

世の中に たえて光のなかりせば 藤の心はのどけからまし

ひよつとこ斎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

進藤ヒカルが見知らぬ誰かと結婚して数年。

自分も身の振り方を考えなければいけないと思っていた矢先、気づけば子どもの頃に逆行していた。

混乱しつつもやり直しの機会を得たとして、前世で失恋したのをバネに、ヒカルと一緒にできるように向き生きる。

そう、そのためには、囲碁のプロになって、ヒカルの視界に入らないと……！

不定期更新です。

目次

第1手	プロローグ	1
第2手	小学4年生まで	3
第3手	小学6年生 その1	7
第4手	小学6年生 その2	13
第5手	小学6年生 その3	23
第6手	小学6年生 その4	30
第7手	中学1年生 その1	35
第8話	中学1年生 その2	42
第9手	中学1年生 その3	53
第10手	中学1年生 その4	59
第11手	中学1年生 その5	68
第12手	中学1年生 その6	77
第13手	中学1年生 その7	84
第14手	中学1年生 その8	92
第15手	中学1年生 その9	101
第16手	中学1年生 その10	111
第17手	中学1年生 その11	120
第18手	中学1年生 その12	128
第19手	中学1年生 その13	138
第20手	中学1年生 その14	147
第21手	中学2年生 その1	155
第22手	中学2年生 その2	167
第23手	中学2年生 その3	179
第24手	中学2年生 その4	189

第49手	プロ1年目	その9	463
第48手	プロ1年目	その8	451
第47手	プロ1年目	その7	441
第46手	プロ1年目	その6	428
第45手	プロ1年目	その5	417
第44手	プロ1年目	その4	406
第43手	プロ1年目	その3	392
第42手	プロ1年目	その2	379
第41手	プロ1年目	その1	368
第40手	中学2年生	その12	358
第39手	中学2年生	その11	348
第38手	中学2年生	その10	337
第37手	中学2年生	その9	329
第36手	中学2年生	その8	318
第35手	中学2年生	その7	307
第34手	中学2年生	その6	297
第33手	中学2年生	その5	288
第32手	プロ試験	その8	276
第31手	プロ試験	その7	263
第30手	プロ試験	その6	254
第29手	プロ試験	その5	244
第28手	プロ試験	その4	234
第27手	プロ試験	その3	223
第26手	プロ試験	その2	212
第25手	プロ試験	その1	202

第53手	第52手	第51手	第50手
プロ1年目	プロ1年目	プロ1年目	プロ1年目
その13	その12	その11	その10
498	489	480	471

第1手 プロローグ

まずはじめに思ったのは、自分がどうなっているかよりも、お母さんが若いということだった。顔からしわがなくなっていて、私の年と、それほど変わらないくらいかな？

どうしたことだと混乱して声を出すと、凄まじく舌つ足らず。何これ、どうなってんの。

20をいくつも越えていた私が、何の因果か子どもの頃に戻ってしまった。いわゆる逆行という奴だ。何の因果というか、失恋のショックかな……。

子どもの頃、それこそ幼稚園児の今からずっと好きだったヒカル。なぜか急に、碁に夢中になって、一緒に行動する機会が減った。中学生のうちにプロになって、何年かするとタイトルホルダーになり、よく塔矢くんと争っていた。

そんな碁にどっぷりはまり込んでいたヒカルだったからか、幾度となくアプローチしても、効果もなく。今思うと、アプローチの仕方が弱かったかもしれない。

20代後半になった頃、ヒカルは見知らぬ誰かと結婚した。

もし、それが一般の女性なら。複雑ながらも素直に諦められた。ヒカルの好みだったんだろう。でも、結婚相手が碁のプロだって言うのだから、やるせなさが凄かった。

もし碁のプロになれていたら、私が横に立てたのかな、とか。ヒカルが碁にはまった時、もつと真剣についていけば良かったのかな、とか。

でも調べたら、碁のプロになるのは非常に難しく、特に女性はプロになった後の対局でも不利だと学んだ。

それでも、ずっと思っていた。昔に戻れたら。未だにいじましく碁の勉強をしていたのは、未練なんだろう。

そんなわけで、理由はまったく分からないし、もしかしたら死ぬ前に見ている走馬灯のようなものかもしれないけど。戻ったからには、

精一杯今を生きる。そして、ヒカルの横に……！

まず手始めに、何故ヒカルが碁に夢中になったか考えよう。

私のように大人になった後に逆行した？ ——ううん、碁をやり始めた後も、全然性格とか変わらなかつた。大人から戻っていたら、あんな馬鹿な行動は取れなかつたと思う。手がスマホを探したりもなかつた、今の私みたいに。

じゃあ、なんだろう。行動をひとつずつ振り返る。虚空に向かって叫んだり、何も無い空間を見て驚いたり。

そして何より、今まで一度も碁に触れてなかつたのに、塔矢くんに勝つた。そう。ヒカルは小学生の頃、塔矢くんには勝っているのだ。そのせいで中学生の時に、塔矢くんと囲碁部で対局して、怒鳴られている。

中学生の時、徐々に強くなっていったのは、ずっと一緒にいた私が一番よく知っている。

そして、塔矢くんがマグレで勝てるような中途半端な強さじゃないのは、プロになってからの成績を見るまでもない。

どういうことだろう。ええと、ヒカルの中に別人がいて、その人が塔矢くんには勝つた？

分からないけど、私がこうやって人生を巻き戻すくらいだ。幽霊がいて、ヒカルに取り憑いてもおかしくない。

そう、そうだ。思い出した。ヒカルのお爺ちゃんの蔵で碁盤を見て倒れて、そこからだった。綺麗な碁盤だったのに、染みが見えるとか言うって。

そう仮定すると、色々なものが見えてくる。确实じゃないけれど、その考えで動いていこう。バタフライ効果については、考えても答えは出ないし、最低限、気を付ける程度。というか以前と同じなら、私はヒカルと結婚できない。そんなのヤダ。

藤崎あかり、5才。ヒカルより先に強くなります。

……タイトルホルダーになるヒカルに、後から追い抜かれるのは分かってはいるけど、挑戦者になれるくらい強く。

第2手 小学4年生まで

小学生になると同時に、お母さんに囲碁教室に行きたいとお願いした。急にどうしたのとビックリされたけど、テレビで見て楽しそうだったと言えば、近くの区民センターでやっている囲碁教室にあっさり通わせてくれた。

「はじめまして。えっと、藤崎あかりちゃんだね。何才かな？」

「えっと、6才です。今日からよろしくお願いします！」

「はい。僕は白川っていうんだ。すっかりしてて偉いね。えっと、碁のテレビを見て、興味を持ったんだね。まずは、石に触ってみようか」
囲碁教室で出迎えてくれたのは、白川先生。懐かしいな。私が初めて囲碁教室に通った時も白川先生だった。とても穏やかで、優しい先生。

今も、五目並べから教えてくれている。しかも、私は3目で先生が5目。3目対5目だとどうやっても勝ち確定なんだけど、だからこそ3目なんだろうな。

しかし手がふやふやしてて、ちゃんと挟めないや。しょうがないので、つまんで持って、コトンと置く。せっかくだし、天元に。

白川先生は、私の石の上、つまり10の九に白石を置いた。10の十一に伸びても、止められてしまう。私は、最初の黒石の左隣、9の十に置く。

「はじめにあかりちゃんが黒い石を置いたでしょう。次に、僕が上に白い石を置いた。石が置かれた逆側に黒が伸びても、僕が邪魔できちゃうんだ」

「うん。だから先生が置いた斜めの場所に置けば、片方しか邪魔できないから、私の勝ち！」

えへへーと笑うと、白川先生もにっこりと笑った。

「そうそう。その通り。じゃあ次は、あかりちゃんは勝ちの一手まで黒い石を二個並べて置いちゃダメってルールをつけようか」

色々なルールでやったが、置き方を覚えるだけの、囲碁ですらない遊び。いくら白川先生がプロで私がアマとはいえ、黒をもらった上に条件まで有利で、負けるはずがない。

すぐに白川先生がやり取りのグレードを上げてきて、碁のルールを把握済みだと理解してもらい、9路盤で打つことになった。ご本で読んだのーって子どもっぽく誤魔化したけど、大丈夫かな。ちよつとドキドキする。

……昔は、置いた碁石を下に動かしてヒカルに怒られたなあ。懐かしい。

そんなことを考えながら、9路盤で遊ぶ。

始まってすぐに、白川先生がガタツと椅子から立ち上がって、部屋の外にいるお母さんと話し出した。

「お母さん、この子は私じゃなく、もっとしつかりしたプロに教わった方が良いです」

「え。でもその。どういうことですか？」

「理解力が高いというか、テレビで碁を見ただけにしては……」

白川先生とお母さんが、何やら話し込んでいる。どうなるか分からないけど、初心者入門で立ち止まっている暇はないんだ。何せヒカルは、学び始めて2年もしないうちに、プロになっている。

と、よそ事を考えてるうちに、話がついたようだ。お母さんが、若干困り顔で聞いてきた。気を使わせちゃってごめんね。

「お母さんはここで楽しくやればいいと思うんだけどね、先生が、きつと強くなれるよって言うの。あかりは、どうしたい？」

強制せず、私の意志を尊重してくれるらしい。なら、答えは常にひとつ。

「えつとね。私、強くなりたい！ プロになって、タイトル取りたい！」

そう。しつかりとヒカルに見初められるためにも、タイトルを取るくらい強くなりたい。

「そう。なら、強い先生を紹介するよ。ちよつと顔は怖いけど、優しい人だから」

そして私は白川先生の紹介で、森下先生という、何回かタイトルの挑戦者にもなったことがあるという九段のプロに師事することになった。

少し年上に冴木さんという人がいて、その人も優しい。森下先生の娘さんの、しげ子ちゃんとも仲良くなった。

しげ子ちゃんは碁が面白くないみたいで、ちよつと触って止めちやつた。小さい子に囲碁は難しすぎるよね。

お兄さんの一雄さんも、幼い頃にやめちやつたらしい。せつかくプロの息子なのにもつたいたい気はするけど、合わなかつたらしようがないよね。

でも森下先生は、塔矢くんのことを知ってるみたいで、碁をやる息子が羨ましそうだ。もちろん、だからといって一雄さんやしげ子ちゃんにきつく当たるわけでもない。時々私に、同い年なんだから塔矢アキラに負けるなってプレッシャーをかけてくるのが辛い。私が、あの塔矢くんに勝てるはずがないんだけどな。

だって塔矢くんは、あつさりプロになる上、ヒカルと争ってタイトルも取るくらいなんだから。

そして、森下先生に師事してから3年ほど経った小学4年生のある日、1つ年上の和谷さんが、森下先生の新弟子としてやってきた。ヒカルと仲が良い、後々プロになる人だ。確か、ヒカルと同じ年度だったと思う。

今でも結構強いけど、私より弱い。

「和谷さん、これからよろしく願います」

「和谷でいいよ。藤崎さんが先に弟子になつてんだし」

「じゃあ和谷くん。私は呼び捨てでいいよ」

「そう？　じゃあ藤崎で。森下先生に教わって、俺は絶対プロになるんだ！」

うおーって吠えてる。あら可愛い。なんとなく微笑ましくて見ていると、しげ子ちゃんが寄ってきた。

「和谷くん、がんばってね！」

「おう、ありがとう！ えっと、しげ子ちゃんだっけ」
「うんー！」

おやおや？ しげ子ちゃん目が……。へえー。

しげ子ちゃんは素直で可愛いし、和谷君にお似合いかも。まだまだ子どもだから、どうなるか分からないけどね。

なるべくしげ子ちゃんを応援しちゃおう。ふふふ。

「なんか藤崎の目から不穏な空気を感じる……」

「気のせい、気のせい」

第3手 小学6年生 その1

あつという間に時間は過ぎて、小学6年生になった。碁の勉強したら、時間が経つの早いね。前に比べても、大分強くなったと思う。和谷くんが院生になる時に森下先生から私もどうかと聞かれたんだけど、ヒカルが碁を始めるまでは、時間が拘束されやすい院生にはなれない。和谷くんは去年、プロ試験も受けたみたいだけど、結果は振るわなかったそうだ。中1になる今年も受けるらしい。結構上達してるけど、まだ私より弱いし、しばらくは受からなそうかな？

そんなことより、ヒカルだ。細かい日にちまで覚えてないけど、冬、12月だったと思う。今はまだ、相変わらず碁なんて一切意識になく、元気に外を走り回っている。この体力オバケめ。

そして、夏に和谷くんが試験を落ちて、森下先生に院生にならないまでもプロ試験だけでも受けてみたらどうかと言われて断っているうちに、12月に入った。

ーそして、運命の日がやってきた。

朝、ヒカルの家に遊びに行くと、ちょうどヒカルが家を出ようとしていた。

「おつ、あかり。せっかくだしお前も来てくれよ」

「ん？ ヒカル、どこか行くの？」

「じいちゃん家」

「何しに行くの？」

「じいちゃん家の蔵にさ、何か売れそうなもんないかなって」

来た。これだ。

「ほら、行くぞ！」

「ヒカル、待ってよー」

相変わらず体力バカだ。走らなくてもいいのに。追いかけるながら、ついにヒカルが碁を始めるんだって思うと、やっぱりワクワクしてきた。私も前世からずっと碁をやってるんだもん。ヒカルと一緒に打

てたら、嬉しい。

「じいちゃん、蔵の鍵貸してよ」

「朝っぱらからなんじゃ。おう、あかりちゃん、おはようさん」

「おはようございます」

「蔵の中、いるもんねえよな？　なんか貰っていい？」

「あん？　そりやまあ、ものによってはやらんでもないが……」

「よし、決まり！」

強引だなあ。鍵を借りたヒカルについて、蔵に入る。入口の電気を点けても、まだ薄暗い。二階に上がって窓を開ける。ちよつとはマシンかな。

ヒカルは一階では良いものが見つからなかったようで、二階に上がってきた。

パツとしないなあ、とか言いながら、箱の中、棚の中を漁っている。

「お!?　これなんかイイんじゃないか？」

引っ張り出してきたのは、碁盤。

見るだけで分かる。相当良い碁盤だ。

「あ、碁盤？　質も良さそう。いいの？　そんなの持っていつちやつて」

「いいんだって。さつき許可取ったし」

「何でもいいとは言ってないと思うよ」

「そう？　それにしても、全然落ちねえぞ、この汚れ」

目を向けても、ちつとも汚れていない、綺麗な碁盤だ。そう言っても、血のアトみたいに汚れているってヒカルは言う。

……なるほど。

しばらく見ていると、へ？　って間抜けな声を出したかと思うと、誰かいるって言い出した。蔵の中でそんな話、普通に怖いよ。

「ちよつとヒカル、大丈夫？　ここにはヒカルと私しかいないよ」

「……出っ……」

何かを見たような素振りで、ボタンと倒れた。ヒカルに見えて、私には見えない。この差が、私とヒカルの、才能の差なんだろうか。

「おじーちゃん、ヒカルが倒れたー！」
それはそうと、倒れたヒカルの対処をしないと。

翌日も、ヒカルは急に叫ぶ、何かをぶつぶつ呟くなどの、奇行が目立った。

さて。私もそろそろ準備していかないかね。

「白川先生、近いうちに男の子が習いに来ると思うんですけど、私の友達なんです。それで、ちよつと事情があつて、私が碁を本気でやつてるって内緒にしてるの。すぐに伝えるつもりだけど、私から言いたい。だから私がヒカルに付いてきた時、知らないふりをしてもらつていいですか？」

「ヒカル君つて言う子が来るかもしれないだね。うん、他ならぬあかりちゃんのお願だからね。分かった、知らないふりをするよ」

よし、後は教室に通っている人たちだけど、そつちはいいかな。

週末、ヒカルの家に行くと、ヒカルは囲碁教室に行つちやつてた。相変わらず、行動が早い。

急いで囲碁教室に行くと、走り去る阿古田さんとすれ違った。懐かしいと思う暇もない。カツラがズレてて泣いてたけど、まさか……。

「いいかい、進藤くん、来週ちゃんと阿古田さんに謝るんだよ」

「はい。俺もちよつとやりすぎたかなと……」

やつぱりかー！ ヒカル、いつも何かやらかすよね。

周りの人はクスクス笑いながらもフォローしてるし、まあ、今回はいつか。

出てきたヒカルを捕まえる。

「ヒカル」

「わっ、ビックリした！ なんだあかり、こんなところでどうしたんだよ？」

「おばさんから聞いたよ。碁をやるんだって？ 私、ちよつと打てるんだけど、相手しようか？」

「え、お前打てるの？ んー、でもなあ。お前と打つてもしょうがないし」

ヒカルが言うと同時に、私が反応するより早く横から怒鳴られたような格好になる。幽霊さんが、代わりに叱ってくれたみたい。

「んー、まあ、じゃあ。ちよつと打つてみるか」

「ホントに!?! ヒカル、ありがとう」

やった、幽霊さんの実力がちよつと分かるかも。塔矢くんには勝つんだから弱いわけではないんだけど、気になってたのよね。

私の家にあるプラスチック碁盤を持って、ヒカルの家に向かう。

どうしようかな。手番とかどうしようかな。

「えつと、互先でいいかな？ それともヒカル、置き石いる？」

「置き石？ ハンデなんかいらねえよ！」

じゃあ、って私がにぎると、ヒカルが不思議そうな顔になる。

「どっちが先手か決めるために、いくつか石をにぎるの。もう片方が、1個か2個の石を置いて、偶数か奇数か選ぶの。当たったら、当てた方が先手で黒。外したら、にぎった方が先手で、外した方が白石になるの」

「へえ」

にぎると、ヒカルが二つ石を置く。

えつと、2の4の6の……8個。偶数だから、ヒカルが先番だ。

「コミは5目半ね」

「コミっ。」

「うん。先に打つから、黒の方が有利でしょ？ だから白石を持った方に5目半つけるの」

「へー！… って……。まあいいや、それでやろうぜ」

じゃあ、石をいったん戻して、と。

「お願いします」

「え？ あ、お、お願いします」

ピシッと姿勢を正して挨拶すると、ヒカルは戸惑ったように挨拶を返してくる。こういうところ、素直で可愛い。

少し待って、ヒカルが一手目を星の横、私から見て左下の小目に置く。指でつまんで、コトリと。そうそう、最初は置き方そうだよね。さて。どうしようかな。やっぱり本気でかかるべきだろう。

そして対局は進んだのはいいんだけどね。

「どうしよ、もう勝ち目はないけど、最後まで打ってもいい？」

「え？……うん、いいよ」

どう見ても指導碁だ。幽霊の人、半端じゃない。これ下手したら、森下先生より強いんじゃないかな。塔矢くんが追いかけるわけだ。でも、どうにも定石は古い。

昔になかった手でかく乱できないかなって思ったけど、そんな差じゃなかった。

「んと、私の3目半の負けね。ヒカル、凄いじゃない」

「え？　そう？　でも、小学生相手に僅差か」

おいこら小学生。ヒカルってば迂闊よね。前世っていうかなんていうか、前の時にどうして大人が気付かなかったのか不思議だわ。さすがに幽霊なんて、突拍子もないからかな。私も自分が逆行なんて非常識を経験してなきゃ、思いつかないだろう。

そして幽霊の人、プロになってからのヒカルの行動を色々考えると、途中で消えたんじゃないかなって思う。

プロになってすぐの、対局ボイコット。あの時のことを、ヒカルは後々のインタビューで「俺が碁をやってもしようがないって思ってた。もつと強いやつができなくなって、俺がやるのは間違ってるって思ってたんです」って。インタビューは、塔矢名人のことだと思われる、って補足してたけど、あれはきつと、幽霊さんのことだ。

まあ、それはともかく。

「終わった後、どこが悪かったかとかの検討もするんだけど、今日は遅いし、無くてもいいかな？」

「わ、ホントだ。もうすぐ晩ご飯じゃん」

「じゃあ、私は帰るね。この碁盤どうする？　置いていこうか？」

「いや、いいよ。持って帰って」

言った直後、ヒカルはワアツと耳を押さえる。欲しいってごねたんだろうなあ。なんだろう、幽霊さん凄く分かりやすいぞ。

「うん、分かった。じゃあヒカル、また明日ね。今日はありがとう」

「おう、こっちこそありがとな」

さて。帰ってから、今日の棋譜を書いておこうつと。ところで、幽霊さんは男？ 女？

第4手 小学6年生 その2

ヒカルはどうやら、幽霊さんの強さを分かってないみたい。

まあ、私がどの程度打てるかも言っていなかったし、しようがないかな。

翌週、囲碁教室に行くヒカルについていくと、先週走り去った阿古田さんが、フツサフサのカツラをつけて現れた。

「やつ、コンチハ」

「ぶーっ！」

ヒカルが阿古田さんを見て、口に含んでいた飲み物を嘔き出した。きやああ、阿古田さんのカツラが……。ヒカルってばなんてことを。

ギャハハと笑うヒカルの後ろから、怒り心頭の白川先生が怒鳴りつけた。

「もういいです、今日は帰りなさいっ！」

ヒカルはなんだかんだ言い訳してたけど、先生は聞く耳持たない。もう、バカなんだから。

「どっか他に碁を打てるところないかな？」

「え？ あるにはあるけど。駅前には碁会所が……」

隣にいたおばさんが、親切に教えてくれる。

「よっしゃ、行くぞー！」

怖いもの知らずだなあ。私、碁会所なんてほとんど行ったことないよう。

「碁会所碁会所、おっ、あれか」

ヒカルが駅前でウロウロするのをついて歩いて、碁会所を見つけると、中に入ると、受付のお姉さんが声をかけてきた。

「あら、こんにちは。どうぞ」

「うおっ、ジジイばっかし！」

ヒカルったら……。

「ふふ。名前書いてくださいね。ここは初めて？」

「ここもなにもまるつきり初めて……。誰でも碁が打てるの？」

「打てるわよ、棋力はどれくらい?」

「棋力? よくわかんねーや」

ヒカルに指を向けられて、お姉さんに愛想笑いする。

「よくわかんない……?」

「人と対局したの、コイツと一回だけなんだ。そこそこ強いと思うんだけど……」

「対局ほとんどしてないのに、そこそこ強い?」

お姉さんが軽く笑う。ですよね。普通に考えて、強いわけがない。

「あ、なんだ、子どもいるじゃん!」

ヒカルが指を向けた先には、塔矢くん。そっか、ここで出会うんだ。もしかしたら、対局して勝っちゃうのかな。

おっと、考えてるうちに話が進んじやった。どうやら席料はオマケしてくれるらしい。

私は打たないと言ったら、私の分もオマケしてくれた。とてもありがたいけど、受付のお姉さんにそんな権限あるのかな。二人分で1,000円とはいええ、お姉さんの給料から天引きとかされなければいいんだけど。

置き石は不要だって言って、ヒカルが先手をもらう。そしてヒカルが、右上の小目に置いた。ふうん、幽霊さん、初手は小目に置くのが好きなんだろうな。私の時もそうだったし、今もそう。

というか、そのまま秀策のコスミ。コミを考えると有利とは言えない手だけど、そのあたりは幽霊さんもおいおい覚えるだろう。ちよつと堅い手だけど、実力が上回れば有利に持っていけるだろう。

……実力が上回れば、というか。塔矢くん相手にも指導碁のレベル。やっぱり半端じゃない。

見たところ、前世込みにも関わらず、私の方が塔矢くんより下。何回かやって1回勝てるかどうかってところかな? 細かい実力差は、打ってみないと分からないけど。

がく然とする塔矢くんを置いて、ヒカルが席を立つ。

「あら終わったの!?!」

「うん。やっぱ知らない奴との対局はまだ早いわ。打つのにすぐく時

間かかって、もうヘトヘト……」

「あらあら」

出る時にヒカルが受付のお姉さんとお話をしている。その流れで、全国大会のチラシをもらったので、私ももらっておく。全国こども囲碁大会かあ。そういうの出たことないけど、こういう大会って、どんなレベルなんだろう。塔矢くんほど強い子はいないだろうけど、私だとそこそこ良いところまで行けたりするのかな？ 森下先生も、プロ試験を受けるとは言うけど、こういうの出たらどうだとは言っていない。

碁会所を出た後、ヒカルがポソツとつぶやいた。

「なんだ、佐為って弱かったのな」

「え？」

「ああ、いやっ……って、ダァー、うるせえー！」

「さい。ソレが名前？」

「もう、ヒカルってば、また一人で騒いで。遅くなっちゃうから帰ろ」
「え、ああ、そうだな。帰るか」

歩きながら様子を見てる感じ、声に出さなくても会話してる。たまあーに、ヒカルが叫んだりしてるけど。ヒカルのお母さん、心配しなくてなればいいんだけどな。

それはそうと、どのタイミングでヒカルに気付いてるってカミングアウトするべきかな。あと、私が前世持ちっていうのも。何事もタイミングが大事。急いで攻めたら悪手になるし、だからといって待っていると機を逸する。ここぞという時を見極めないと。

「ヒカル、これ見に行ってみる？」

「うん？ 囲碁大会い？ めんどくせえなあ……うぶ、まあ、気が向いたらな」

どうも、幽霊さんが反論するとヒカルの調子が悪くなるのかな。でも、中学に入った頃には、そんなことなかった。馴染むまでの最初だけなのか、すぐに幽霊さんが消えたのか……。判断は付きにくいから、しばらく様子見ね。

「うん、もし行くなら付いていきたいから、声かけてね。ルールとかも

教えてあげるから」

今は昔と違って、碁が打てる。その一点だけを見ても、幽霊さんからも好感度は高い可能性があるし、ヒカルにしてもルールとか聞きやすいはずだ。

「ルールだあ？ そんなのいらねえよ。どうせ本格的にやるわけじゃないし……」

言った直後、あーって言いながら耳を押さえる。幽霊さん、心配しなくてもヒカルは碁をやるよ。そして塔矢くんに負けなくらい、強くなるの。そして……。

ああ、考えていると落ち込む。やめやめ、未来のことなんて確定してない！

「んじやまた、学校でな」

「うん。ヒカル、宿題ちゃんとやっておくんだよー」

「あー、やなこと思い出させんよ」

どんより。そんな表現が似合う感じに肩を落として、とぼとぼ歩く。ふふふ、可愛い。

よし、可愛いヒカルを見てちよっと回復した。帰って碁の勉強しよっと！

そして年が明けた、次の週末。ヒカルと一緒に、子ども囲碁大会にやってきた。森下先生に教えてもらってる関係で、何人かの先生とは顔見知りだけど、わざわざ声をかけてくる人は少ないだろう。こんな忙しそうな日に。

「う……わあ。子どもでも結構やってる奴多いんだな」
「そうね」

うん、全国大会だからね、余計に活気あるというか、みんな真剣だ。ヒカルがうろうろとするのを、後ろから付いて歩く。と、ふとヒカルが対局中の盤面に目を向けた。

えっと、左上に死活があるね。正着が分かりにくいけど、大会に出るレベルの子なら、分かるかな？

パチリ。ああ、違う、その上。

「惜しい、そこじゃダメだ。その上なんだよ」

え。今、私声出してないよね!？」

「え?」

「あ」

当然だけど、対局中の二人も気付いた。すぐ近くにいた係員が、ヒカルの肩を掴む。

「きみっ!」

すぐにヒカルが連れ去られる。そりやそうだー。うわああ、どうするんだろ、この場。

あ、緒方さんが来た。向こうは私を知らないだろうけど、念のため少し離れようかな。私まで怒られたくないし。

ヒカルが連れて行かれて、残った緒方さんが状況を聞きながら対処している。ヒカルが連れて行かれた方へ向かう。

「おさわがせしましたー、さよならーっ」

ヒカルが出てきた。会場に戻るわけにもいかないし、帰るみたいだからついて歩く。

「やっぱアレはまずかったよなあ……。つい口走っちゃったもんなー」

「うん、あれはどう考えてもヒカルが悪いよ」

部屋でしっかりと怒られたようで、疲れた顔をしているヒカル。

「あーあ、囲碁ってホントかったりーよな。やっぱ俺の性にあわねえなあ」

日本棋院でなんてことを言うかな。前言撤回したくなっても知らないよ。

……って。前見て、前!

どん、とぶつかってヒカルが転んだ。塔矢先生だ! 凄い、貫禄あるなあ。

「ご、ごめんなさいっ」

「……気をつけなさい」

そのまま何も言わずに去ったけど、きつと、さっきのヒカルの声は

聞こえていたよね……。子どもが碁はかったるいなんて言ってるのが聞こえたら、ガツカリしたかな。

「うわ、怒鳴られるかと思った……」

「ヒカル、大丈夫？」

座ったままぼう然とつぶやいたので、声をかけて手を差し出す。起きるのを手伝ったら、ヒカルはキョロキョロした後、口を開いた。

「あかり、帰ろうぜ」

「う、うん」

建物を出て、ヒカルがジタバタするのを見ながら歩いていると、少し離れたところから、声が聞こえてきた。

「進藤……進藤ヒカル！」

塔矢くんだった。ヒカルは屈託無く話しかける。塔矢くん、悩んだんだろうなあ。普通に対応されてうろたえてるもん。

って、ぼんやり聞いてたらヒカル、またとんでもないこと言ってるし。塔矢くん切れちゃった。そりゃ怒りたくなる気持ちも分かる。だって、私でも、森下先生がどれだけの努力をしているか知ってるし、それでも取れないのが七冠タイトルだ。

碁聖、天元、名人の三冠棋士である塔矢先生は、現在の碁界トップなのは間違いないだろう。

「今から打とう！」

あーあ。ヒカル、引つ張られちゃってまあ。っていうか雨に打たれちゃって、風邪引かなきやいいけど。地下鉄の入り口で、私だけ差していた折りたたみ傘をたたみ、2人に付いていく。

「なあ、碁打ちってみんなこんなの？」

「塔矢くんは特に熱心だと思うけど、多かれ少なかれ、こんなだよ」「うへえ」

そんな会話は耳に入らないようで、ぶつぶつとつぶやいている。漏れ聞こえる感じ、やっぱり定石の古さが気になるらしい。

そして、以前にも打った碁会所に入る。ズラツとお客様を引き連れて、塔矢くんが奥の席に座った。ヒカルがおっかなびつくり、対面に

座る。

そして、勝負が始まった。

序盤、少しだけ塔矢くんが頑張っていたけど。

「……ありません」

とんでもない強さ。これは私はもちろん、塔矢くんに指導碁が打てるわけだ。現在の碁界トップが塔矢名人なのは疑うべくもないけど、もし幽霊さんが今の世にいれば、覆りかねない気さえする。

「でもすげえよお前。凄く真剣でさ」

ヒカルの言葉に、ピクリとも反応しない。打ちひしがれて、それどころじゃない感じ。

「んじゃ、俺帰るよ」

「あ、ありがとうございます、お邪魔しました」

ヒカルもどこか混乱した様子で席を立つ。私も後に続いた。

店を出て、しばらく黙って歩く。ヒカルは幽霊さんと会話してるかもしれないけど。

そろそろ家だ、というあたりで、私は声を出した。

「ヒカル、晩ご飯食べた後、お家に行っていい？ 一局、打ってくれない？」

「え？ いや……」

「ちよつと聞きたいことがあるの」

真剣さが伝わったのか、ヒカルははっきりと頷いた。

「じゃあ、また後でね」

「おう」

家に帰ってご飯を食べて。ついでにお風呂も済ませておいて、ヒカルの家に向かった。

いくら近くとはいえ、だいぶ遅い時間だったからお母さんは苦い顔をしていたけど、今日ばかりは聞いていられない。

「多分遅くならないから」

「ほんとね？」

「うん、一局打つだけ」

「……長いじゃない」

そんなことない。多分、すぐ負けるだろうし。

「ヒカル、おまたせ」

「遅い！ って風呂まで入ってたのかよ。俺も入っておけばよかった」

「入ってないの!? 雨に打たれたのに？ 待つから、入ってきてよー」

「大丈夫だって、うるさいなあ」

聞いてられない。部屋の扉を開けて、おばさんに声をかける。

「おばさーん、ヒカル、先にお風呂！ 今日、ちよつとだけど雨に打たれてるし、風邪引いて移されても困るからー」

「あら。ヒカルは何とかだから風邪引かないと思うけど、移しちやまずいわねえ。さっさと入ってらっしゃい」

ぶつぶつと文句言いつつ、ヒカルはお風呂に向かっていった。5分ほど経ってから、ぼそりと声を出してみる。

「……ふう。えーつと。幽霊さん、お風呂に付いていった？ それとも、ここにいるの？」

返事がない。あっても困るけど。しばらくお風呂場の様子を窺っていたが、慌てたような音もしない。どうやらここにいないようだ。

しばし待って、ヒカルが部屋に戻ってきた。

「おかえり」

「ん。そんで、一局打ちたいんだな？」

「うん。指導碁じゃなく、本気でお願い」

プラスチックの碁盤を出して、にぎる。私が黒だ。

そして打ち始めるも、布石の段階からはつきりと形が悪い。打つたびに、悪くなっていく。白の動きを全然とがめられない。

囲碁は会話だ、というのを聞いたことがある。私もそうだと思う。ただし、実力差がありすぎると、言いたいことも言えない。

「あ、ありません」

負けると悔しい。最初から負けると分かっている、涙が出てしまう。

「おい、あかり……」

「ん、ごめんね。大丈夫。さすが、強いね、幽霊さん」

「まあな、小学生に負けてるようじゃ……って」

叫びかけたヒカルの口を手で押さえる。

「ごめんね、最初から気付いてた。ヒカル、分かりやすすぎ。1回、さ
いって名前も口に出してたよ？」

大声を出さずに済んで、ほっとため息。ヒカルがおそろおそろ、口
を開く。

「でも、じゃあなんで対局なんか……それに、誰にも言っていないのか
？」

「どれくらい強いかだいたいは分かってたけど、やっぱり真剣に打っ
てほしかったの。それと、言うわけないよ。ヒカルが隠してるのに」
「まさか、佐為がばれてるとはなあ」

何も無い空間に向かってヒカルが笑みを浮かべる。その笑顔、私に
も向けてほしいな。

「さいさんがいるの、何も無い空間だからね。周りから見たら不思議
よ。それと、碁」

「碁、っすか」

「碁、っすよ。いくらなんでも昨日や今日始めたばかりの素人に、塔矢
くんは当然、私もあっさり負けるような実力じゃないよ」

何やらヒカルが佐為さんに聞いてるっぽい。

「ふーん。具体的に、お前とか塔矢ってどんな程度なんだ？」

どういえば通じるだろう。

「例えばね、年に1回、プロ試験っていう、碁のプロになるための試験
があるんだけど。塔矢くんは、多分今受けても通ると思う」

「え？ プロオ？ そんなに強いのか!？」

「うん。凄いよ」

「へええ」

「今日、囲碁大会で、帰る時にぶつかった人覚えてる？」

「ああ、なんかテレビで見た人だな」

「あれ、塔矢行洋名人。タイトルを三つも持っている、塔矢くんのお父

さん。名人っていうのもタイトルね」

「えええ！ 似てねえ！」

引つかかるの、そこかー。

「で、あかりは？」

「私？ 私は……今のままだとプロ試験には受からない、かな？」

受けたことないけどね。まあ、前世に比べものにならないくらい強くなってるけど、プロになれるほどじゃないと思う。今の実力は私より下だからそこまで参考にならないけど、和谷くんも全然プロにならないみたいだし。

ヒカルはちよつとだけほつとした様子で、そつかとつぶやいた。

「そんな簡単にプロになれるわけねえもんなあ」

「うん、まあそうだね。だからこそ、塔矢くんは怒ったんだよ」

「あー、まあ、言い過ぎたかもな」

明らかにね。まあ、とりあえず確認したいことは済んだかな。

私の秘密は、いつか言うかもしれないけど、今は言えない。

「ヒカル、もしヒカルが碁をやることになって、さいさんに教えてもらえるなら、私も一緒に勉強したいな」

「どうだろ、やるのかねえ」

「きつとヒカルは強くなるよ」

その後、佐為さんの漢字を教えてもらって、佐為でいいって言われた。なんとなく抵抗あるけど、見えないし聞こえないから、まあいいか。

第5手 小学6年生 その3

ヒカルが塔矢くんと打ってしばらく経ったある日、ヒカルと一緒に学校帰りに歩いていると、家じゃない方に向かっていく。というかこの方向は……。

案の定、塔矢くんと打った囲碁サロンの前。ヒカルはそのまま少しぼんやりしていたけど、ため息を吐いて引き返そうとする。

「キミー！」

って、緒方さんだ！ 呼び止めたと思ったら、会いたい人がいるのかなんとか。ヒカルと会いたい人がいるって、なんだか嫌な予感が……。どんな用事だろう。

「あの、私も付いていいですか？」

「友達かい？ そうだね、良ければ是非ついてきて」

ヒカルが緒方さんに引つ張られて、囲碁サロンに入る。指導碁をしているのは、塔矢名人だった。

「塔矢先生！ この子が例の……」

ぼそぼそと声を細めたので、続きは聞き取れなかった。だけど、塔矢くんに勝ったのが波紋を呼んでいるのだろう。

そして対局が始まった、んだけど。

ヒカル、どうしたんだろう、凄く何か言いたそう。塔矢先生に？ ううん、違う。それよりもっと、言いたいけど言えないような、諦めたような顔。もしかしたら、佐為に何か言いたいのかな。

そして対局が始まる。布石を打ちながら、少しずつ会話も進む。塔矢くんに勝てるのが信じられないというのは、確かにその通りなんだけど。なんだろう、塔矢くんが凄く強いのは確かだけど、自分の子を別格とか。見た目とも雰囲気とも合わないけど、親バカの気配を感じる。私の気のせいかな？

ヒカルは話半分といった風に、塔矢名人の打ち方に魅入っている。自然な姿勢も、なめらかな指の動きも、すつごく綺麗だもんね。

おっと、よそ事を考えているうちに、ヒカルが凄く何か集中してい

るように、碁石を手に取る。親指と人差し指でつまみ取り、人差し指と中指に持ち替える。そして、盤面に打つ。

パシツ。

綺麗な音が碁盤から鳴る。

打った場所も、たぶん佐為が言った場所とは違う。ここまでの布石から打たれるような場所じゃないもん。有利とは言えない、独立した一手。でも、だからこそ。この後の変化が楽しそう。

「うわああー！」

だというのに、ヒカルつてビックリしたような声を上げて、逃げていつちやった。もったいないし、この場も気になるけど、さすがに放っておけない。

「ご、ごめんなさい。また今度、お詫びに来ます！」

言葉だけ残してヒカルを追う。もー、ヒカルに追いつくの大変なのにー！

公園まで走っていったヒカルに何とか追いつくと、何やら一人でもめている。身体を操った？ 佐為が？

そんな風には見えなかったけど。

「ヒカルが、打ちたくて打ったんじゃないの？」

「俺があんな風に打てるかよ」

「案外、やってみたらできるかもよ」

「そんなわけあるか。コイツが乗っ取ろうとしてんだろー！」

「そんなに言うなら、もう一度試してみたらいいじゃない」

「ちえ、お前ら、言葉が聞こえないわりに同じこと言いやがって。わあーったよ」

そこらに転がっている平べったい石を手に持つ。ちよつとプルプルしてる。

ひよい、と振ると、地面に置かれず、すっぽ抜けて飛んでいった。

「ズボツだってよ」

やってられない、とばかりにヒカルがつぶやいた。どうしよ、ヒカルが碁に興味を持っているのは間違いないんだけど。

「たった一回上手くいっただけで、その後ずっと上手くいくとは限らないよ。ヒカル、手を貸して」

「ん？」

「爪。碁石の持つ手はね、こんな風に、爪がへこむの。それに、指の腹もほら、硬いでしょ」

ヒカルの指をフニフニと触って、私の指と比べる。人差し指の爪も、中指の腹も。私とヒカルで、全然違う。

「せめて、ちよつとは石に慣れるまで触ってないかね」

ヒカルは少しいじけたような顔だったが、私の手とヒカルの手が全然違うって気付いたんだろう。

それ以上は文句を言わず、素直に家路についた。

週末、ヒカルと一緒に葉瀬中の創立祭にやってきた。お姉ちゃんにもらった食券を持って、何を食べようかと見て回っている時だった。ヒカルが遠くに目をやった。

「お、ホントだ。碁が置いてる」

「どっ？」

佐為が見つけたんだろう、私が聞くと、ヒカルが碁盤の方向を指さす。

2人で近づいてみると、筒井さんが詰め碁をやっていた。ああ、懐かしい顔だ。まだまだ幼さが目立つ。ふふ。

「次、いい？」

「どうぞ」

筒井さんが並べた詰碁を、ヒカルが少し考えて答えを出す。おお、ヒカルが正解した。ヒカルの部屋に、碁のルール本なんてなかったよね。週末の囲碁教室と何度かの対局で、ルールを覚えただろうか。

もらった賞品に渋い顔をしながら、ヒカルが文句を言う。こ、こら。厚かましいよ。

「もっと難しいのやってよ」

「もっと難しいの？ 大丈夫？ じゃ有段者の問題だ。ボクでもこれはてこずるかな。三手まで示して」

言いながら、筒井さんが碁石を並べる。私は解けるけど、ヒカルには難しいかな……って即答しちゃったよ。佐為に力を借りたな。」
「えっ」

そりや驚くよね。さっきのに悩む子が解ける問題じゃない。

「詰碁集がもらえる一番難しいのやってよ」

「こんなの解けたら塔矢アキラレベルだよ」

言いながら並べたのは、確かに難易度は高い内容だった。でも、塔矢くんクラスの棋力が必要かというのと、そこまででもないというか、私でも解けるくらいだ。

ようし、と解く気満々なヒカルだったが、横からちよつかいが入った。

「第一手は……ココだろ」

「ああっ」

目を向けると、加賀さんがタバコを碁盤に押し付けている。わああ、なんてことを！

何が塔矢アキラだって、加賀さん、塔矢くんに会ったことあるんだ。そして詰碁集を破いて筒井さんを煽っている。そしてヒカルが勝負に乗って、ヒカルと加賀さんで対局する流れになるのね。

ヒカルってば、止める間もなく売り言葉に買い言葉で対局を始めちゃった。昔は加賀さん、もつと大人っぽい印象だったけど、そっか、こうやって見ると子どもだなあ。碁が嫌になった理由って、何なんだろう。打つのは好きみたいだし。荒っぽい碁にも見えるけど、押さえるところはちゃんと押さええていて、基礎からしっかり学んだ碁だ。

とはいえ、佐為は当然、今は私の方が上みたい。森下先生に何年も鍛えられておきながら加賀さんより弱いと、話にならないもんねえ。

「……2目半負け」

ヒカルが、というか佐為が勝った。当然だね。加賀さんが、信じられないような顔で盤面を睨んでいる。

指導碁というより、ヒカルのための碁。ヒカルは分かっているかなあ、分かっているだろうなあ。

「勝ったぞー！ 土下……」

「ヒカル！ 待った！」

約束通り土下座と言いかけたヒカルを、慌てて止める。加賀さんに土下座させるとか、そんな後が恐ろしいことは止めてほしい。

「ヒカル、碁やるなら、囲碁部に入った方が良いと思わない？」

「ええ、そんなのめんどくせえよ」

「今より強くなれるよ」

「うーん、でもなあ」

逆行前に、後から聞いた話だけど、無理矢理ヒカルが中学の大会に出てみたい。それを止めないなんて、加賀さんはともかく筒井さんも大会に出たかったんだろうな。でもヒカルが小学生なのに出るのは、ルール違反だから絶対駄目だと思う。

「ええと、加賀さん」

「あん？ なんだお前」

「藤崎あかりです。初めまして。ヒカルが勝った分のお願いがありませんけど、いいですか？」

「ああ？ なんでお前が……」

「兼部でいいんで、囲碁部に入って貰えませんか？ ヒカルと私も、囲碁部に入ろうと思うんですけど、ヒカルはまだ実力が不安定で、色々教えてあげて欲しいんです」

反論させたら面倒なので、先に言いたいことを言っちゃおう。

佐為が打つと強いけど、ヒカルが打つとまだまだ弱い。今回だいたいの互角の展開で、ぎりぎり加賀さんに勝てる程度の打ち方だったから、ごまかせる範囲だと思う。

「そうは言っても、俺は将棋部の部長だから、兼部は無理だぜ」

「そうですか。なら、時々打ってもらうのは？」

「それぐらいならいいが……」

「決まりですね！ お願いします！」

怪訝そうにしているけど、この場で長々と話すのも難しい。詳しくはまた今度ということにして、その場を離れた。

その後、たこ焼きをヒカルと分けて、色々楽しんでから家路につ

く。

「ヒカル、碁は楽しい？」

「そうだな……まあ、つまんなくはねえよ」

「ふふ、何それ」

相変わらずひねくれてるなあ。そして少し耳を押さえている。

あーあー、もう。懲りないんだから。

佐為は強さも普通じゃないけど、情熱というか執念というか、そういったものも普通じゃない。幽霊になるほどなんだから、それはそうか。

「思ったより面白いよ。塔矢もそうだけども、真剣にやってる奴は格好いいし」

「そういう塔矢どうしてるだろ、ってヒカルってば。囲碁の勉強してるよ、間違いないく。

いやでもそんなことより。

「ヒカル、私も真剣にやってるよ。格好いい？」

「お前が？ 何言ってるんだよ、女のくせに」

「あー、ひどい」

反論しようと思ったけど、ぼんやり気味。へーって。

「佐為？」

「ああ、うん。平安時代も女性が打ってたって」

「へー」

それは知らなかった。っていうか平安!?

「佐為って、平安時代の人？」

「そうみたいだな。その後、ほんいんぼーしゅーさく？ とかって奴と一緒に打ってたらしいよ」

「ほんいんぼーしゅーさく……本因坊秀策!？」

ああ、それは強いとかプロレベルとかの次元じゃない……。

「凄いな。そういうえばヒカル、家に碁盤なかったよね？」

「そんなのねえよ」

「前はいらないうって言われたけど、やっぱりあると便利だよ。佐為と打つかどうかはともかく、今日やった詰碁なんかも、碁盤があると考

「えやすいし」

「幸い、私の家には昔使っていたプラスチック碁盤と、今使っている木の折りたたみ碁盤がある。」

「ビクツと身体を震わせたかと思うと、ヒカルは耳を押さえてうずくまった。」

「あー、まあ、使うかどうか分からないけど、一応貸してくれる？」

「うん。じゃあ今日渡すよ」

「本因坊秀策に、手取り足取り教えてもらうなんて、なんという贅沢。素質もあるんだろうけど、ヒカルが強くなるわけだね。」

「私も、たまにはヒカルや佐為と打ちたいんだけど、いいかな？」

「おう……って俺とお？」

「うん。ヒカルも打てるようになってると楽しいよ。私も色々教えるから、一緒に遊ぼうよ」

「囲碁の勉強も大事だし、強くなるのも必要なんだけど、そもそも楽しむのが大事。ずっとヒカルと一緒に碁を打つとか、凄く贅沢な時間だよ。」

「もちろん、後々恨まれないように、ヒカルと佐為の時間を取り過ぎてもいけない。」

「きつと、佐為はいつか消えるのだから。」

第6手 小学6年生 その4

小学生最後の春休み。

学校がないので、昼過ぎに森下先生の研究会へ向かう。

最近、ヒカルは私に負けるのが悔しいらしく、そこそこ真剣に囲碁に取り組んでいる。ふふふ、前世では私は付いて回るだけだったから、囲碁という世界でヒカルの視界に入っているのは、純粹に嬉しい。「機嫌良さそうだな。いいことあったのか?」

「はい?」

あまり聞き覚えのない声に反応して顔を向けると、そこには白いスーツ姿の緒方さん。

「こ、こんにちは」

「こんにちは。君は院生だったかな?」

「いえ、森下先生の研究会に参加させてもらってます」

あれ、前にヒカルと一緒にだったから声をかけてきたと思ったら、単になんとなく見覚えあるっただけなのかな?

「へえ。じゃあ、進藤って奴もそこに?」

キラリ、と眼光鋭く、値踏みするような視線。さて、困った……。

「いえ、ヒカルは特には……」

「誰にも師事せずアキラ君に勝った? それはそれは、興味深いな」

その後も巧みな話術で情報を引き出される。

海王に進学するという塔矢くんを引き合いに出されて、葉瀬中へ行くと言ったり。もちろんヒカルの秘密も、私の秘密も内緒だけど。

「じゃあ、そろそろ時間なので」

「ああ、引き留めて悪かったな。もし良かったら、塔矢先生の研究会に来てみるか? アキラ君もいるから、いい勉強になると思うぜ」

意外な言葉に、若干の苛立ちが湧いて出る。

「ありがたいですけど……。ヒカルは行かないと思います。それに私は、ヒカルの付属物じゃないですよ。棋力も分ならず研究会に誘うとか、失礼なんじゃないですか」

私の言葉に緒方さんは驚いた顔を一瞬浮かべるも、すぐに苦笑へと

変わる。

「きみを誘っただけで、別にそんなつもりじゃないが。森下先生の研究会に行ってるなら、棋力はそこそこ見込めるだろう。あの人の實力は確かなものだからな」

「恥ずかしいー！ うわ、勘違いして反発して。やらかしたあー。」

「あはは、えつとおー。どうしようかな。」

「ご、ごめんなさい。生意気なこと言っちゃって」

「ククク、いや別に。誰だっけ自分が軽んじられたと思うと苛つきもするさ。囲碁打ちなら特にな」

「あまり気にしてないみたい、助かった。って時間！」

「あの、お返事は今度でいいですか？」

「そうだな。じっくり考えてくれていいよ」

最後に挨拶をして、研究会に向かう。ふう、緊張したあ。

「藤崎、緒方さんと知り合いなのか？」

「わっ」

急に声をかけないでよ、和谷くん。

「あ、悪い。なんか話し込んでたからさ」

「うん、ちよつと前に顔を合わせる機会があつて。塔矢先生の研究会に誘われちゃったの」

私の言葉に、渋い顔になる。そうよね。

「あー、森下先生、なんて言うかな」

「塔矢行洋のところに行くなら、うちは破門だー！ かな？」

「あはは、似てた似てた」

私の物まねで、和谷くんが笑う。

森下先生は、塔矢先生が気に入らないみたい。同期で、自分より成績が上だから。でも塔矢先生は別格として、森下先生も十分な成績だと思っただけだな。

怒鳴られるかな、と思いつつ森下先生に相談すると、しばらく黙つた後、口を開いた。

「まあ、藤崎ならどこに行っても馴染めるだろうし、相手も悪い顔はし

ないだろう。それに、俺に相談した結果断るとなれば、俺が狭量のよ
うじゃねえか。いいから行ってこい」

「あれ？ 塔矢門下になるなんぞ許さん！ って言わないんですか
？」

あああ、せっかく許してくれたのに、和谷くんってば混ぜつかえさ
ないですよ！

「ふん。だからこそだ。いいか、藤崎。塔矢のところで勉強して、ちや
んと情報を持ち帰ってこい！ スパイってやつだ、スパイ」

えー、大人げなくないですか。私が困った顔をしていると、白川先
生がフオローしてくれた。

「ふふふ、素直じゃないですね。ああいうポーズを取っているだけで、
藤崎さんの成長に繋がるから認めただけですよ」

こつそりと耳打ちしてくれる。そつか、そうだよね。さすが白川先
生。長く森下先生の弟子をやってるだけある。

「そこ、何か言ったか？」

「いいえ、別に何でもありませんよ。さて、冴木くん、打ちましようか」
そうして塔矢先生の研究会の話は終わり、いつもの対局や検討へと
移行していった。

あとは、ヒカルへの説明と、どうするかの確認だ。

夜、ヒカルの家に行き、ヒカルと打ちながら説明する。

日によって、ヒカルと私が打ったり、私が佐為から指導碁を打って
もらったり、ヒカルと佐為が打つのを見たり。

ヒカルは指導碁を嫌がる。本気で打つと実力差がありすぎて、ま
もな勝負にならない。置き碁も嫌がるし、案外めんどくさい。

でも最近ヒカルも少し打てるようになってきたから、初手天元に
してみたり、普段と違う棋風で打ったりすると、なかなか楽しい。

現代風の変わった打ち方をすると、佐為の食いつきが大きいらし
く、次に佐為と打つ時にその打ち方をしるってヒカル経由で要望が入
る。佐為と打てるほど慣れてないからヒカル相手に使ってるのね。
佐為は楽しそうらしいし、まあいいか。

「ふうん。研究会ねえ。俺はいいよ。佐為に打たせるわけにもいかねえし」

あー、つて顔をしかめる。ああ、佐為がごねたんだね。でも今回は私もヒカルに賛成。塔矢先生たちの前で打つのは、佐為にしてもヒカルにしても、あまり良いことにならない気がする。

「そうだよね。そういうえば、塔矢くんに勝った件、どう説明しようか」「マグレだつて誤魔化せばいいんじゃないかねえ？」

「うーん、それしかないかなあ。じゃあ、現時点で私より弱いって言うちやつていいよね？」

私の言葉に、ヒカルが首をかしげる。何言ってるの？　つて感じ。

「当たり前じゃん、実際、お前に勝てないし。あーもー、やめやめ」

こら、ちゃんと負けましたと言いなさい。子どもなんだから、もう。「じゃあ、聞かれたら私より弱いって言うね。塔矢くんに勝った時のことは、よく分からないって言っとく」

「ん。でもその研究会？　とか行くなら、あかりは中学の囲碁部は入らないのか？」

「えつとね。週に2、3回程度になつちゃうんだけど、それでいいなら顔を出したいな。駄目かな？」

「さあ？　筒井さんに聞かなきゃ分からないけど、いいんじゃないかね？」

そつか、ヒカルが決めることじゃないね。入学したら、早々に聞いてみよう。

「ヒカルは大会に出て実戦を経験して、実力を付けないとね」

「まあ、そうだな。塔矢にもお前にも、勝たないとね」

「ふふ。がんばれ」

「うっわ、上から目線、むかつくなー」

他愛のないやりとりが、今は楽しい。でも、そろそろ今後の方針を固めていかないとね。

ヒカルとの対局も相談も終わり、私は自宅に帰る。

ぼんやりと秀策の棋譜を並べながら、少し考え込む。

前世では、ヒカルは大会に出て塔矢くんに負ける。その後、夏の間はネット碁を打っていて、夏休み明けしばらくして三谷くんに勝つ。その後に院生になるって宣言して、1月には院生になっちゃうんだ。あれ？ ヒカルが院生になるって決めたの、12月になっていたよ。うな気が……。記憶違いかな、だいぶ前の話だし。12月だったら締め切り越えてて受けられないもんね。

ともかく、1月に院生になった後、中学2年の夏にプロ試験合格。今から1年半でプロ？ 今の実力を考えると、とんでもない話ね。あー、これは私も、院生になっておく方がいいかも。ヒカルと星のつぶし合いは嫌だけれど、ヒカルと同じ年度か、遅くとも翌年にはプロになりたい。

プロ試験の時期を考えると、7月から院生になるのが丁度よさそう。というか、5月の分は2月締め切りが過ぎているから間に合わない。

ヒカルのネット碁のためにパソコンも欲しいんだけど、院生にしろ何にしろ、お金がかかりすぎる。今でさえ森下先生の研究会に通うお金を出してもらってるし、塔矢先生のところに通うとなれば、それもまたお金がかかる。早く稼げるようになりたい。囲碁のプロ、なれたらいいんだけど……。

「そう考えると、塔矢先生の研究会はありがたいかな。きっと実力アップにも繋がるし」

何かと忙しくなりそう。でも、全部囲碁絡みっていうのが気になる……。大丈夫かな。

どうなるか分からないけど、二度目の中学生生活も楽しもう！

第7手 中学1年生 その1

入学式が終わって、さっそく囲碁部の部室へと向かう。

加賀さんはすぐには来られないようで、筒井さん一人。そういえば三谷くんは、ヒカルが碁会所でズルしているのを見つけたって話だった気がするけど、どうしようかな。

詰め碁ポスターは、見なかったとしても見たことにすればいいけど、それ以外は口出しするべきかどうか……。囲碁に関しては躊躇しないし、ヒカルに近づく女の子には注意を払うけど、男同士のやりとりには私が出しゃばっても、良いようにはならない気がする。

ともかく、まずはポスターだ。そうそう、最初は詰め碁も書いてない、単なるポスターだったんだよね。

「筒井さん、打とうよ。俺、強くなったんだ」

「加賀に勝てるほど強いのに、また強くなったの？」

「あ、いやあれは、マグレっつーか」

ああ、そういう伝えておかないと。

「筒井さん、私、囲碁部には入るんですけど、大会に出る気はないんです」

「え？ でも、大会は個人戦もあるよ」

どうやら3人集めるのが難しいからだと思われたみたい。

「私、今はまだ無理ですけど、プロになりたいと思ってるんです。だから、近々院生になれたら良いなって思ってます。だから、大会には……」

筒井さん、ポカーンとした顔になっちゃった。ヒカルも驚いた顔になってる。あれ？

「そ、そうなんだ。藤崎さん、そんなに強いのか？」

「プロはまだ無理だと思いますが、まあ、そこそこ」

「え、プロ？ お前が？ 無理に決まってんじゃない！」

ヒカルってば失礼な。無理とは限らないでしょ。院生1組の和谷くんより私の方が強いんだよ？ って言っても分からないだろうけど。

「塔矢くんは今年にもプロになるだろうし、私もできれば中学生のう

ちに、プロ試験合格したいと思ってるよ」

「え？ そんなにすぐに？ 大人になってからじゃないの？」

「プロ試験に合格したら、中学生でもプロだよ。過去にもいるし、塔矢くんもまず間違いなくプロになる」

もつと先の話だと思った、って。それは分からないでもない。私も、ヒカルがプロになった時はびっくりしたもん。

「じゃあ、俺も院生になる。それでプロ試験もあっさり合格してやる！」

わあ、またヒカルが無茶を言ってる。いや、無茶じゃないんだけど、まだ無理じゃないかな。

「正直言つて、今のヒカルじゃ厳しいと思うよ。それこそ、囲碁部の大会で海王に勝てるくらいにならなきゃ」

ちよつと細かい強さは分からないけど、海王の囲碁部より院生の方が間違いなくレベルが高い。

それはそうと、打とうと言いつつ止まっちゃってる。対局するよう促して、私は横から見る。佐為や私以外とほとんど対局経験がないから分かりにくいけど、筒井さんと良い勝負。

盤面五分で進んだ結果、ヨセで筒井さんはミスがなく、ヒカルは何目か損して、結果それが響いてコミ入れて9目半負け。

「ああ、駄目じゃん」

「いや、よく打てた方よ。ここ、突っかかるのがちよつと早かったね。この場合は先にスミを守るようにした方が正解かな。こっちは逆に、十分なのに手を入れちゃって、損してるね」

ヒカルの打った石に対して、いくつか説明を入れる。筒井さんも、ふんふんと一緒に聞いていたけど、話が一段落ついたところで、不思議そうに首をかしげた。

「でも、加賀に勝ったわりに、僕といい勝負だったね。悔しいけど、僕より加賀の方が随分と強いのに」

「あー、まあ」

ヒカルが困ったような顔になる。そうよね。ヒカル、今は加賀さんより弱いもん。

「どうしよう、手助けするべきなんだけど、どう説明しようかな。俺、まだあまり分かってないせいで、打ち方に波があつてさ。たまたまにああいう風に、上手く打てる時もあるんだ」

筒井さんは、あまり納得いつていないみたい。でも他に言いようがない。

よし、話を逸らそう。

「筒井さん、新入部員の勧誘ポスターとかって作るんですか？」

「え？ ああ、そうだね。団体戦のためにも、あと1人、男子部員欲しいなあ」

「加賀さんは？」

「あいつが素直に出るとは思わないからね。まあ一応、声はかけるけど」

募集はしておこう、と筒井さん。ヒカルも院生になれば大会に出られないし、筒井さんも加賀さんも3年生だもんね。

でも誰か入ってくれても、来年から1人？ もちろん、私はたとえ院生になつても顔を出すつもりだけど、やる気を維持するのは大変そう。そう考えると、1人でずっと頑張つてた筒井さんって、凄い。

そんな話をした翌日、葉瀬中に塔矢くんがやってきた。

「進藤！」

「塔矢じゃないか。どうしてこんな所に？」

「進藤。キミほどの人がなぜ学校の囲碁部なんか？」

囲碁部なんか、って塔矢くんって意外と失礼かも？ というよりは、ヒカルしか目に入つてないといったところね。

碁会所に来ていて言ってるけど、佐為のことを考えると、碁会所で打つわけにはいかないよね。

「俺はお前とは打たないぜ」

「えっ!？」

「俺、筒井さんと囲碁部で頑張るんだ」

「待て、どういうことだ！」

「それで大会に出るんだ」

「進藤！」

窓を閉めて、カーテンも閉める。廊下側から来たり出るところを待たれたら意味ないけど、塔矢くんもそこまではしないだろう。……多分。前世の時はしなかったはず。

しかし、完全にヒカルしか目に入っていない。まあ、私はヒカルに付いていっただけで、塔矢くんと打ったことないし、実力も知らないだろうから、しようがない。

「進藤くん？」

「待たせるさ、俺が追いつくまで」

佐為ではなく、ヒカルが。筒井さんには意味が分からないだろうけど、私には分かっちゃった。というか筒井さんは初めて塔矢くんを見たんじゃないかな。意味分らないよね。私は前世の時、意味が分からなかったよ。

「今日は、ここまでにしようか」

ヒカルに配慮して、筒井さんが終わりを告げる。やっぱりこの辺、上級生だなあ。しつかりしてる。

塔矢くんと接触から数日後。私が、塔矢先生の勉強会に顔を出す日がやってきた。

もう少し早く来たかったけど、勧めてくれた緒方さんと、塔矢くんや塔矢先生が行ける日を初日にした方が良いとのことで、日程調整してくれていたの。見た目は怖いけど、案外優しい。

私が塔矢先生の家に行くと、奥様が出迎えてくれた。うわ、若い。……いや別に、塔矢先生が老けているといたいわけじゃないんだけどね。

部屋に通されて、全員揃ってから挨拶するように、と言われる。塔矢くんもいて、私を見てびつくりしている。ヒカルの隣にいたのを覚えてるんだらう。でも、さすがに今は大人しくしている。後から色々聞かれそうだけど……。

「藤崎あかりです。普段は、森下先生に教えてもらってます。よろしくお願いします」

「藤崎さんだね。よろしく。アキラと同級生だと聞いた。どれくらい打てるか、やってみようか」

挨拶の後、塔矢先生と五子での対局が始まった。これはどちらかというところ、実力を見るための対局ね。

置き石を置いての碁はミスがなければ、順当に勝てる。もちろん塔矢先生が強引に地を奪いに来たら別だけど、この対局でそんな真似はしない。

私は前世では、攻撃的な手があまり打てず、強引な手や乱暴な手を苦手にしていた。争いごとが好きじゃないと言えば聞こえは良いけど、どうにも弱腰だったんだと思う。だからヒカルもどこぞの誰かに取られて、泣くことになる。

逆行してから、意地でもヒカルと一緒にいるために、碁の勉強もいっぱいしているし、苦手なんて言ってもらえない。必死で攻める手も覚えた。

無理せず守ればいいんだけど、ちよつと薄そうなところに、ちよつかいをかける。つて、あれ。左下スミが薄そうだったから攻めたけど、左辺の石を上手く打たれて、攻めた分が丸々損になってしまった。置き石の貯金、1つ分は潰しちやっただかな。手は緩めず、でも無茶はこれ以上できない。

「終局だね」

「ふむ、ここの部分、よく守ったね」

危ない、ギリギリだったけど何とか勝てた。まあ、塔矢先生は様子見の手がいくつもあった。手を抜いたというよりは、どう対処するかを調べるといふような手。

それでも、だからこそ、ある程度の実力は見せられたんじゃないかな。

「大したものだ。アキラくんに近い実力があるんじゃないか?」

「そう、ですね。何度か打てば、僕でも負ける場合もあるでしょうね。

……進藤の友人というのも納得だね」

塔矢くん、聞こえたよ。緒方さんもピクツて反応してるし。

「ひゃー、凄いな。俺でもアキラくんに負ける時あるのに」

若い男の人、芦原さんというらしい、口笛でも吹きそうな調子で褒めてくれる。自分でも、かなり上手く打てたと思う。

というか、たった数ヶ月だけど、佐為に打ってもらって、間違いなく強くなっている。教え方が上手いというより、生半可な打ち筋じや一刀両断されるから、最善の手を常に考えなきや勝負にならないのが理由かな。

格上との対局は、何物にも代えられない財産ね。

しばらく塔矢先生と私の対局について検討を行った後、塔矢くんと打つことになった。まずは様子見の、互先で。

そして、打ちながら少し雑談をする。

「藤崎さんは、進藤に教えてもらったの？」

「えっと、そういうわけじゃないんだ。今は時々打ってるけどね」

確かにヒカルに教えてもらったけど、それは今の時代じゃない。前世でヒカルに教えてもらって、今は小学生から森下先生に強くしてもらって。現状はヒカルと打ちながら佐為に師事している。うん、絶対説明できない。

「進藤には、指導碁を打ってもらってるの？」

「ヒカル、よく分からないだよ。真剣にやっってるのは間違いないけど」

「どうして、僕と打たないなんて言うんだろう」

「さあ」

突っ放したような言い方で悪いけど、説明できない。

ヒカルが私より弱いと言っても、塔矢くんは否定するだろう。

それより、今は目の前の盤面に思考を傾けたい。せっかく塔矢くんと互先で打っているんだもん。

塔矢くん、よそ事なんて考えていると、負けちゃうよ。

「……ありません」

ほら。いくら強くても、気を散じてたら勝てるものも勝てなくなるよ。

「塔矢くん、ヒカルが気になるのは分かるけど、それと碁の勉強をおろそかにするのは違うよね」

「うん、その通りだね。ごめん」

塔矢くんの目に、強い光が宿る。やる気に満ちた目。よし、それでこそヒカルのライバル。

でも今日は時間がもうあまりないので、もう一局打つのは難しい。「終わったか。こちらでの検討に混ざりなさい」

私たちが近寄ると、塔矢先生が塔矢くんを責めた。曰く、対局に集中しないのは相手に失礼だから、集中できないなら打たないように、とのこと。確かに塔矢先生から見ると、私と打つメリツトなんてほとんどないのに、真剣に打ってくれた。佐為もそう。二人とも、私との対局でも糧にしていると思う。

負けるにしても、何が悪かったのか、相手の良い手があれば吸収するくらいの気持ちでないと駄目ね。うん、さつきもやったけど、帰ったらまた塔矢先生との対局を検討しよう。

そして非常に有意義な、塔矢先生の勉強会が終わった。

「ありがとうございました、凄く勉強になりました」

「うむ、また来なさい。アキラにとっても、刺激になるだろう」

「そうそう。今度は俺とも打とうね」

芦原さんが気楽に言ってくれる。ありがたいんだけど、この人軽いなあ。塔矢先生の門下といっても、色々な人がいるんだね。

塔矢くんは、一転して真面目な顔。本来の力を出せば、私では相手にならないだろう。一步でも近付けるように、これまで以上に努力しないよね。

「はい、また次回、よろしくお願いします。塔矢くん、またね」
ぺこりと頭を下げた後、塔矢くんは手を振って帰路についた。

第8話 中学1年生 その2

あ、三谷くんだ。

ヒカルが金子さんを引つ張つてきて失礼なことを言った翌週、詰碁ポスターに書き込んでいるのを目にした。

声、かけてみようかな。前はヒカルが無理矢理連れてきたけど、最初はひねくれたこと言ってたし、ヒカルも院生になるから、ずっと一緒に大会に出られるわけじゃないし。

うん、声かけてみよう。ヒカルに任せても、ろくな結果にならない気がする。

「えっと、三谷くん？」

「あ？」

ピンピンと跳ねた髪の毛の三谷くん、若いなあー、かわいい。

おっと、まじまじと見ていたら不審そうな顔をされた。

「あ、私も囲碁部なんだ。詰碁を解いているのを見て、つい。囲碁部に興味ある？」

「ふーん。別に興味ない」

「でも、問題解いてたじゃない」

「解けるから解いただけ。話はそれだけ？」

「一度、囲碁部に来てみない？」

「遠慮しとく。放課後は用事があつてね」

うわー、取り付く島もない。次の授業もあるし、今日は塔矢先生の研究会があるし、来週になつちやう。

それに用事つて碁会所だよね。しかもズルしてて。良くないなあ、辞めさせないと。

「そっか。囲碁部はいつでも歓迎だから。また声かけるね」

肩をすくめられたけど、強くは否定してこない。よし、印象はそう悪くないかな。

昼に、ヒカルに三谷くんの情報を伝える。

「詰碁ポスター、3組の三谷くんが解いてたんだ。声かけてみたんだけど、あまり乗り気じゃなかったの。週明けの月曜なら行けるから、

「一緒に行つてくれる?」

「ふーん。じゃあ、俺も聞いてみるよ。任せとけつて」

ヒカルに任せるのは、不安しかない。でも、以前も囲碁部に誘うのは何とかなったみたいだし、任せて良いのかな。

加賀さんは将棋部の大会と被っちゃったせいで、囲碁部の大会には出られない。だから、三谷くんを誘えなきや大会に参加できないんだけど、ヒカルつてば、分かっているのかな。

ヒカルにやりすぎた行動を取らないよう言い聞かせてから、私は塔矢先生の研究会に向かった。

そういえば、初めて塔矢先生の研究会に行つた後、森下先生が興味を示したので塔矢先生の勉強会で何をやったか伝えたら、うちと変わらねえじゃねえか、とか文句言っちゃって。

そりやそうよね。変わったことしている勉強会って何。

その日は塔矢くんと打つて、検討をして。でも、ヒカルが気になるから、早めに終わらせてもらった。

「ヒカル、どうだった?」

ヒカルの家に行つて経過を聞くと、難しい顔になる。あ、そういえば。

「先に帰っちゃつてたから部室に連れて行けなかったんだけど、たまにたま碁会所にいたのを見つけて、打つてるところ見たんだけどさ」

「強かった?」

「ああ、なかなか打てると思うぜ。終局間際だったからあまり分からなかったけど、勝ってたし。それより、佐為が気付いたんだけど、あいつ、整地をいじつてみたいなんだよな」

「えつ、ズルをしていたつてこと?」

「ああ。しかも賭け碁してたからなあ。バレたらどうなることやら……」

えええー、ズルしていたのは以前にも聞いたけど、賭け碁は初めて聞いたよ。そっか、負けるのが嫌なだけかと思つてたけど、賭け碁は

まずいね。

「ヒカル、月曜は私も行けるから、一緒に誘おう」

「おう。そうだ、筒井さんに勝ったぜ！」

「えっ、凄い！」

「結構きわどかったけどな。佐為にも悪手をいっぱい指摘されたし」

「佐為の指摘はしようがないよ。ヒカル、おめでどう」

勝てなかった相手に勝てると嬉しいよね。

しかも筒井さんに勝つてことは、ヨセに入る前には勝負が付いてなきやいけない。ヒカルの実力だと厳しそうだっただけ……。

「ヒカル、1局打てる？ どれくらい強くなったか、気になるの。ヒカルと佐為が打つのを見るだけでもいいんだけど」

「おう。手加減なしだぜ」

「うん」

そして対局が始まる。随分、布石がすっかりしてきた。ちょっと地を広げすぎているからあっちもこっちも薄いけど、一応形になっている。特に弱いところを攻めながら、雑談を混ぜる。

「筒井さんって、ヨセ上手いよね。目算も間違えないし。ヒカルも教えてもらった方が良いんじゃないかな」

「あー。目算って苦手なんだよな。数えんの面倒くせえし」

「好き嫌いしてるようじゃ、塔矢くんに追いつけないよ。今は、序盤はおぼろげに勝ってそうかどうか程度でもいいけど、中盤にはおおよそ何目くらいの差か読めるようにならないと」

ヒカルの場合には性格に似合わず、意外と攻めるのが苦手みたいだから、不利になると巻き返しがあまり上手くない。その代わりに、優位に立つとそのまま維持するのは得意みたい。だからこそ、布石が大事なのよね。

攻めるのも慣れていかなきゃ駄目なんだけど、私にたくさん言われても嫌だろうし、意味も薄い。佐為も分かっているだろうし、必要なら助言するだろう。

終局したら少し検討して、私も佐為から助言をいただいて、家に帰る。

家でご飯を食べた後、さっそく棋譜に書いて、保管する。
とても大事な、ヒカルとの記録。私の宝物。

そして翌週、ヒカルと一緒に三谷くんを囲碁部の部室に誘う。

ヒカルつてば無理矢理腕を引っ張っちゃってる。あーあー、もう。
三谷くん呆れてるよう。

「それで、一番強い人は？」

筒井さんが来た後、これで全員と言うと、三谷くんは強い人を指名してきた。

どうしよう、私が出てもいいのかな。

「強いのは私だけど、大会に出るのはヒカルと筒井さんだから、私よりどっちかと打つ方が良いと思う」

「あっそう、逃げんだ？」

「そうじゃないよ」

「じゃあ打とうぜ」

困っちゃってヒカルを見ると、小さく頷いた。打っていいってことね。

「分かった。よろしくね」

序盤で得た地を維持しつつ、無理に相手の地を荒らさずに打つ。正直に言って、まだまだ緩い手が多いけど、時々勢いよく噛みついてくる。こういう力強さは、ヒカルが持っていない部分ね。

「整地はいいよね。コミ入れて8目半の勝ちね」

途中、コツンと碁石を側面に当てたりもしてたけど、いくらなんでも、盤面に打たれてもいけないのに次の手を打つほど視野が狭くなることとはないし、置く時にズラしたのも、一度「あれ、動いちゃったね」って戻したら、二度目は試みなかった。

ヒカルから整地をいじるって話もあったけど、じゃあ整地しなければいい。

「チッ。で、お強い人がいるのは分かったけどよ、それでどうしろって

んだ?」

「だから、大会だよ大会。6月末頃にあるから、一緒に出ようぜ」

「海王中学っていう、凄く強い学校があるんだ。絶対勝てないけど、そこ当たるところまで行きたいなあ」

筒井さんつてば、絶対勝てないつて……。そこまで圧倒的じゃないと思うんだけどなあ。

「何言つてんだよ。俺、海王に勝てるくらい強くならなきゃいけないんだよ!」

そうだよね、ヒカルは勝ちを狙わないと。

あ、そうだ。三谷くんと言つておかないと。

「三谷くん、良かったら、一緒に出てあげてくれない? ヒカルも院生になりたいつて言つてるから、3年間ずつとじゃないんだけど」

「はん。つまり進藤が海王と対局したいから、俺を人数会わせで都合良く使おうつてことだろ? そんなのはお断りだよ」

まあ確かに、別に対局したから入部しないといけないつてわけじゃない。ただ、三谷くんの場合は、ズルしてるから碁会所で続けさせるわけにもいかないのよね。

うーん、どうしたものか。悩んでいるうちに、三谷くんは帰っちゃった。一日を争うわけじゃないし、明日以降でいいよね。明日は、森下先生の研究会だけだ。

「碁会所でアイツを見つけたんだけど、対局後の整地でこう……。ズルしてたんだ」

「整地で!?!」

ヒカルが筒井さんに説明をする。筒井さんは大会でズルしないか、不安そう。ヒカルはやめさせると言っているけど、どうするつもりだろう。

「ちよつと追いかける」

「あつ、ヒカル待つて、私も行く」

バタバタと荷物を片付けて走り出すヒカルを追いかける。

「ちよつと、私は碁会所の場所知らないんだから、置いていかないですよー」

「遅えぞ、あかり！」

止まる気配なし。もう。

必死に追いかけると、ヒカルは走りながらブツブツとつぶやいてる。佐為と会話ね。余裕あるなあ。私、走るのでせいっぱいなのに。

なんとか目的の地まで、ヒカルを見失わずに到着する。ヒカルはそのまま繁華街の地下にある碁会所に入っていったが、私は少し息を整えてから入る。ゼーは一言いながら入るのは恥ずかしい。

「こんにちはー」

中に入ると、人の良さそうなマスターが出迎えてくれる。

「いらつしやい。おや、また学生かい。あの子たちの友達かな？」

「あ、はい。えっと、見るだけなんですけど、席料は……」

「ああ、見るだけならいいよ。今度また打ちに来てよ」

「すみません、ありがとうございます」

優しい人だ。お茶まで出してくれる。こんなマスターがいるなら、三谷くんも明らかに無理な相手とは対戦していなかっただろう。なのにズルをするとか、三谷くんってばもう。

「ヒカル」

見ているヒカルに声をかけて、盤面を見る。

まだ中盤に入るかどうかだけど、三谷くんの方が、石の形ははつきり良い。これなら、ズルしなくても勝てるかな？

「おやおや、女の子まで見に来てんのかい。おんなあく心おく♪てか」

うわ、いきなり歌い出した。酔ってるね、うん。

酔ってる人は、ちょっと苦手。前世でも、セクハラしてくるのは、酔ってる人が多かったもん。

「あんちゃん勝ったと思ってるね。勝負はゲタを履くまでわからねえって言葉、知ってるかい？ とらぬタヌキの皮算用ともいうぜ」
「ハハ」

「お、笑ったな。最後まで笑っちゃいけねエよ。勝負ってもんはよ」
酔ってるけど、言うことはまともだ。筒井さんのヨセじゃないけ

ど、油断して読み間違つて、なかった負け筋が生まれてしまう、というのは珍しくない。

三谷くんも、思うところがあつたのだろう。緩みかけていた空気を一転させて、真面目な顔つきになる。

「いいこと言うね」

「だろ？ あんちゃん、人の話を聞く耳持つてんな。将来、見込みがあるぜ」

シユボツとライターの火を、左手で付ける。あれ、この人右打ちしてたよね。

別に、利き腕で打たなきゃ駄目な理屈はないけど。

「左ききかい？」

三谷くんも怪訝そうだ。と、相手の人がニヤリと笑う。

「観察力もするどいな。てえしたもんだ……。いいだろ、ちよつと早いが勉強させてやるよ、大人の碁を」

ガツと左手で碁笥を持ち、置く場所を変える。と同時に。

「一万円の授業料でな」

左手でそのまま碁石を手に持ち、バシツと力強く打つ。気持ちの問題かな。利き腕で打つ時は本気。逆の手で打つ時は遊び。

「あ」

石をずらした。佐為も気付いたのか、ヒカルが盤面を探し始める。いやあ、凄い。俯瞰で見ているから気付けたけど、対局中だと気付かなかつたんじゃないかな。

それと、焦っているのか三谷くんも相手の早打ちに釣られて、考えずに打っちゃつてる。これじゃ実力の半分も出せないだろう。

「ギア終局だ。どっちが勝つてるか分かるか？ ふふ、整地でイジらねえと勝てねえぜ」

あらら、もう現時点で勝つてるのに、さらに整地までイジっちゃうかあ。これは、この人は悪さした三谷くんを懲らしめるために呼ばれたかな。

「コミを入れて12目半の差。俺の勝ちだ。あんちゃん、1万円出しな」

「ええ！ 1万円!？」

あ、思わず。あはは。

「おう。賭け碁だからな。コイツがいいって言ったんだ。約束は約束だからよ」

「三谷……」

「く、くそっ」

財布から……ん？ 今、ポケットから直接お札出さなかった？

「20円足りねえぜ」

容赦ないなあ。いや、文句言う権利はないんだけどね。

「三谷、俺貸してやるよ」

ヒカルが声をかけるが、貸しを作りたくないみたいで、マスターに相談した。ああ、でも……。

「あんちゃん、おいたが過ぎるとな、こうやって俺みたいなのが呼ばれるんだよ」

「え？」

「ダケさん！」

うーわー。言っちゃうかあ。このダケさんって人、容赦ない。三谷くん、悔しそうに20円をマスターに返して、ヒカルから借り直した。そのまま黙って出て行っちゃう。ヒカルがそれを追いかける。

え、ここに私を置いていく？ どうしよ。

「お嬢ちゃん、打つかい？」

「えーと。どうしようかな」

「へっ」

本気にしていないのか、打つつもりは元々無かったのか、鼻で笑ってダケさんはマスターと会話を始める。

これは、私が三谷くんの友達と分かった上で、伝えているんだろう。優しさとも言えるけど、私が見限ったり、言いふらすことは考えないのかな。

「最近なんだよ、イタズラを شدしたのは」

お客さんも、孫にこづかいやるような気持ちだったと言う。小中学生が碁を打っているの、嬉しいもんね。微笑ましいというか。一度大

人を経験してると、よく分かる。

「でもイタズラはいけないヨ。それで、ちよつとたしなめてもらおうとね」

「おう、子どもをしつけるのは大人の役目だからな。さてと、このままカモでも待つかな」

多分、マスターがダケさんに依頼したから、お礼もあるんだろう。でも私がいるから払えない。ダケさんが待つと言ったら、マスターは少し嫌そうな顔をするも、黙っている。

「あの。おじさん、私と打ってもらえますか？ 1万円を賭けて」
「え？」

「お嬢ちゃん、やめときな！ さっきの見てたろう？」

見てましたよ。腕は、私の方が上。問題はズルだけど、やると分かっていたら気付けると思う。

カラン。扉が開いて、ヒカルが戻ってきた。

「おじさん、俺が勝ったら、さっきの1万円返してくれない？」

「お？」

「俺、あいつの友達なんだ」

「じゃあ、お前が負けたら1万円くれるんだろうな」

「え？」

「じゃねーと賭けにならねえよ。こっちのお嬢ちゃんは、1万円賭けるって言ったぜ」

「あかりが!？」

うん。だって、このままだといくらなんでも、三谷くん可哀想だもん。

「やめとけよ、お前が1万円かけるとか、似合わねえ。俺に任せとけ」

「絶対負けられないけど、ヒカル、大丈夫なんだね？」

「おう、絶対に勝つ」

ん、通じたみたい。さっきのを見て絶対に勝つって言えるのは、佐為が打つということ。じゃあ任せよう。多分、佐為なら対局中でもズルに気付くだろう。

実力はともかく、ズルをするような人と打つのは、ちよつと不安

だったんだよね。ヒカルが戻ってきてくれて助かった。

「座れよ、置き碁は無しだぜ」

「いらねーよ、そんなもん」

「いらねーか、そんなもん」

「バカ、知らないよ！ まったく、最近の子は……」

「あんちゃん、どれくらい強いんだ？」

ダケさんがヒカルに質問する。ヒカルってば、少し悩みながらも。

「本因坊秀策くらい——かな？」

「はっはっは！ こりやまいった、言うに事欠いて秀策かよ」

ダケさん大笑い。勝負終わるまでは笑っちゃ駄目なんじゃないか。たっけ。マスターもため息をついている。気持ちは分かるけど、事実はなんだよね、まったく笑えないよ。

「秀策殿に敬意を表して、はなっから左手でいくぜ」

そして対局が始まる。……うわ、容赦ない。打ち始めて、すぐに佐為は相手の地を荒らしに行く。ダケさんも自信があったのだろう、早々にヒカルの打った右下にちよつかいをかけたが、きっちり守りつつ、右上、左辺と黒を殺していく。

これはまた、早い決着だ。布石の段階で、ダケさんの黒に生きがほとんどない。左上少しと上辺、左下で凄く小さく生きるのがせいぜい。はつきり黒が悪いというか、もう終わってる。

「……負けました」

「約束ね、1万円」

盤面を見ながら、呆然とするダケさん。うん。佐為って凄い。

「いくぞ、あかり」

「うん。ありがとうございました」

ペコリとマスターに頭を下げて、碁会所を出る。はあ、緊張した。

「ヒカル、お疲れ様。佐為も、ありがとう」

「おう。明日これを三谷に返して、大会参加させようぜ」

「弱みを握ったみたいであまり好きじゃないけど、そうね」

「大会で海王に勝ったら、院生試験を受けてもいいだろ？」

「そうね。でもヒカルに勝てるかな？」

「勝つさ」

「応援してる。頑張ろう」

へへっと笑ったヒカルと並んで、家へと向かう。

「ヒカル、今日行っていい？ 佐為と打ちたい」

「んー。って、分かったよ。その後、俺とも打つぞ」

「うん！」

今日の打ち方を見るに、佐為は一度も全力で打ったことないんじゃないかな。ヒカルは当然、私なんかとも実力が違う。

ヒカルはきつと、佐為と変わらない実力を身につけるし、私も佐為からできるだけ吸収しないと。

第9手 中学1年生 その3

賭け碁をやった翌日は森下先生の研究会だったので、一日空けて水曜に理科室へ行くと、ヒカルと三谷くんが打っていた。上手く説得できたみたい。でも筒井さんが不審そうな顔をしているけど、大丈夫かな。

「三谷くん、囲碁部に入ってくれるの?」

「まあ、一応な」

「俺も院生試験受けるから大会には出られなくなるけどさ、時々打ちに来るからさ」

ヒカルの言葉に、三谷くんが笑う。

「お前、俺に勝てねえのに院生になる? なれるわけねーじゃん」

「確かに、院生ってとんでもないところだからね。海王に勝つより難しいかも」

筒井さんも話に混ざるけど、確かに現状だとヒカルが院生にはなれない。でも、囲碁を始めて半年ほどで、三谷くんに負けるとはいえ五分に近い。私が今の三谷くんくらい打てるようになったの、随分経つてからなのに。

ヒカルが凄いのは間違いないけど、それを引き出せる佐為が凄いな。

「藤崎は院生にならねえの?」

「私、今月院生試験を受けるの。通ったら、来月の7月から院生よ」

日曜は基本的にずっと院生研修日だから、大会を見に行けるのは、今回が最初で最後。

「まあ、お前なら通るんだろうな」

「一緒の先生に教えてもらってる子が既に院生で、棋力は私とそう変わらないから、私も多分大丈夫。もちろん油断はしないけどね」

「へえ。じゃあ次はお前打ってくれよ」

三谷くんの言葉に、チラリとヒカルの様子を窺う。ヒカルは私と三谷くんを気にした風もなく、筒井さんに声をかけている。

「じゃあ、筒井さん打とうぜ。筒井さんって目算得意だよ。普段、目

算ってどうやってんの？」

「そうだね、大まかに言うところ……」

今、三谷くんに負けたのは全然引きずってないみたい。1つのことに集中すると周りが見えなくなるのは昔から。ヒカルらしくて、そういうところも魅力なだけだね。

そんなわけで、三谷くんと指導碁を始める。前に八目半負けた時に本気で打ってなかったのも分かっているみたいだけど、とりあえず二子で打つ。三谷くんは前回より無理な手が少なくなってる。でも、攻撃的な棋風は変わらない。

筒井さんからヨセと目算、三谷くんから地の荒らし方を教わって、佐為から読みの深さを学んだら、ヒカルは院生試験もすぐに突破するだろう。

「ねえ、筒井さん。大会前に加賀さん呼べないかな？」

「加賀も大会前だから、難しいかも」

多分、加賀さんの実力は海王とさほど変わらない。仮想とはいえ、相手の実力を知るのには良いことだと思っただけ。

まあ、まだまだヒカルも三谷くんも、海王に勝てるとは思えないけどね。

昨日は三谷くんが入部してから、初めて4人揃ったせいかな、遅くまで打っていてヒカルの家には行けなかった。

今日は早めに終わったので、家に荷物を置いて着替えてから、すぐに家を出る。

目的地はすぐ近く。

「こんばんは」

「あかりちゃん、いらっしやい。ヒカルー！ あかりちゃんよーっ！

あかりちゃん、お菓子とか食べる？」

「お邪魔します。えっと、お菓子食べちゃうと、晩ご飯食べられなくなるから」

「そう？ じゃあ飲み物だけ。紅茶でいい？」

「うん、ありがとうございます」

ヒカルのおばさんと挨拶して、ヒカルの部屋に向かう。

お湯を沸かしてくれていたみたいで、すぐに紅茶を持ってきた。おばさんが部屋を出て、すぐに対局を始める。今日は、最初に私とヒカルが打つ。

「あかり、もうすぐ院生かあ」

「うん。大会と被らなくて良かったわ」

「いつ?」

「大会の一週間前。ねえ、ヒカル。佐為って私たちとしか打ってないでしょ?」

「ああ、まあな。でも打たせるわけには行かねえからなあ」

ヒカルがため息とともに難しそうな顔をしている。

「ひとつ提案があるんだけど」

「ん、何?」

「インターネット碁とかどう?」

そう。先週、和谷くんからインターネット碁の話聞いて、これだー! って思った。

前世では、大人になってから一人で碁会所は行きにくかったし、急速なインターネットの普及で、パソコンは当然、スマホでもインターネット碁を楽しめた。

あれなら匿名で打てるし、佐為も打てるんじゃないかな。

「インターネット碁? 何それ?」

「パソコンを使って、世界中の人と対戦できるの。パソコン買うと高いから、どこかでできれば良いんだけどね」

「へえ。それって、バレる心配ねえの?」

「うん。登録時にパスワードとか入れるから、パソコンが変わっても大丈夫だし、匿名だから大丈夫よ」

個人情報を入力もないから、なんともなる。

と、いきなりヒカルが耳を押さえた。

「わっ。……わーった、分かったからちよつと黙って」

ああ、佐為が叫んだのね。打てるなら打ちたいよねえ。

ヒカルも大変だろうけど、佐為が他人と打つところを見るのも、絶

対に勉強になる。

「佐為のやつ、分かってないくせに打てるって聞いただけで大騒ぎだ」
「お金、私も少し出すから、一度ネットカフェで試してみない？」

お小遣いのやりくり大変だけど、どうにかしよう。

甘い物を絶つわけにはいかないけど、安く済むようなものを選びつつ頑張ろう。そう、脳は糖分を必要としているの。決して甘い物が食べたいだけじゃない。うん。……お菓子、出してもらっても良かったかも。

「そうだな。試しに行ってみるか」

「決まり。明日は私が無理だから、明後日でいい？」

「一人でもいいよ。適当に行ってみるから」

ヒカル、結構一人で動くタイプよね。私はずっと、後ろから追いかけてる。

「でもヒカル、インターネット碁の打ち方とか分からないでしょ？」

「適当にやるよ。っていうかお前も、知らないだろ？」

「森下先生の研究室で話を聞いて、試したことあるよ」

話を聞いただけで、試したのは嘘。ちよつと古いから慣れない部分もあるかもしれないけど、なんとかなると思う。

明後日、一緒に行く約束を取り付けて、私とヒカルの対局後に、ヒカルと佐為の対局も見届けてから、家に帰った。

2日後、学校でヒカルと話していると、もう行っただって言われた。ちよつと待って、どういうこと？

「だから、三谷の姉ちゃんがネットカフェでバイトしててき。タダでやらせてもらえたんだ」

「ふうん。それで、どうだった？」

そういえば、三谷くんのお姉さんがバイトしてたね。すっかり忘れてた。

「最初はちよつと戸惑ったけど、まあ囲碁やるだけだし、なんとかあったよ。誰とやっても連戦連勝。外国のやつからさ、プロですか？
だつてよ」

「そこらのプロより強いもんね」

そこらのプロどころか、佐為に勝てる人なんているのかな。塔矢先生でもかくや、つてくらい強いもん。

佐為の強さで盛り上がって、今日もネットカフェに行く約束をする。

「ただし。三谷くんや筒井さんから見たら、部活サボってネットカフェで対局してるんだから、ずっとやってるのは良くないよ。大会終わるまでは、週に1回くらいの方がいいと思うの」

「あー、まあな。つていうか佐為に打たせるだけじゃなくて、俺も三谷に勝たねえと」

確かに。目の前に身近な目標があるのは、悪くないね。

その日はヒカルに付いて行って、横からネット碁を観戦する。

相手は玉石混交で、だいたい私より弱いけど、たまにもしかしたら負けるかも、つて相手もいる。ネット碁自体が、まだあまり洗練されてないから、勝てば勝つほど段位が上がるとかもなく、フリー対局がメイン。

どんな相手でも危なげなく勝利を掴む。

「今日はこの辺かな」

「あら、終わり？ 勝てたの？」

「へへ、連戦連勝！」

「へえ、凄い。彼女に良いところ見せられたのね」

「彼女お？ そんなんじゃないよ。ただの幼なじみ」

「へえ。ふうん」

ヒカルは否定したが、三谷くんのお姉さんはニヤリと笑う。

私の顔を見たら、一目瞭然よね。真っ赤になってる自覚あるもん。顔熱い。

その後も少し会話をしていたけれど、私は挨拶するだけでせいっぱいだった。

他人の恋を応援するのは楽しいけど、自分のことになると冷静でいられない。当然といえば当然。佐為が、囲碁のために幽霊になったの

と似ていて、私はヒカルのために逆行した。それくらい執着してるってことだから。

それにしても、すっかり囲碁漬けだけど、そこはしょうがない。将を射んとすればまず馬を射よ。この場合、ヒカルが将で囲碁が馬。何かおかしいけど、そんな感じ。

そんなこんなで日が経って、院生試験の日がやってきた。

第10手 中学1年生 その4

いつも行っている日本棋院に、お母さんと一緒に入る。

中に入ると、和谷くんが友達と話をしていた。

「お、藤崎。試験今日だっけ」

「こんにちは。うん、これから」

「和谷、知り合い？」

隣の、ちよつと年上の男の子が疑問を口にする。なんとなく見覚えはあるけど、初対面。見覚えがあるってことは、プロになった人だろう。

「ああ。森下先生の、姉弟子？」

「なんで疑問系なんだよ」

「年下だしなあ」

「はじめまして。通るかどうかわからないけど、通ったらよろしくお願いします」

「ああ、よろしく。……和谷の友達とは思えないほど礼儀正しいな」

失敬な！ とか言い合ってる。ふふ、和谷くん楽しそうだ。あ、前の子が終わったみたい。お母さんと一緒に呼ばれて、部屋に入る。

「はじめまして。どうぞ、そっちへ座って。志願書と棋譜を見せてください」

「はい」

用意しておいた書類を渡す。

棋譜は、和谷くんと最近の対局のうち、一番よく打てた一局。それ以外は、ヒカルや佐為との棋譜を出すわけにもいかないの、冴木さんとの互先の一局、塔矢くんに負けた一局。

最初の塔矢くんに勝った時ののは、あまりに塔矢くんがよそ事を考えていた時だったので、さすがに選べなかった。

だから、冴木さんも塔矢くんも負けた棋譜だけど、相手がプロだったり、塔矢先生の子どもだったりするし、しょうがない……よね？

よく考えたら、負ける相手って佐為と塔矢くんを除いて、みんなプロなんだよね。冴木さんには極稀に勝てるけど、基本的に負ける。勝

てる相手は、和谷くんを除いてかなり弱い。近い実力の人って、本当に和谷くんくらい。そう考えると似た年代、似た実力の集まりっていう院生研修は大事な学び場ね。

「森下さんのお弟子さんなんだね。棋譜も……。うん、ちゃんとした棋風を持つてるね」

書類は合格の様子。先生は、お母さんの方へと顔を向ける。

「試験は小一時間かかるので、お母さんは外でお待ちいただけますか？」

「ええ、分かりました。あかり、喫茶店にでも行ってるから、終わったら声かけにきてね」

「うん、ありがとう」

お母さんが出て行き、碁盤の前に座る。

「では、早速打とうか。置き石は2つで」

「はい。よろしくお願いします」

置き石を置いて、対局が始まる。

盤面のリードを守るだけに留めるか、ある程度攻めていくか。せつかくの試験だし、良いところを見せなきゃ意味がない。

勝ちを目指して食欲に攻めたら、しばらくして手が止まる。

ちらりと目を向けると、手元の書類を確認している。

すぐに再開したけど、さらに少し打ったところで、また手を止めた。

「うん、森下先生に教わっているだけあって、十分に打てるね」

「あ、ありがとうございます」

「いいでしょう。来月から来なさい」

「はい！ありがとうございます。良かったー」

「ふふふ。では、お母さんをお呼びできなさい」

「はい」

うつかり気が抜けた発言が出ちゃったけど、先生は笑って流してくれた。なんでも、緊張して粗相する子も結構いるんだって。ヒカルが受ける前に、注意しておかないと……。

しばらく説明を受けて院生がたくさんいる対局室へ通される。対

戦表の見方なんかを教えてもらいつつ、ちよつと和谷くんたちのところに向かう。

「藤崎、どうだった？」

「来月から来なさいって。これからよろしくね」

「おう。こいつらとの挨拶は、まあ今度でいいか」

「そう？　じゃあ、来月からよろしくお願いします」

周りの人に、ペこりと頭を下げる。女性も結構いるし、和谷くんと一緒に検討していた子に、とびきり美人がいた。凄い、こんな子も囲碁をやってるのね。

その場は特に話もせず、お母さんについて帰る。

「ごめんね、色々とお金かかっちゃって」

「んー？　大丈夫よ、気にしない気にしない。あかり強いみたいだし、これくらいはね」

逆行してからこつち、なるべくワガママを言わないようにしている。でもその中で、囲碁に関するごとと、ヒカルに関するごとだけは、かなり無茶を言っている自覚がある。プロになつてお金を稼げたら、ちゃんと返すから、それまで待つてもらおう。

週明け、院生試験を通つたと部活で報告すると、皆から祝福の言葉をいただいた。

「ありがとう。次はみんなの番だね」

来週、いよいよ海王との大会がある。大将が三谷くん、副将がヒカル、三将が筒井さんという実力順で応募した。応募した時は三谷くんの方がはつきり上だったのに、今の勝率はヒカルにちよつと傾いている。

佐為とインターネット碁を打つのが楽しくて、のめり込んでるみたいだし、その効果かな？

「おう、任せとけ」

ガッツポーズを取るヒカルだけど、どうだろう。前世だと塔矢くんが来たんだよね。塔矢くんと当たれば、いくら強くなつてるとはいえ、ヒカルじゃ相手にならない。

まあ、そんなこと言えるはずもないので、笑顔を向けて応援していた。応援する気持ちは嘘じゃないからね。うん。

そして大会当日。

以前の時と同様、やっぱり塔矢くんが、ヒカルの前に現れた。

「海王戦の副将ってどんな奴かな」

「僕だよ。海王の副将は僕だ、進藤」

「塔矢！」

びつくりするよね。その後、少し海王のメンバーや三谷くんたちも含めて話をしている。私は葉瀬中の部員だけど、大会に出るわけじゃないし、あまり話に入らない方がいいかな。

って思っていると、塔矢くんこっちに来ちゃった。

「藤崎さん。こんにちは」

「こんにちは。塔矢くん、ヒカルを追いかけて部活に入るって、結構無茶するよね」

「進藤が、僕とは対局しないって言うから」

真面目よね、塔矢くん。私が話しているのを見て、筒井さんと三谷くん、海王の人たちも驚いている。

あはは。塔矢くんって、あまり表に出てこないもんね。

「藤崎、塔矢と知り合い？」

「ちよつとね。塔矢先生の研究会に行ってるから」

ざわり、と海王のメンバーがざわつく。

「それで塔矢が進藤を追いかけてるってか。……進藤が強いとか、完全に勘違いなのにな」

三谷くんが、ぼそり。

あはは、と笑ってごまかす。前世ではヒカルが打ったけど、今日はどうだろう。もし佐為が打ったら、勝っちゃうだろう。そうすると、大騒ぎね。

1回戦は、順当に3勝で勝ち進む。ヒカルも気を引き締めているみたい。真面目な顔して、ちよつと緊張もしているのかな。

この顔を見る限り、ヒカルは自分で打つつもりなんだろう。

1回戦が終わったなら、お昼の時間。お弁当作ってきたんだけど、ヒカル、食べるかな？

「ヒカル、お弁当あるよ。食べない？」

「俺、いいわ」

「えーっ。でも」

立ち上がって歩き出したから、後ろから付いていく。

「結構あっさり勝っただろ。結構腕上がってるよ、俺！」

「うん。かなり強くなってきたよね。塔矢くんと対局、頑張ってるね」

「おう。いくら塔矢が佐為と打ちたがってても知るもんか。佐為、俺が打つからな」

ヒカルが、佐為に釘を刺している。

って、隠れるような感じでヒカルが柱の横に行っただけど、どうしたのかな？

きゅつと手を引かれて、私も柱の陰に隠れる。

「岸本くん、話って、ひよつとして、塔矢がイジメにあっていたこと？」

「塔矢は確かに部では浮いた存在だったが……」

内容が内容だけに、2人が会話を続けるのを聞き入っちゃった。確かにあれだけ強ければ、周りには気にするし、嫉妬する人も出るよね。

ヒカルはしばらく黙っていたけど、やがて歩き出す。階段のところまで座り込む。私が横に座ると、ヒカルが小さくつぶやいた。

「イジメねえ、まあ、当然かもな。あいつ自分のことしか考えてねーから」

「うーん。それだけ、塔矢くんも必死なんだろうね」

「……。普通そこまでしないよな」

しばらく考え込んだ結果。

「佐為、お前打て」

「ヒカル」

やっぱり。ヒカルってこういう時、意外と相手の気持ちを感じ取っちゃうのよね。

私は制止しようとしたけど、ヒカルの顔を見て、言葉に詰まる。辛そうな顔。ヒカルも凄く葛藤した上での言葉だろう。でも、それでも。言いたいことは言っておきたい。

「ヒカル、塔矢くんの気持ちも大事だし、佐為と打たせるのも大事だけど、ヒカル自身が塔矢くんと打てる機会も、滅多にないのよ。今は力が及ばないかもしれない。でも、どれくらい差があるのか、その見極めも凄く大事よ」

「ん……」

うなだれていたヒカルが、ふっと笑いを浮かべて私を見る。

「お前の言いたいことも分かるけどさ。せめてもうちよつと強くなつてから塔矢と打つき」

言つても無駄なようね、残念。

追い抜かれるのは悔しいんだけど、ヒカルが私より弱いままというのは、なんだか落ち着かない。ヒカルが強くなるためにも、こういう真剣勝負の場での上級者との対局は大事にしてほしいのよね。

でも言葉を選んでいううちに、ヒカルは会場に戻ってしまった。ああ、何もフォローできてないよ。

私も会場に戻ると、筒井さんと三谷くんが打っていた。

「どこ行ってたの？」

「飯も食わずに、海王戦が戦えるのかよ」

言われるうちに、2回戦が始まった。

「始めてください」

「俺が白、進藤は黒で、筒井さんも白ね」

「お願いしま……す」

「やつと、君と対局できる」

塔矢くん、思いつめた顔でつぶやく。碁笥の蓋を開く時に落としちゃって、拾おうとして、手が震えている。武者震い。気迫がこつちにも伝わってきそうなくらい。

……前に私と打った時とは、大違いね。そこまでの相手がいるっていうのは、素直に羨ましい。

そして、ヒカルと塔矢くんの対局が始まった。

序盤から、慎重に打たれていく。序盤の展開ではヒカルの方が良さそうだけど、圧倒的な差はついていない。塔矢くんもさすがだけど、それ以上に、佐為がネット碁で覚えた最近の布石を試しているのが大きい。そのせいか、先が読みにくい打ち方はせず、それなりに基本的に忠実な打ち方をしている。

序盤、ヒカルが少し長考している。おそらく佐為が、先の展開を読んでいるのだろう。右側の攻防でどちらを優先するか、といったところかな？

「……少しは成長しただろうか、僕は」

塔矢くんの言葉に、ヒカルがため息を吐く。そうよね。塔矢くんは元々強いのに、ますます遠い存在になっちゃう。

「君も変わった。打ち方が様になってきた」

「え、打ち方？ ああ……」

毎日、放課後は部活で打って、夜は私や佐為と打ってるもんね。集中力も凄いいし、そりゃ打ち方も変わるよ。それに、ヒカルも随分強くなったんだよ。

あれ、今までヒカルの目に気合いが込められてなかったけど、少し変わった？

「……ん？」

あ、思わず声が出ちゃった。ヒカルが打ったのは、11の八。こういう局面で打たれる場所じゃない。

塔矢くんも不思議そう。

しばらく打つと、ヒカルがなんとなく、中央に大きな模様を作ろうとしているのかな、と感じた。間が空きすぎて、凄く緩いけれど。実力がともなえば、凄く楽しそうな気がする。

そして、手が追いついていないから意味を成さなかったけど、さっきの11の八、今の左辺のやりとりで悪手を打たなければ、結構いい位置で塔矢くんの手をとがめられたんじゃないかな？

「……なんだ、これは」

塔矢くんがつぶやく。うん、反応に困るよね。前世の時はヒカルが怒鳴られたけど、その時より実力があるのは間違いない。だから、ヒカルの碁も、一応形になってる。でも生きるべき石は死んで、四方すべて形勢が悪い。塔矢くんには遠く及ばず、佐為と打つつもりだった塔矢くんとしては、困惑するだろう。

以前の碁が古かった、というのも、今の悩みに直結してそう。新しい打ち方を学んだ、それを色々と試しているという風にも見える。

「遊んでいるのか？」

「ん？ 遊んでねえよ、本気で打ってる」

「ふ、ふぎけるな！」

あー。もう。大会中に叫ぶとは、塔矢くんもまだまだ子どもね。

「塔矢くん、大会中よ」

「塔矢！」

海王中学の先生も、塔矢くんをたしなめに来た。

「最後まで打ちなさい。もしくは、中押し負けにするか？ 言っただろう、打てば分かる」と

ああ、1回戦の様子を、先生は見ていたのね。確かに塔矢くんが固執するような腕とは言えない。

でも、先生も塔矢くんも、ヒカルを馬鹿にしすぎている。どれだけ頑張っているかも知らないで。

「くそっ」

塔矢くん、知ってる？ ヒカル、打つたびに強くなるの。特にネット碁をやった日の夜は、それが大きい。メンバー表を提出した時は三谷くんの方が強かったけど、一ヶ月もしないうちに、ヒカルの方が強くなってる。

私との実力差もまだまだ大きいけど、打っていてヒヤリとする回数、日に日に増しているの。

「……負けました」

そして、この盤面での投了。実力がないほど、目算もできないから投了が遅い。筒井さんに学んで、目算もかなり正確になってきた。

「以前の君に、垣間、神の一手すら見たと思ったのに……」

「……」

ヒカルは、何も言い返さない。内心、ショックを受けてるだろうな。「ヒカル……お疲れ様」

「ん……」

横を見ると、筒井さんも負けた。三谷くんは頑張っているけど、はつきりと白が悪い。

「——正直な話、君がこんなに打てるとは思ってなかった。楽しかったよ」

「……まだ、終わってないだろ」

「おや、最後まで打つのか？」

うわー、嫌みっぽいー。三谷くんも、悔しいだろうなあ。

筒井さんも、思わずといった風に、涙がこぼれている。

私、長年囲碁を打ってるけど、勝ち負けに対して、最近は意識が薄かったかもしれない。

森下先生や、そのお弟子さんには鍛えてもらうだけ。和谷くんに真剣に打ってもらうけど、だいたい勝つし。

塔矢くんとヒカルは、今は実力面で釣り合っていないけど、そのうち釣り合う。そして、ライバルとしてのぎを削る。

私にとつての、ライバルって誰だろう。ヒカルを挟んでのライバルは、前世でヒカルと結婚した人だけど、いくらか年下の、ヒカルがプロになって何年か経ってから知り合ってる。私は今世でそこまで待つ気はないし、囲碁のライバルというのもおかしい。

いつか私にも、ライバルと言える人が現れるのかな……。

第11手 中学1年生 その5

「藤崎、saiって知ってるか?」

森下先生の研究室に行くと、和谷くんが話を振ってきた。

「さ、さい?」

「そう。インターネット碁でさ、最近ちよつと話題になってんだよ。かなり強えって」

「へえ。ネット碁は何回かやったことある程度で、あまり知らないの」
「saiだけじゃなく、時々プロも打ってるし、勉強になるぜ」

へえ、プロって誰だろう。若い人が多そうな印象だけど。

「この前なんてさ、一柳先生が打ってたんだ。ビックリしたのなんの」
「え、一柳先生が!?!」

凄い、七大タイトルの保持者がインターネット碁って。一柳先生、見た目によらず若いなあ。

「おう。でも、それよりsaiの方が気になるんだよな。絶対どこかのプロだと思っただけど……」

「そんなに強いのか?」

「ああ。現れるのは1週間に1回程度なんだけど、海外のアマ上位者相手にも負けなしなんじゃないかな」

佐為、話題になっちゃってるらしい。ヒカルに言った方がいいかな。佐為が認められたって喜ぶか、バレたら困るからって止めちゃうか、どっちかなあ。

前世では、結構打ってたはず。でも2学期に入ってから部活にずっと顔を出してたから、途中で止めちゃったんだろう。

今も佐為の存在がバレないように気を付けてるくらいだから、止めちやいそう。

うーん、どうすればいいのかなー。

「藤崎?」

「あ、ごめんね。ちよつと考え事してた」

適当に話を合わせているうちに森下先生の勉強会が始まり、話はそれで終わった。

夜、ヒカルの家に遊びに行く。

「え、佐為が話題になってる?」

「うん、少しだけね。バレるとまずいし、絶対にチャットはしないようにね」

「打つの面倒だし、そんなのやる気ねえよ」

「そっか、じゃあ大丈夫ね。あと、曜日はバラバラの方がいいと思う。それと暇があったら、たまに土日にもネット碁したらどうかな」

「ふーん。その方がバレにくいんだ?」

「打つのが平日の放課後だけじゃ、学生だって特定されやすいかも。土日にも打っても変わらないけど、少なくとも候補は広がるだろうし」

後は……そうだ。

「もし、知り合いっぽい人と打つ機会があったら、バレないように気をつけてね。特に、直接佐為と打っている、塔矢くんとか」

彼なら、直接対局しなくても、ネット碁の棋譜を何枚か見たら気づきそう。

忠告だけだとやる気なくしそうだし、佐為が喜びそうな情報もあげないと。

「そうそう、七大タイトルのひとつを持ってる一柳先生って人も、ネット碁やるんだって。ハンドルネームは、そのまま英語で『ichiryu』らしいよ。機会があったら、打ってみて。多分、今まで打った人たちより、ダントツで強いから」

「へえ……って、いないと打てないだろ!」

あはは。佐為がまた打ちたがったんだね。本当に、佐為つてとんでもなく強いんだけど、子どもみたいな可愛い印象が強い。

……見えないから好き勝手言ってるけど、ひげもじゃおじさんだったらどうしよう。

「ヒカル、ちよつと気になったんだけど、佐為つてどんな見た目?」

「ん? 佐為?」

んー、と考えながら言うには、長い帽子と着物みたいなのを着た、ほっそりとした男性なんだとか。外だと靴を履いているけど、土足厳

禁の場所だといつそのままにか靴を脱いでるって。

ふふ、お行儀良いんだね。

「まあ、犬っころみみたいな感じ?」

「なにそれ。でも、じゃあ可愛い感じなんだ」

良かった、印象と違ってない。

「対局してると憎たらしいけどなー。勝てねえし」

「勝てるようになったら、タイトルも取れるよ」

「頑張らねえとなあ」

そんな佐為に打ってもらって、今日はお開きとなった。

そして、日曜日、院生研修の日がやってきた。

同年代の子がたくさん打っている場所でやるのは今世では初めてだから、ちよつと緊張しちゃう。

「……和谷と同じ、森下門下だっけさ」

「へえ、じゃあ強いんだ?」

部屋に入ると、話し声が聞こえた。

ん、私のこと?」

「あ」

「こ、こんにちは」

うう、ドキドキする。変な声になっちゃった。

「おう、藤崎」

「和谷くん、こんにちはー」

ほつ。知った顔を見ると、安心する。

「場所も決まってるんだっけ」

「そうそう。対戦表に書いてあるだろ」

「うん、ありがと」

対戦表を見て、所定の位置に座る。

前に座ったのは、今西くんという、年上の男の子。

挨拶だけして、黙り込んじゃった。自分から話しかけるのも難しい。うーん。

つて、悩んでるうちに、篠田先生がやってきた。

「おはようございます」

「今日から、みんなの仲間が増えました。藤崎あかりさんです。よろしくお願ひします」

笑顔を浮かべて、周りにペこりと頭を下げる。しかし、仲間が増えたって、雨後の竹の子じゃないんだから、もうちよつと言ひ方があるような気が……。

って、始まつちやつた。さつそくニギって、私が白を持つ。

「お願ひします」

そして対局が始まつたけど。負ける心配は、あまりなさそう。

もちろん院生になるくらいだし、相手もそこそこ打てるから、油断しちや駄目だけど。多分、海王の大将をしていた人の方が強いくらい。とはいえ、今のヒカルよりは少し強いかな？

「……負けました」

「ありがとうございます」

ふう、一勝。

最初だからか、篠田先生が検討に混ざってくれた。相手の子の失着を説明するだけでなく、私が打つたヌルい手も指摘してくれる。なるほど、油断してないつもりで無難な手を打つちやつてみたい。最善の一手にはほど遠い。

堅くなつちやつてたかな？

「よう、勝つたな」

「うん。勝つて良かったー」

「相手にや悪いが、まあ順当だな」

「そう？ 私もまだまだだし、そこまでじゃないよ」

ちよつとしたミス、もしくは相手に会心の一手があれば、ひっくり返る可能性は十分あるレベルよ。それこそ、塔矢くんくらい強くないと……。

塔矢くんは、競り合いや、ここぞという押しの強さが凄い。大人しそうな外見に似合わず、力碁も得意としている。

「つと、次の対局が始まるな」

午前中に2局、午後から2局。1局ごとの密度を考えると、結構な

ハードスケジュール。

午後からは内田さんという女性と対局。落ち着いて打てたおかげで、勝利を得られた。

「いきなり二連勝か」

「おかげさまで」

「昼、どうする?」

「和谷くんはどうしてるの?」

「店屋物を頼むか何か買ってくるか、外に食いに行くかだな」

ふうん。えっと、どうしようかな。

「おーい、奈瀬。お前、今日は昼どうすんの?」

私が悩んでいると、和谷くんは近くにいた女の子に声をかけた。

顔を向けると、院生試験の後にも見かけた、凄く美人の子。

「ん? どっか食べに行くつもりだけど」

「今日は、こいつも一緒だから、付いてきてくんねえ? 初回で女子が

一人って、やりにくいだろうからさ」

「オツケー。んじゃ、藤崎さんだっけ。どこか希望ある?」

「あ、どこでもいいです。えーっと、奈瀬さん」

「ゴメンゴメン。自己紹介してなかったね。奈瀬明日美っていうの」

「藤崎あかりです。よろしくお願いします、奈瀬さん」

「硬いなあ。まあいいか。よろしく」

奈瀬明日美さん。ヒカルと一緒にになった人ではないけれど、凄く美人だし、ちよつとだけ気をつけておかないと。

和谷くんと奈瀬さん、あと伊角さんという人、福井くんというメンバーで唯一の年下の子も一緒に、外へ食べに出る。

お店は、無難にハンバーガーショップ。

奈瀬さんや伊角さんの質問に、私が答える。

「じゃあ、あかりちゃんの小1の頃から森下先生のお弟子さんなんだ」
「うん。考えたら長いね」

「そうだなあ。そんで、俺より強いんだぜ」

「和谷より!? 今まで、どうして院生にならなかったの?」

「ちよつと諸事情がありました。大したことじゃないんですけどね」

逆にこちらからも質問をして、伊角さんは九星会に所属していたけど、奈瀬さんや福井くんは師匠もおらず、研究会にも所属していないとのこと。ええー、もったいない。

院生1組にいるくらい強いのに、師匠がいないというのは、伸び悩みそう。

「……奈瀬さんと福井くんは、師匠や研究会には興味ないの？」

「フクでいいよー。僕はね、中学に入ってから、誰かに師事するつもりなんだー」

あ、そうなんだ。中学に入ってから院生になった私と、似て真逆のパターンね。

チラリと奈瀬さんを見ると、小さく肩をすくめられた。

「考えないでもないけど、プロの研究会は、レベル高くて、私じゃついていけないかなって」

「え、そんなことないですよ。私、2つ顔を出してますが、楽しいし勉強になりますよ」

「そうなんだけどね。あかりちゃん、硬い硬い。敬語じゃなくていいよ」

「あ、えっと、うん」

そう言われても、前世はともかく、今は年上だし。和谷くんは付き合い長いし、今さらだけどね。

でも、伊角さんは大分年上っぽいけど、和谷くんも奈瀬さんも敬語じゃないよね。結構気楽に話してる感じ。

フクくんは、もうお子様！　って感じ。フワフワした雰囲気、癒やし系ね。かわいい。

「奈瀬、一度試しに、藤崎と一緒に研究会に行ってみたら？　知った顔があるとかやりにくいなら、森下先生の方じゃなく、もう一つ藤崎が行ってる方にでもさ」

「んー？　それって、誰の研究会？」

話を聞いていた和谷くんが、ニヤリと笑って口を挟む。あ、悪いこと企んでる顔。

奈瀬さんも警戒して、訝しげな表情になる。うんうん、いたずらっ

子の顔だもんね。しげ子ちゃんに言いつけるぞ。

「それは……」

「おっと、藤崎。それは内緒で。行ってみてのお楽しみでいいじゃん」
「何それ。でももうすぐ予選始まるし、それに通ったら本戦もあるし、そのあたり終わってからのかな」

「何ヶ月も先じゃん、時間がもったいなえよ」

うん。プロ試験中が色々忙しいのは分かるけど、塔矢先生の研究会に行つて損することなんてない。それに、塔矢くんもいるし。

「藤崎、許可貰えたら、連れて行つてやつてよ。奈瀬にとつても藤崎にとつても、いい勉強になるだろう？」

「うん、まあ確かにそうだけど。……隠す意味は？」

「その方が驚くじゃん。現地まで言うなよ？」

やつぱり。連れて行つて驚いたとしても、その場にいるのは私だけ。怒つたとしたら対処するのも私なだけだな。

「でも、私から先生にお願いするにしても、奈瀬さんの棋力は知っておきたいかも。あ、もちろん1組にいるんだから強いのは分かってるんですけど」

あ、言つてすぐに気付いたけど、上から目線の失礼な物言いだつた。これはやらかしたかも。

「そうね。どうしようかな、あかりちゃんまだしばらく2組だし、研修の後に一度打つてみる？」

「あ、はい。すみません、お願いします」

まったく気にしない様子で、奈瀬さんが提案してくれる。これは、分かつた上で流してくれた感じかな。奈瀬さん大人だ。助かつたというか、言い方に気をつけないと。

そして、院生研修が終わつた後、棋院の対局室で奈瀬さんと打つてみる。観客は和谷くんと伊角さん、あと飯島さんという人も。フクくんは、早めに帰らないと駄目だつて帰つていった。

「ありません」

互先で全力で打ち合つた。結果、私の中押し勝ち。とはいえ、圧倒

的な差があるわけじゃない。話を聞くと、飯島さんも奈瀬さんと似た実力だそうで、私と打つのが気になったみたい。私が勝つたのを見て、ちよつと顔色が悪いけど、大丈夫かな。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。どこが悪かったかな？」

奈瀬さんが検討を求めてきたので、気になった点を口にする。あきらかにおかしな手は無いけれど、どれも無難で、ちよつとずつ損を繰り返すような打ち方。悪手のとがめ方もちよつと弱い気がする。

盤面全体の管理は上手いから、無難な手を最善手にできれば、強くなると思う。もちろん、どれもこれも最善手を求めると先の展開が読み辛く、ちよつとのミスが大きな損になって難しくなる場合も多々あるから、地力を付けないといけない。そういう意味でも、奥の深い検討を行う塔矢先生の研究会は、奈瀬さんにとってすごく意味のあるものになるはず。

「あかりちゃんの説明、分かりやすいね」

「えっ、そうですか？　ありがとうございます」

そんなこと、初めて言われた。私の説明がうまく伝わったのなら、嬉しいな。

「奈瀬さん、さつき言ってた研究会の件、和谷くんの思惑はともかく、実際勉強になるし良かったらどう？」

「えーっと。まあ、1回行くくらいなら……。でも本当に、二人とも悪い顔してるよ？」

あはは、私も和谷くんと同一視されちゃった。でも、なんていうか、ドツキリを仕掛けるみたいでちよつと楽しいのは確か。

奈瀬さんは良い人だし、実力も近い。仲良くなって、絶対に損はないだろう。

夜、帰ってから塔矢先生の家連絡する。

塔矢先生は留守だったけど、塔矢くんがいて、緒方さんの連絡先を教えてもらった。

あらためて緒方さんに連絡して、院生1組の実力があるなら、とり

あえず1回来る分には問題ないだろうと許可をもらおう。やった。ただ、今週は塔矢先生がいないから、奈瀬さんを連れて行けるのはその次。プロ試験予選が行われる週の直前ね。

それと、継続して来ていいかどうかは、塔矢先生が決めることらしい。それはそうよね。

その週は普段通り森下先生の研究会、塔矢先生の研究会に参加して。

土曜の院生研修日に了承いただいたと奈瀬さんに伝えて、来週金曜に一緒に行くことになった。

塔矢先生の研究会と聞いた時の反応が、今から楽しみ！

第12手 中学1年生 その6

学校が終わってすぐ奈瀬さんとの待ち合わせ場所に向かうと、思った以上に早く着いちやった。30分以上は余裕ある。

実は、奈瀬さんを連れて行きたかったのは、塔矢くんの追及を少しでも緩める目的。先週は研究会がなかったから大丈夫だったけど、今週の研究会で絶対にヒカルについて色々と聞かれるはず。

せっかく塔矢先生のところまで学べるんだ、行かないという選択肢はない。

「あら、あかりちゃん早いよね」

「奈瀬さん」

「もー、明日美でいいってば」

「う、はい、明日美さん」

時間は早いけど、どうせ緒方さんは着いてるだろうし、塔矢先生も塔矢くんも準備はできてるだろう。

少しゆっくり向かいながら、奈瀬さん……明日美さんの質問に答える。

「それで、そろそろいいでしょ。どこに向かっているの？ もし名前を存じない方だったら相手方に失礼だし、教えてよ」

「確かにそうですね。場所は、塔矢先生のご自宅で、メンバーは塔矢先生、緒方さん、塔矢くん。他にもお弟子さんが何人か。緒方さんは、研究会の時は緒方先生って言われるより緒方さんって言われる方が慣れているみたい」

え？ と足を止める明日美さん。

「ちよつと、聞いてない」

「言つてませんもん」

「……行くの断れない？ 私じゃレベル低すぎるよ」

「そんなことないと思いますよ。師匠もなしに1組を維持できてるのって、凄いですよ」

本当にそう思う。碁会所で打つくらいはあるだろうけど、自分より格上は、院生メンバーの何人かと、篠田先生くらいかな？ そんな環

境じゃ、伸びようがないよ。

「いや、でも……」

「今日は明日美さんが一緒って言ってますし、これで行かないと、余計に失礼だと思います」

どつちにしろ今さら断る気はないけどね。

明日美さんは今まで会った人の中で、女性で1番私と実力が近くて、1番囲碁に対して真剣。

私はヒカルの目にとまるためという不純な動機があるし、そういうのもなく純粹にプロを目指す姿勢は、格好いい。ちよつと卑屈すぎるのが気になるけど、何か過去にあったのかな。院生にはあまりいないみたいだけど、女性だからって差別する人はたくさんいる。

「う……。確かに。でも本当に大丈夫?」

「うん、もちろん大丈夫!」

話してるうちに塔矢先生の家に到着した。

呼び鈴を鳴らして、人が出てくるのを待つと、すぐに塔矢くんが戸を開けてくれた。

「こんにちは。今日もよろしくお願いします」

「こんにちは、藤崎さん。それで、こちらの方が……?」

「はい! 奈瀬明日美って言います! よろしくお願いします!」

ビシツと直立不動で、大きな声。あれ、明日美さんって体育会系?

塔矢くんも、目を丸くしてる。

「ええと、こんにちは。自己紹介は、あらためて揃った時をお願いします」

家にあげてもらいながら、私は明日美さんに笑いかけた。

「明日美さん、そんな緊張しなくても大丈夫。いつもの院生研修と似た感じでやれば」

「でも緊張するし、やっぱり場違いだよー」

どういつて奮い立たせるべきだろう。悩ましい。

「奈瀬さんは、院生の1組なんですよね。今年のプロ試験は、本選から?」

「えっと、私は予選からです」

「そうですか。じゃあ、僕と一緒にですね」

「……え？」

「今年、僕もプロ試験を受けるんです」

「あ、そうなんですか」

「ええ、追いかける相手も、勘違いでしたし、ね。ああ、それと敬語なんていらなですよ。僕は藤崎さんと同じ歳ですから」

ああ、追いかける相手とか言いながら、目がこつち向いてるし。知らない、見えない。聞こえない。

それより、塔矢くん言葉でひとつ思いついた。

「明日美さん、会った時から言われてたけど、これから敬語なしで話すね。だから、明日美さんも塔矢くんに敬語なしで。仲良くやろー」

キユツと両手でガツツポーズを作りながら、えいえいおー。

明日美さんは目を丸くして驚いていたけど、大きく深呼吸して、私と塔矢くんに向き合った。

「うん、ありがとう。緊張しないってわけにはいかないけど、できる限り頑張るね」

うんうんと頷いていると、塔矢くんも笑みを浮かべた。良かった、明日美さんも元気が出たみたい。

そして研究会に使っている部屋に入ると、塔矢先生と緒方さんが、検討をしていた。

「こんにちは」

「こんにちは。そちらの子が、今日から来る子だね」

あはは、塔矢先生に今日から来るって言われちゃったね。これで、今日だけとは言いにくいはず。

「は、はい。奈瀬明日美と申します」

「ようこそ。俺は緒方。あと、今日はもう一人来るんだが、うるさいだけだから放っておいていいぞ」

「緒方さん、またそんなこと言って。芦原さん泣きますよ」

緒方さんは、芦原さんに対して妙に辛辣だ。それだけ仲が良いというか、いじりやすいんだろうなあ。

そして私の時と同じように、塔矢先生が指導碁を打つ。

打ちながら、今週末から始まるプロ試験を受ける心構えの話にもなる。最初は良くても、長丁場だけに最後まで普段通りの力で打てない場合も多く、自滅するパターンも多いんだって、緒方さんから説明を聞く。

そういえば、伊角さんは院生順位が1位のまましばらく経つそうだし、きつと精神面で弱いんだろうな。明日美さんが精神面で弱いかどうかは分からないけど。

しばらく経って、塔矢先生との指導碁が終局した。私たちも混ざって検討をしていると、塔矢先生が口を開いた。

「失礼な言い方だが、今の実力だと、今年のプロ試験での合格は難しいだろう」

塔矢先生の言葉に、明日美さんがしよぼんとする。本選まで2ヶ月近くある。まだまだこれから伸びると思うけど、どれくらいの実力だとプロ試験に合格するんだろう。

塔矢くんが合格できる実力だとは聞いているけど、例えば、今の私で受かるのかな。

ヒカルが囲碁を始めて、半年と少し。ヒカルもとんでもない速度で強くなってるけど、私自身も、結構伸びてる気がする。塔矢先生や緒方さん、塔矢くんとの対局はもちろん、佐為に打ってもらっているのが、本当に大きい。

塔矢先生と打って後から検討しても、時間が短いので、どうしても深いところまでは検討できない。

佐為に打ってもらうと、夜遅くなっても何とかかなるから、相当深く検討できる。しかもヒカルにも分かるように説明してくれるから、凄く細かい部分にも目が行き届いている。凄く貴重な時間ね。

「院生研修だけではなく、ここでしっかり力を付けて、合格を目指して頑張りたい」

塔矢先生の言葉に、明日美さんがぱっと顔を上げる。研究会参加の許可が出るとは思っていなかったのだろう。来た時の言葉は、緊張して理解できてなかったかもね。

森下先生もだけど、みんな懐が広いというか、囲碁業界の人はかなり子どもに優しいよね。

「あ、ありがとうございます」

「塔矢先生、ありがとうございます」

私も明日美さんに続けてお礼を言う。私が連れてきたんだし。塔矢先生と明日美さんの対局中にやってきた芦原さんは、どこことなく嬉しそうだ。明日美さん、美人だもんね。

「若い可愛い子が増えて、嬉しいなあ。なあアキラくん」

「え？ いや、僕は別に……」

あつさりと言い放つ芦原さんに同意を求められて、塔矢くんは困っている。前世の時は気にしてなかったけど、モテそうなりに色恋沙汰に苦手そうだもんね。

「まあ、アキラ君にとっては、女の子どうこうよりも、ライバルの方が嬉しいだろうけどな」

「ライバル？」

緒方さんが的確なご指摘。うん、私もそう思う。

「ああ。同じくらいの立場で争わないとな。張り合いつてもものがないだろう？」

「張り合い？」

「ああ。アキラ君、今は張り合いが抜けたみたいなものだからな」

「僕は別に、彼のことなんかどうとも思ってます」
がっかりしてたもんね。どうとも思っていないわけがないよね。

口を挟みにくい雰囲気だけど、どうしようかな。

「ふーん？ よく分からないけど、まあいいや。奈瀬さんだっけ、次は僕と打とうよ。塔矢先生はああ言ったけど、僕に勝てたらプロ試験受かる実力あるかもよ」

定先でやろう、と芦原さんが白石を持つ。

明日美さんが、コミなしの黒。

そのまま話はいったん置いて、塔矢先生と緒方さんが打ち始めて、私は塔矢くんと打ち始める。

そして、対局や検討が終わり、さて帰ろうとしていると、塔矢くん

から声がかかった。

「藤崎さん、前はごめんね」

「えっ、何が？」

「大会中に、君の友達に暴言を吐いてしまったから」

ん？ ああ、ヒカルに怒鳴ったことね。前世では分からなかったけど、今なら分かる。佐為の実力を想定していたらがっかりするし、怒鳴りたくなる気持ちも、まあ碁打ちとして理解できる部分もある。

「ううん。あれは何というか、ヒカルが悪いというか。でも、今もヒカルは頑張ってるから、がっかりせず保留してもらえると嬉しいかな」
「……頑張ってる？」

「うん。塔矢くんに追いつこうと、必死でね」

「ふうん……」

あつ、半信半疑。今に分かるよ。

気が付いたら、塔矢先生と緒方さんも、手を止めてこちらの話を聞いていた。わあ、お邪魔しちゃってごめんなさい。

「では、お先に失礼しまーす」

「本当に、たくさん教えていただいて、ありがとうございますー！」

私と明日美さんの言葉に、塔矢先生は頷きを返してくる。ゆったりとした動作が、また似合うんだよね。渋い。

「ああ、来週は試験だね。なら、また再来週から来なさい。今、伸び悩んでいても、一足飛びに強くなる必要はない。時間をかけて勉強をすれば、絶対に自分に返ってくる。精進しなさい」

私に、というより明日美さんに向けての言葉。前にも思ったけど、明日美さんは基礎がしっかりしてる。筒井さんみたいにヨセと目算特化というわけでもなく、ヨセも苦手じゃないし、攻めるのも守るのも、無難にできてる感じ。

塔矢先生の言う通り、苦手があつて勝てないなら、苦手の克服で一気に強くなった気になれるけど、奈瀬さんの場合は、そういうタイプじゃない。

だからこそ、強い人に色々教えてもらえて読みが深くなれば、しっかり強くなると思う。私も前世では全体的にレベルが低すぎた

けど、森下先生に長年教えてもらって、ちよつとずつ強くなってきた。……前世という反則があつて、長年森下先生に教えてもらって、それでも塔矢くんには及ばないレベルかあ。情けない。

あああ、駄目駄目、考えないようにしないと。落ち込んでる暇はない。

塔矢先生の家を出て、歩き始めてすぐに、明日美さんが口を開いた。

「あかりちゃん、今日はありがとう。すつごく勉強になったよ」

「ごちらこそ、元はといえば和谷くんのせいだけど、どことも言わずに連れてきちゃつてごめんなさい」

「ううん。それに、塔矢先生も再来週も来なさいって言うてくださいつたし。今でも、私なんか行つてもいいのかなつて不安だけど、せいっぱい頑張るね！」

「うん！ 私も、まずは院生1組に行かないと」

「あはは、あかりちゃんならすぐなれるね」

今のところ負けなしだけど、1組に行けばそう簡単にはいかないだろう。

今は明日美さんより強いけど、地力を考えると、追い抜かれても何もおかしくない。

そもそも私が囲碁のプロになるっていうのが、ちよつと想像できない。でも、ヒカルの前に堂々と立つためにも、今は必死に勉強するしかないんだ。

「頑張ろう」

「うん、頑張ろうね」

「お互いプロになつて、タイトルの挑戦者くらいにはなりたいよね」
「え、ちよつと待つて」

明日美さんが凄くおかしな顔になつてる。あれ、プロになつた後もヒカルと対局するには、タイトル狙うくらい強くならなきゃいけないんだけど、何かおかしいこと言つたかな？

第13手 中学1年生 その7

明日美さんには、プロ試験合格もできるかどうか分からないのに、タイトルなんて考えにないって言われた。

それはそうなんだけどね。ヒカルの横に立つためにプロになれればいいって思ってたけど、やっぱり打つからには勝ちたい。高みを目指したい。

そんな話を伝えると、苦笑まじりだったけど、応援するだけじゃなく自分も目指すと言ってくれた。放っておけないとか、たまにはそれくらい無茶な目標を持つのも悪くないって。

ところどころ気になったけど、明日美さんと仲良くなれたのは嬉しい。

夏休みが始まると、ヒカルはほぼ毎日のように、佐為とネット碁をやっている。私も暇があれば付いて行って、一緒に佐為の対局を見ている。

前に話をした一柳棋聖にも対局を受けてもらえたらしく、しかも勝っちゃったらしい。

うん、うん。そうよね。タイトルホルダーとはいえ、本因坊秀策に勝てるはずない。海外の人は知らないけど、今の世で勝てる可能性がありそうなのって、塔矢先生くらい？

ともかく、そんなわけで和谷くんが研究会の時に騒いでいた。森下先生はネット碁は分からないみたいで、うるさいって怒られてたけど。和谷くんの気持ちも分かるけど、今は目の前のプロ試験に集中した方がいいと思う。

「向かうところ敵なし。あかりの言ってた*ichiryu*にも、結構あつさり勝っちゃったんだぜ」

「向かい合って打つのと、ネット碁で打つのだと、勝手は違うと思うけどね。それにしてもタイトルホルダーの一柳先生に勝てるのは凄いやね」

「まあな。俺もずっとやってると、打ち始めたら相手の強さがなんと

なく分かるようになってきたし、こういう手が嫌だとか、こう打てばいいのとか、考えさせられるぜ」

ヒカルも、佐為の対局を見て学んでいるらしい。うんうん、特等席だもんね。羨ましい。

「私にも佐為が見えて、声が聞けたら良かったな。……そうしたら、もっとヒカルと一緒にいられるのに」

「ん、何だって?」

後半は、ヒカルに聞こえないようにつぶやいたから、聞き返された。何でもないと言った首を振って、席を立つ。

「さて、じゃあ約束の時間だから私は行くね。ヒカルも頑張ってたね」

今日は、塔矢先生の研究会。明日美さんと塔矢くんが予選突破したので、塔矢先生の家に行く途中、お祝いのケーキを買う。お小遣いだと厳しいので、お母さんに相談して出してもらった。緒方さんが出してくれるって言ってたけど、二人とも私の友達だし、ここは私が出しておきたい。

「明日美さん、こんにちは」

「あかりちゃん。やつほー」

いつもより元気で、笑顔もまぶしい。ちらりとケーキが入った箱に視線を向けて、嬉しそうにしている。

「あかりちゃんのおかげで、予選通ったよ」

「え、私は何もしてないよ」

「私ね、こうやって研究会に通えるようになったの、凄く嬉しいんだ。まだ1回だけだけどね」

「予選通ったのは、明日美さんの実力だよ。でも、楽しいなら良かった。塔矢くんとも相性良さそうだし、安心した」

「塔矢くんどう? うーん、どうなのかな。実力差がありすぎて、ちよつと年下とは思えないけどね」

あははは、と笑いながら肩を落とす。うん。しょうがないよ。彼は別格。

「正直言って、今年は塔矢くんが1個埋まるから、厳しいなーって思うよ。伊角くんにも勝ったことないし。他の外来にも強い人はい

るからね」

「なるほど。期間は長いし、体調を崩すとももちろん駄目だし、ちよつとした精神的な戸惑いから崩れたりもするみたいね。って、森下先生の受け売りだけどね」

「うん、確かにそうよね。一度負けて、引きずったりとか。ああー、考えたくない」

頭を抱えてぶんぶんと振る。せっかく整えてる髪が乱れるよ。

止まったのを見計らって、手櫛で整えてあげる。

「あはは、ありがと。あかりちゃんの良い子だー」

「そんなことない。私、色々とずるいよ」

んー？ とか言って顔をのぞき込まないでください。明日美さん美人だから、照れちやうよ。

私はずるい話は横に置いて、今は明日美さんの話だ。

「結果はどうあれ、プロ試験は羨ましい。私、今年はまだプロになる気がなかったから受けなかったけど、受けたところで受かるかどうかなんて分からないし、勉強のためにも受けていれば良かったかなって、今さら思うもん」

「ふーん。そっか。そうよね、せっかく皆が本気でぶつかり合う場なんだから、成長しないと損よね」

そんな雑談をしながら、塔矢先生の家に着く。

軽くお祝いをやって、でも一日雑談で過ごすわけもなく。小一時間もすれば普段通りの研究会になった。

塔矢くんも明日美さんも、他のみんなもだいたい真面目だ。一番緩いのは芦原さんだけど、それは性格だけで、囲碁に対して緩いわけじゃない。

しばらく研究会や院生研究で夏休みも半分を過ぎたある日。私は森下先生のお仕事を手伝うために、囲碁のイベントに呼ばれていた。和谷くんと駅前で合流して、会場に向かう。

ヒカルは今日もネット碁らしい。前はイベントがあるって言ったから佐為が行きたがって大変だったという話だったのに、今は佐為も

ネット碁に夢中らしく、あまり他の欲求はぶつけてこないんだって。あれだけ毎日打てば、そりやそうよね……。

「だから、俺は学生じゃないかって思ってるんだよ」

「またその話？」

和谷くん、最近佐為にご執心だ。とは言っても、塔矢くんと違ってヒカルの存在は知らないし、注目してるのはネット碁のsaiなんだけどね。

「ああ。前は平日の夕方中心でたまに休日だったのが、ここにきてほぼ毎日だぜ？ そんなに暇なの、学生しかねーじゃん」

「仕事してて、辞めちゃったとか？」

「そんな簡単に仕事辞めるかあ？」

いやはや、案外するどい。そして和谷くんがそう考えるってことは、他にも同じように考える人はいるわけで。

でも、大人でも仕事辞める人はいるよね。

それでちよつとごまかせないかな。

「もしかしたら、今度のプロ試験を受ける人もよ。時期としても、仕事を辞めてプロ試験に臨むっていうと、タイミング合わない？」

「ああ、なるほど」

ポンと手を叩いて、私の意見に同意する。

でも、と首をかしげる。

「強さがプロ試験受けるってレベルじゃないんだよな。俺、予選で塔矢と当たったけど、強かったのは確かだし、プロ試験もアイツは通るのは間違いない。ただ、saiと対局した時の方が、圧倒的な強さを感じた」

「え、和谷くんsaiと打ったの？」

それは初耳。びっくりしたというか、ネットを通じてだけど、ヒカルと和谷くんが打ってるって、ちよつと面白い。

「ああ。圧倒的な実力でほこられた。最近はその時に比べても現代風の手が増えてるっていうか、俺とやった時は秀策のような古い手が多かったんだけどな」

「へえ」

するどいなあ。言えるわけないから何も知らないふりをしてるけど、全部正解よね。

そして話しているうちに会場到着。

「雑談はこの辺で。お仕事頑張ろう」

「あ、うん」

和谷くんの歯切れがちよつと悪い。切り替えが苦手なのは、和谷くんの欠点かもしれない。

あまり言い過ぎても逆効果だろうし、仕事にならなかつたら森下先生が叱るし、放っておこうかな。

会場に入ると、大会に参加している人やすでに負けてしまった人など、たくさんいる。和谷くんは森下先生に強いのがいるとsaiの説明をしてる。もう、本当に懲りないんだから。

案の定、軽くあしらわれて、相手を探していた人と打つよう指示された。私も誰かと打つのかなと思っていたら、会場を見て回つていると言われた。あまりイベント会場に来ないから、場に慣れるつてことらしい。本当に、森下先生は顔に似合わず過保護なんだから。

言われた通り回っていると、緒方先生の姿も見かけた。さすがにアマの大会とはいえ、国際戦だけはある。軽く挨拶だけ行つて、日本人の対局に目を向ける。隣では、中国人かな、真剣な表情で対局を見ている。

「……sai」

ん、今なんて？

チラリと目を向けると、軽く首を横に振っている。saiって言った？

と、対局が終わった。日本人の方が勝ったみたい。少し話をしていると、対戦相手の方が大きな声を出した。

「あなたがsai!?!」

「いえ、私は違います。saiって?」

聞かれた方は、saiを知らないみたい。でも、すでに聞かれていたように冷静に返している。盤面を見た限りかなり強いのは確かだ

けど、当然ながら佐為には遠く及ばない。その声に影響されたのか、周りからsaiについて語る声が増えてきた。海外でもこれだけ騒ぎになるほど、saiが有名になっているとは……

ざわざわとはじめて、森下先生や緒方先生も騒ぎを収めようとしていると、和谷くんが混ざってきた。

まるで本因坊秀策が現代の定石を学んだような強さだそうだ。周りでザワザワと秀策？ とか聞こえてくる。ああ、居心地が悪い……。

ザワザワしていると、塔矢くんがやってきた。あれ、珍しい。

「どうしたんですか」

変な空気に不思議そうな塔矢くんは、周りが説明する。

「夏休みに入ってよく打ってるし、俺は子どもかなって思ったんだけど、藤崎はプロ試験に臨む社会人かもしれないねえって言うんだよな」

「子ども？」

「お前に言っただけよ。そんで、俺、秀策の棋譜をよく並べるんですけど、まるで秀策が現在の棋譜を学んでるっていうか、そんな印象なんですよね」

塔矢くんは、緒方さんと顔を見合わせた後、チラリとこちらに目を向ける。どうしよ、何か言った方がいいかな。

「名前はsaiと言うそうだ」

塔矢くんがノートPCを起動させて、ネット碁のサイトにアクセスする。アカウントは持っていたみたいで、名前がakiraと出る。

対局者のリストを見ると、今は対局していないみたい。ヒカル、今もネット碁打ってるはずなんだけど、休憩中かな。

「あ」

塔矢くんのアカウントに、対局が申し込まれる。それ自体は珍しくないけれど、なんとsaiからの申し込み。そんな偶然もあるのね。ヒカル、対局者の名前で選んだのかなあ。佐為も塔矢くんと打ちたがったとか。

対局が開始されて、佐為が黒。数手打つけど、これ、当時の再現……？
もう、ヒカルのバカ！ なんでそのまま打つかなあ？

あ、手が変わった。変わったけど、ごまかしとしては今さらね。

「まさか……」

ほら、塔矢くんも疑ってる。え？ 投了した？

と、そう思ったら、チャットで再戦を申し込んだ。しばらく待つと、ヒカルから来週の日曜、午前10時と返信があつた。あらら。バレてもいいと思ってるのか、深く考えてないのか。後者だろうなあ。そんな大ごとになっているとは思っていないだろうし。

「日曜？ もう国に帰ってるな……」

「彼はいったい？」

ザワザワと騒ぎが収まらない中、塔矢くんは挨拶だけ残して帰っていった。まあね、いたら騒ぎが収まらないと思うから、帰るのはいいんだけど。

「日曜？ プロ試験がどうでもいいって言うのか。バカにしやがって」

いらだってる和谷くんも、誰か連れていってくれないかな。ちょうどよいところに森下先生。どうにかしてください。

「森下先生、和谷くんが茹だつてるので、ちよつとクールダウンしてあげてもらえますか？」

「ああ？」

「塔矢くんがプロ試験初日だつていうのに、saiの対局を受けたから。馬鹿にされたつて苛立つてるみたいなの」

「そうか、ありがとうよ」

ポンポンと私の頭を撫でて、ため息まじりに和谷くんと話し始める。和谷くんも少しかみついてはいたけど、しばらくすると落ち着いた。さすが森下先生。

しばらく周りがざわめいていたけど、和谷くんとの話を終えた森下先生が仕切つて大会を進行しはじめた。私も勝ち進んでいる対局者の案内や、フリー対局の相手探しを手伝う。

韓国語や中国語は単語で意思疎通する程度で、会話とも言えない。英語だけはそれなりに話せるから、何とか役に立てそう。韓国人や中国人も、英語を話せる人は多い。

「藤崎、お前凄いな」

「何とかね。和谷くん、この方が相手を探してるみたいなので、打ってあげて」

せっつかくなので和谷くんの手伝ってもらおう。何やら言っていたけど、問答無用。プロ試験を控えているんだから、雑務をやるより対局しなきゃね。

そして夕方になり、イベントが終了した。森下先生が門下生や関係者を集めて、ご飯に行くみたい。

「藤崎はどうする？」

「お母さんが用意してくれてるから、帰ります」

「そうか、今日は助かったよ。まさか英語も話せるとは思わなかったが」

森下先生が褒めてくれたので、えへへと笑ってごまかす。前世の遺産なんです。

まだ中学生だから、まったく引き止められずに開放される。大人になっても、森下先生なら無理に連れ回すようなことはないと思うけどね。

「では、お先に失礼します。和谷くん、プロ試験頑張ってね！」

「おう。一足先に合格してやる！」

和谷くんの実力が前世と同じかどうか分からないけど、できれば合格しておいてほしい。森下先生は私も和谷くんも、合格できる実力があるって言うけど、過保護なところあるし、ちよつと割り引いて考えないと。

それはそうと、早く帰ってヒカルから話を聞かなきゃ。

週末はヒカルと塔矢くんの対局を見たいから、院生研修も休む必要がある。上位陣はプロ試験中だからあまり行く意味もないし、篠田先生に伝えておこう。

色々と考えることがいっぱい、こんがらがりそう。ヒカル、院生試験の申し込みやったかな？

第14手 中学1年生 その8

家に帰って用事を済ませて、すぐにヒカルの家に向かった。

前世ではこんなにヒカルの家に行ってないし、行ったとしても相手をしてもらえなかっただろう。囲碁をやつてて良かった。佐為に氣付けたのも大きい。きつと、囲碁をやつてるだけじゃ、佐為を隠そうとするヒカルからは逃げられただろうし。

今日は、私とヒカルが打つ日。打ちながら、雑談に興じる。

「え、事前に申し込みが必要？」

「うん。結構お金もかかるし、おばさんに相談しておかないと駄目だよ」

「面倒だなあ」

「しようがないよ。それとね、棋譜もいるから用意しておかないとね」

「キフウ？ なんだそれ？」

「え、棋譜知らない？」

うそ、説明したことなかったかな。……うん、あらたまつて棋譜について説明してないかも。チラリと部屋の中をチェックしてみたけど、塔矢名人詰碁集とかあるだけで、囲碁雑誌や囲碁新聞は見当たらない。

「棋譜っていうのは、打った順番を記録していつて、それを見ると打っている途中も含めて全部分かるようになってるの。何を考えて打った手かを考えるのに便利よ」

「へえ」

「いるのは試験の時だけど、今度持つてくるね」

「おう、ありがとな」

えへへ、ヒカルにお礼言われちゃった。

「ああ、それと長く借りてたけど、この碁盤、来週返すわ」

「えっ、そうなの？」

痛んできたから買い替えるとか？

「ああ。じいちゃんと打つてき、足つきのを買ってもらえることになったんだよ。ちゃんと俺が打つたんだぜ」

「そうなんだ。おじいちゃんには勝てた？」

「おう、あつさりとは言わねえけど、なんとかな」

そっか、それは良かった。おじいちゃんも、ヒカルが真剣に囲碁をやるようになって嬉しいんじゃないかな。

「じゃあ、碁盤が届いた後に、持って帰るね。それと、週末塔矢くんと打つの、一緒に見ていていい？」

「ああ、別にいいけど」

「やった。ありがとう」

良かった。断られたらどうしようかと思ったのよね。

「って、ちょっと待て。なんであかりが知ってるんだ？」

「ああ、ごめん。説明してなかった。今日、囲碁のイベントって言うたでしょ？」

「うん」

「そこに塔矢くんが来たの。インターネット碁の話になって、塔矢くんがインした時に、たまたま佐為と対局になったの。イベント会場だし、落ち着いて打てないってことで、塔矢くんが再戦をお願いしたっていうわけ」

「へえ。偶然ってのもあるんだな」

「そうね」

前世でも、ヒカルというか、佐為と塔矢くんはインターネット碁を打ったのかな。私がイレギュラーになったバタフライ効果なのかどうか分からないけど、佐為と塔矢くんの対局は、間違いなく私とヒカルの勉強になる。絶対に見ておきたい。

海外勢からも注目されているとか、塔矢くんがプロ試験初日だとか、そういうのは言わない方がいいだろう。ヒカルも塔矢くんと打つリスクくらいは分かっているだろうし、何にでも口を出せばいいってものじゃないよね。

それはそうと……。

「ヒカル、強くなったよね」

「え、そっつー」

まだまだ負けるとは言わないけど、相当腕を上げてる。無理な手が

減っているだけでなく、こつちが地を荒らしにいくと、ちゃんとがめてくる。

ここ一ヶ月くらいの中に、どんどん強くなってる気がする。院生下位の子とそう変わらない手応え。

「お前が帰った後にも佐為と検討したり、佐為と打ったりしてんだぜ。ちよつと佐為が強すぎて腹立つけど、まあ、勉強にはなるよ」

「……羨ましい」

佐為と寝るまでずっと打てるとか、本当に羨ましい。

「休みの前日とかに、私も泊まりがけで打ってもらいたいな」

「ええ、嫌だよ。眠いじゃん」

駄目かあ。ヒカル、まだ恋愛とか興味ないんだね。本当に面倒そう。私が恋愛対象外ってだけならどうしよう。そうだったら、くじけそう……。

というか前世の時でも、中学時代はもちろんプロになってからも、かなり経っても恋愛沙汰に興味なさそうだった。だから油断してたというのもあるんだけど、今世では油断しない。

夜通し打つのは断られたけど、これまで通り夕方から打つのは問題ない。私にとって、とても大事なヒカルとの時間。佐為もいるけど。

そして週末。佐為と塔矢くんが打つ日。

ヒカルと一緒に、三谷くんのお姉さんがいるネットカフェに入る。

二人で行くのにお金を払わないってわけにもいかないので、ヒカルと半分ずつ払う。

「うう、緊張してきた」

「なんでお前が緊張するんだよ」

関係ないけど関係あるというか。一昨日の塔矢先生の研究会でも、塔矢くんは相当。ピリピリしていた。

私が塔矢くんに何か言えるわけもなく、事情を知っている緒方先生と顔を見合わせるのがせいぜいだった。きっと、緒方先生も今日の対局は観戦しているだろう。

そして時間になり、対局が始まる。

「佐為、普段の布石と違うね」

「最近よく見る布石を試したいんだってさ」

なるほど。確かに塔矢くん相手なら、メリットもデメリットも、分かるだろう。佐為もネット碁を始めて、私やヒカルとばかり打つよりも打ち方の幅が広がったのは間違いない。

練習手合いでは研究のために色々な打ち方をするけど、苦手な打ち方はたどたどしいもので、しっかりとした打ち筋にならない。ネット碁だと、私が苦手な打ち方を得意とする人もいるし、一柳先生くらいの人は滅多にいないにしろ、私より強い人はいくらでもいる。

話がずれたけど、塔矢くんとの対局は、勝負を急ぐかのように早々に塔矢くんが仕掛けた。でも佐為は慌てず躲す。しかも、無難に逃げるのではなく、塔矢くんの勇み足をとがめて、少ない石で相手の石を無駄にしている。塔矢くん、この攻防で数目は損をしている。

ただでさえ佐為を相手にするのは厳しいのに、こうなると無理をしなくても攻めるしかなくなる。辺での争いだけではなく、中央にも大きく地を作ろうとするも、あっさりと荒らされて、活路が消える。

「投了ね」

「ふう。佐為、どうだった？ 塔矢は強くなってた？」

普段なら声を出さないだろうけど、今は私がいるから、佐為への問いかけも口に出す。佐為の返答は聞こえないけど、ヒカルの気遣いが嬉しい。

「ふうん。……佐為、塔矢も強くなったけど、それ以上に自分や俺が強くなった、ってさ」

少し嬉しそうにヒカルが話す。確かに伸び率だと、ヒカルの方が塔矢くんより上ね。

「ヒカル、明日は棋院に行こうか。願書を出しておかないと」

「ああ、そうだった。めんどくせえなあ」

「まあまあ。そうだ、ついでに棋譜の書き方教えるよ」

いったん家に寄って棋譜を持ち、ヒカルの家に向かい、うんざりした顔のヒカルを宥めて説明する。

私を書いた棋譜と、無記入の棋譜を見せる。

「これが棋譜。どう打ったか、経過も分かるから面白いでしょ？」

「ふーん。3枚とも同じ相手でもいいのか？」

「どうかな、構わないとは思うけど」

「じゃあ、最近お前と打った奴書くよ」

うん、それでもいいんじゃないかな。……ん？

「ヒカル、全部覚えてるの？」

「大体覚えてるぜ」

「そうなんだ。でも必要なのは試験を受ける時だから、1枚は私との対局でいいと思うけど、残り時間があれば部活で三谷くんや加賀さんに打ってもらって書いた方がいいかもしれないね」

試しに1枚、私との対局を書くのを、横から覗く。コウの書き方を説明したりしつつ書き終わるのを見届けて、今日は対局はせず、佐為と塔矢くんの検討を行う。佐為がどういふつもりで打ったのかも聞けて、とてもためになる。中央付近に打たれた一手で、全方位の牽制を視野に入れるとか、ただごとではないよね。

翌日、ヒカルと一緒に棋院へと向かい、受付に提出する。

受付のおじさんが顔見知りだったので挨拶をかわす。

「藤崎さんのお友達？」

「はい。一緒に院生研修通えたらいいなって」

「そうかい、きみ、頑張ってるね」

「ああ！」

元気よく返事したヒカルに微笑ましい顔を向ける。中学生って、まだ子どもだもんね。もう2年もすれば、あれだけ落ち着いて打つようになるなんて、今の姿からは想像もできない。

「試験日が来月のいつになるか、棋院から来るの。それまでにもいっぱい打って強くならなきゃね」

「ああ、そうだな。って、塔矢!?!」

ガラッと棋院の入り口が開き、塔矢くんがやってきた。

「進藤！」

ビックリした。周りも何事かと目を向けてくる。

「塔矢！ ビ、ビックリするじゃねーか！」

「と、塔矢くん。ヒカルも、ちよつと外に出よう」

「あ、ああ」

二人が同意して、まずは外に出る。通行の邪魔にならないよう道の端に寄ってから、私が塔矢くんに話しかける。

「塔矢くん、ヒカルがここに来てるの知ってたの？」

「碁会所のお客さんが進藤を見たって言っていて、つい」

少し冷静になったようで、棋院に入るなり叫んだのを恥じている。ヒカルも驚きから立ち直ったようで、警戒しつつ声をかけた。

「なんだよ、急に。なんか用？」

「インターネット碁をやったことは？」

「ねーよ」

「知ってはいるんだ」

塔矢くんが色々を探りを入れて、ヒカルは何とかごまかす。

それはいいんだけど。

「前に、一柳棋聖にも勝ったことがあるし、s a iの正体が誰かと大さわぎだ」

「え、s a iの正体？」

おつと、騒がしいことがヒカルにバレちゃった。これはよくない流れになりそう。

「まあ、大さわぎって言っても、ネット碁を打つ一部の人だけね。それより塔矢くん、何をしにきたの？」

「……もしかして、お前、俺かもしれないって思ったんだ？」

ヒカルが軽く煽って、塔矢くんはがっかりしてつぶやく。

「やっぱり、君じゃない……か」

「なんだよ、お前も俺じゃないとは思ったんだ？」

「そう、君のはずがない。悪かった、もう二度と、君の前には現れない」
いやあ、それは無理だと思うよ。

塔矢くんがあまりにもヒカルを見ないから、余計だと分かっているけど、口を挟まずにはいられない。

「塔矢くん、ヒカルがどうして棋院にいるか、分かる？」

「え？　そういえば……」

「それどころじゃなかったって感じね。」

「ヒカルね、来月、院生試験を受けるの」

「え、院生？」

「わ、悪いかよ」

「あり得ないと言いたそうな顔。ヒカルもそれが分かったのか、不服そうに口を尖らせる。」

「いや、悪くはないが……通らないだろう？」

「決めつけるなよ」

「明らかに駄目なら、私が止めるよ。でも私は、止めなかった」

「言いたいことは分かるよね、と。」

「塔矢くんが、ヒカルの中の佐為を追いかけたように。」

「ヒカルは塔矢くんを追いかけて、強くなるうとしてる。今はまだ及ばないけど、今年プロになる塔矢くんと、今年院生になるヒカル。この距離は確かに遠いけど、それは絶対的な差かな？」

「塔矢くん、ごめんね。」

「佐為の存在含めて、情報量が違いすぎるからフェアじゃないのは分かっているけど、ヒカルが馬鹿にされて黙っていられない程度には、私も馬鹿なの。」

「ギリツと歯をかみしめて、塔矢くんが質問を投げかけてくる。」

「……藤崎さんは、進藤が強くなると思ってるの？」

「さあ、どうかな。未来のことなんて、何も決まってるないもん。ヒカル次第としか言えないよね」

「前世と今は違う。少なくとも、私が違うせいで完全一致はしないから、どうなるかなんて分からない。」

「でもヒカルは強くなると思うし、追い抜かれても、いつか追いつけるだけの下地を作るために、今も私は必死で頑張っているつもり。努力すればいいってもんじゃないけど、かなり密度の濃い勉強ができていると思う。」

「進藤、追いかけたければ、好きにすればいい。それなら、僕は君なん

かには手の届かない、ずっと遠い場所まで行くよ。近付けさせやしない」

おお。熱い宣言。ヒカルは戸惑いつつも、しっかり言葉を返す。

「じゃあ、俺もそこまで行ってやるさー！」

うん、それでこそね。手の届かない遠い場所。タイトルの保持者と、その挑戦者。きつと、二人はその位置まで行く。私の存在なんか、二人の碁には関係ないだろう。

でも、だからと言って、諦める気はさらさらないの。最初はヒカルを追いかけるためだけだったけど、今では私にとつても、碁はとても大事な存在。誰にも負けたくない、いつか勝ちたい。たとえば、塔矢くんでも。

去って行く塔矢くんを見送りながら、私はヒカルの顔を覗き込む。

「ヒカル、帰ろう。帰って、佐為と一緒に勉強しなきゃね」

「ああ。院生試験くらい、軽く通ってやるさ」

「頑張つて。塔矢くんに追いつくには、まず私は越えていかないと駄目よ」

「あかりにかあ、なんだかんだ、お前も強いからなあ」

「ふふふ。まだまだヒカルには負けないよ」

ヒカルが強くなる速度には負けるけど、私もヒカルが囲碁を始めた時から考えると、半年ちよつとで随分強くなつた。まあ、考えたら森下先生の研究会だけじゃなく、塔矢先生の研究会に加えて、何よりかなりの頻度で佐為やヒカルと対局や検討をしている。佐為の指導は凄く大きいし、ヒカルと打つのは、何にも変えられない貴重な時間。

うん、強くなるわけだね。

「来月の院生試験で受かって、1組の上位はまだしばらくプロ試験中だよ。どっちにしる上位に入るまでは2組で対局が続くけど、それもいい勉強になるよ」

「ああ。でもすぐに1組になって、プロ試験とかもあっさりクリアしてやるさ」

「プロ試験は1年に1回だから、来年だけだね。私もそれまで、1組の上位目指して頑張るね」

思いがけない塔矢くんの登場だったけど、ヒカルの意識が高まったのは良いことだと思う。その点では、塔矢くんに感謝ね。

第15手 中学1年生 その9

9月。夏休みが終わって、2学期が始まった。

塔矢先生の研究会で塔矢くんと少し話したけど、ヒカルと話す前に比べて、目に見えてやる気にあふれていた。明日美さんもビツクリしていたけど、それ以上に緒方さんや塔矢先生が驚いていた。

何があったのか聞かれたら、塔矢くんは少しぼかしながら、これから院生になる彼に追いつかれたくないって。それで塔矢先生と緒方さんも分かったみたいで、静観の構え。

明日美さんが気にしていたので、帰り道に説明した。

「へえ、塔矢くんがライバル視する子が、院生試験ねえ」

「とは言っても、ヒカルの実力は今のところ明日美さんや私より下だけどね」

「ふうん。でも、塔矢くんが気にするくらい、何かは持ってるんでしょ？」

「そうかもね」

「なるほどなるほど。で、あかりちゃん」

歩きながらだったので明日美さんの顔を見ていなかったのを、私は少し後悔した。名前を呼ばれて顔を向けると、そこには明日美さんのニマニマとした顔。

「その、ヒカルくん？　っていう子は、あかりちゃんの彼氏？」

「えっ！　いや、そんな、違うよ！」

「そう？　でもヒカルくんのことを語る時の顔、全然違ったけどね。そういうえば、苗字は？」

「……進藤ヒカル」

ヒカルが気になるのかな。少しだけ、警戒心を持つ。

「オツケー。じゃあ進藤だね。知りもしない友人の彼氏を名前呼びとか、そんなわけにいかないからねえ」

「あ、明日美さん、だから違うって！」

「はいはい。分かった分かった」

からかう方向だった。もうっ！　不安になって損した！

そんなわけで警戒心は減ったけど、対処には困るよ。

「もー。そんなことより、明日のプロ試験に意識を向けてよ！」

「あー、うん。まず負けるけど、せいぜい勉強させてもらいます」

からかっていた雰囲気は消えて、真面目な表情。さすが明日美さん。囲碁の話を振ると、色恋沙汰より優先される。

「ああ、塔矢くんだったっけ？」

「うん。ここで打つようになって、ますます自分の力不足を実感したわ。でも、プロになるのを諦めるわけにはいかないもの」

「ここで打つのと、試験中に打つんじゃないや塔矢くんの気合いも全然違うだろうから。いい経験になると思う。明日美さん、頑張ってる」

「ありがとね。プロ試験終わったら、パーツと騒ぎたいな。たまにはストレス発散しないと」

「あはは、そうだね。楽しみ」

暗くなってもしょうがない。前向きな話に切り替えて、明日美さんと駅で別れた。

学校で部活が始まって早々、ヒカルが三谷くん事情の説明をした。

「ああ、来月受けるんだ」

三谷くんのつぶやきに、ヒカルがうなずく。だから、ってパンと顔の前で手のひらを合わせて拜んだ。

「試験の時に3枚棋譜があるんだ。三谷、打ってくれねえ？」

「……俺なんかで、いいのか？」

「知ってる中で、お前が3番目に強いからな。あかりに加賀に三谷で3人」

まあ、院生試験の棋譜のために塔矢くんと打つわけにもいかないよね。

加賀さんも、都合の付く時に打ちに来てくれるし、今日は三谷くんと対局を棋譜にしないとね。

「まあ、いいけど……」

良かった。最初からヒカルも院生が目標と言っていたおかげで、三

谷くんも怒ることなく受け入れてくれてる。

大会のメンバーを探すのはちよつと大変かもしれないけど、囲碁部自体を継続してくれるのは嬉しい。

私が参加できない以上、金子さんや久美子を引っ張ってくるのも難しい。でも、そうなると三谷くん一人になっちゃうのよね。久美子とは今もそこそこ仲良くやってるけど、私が大会にも出ない囲碁部に引っ張るのも、どうなんだろう。考えてもしようがない。なるようにしかならないか。

三谷くんとヒカルの対局は、順当にヒカルの勝ち。それほど日数は経ってないし、三谷くんも少しは強くなってるのに、ヒカルの圧勝。日をあらためて対局した加賀さんにも3目半差で勝った。加賀さんも相当実力はあるから、言い方は悪いけど、良い試金石になったと思う。

そして私との棋譜も用意して、いざ、院生試験。

自分の時より緊張する……！

「私、院生研修あるから先に行くけど、時間空いたら様子見に行くね。ヒカル、頑張ってー！」

「あー、はいはい」

「ヒカル！ せっかくあかりちゃんが応援してくれてるのに！」

あはは、ごめん、怒られちゃったね。昨日も遅くまで一緒に佐為から教えてもらったし、今のヒカルなら大丈夫なはず。

院生研修で、1度目の対局が終わった後、まだ早かったけど様子見に行くと、なんとなく見覚えのある子が篠田先生と一緒に出てきた。確か、ヒカルと一緒に合格した子だ。

「じゃあ、今はプロ試験中だから普段の部屋じゃなくて一時的だけど、来月はこっちの部屋で対局や検討などをします。月末に組み合わせ表やお知らせをお送りします」

説明してるってことは、受かったってことよね。この時期に入つて、ヒカルと一緒に合格って相当凄い。しかも、見た感じ年下っぽい

し。

「何？」

おっと。あまりに見続けていたせいで、訝しげな顔で睨まれた。

「あ、ごめんね。試験受かったの？」

「当然だね。君は院生？ この時期にプロ試験受けてないってことは……弱いんだね」

弱い認定されちゃった。強弱は比較対象によるけど、少なくとも来年のプロ試験に受かるなら、私より強いんじゃないかな。

「どうかな。あなたの3ヶ月前からだから、プロ試験の時期を外しちゃってたの」

「ふーん。まあ、せいぜいよろしく」

生意気というべきか、そこが可愛いというべきか、微妙なところね。無駄に言い合う意味はない。受かったんだったら対戦の機会はあるだろうから、お互いに実力は分かるだろうし。

「うん、来月からよろしくね」

帰っていく男の子を見送り、次の対局の準備をしながら、ふと思う。名前聞き忘れた……。

2度目の対局が終わってお昼の時間になり、院生試験の様子を見に行くと、ちょうどヒカルが先生と打っていた。

見に行くわけにもいかないなので、1階に降りると、喫茶店でヒカルのお母さんが時間を潰していた。

「おばさん、こんにちは」

「あら、あかりちゃん。どうしたの？」

「午前の部が終わったから、これからお昼なの。ヒカル、今試験を受けてるんでしょ？」

「ええ。お友達と一緒に？」

「今日は一人。ヒカルが試験終わる時間によっては、一緒に食べようと思ってたから」

「そう。さつき始まったところだから、お昼はずれちゃうわね。もし良かったら、おばさんの相手してくれる？」

「うん！」

おぼさんの前の席に座り、ウエイターにパンケーキを注文する。

「ヒカル、最近になって碁にのめり込んでるんだけど、勉強も同じくらいやってくれたらねえ」

「あはは。ヒカル、勉強嫌いだもんね。でも、囲碁はどんどん強くなってるよ」

「うーん、いくら碁が強くても、高校受験には役に立たないからねえ」

あ、これは一から説明した方がいいかもしれない。

「私も院生なんだけど、ヒカルが今受けてる院生試験って、碁のプロを目指す子どもの集まりなんだ」

「え？」

ああ、目を丸くしてる。やっぱりヒカル、何も説明してないのね。

少し時間をかけて、院生や碁のプロについて説明する。

「あかりちゃんも通ってるし、ちょっと本格的なだけで、ただの囲碁教室だと思ってたわ」

「うん、大きくは間違っていないけど、もし中学のうちにプロ試験に受かったら、高校は行かないと思う」

「あかりちゃんも!? あかりちゃん、結構学校の成績良いって聞いたけど」

「あー、悪くはないけど。一応お母さんにも、プロになったら高校行かなくていいって、オツケーはもらってるんだよ。ヒカルが院生試験に合格したら、お母さんにも話を聞いてみてよ」

「そうね、相談させてもらおうわ」

良かった、知らないうちにプロ試験を受けて、知らないうちにプロになるとか、親からしたら不安で仕方ないよね。中学でプロとか、一般的に見たら不思議な世界だし。

と、話してたら昼からの対局時間が近付いてきた。ヒカルはまだかかりそうだし、これは帰ってからどうだったか聞く感じかな。

「おぼさん、私そろそろ戻るね。これお会計」

「いいわよ、おぼさんが払っておくから」

「えっ、でも」

「相談乗ってもらったの助かったし、今度あかりちゃんのお母さんに相談するし、そのお礼代わり。ね？」

「ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えます。ごちそうさまです」

そんなつもりなかったけど、考えたら子どもと一緒に食べたら親側が出すよね。うーん、でも碁について少しは説明できたし、まあいいか。実際今は子どもだし甘えておこう。

戻って対局が始まり、そう時間が経たないうちに、先生に連れられてヒカルが部屋に入ってきた。

ここに来たつてことは、受かったのね。良かった。

「対局中なのであまり話せませんが……」

小さな声で説明している。よし、気合いを入れて、この対局終わらせよう！

ちよつと焦っちゃったせいで、余計に時間がかかってしまった。うーん、まだまだ修行が足りない。

ヒカルは部屋にいない。というか小一時間経っているし、もう帰ったんだろう。

そう思いつつも、もしかしたら残ってないかなと思って、部屋を出て、入り口付近まで行く。

「藤崎、きよろきよろとしてどうした？」

「え？」

声をかけられて振り向くと、緒方さんがいた。

「こんにちは。えつと、友人が院生試験を受けていたので、まだどこかにいるかなーって」

「友人？ ああ、進藤が受けるのかなんとか言ってたな。受かったのか？」

「はい、対局中だったから話せなかったけど、篠田先生が説明とかしてたから」

私の言葉に、緒方さんが目を細めて、なるほどとつぶやく。

「アキラくんには、俺から伝えておこう。きつと、僕には関係ありませ

ん、とか言うぜ」

楽しくて仕方がないといったふうに笑う。ほんと楽しそう。

緒方先生、気に入った相手ほどからかうよね。

そんな雑談をかわしてるうちに時間が来たので、ヒカルを探すのは諦めて部屋に戻った。

早くプロ試験終わらないかな。1組の上位と、早く対戦したい。

最後の1戦もそれほど手応えを感じないまま、その日の研修は終わった。

「こんばんはー」

「あら、あかりちゃん。今日はお昼、相手してくれてありがとうね」

「ううん、こつちこそ、奢ってもらっちゃって」

パタパタと手を振ると、おばさんにふふふと笑われた。

「ヒカル、あかりちゃんよー」

「おー」

返事があり、少し経ってから降りてくる。

「お皿並べてちょうだい」

「なんか母さんが、院生試験通ったからお祝いだって。囲碁のことも知らないのにさ」

私が今日、院生について説明したから、かもしれない。プロ養成機関に受かるのは相当難しいっていうくらい、その競技が素人でもだいたい分かるもん。

というか、そういう理屈はさておき。

「それはいいけど、何で私の分もあるの?」

「あら。あかりちゃんが、毎日ヒカルに教えてくれるからでしょ?」

「え? いや、私が一方的に教えてるってわけじゃ……」

むしろほとんど教えてもらってます。佐為に。

「まあいいから。説明できねえし。ケーキくらい食ってけよ」

そりゃ、ケーキが食べられるのは大歓迎だけど! それ目当てで来たみたいに思われたら困る。

「来ると思ってもう買っちゃってたから、来なかったらヒカルに呼び

に行かせたくらいよ」

言いながら、おばさんがどこかに電話をかけている。直接来たからこつちにどうぞって、もしかしてうちにかけてるの？

すぐにお母さんと、お姉ちゃんまでやってきた。便乗どころじゃない……。

「こんばんは、ヒカルくん。お久しぶりね」

「ども、こんばんは」

それほど大きく離れているわけじゃないけど、ヒカルと遊んでいたのはもっぱら私で、お姉ちゃんはあまり関わっていない。本当に良かった、姉妹でライバルだなんて変なことにならなくて。

「あかりのついでに、お相伴にあずかりに来ました」

あつげらかんとお姉ちゃん。まあいいか。

そんなこんなで、食べながら雑談に興じる。話は囲碁の話が中心。いかにヒカルがハマったかということや、私が昔からやっていたこと。お姉ちゃんは興味を示さなかったのにねえ、なんて話にもなった。

ケーキを食べ終えても話が止まらず、おじいちゃんから高い碁盤を買ってもらった話にもなってる。そういえば、足つきの碁盤を買うかお母さんに聞かれて、断った覚えがある。

ちよつと場所を取るし、安くても数万するから、躊躇したんだよね。「あかりって、変なところで遠慮するわね。私ならちやっやと買ってもらうけど」

「だって。別に折りたたみの碁盤でも勉強するのに困らないもん」

ヒカルのように一人で佐為と打てるならともかく、私は棋譜並べや詰め碁くらいにしか使わない。

ヒカルが飽きてきたのか、そわそわし始めた。

「そろそろ、部屋に戻るよ」

「あ、私も行く」

ヒカルが引き上げるのに合わせて、私も付いていく。

お姉ちゃんはやりと笑うけど、囲碁を打つだけだから。佐為もいるし。

「ふう。話、長えんだよなあ」

「まあまあ。ヒカルのお祝いなんだから、良いじゃない」

「また2人して同じようなことを……」

ヒカルによると、私と佐為は案外息が合っているらしい。でもそれは、ヒカルの行動が分かりやすかったり問題があったりするんじゃないかな？

二子置いての、篠田先生との対局を並べながら、検討をする。

実戦でヒカルが打った手のヌルい部分を指摘したり。良い手があっても、次の手でもつたない結果になってしまった部分を重点的に教えてもらった。

「まあ、検討はこんなところか。試験してくれた人から聞いたけど、プロ試験中は2組とプロ試験に落ちた1組しかいないんだろ？」

「そうね。でも、ヒカルはまず2組で成績を上げないと1組に上がれないから、10月は関係ないよ」

そういえば、ヒカルって囲碁業界のこと、全然知らないよね。佐為にも分からないだろうし。

「ヒカルは院生になっても、秒読みや記録係で呼ばれることはなさそうね」

「秒読み？ 記録係？」

「うん。私は森下先生の弟子をやってて、前から棋院にも出入りしてるから、たまにやってるの。プロの大きな対局だと、対局時計だけじゃなくて、人が秒読みをやるの。記録係は、その場で棋譜を取ると言えば分かりやすいかな」

「へえ。でも面倒くさそうだな」

「プロになったら、仕事でやらなきゃ駄目なのよ。私が手伝った時も、バイト代は一応もらってたけど」

「え、バイト代もらえんの？」

「うん。お母さんに全部渡してたけどね。私には囲碁の勉強の一環でしかなかったから」

バイト代って聞いて、急に前のめりになる。ヒカルってば囲碁に集中してると思えば、かなり即物的なところもあるよね。それで塔矢く

んを怒らせたのが最初だったよね、懐かしい。

「今はヒカルに必要なし、後から覚えればいいよ。プロになってからでも遅くないもん」

「へえ、そういうもん？」

「うん。院生でもそういうお仕事はしないって人もいるし、色々よ」

晩御飯の時間になっていたので、ご飯を食べてからまた来ると伝えて、家に帰る。

今日はヒカルと打つ日。院生研修でも打つと思うけど、やっぱりヒカルの家で打つのは特別。私だけの特権。

これからもずっとそうであるよう、気を抜かずに頑張ろう！

第16手 中学1年生 その10

10月に入り、ヒカルが院生として通う日がやってきた。日曜、ヒカルの家に行く。

「おはよう、ヒカル」

「おう。まだちよつと早いかな？」

「いいんじゃないかな。早めに行こう」

おばさんに挨拶をして、ヒカルの家を出る。雑談をしながら駅まで歩く、幸せな時間。

「そういえば、佐為ってネット碁続けてるんだよね？」

「あー、さわぎになってるって言ってたけど、俺だって気付きそうな碁矢くらいじゃん。やっぱり佐為が打てる場所は他にないし、何とかなるかと思っただけ」

「うん、そうだね。前にも言ったけど、チャットとかしなければ多分大丈夫。気を付けるとすれば、ネット碁そのものより、ヒカルの方ね」

「俺？」

「佐為の話題で盛り上がった時に、何か言っちゃったり、不自然に黙ったり？」

特に和谷くんの前では要注意。ずっと佐為の碁をチェックしてるもんなあ。暇でもないだろうに……。

「ああ、大丈夫だって。俺がそんなミス、するわけねえじゃん」

「そうかなあ。気をつけてよ」

大丈夫大丈夫と、あつげらんかんとしている。ホントかな。

「そーいや、またichiryuと打ったぜ。佐為はこれまででトッポクラスに強いって。他に、他の国の人でも強いのと対局してるし」

「柳先生と？ いいな、私も打つてみたい」

「あかりはネット碁しねえよな」

「いつか、パソコンを買えたらやろうと思ってるの。外だと時間の都合も難しいし」

週のうち、森下先生と碁矢先生の研究会、院生研修、囲碁部に顔出しすると、だいたい日が埋まる。外でネット碁を打つ機会って、本当

に難しい。

ヒカルは気楽に強いのとばかり対局できたらいいのになつて言うけど、昇段制やレート方式になつたら、それこそ無敗のsaiは誰だつて大騒ぎになる。

「強さが細かな数値に出ないから紛れてるつてのもあるし、ある程度はしようがないよ」

「そんなもんなのかな。それと佐為は、強いだけが全てじゃないつて。拙いからこそ面白い手もあるから、今のままでいいつてよ」

なるほど。そういうものかな。ちよつとその境地は分からない。

棋院に着いて対局部屋に入る。いつもと違ってヒカルと一緒にだから、少しだけ緊張する。普段通り、普段通り。

ちらほら人がいたので、仲の良い人と挨拶をして座つた。ヒカルは周りを眺めている。

「おはよう。そっちの人は友人？」

「内田さん、おはよう。うん、幼なじみの進藤ヒカル」

「お、おはよう。今日からよろしく」

「よろしく。藤崎さんの友人なら、凄く強いのか？」

「え？ いや、そんなことねえよ」

話しかけてもらえて助かった。話していると、周りに少し集まってくる。そのまま雑談していると、キノコカットの男の子が入ってきた。

そしてそのまま、臆した様子もなく空いている席に座る。別に話しかけるなつて雰囲気でもないのです、ちよつと近付く。

「おはよう。今日からよろしくね」

「……おはよう。こちらこそ」

もう。せつかく挨拶したのに、愛想ないなあ。まあいいか。

そうやって時間を潰すうちに、篠田先生がやってきた。

対局のために割り振られた席に座り、先生がヒカルともう1人、越智くんという男の子を紹介する。

今日の対局相手は、1組だけどプロ試験の予選で落ちた男の子。も

ちろん油断はできないけど、きちんと打てたら、負ける相手ではない。しばらく打っていると越智くんが終わったようで、ヒカルの盤面を見たり、他の盤面を見たりしつつ、こっちに向かってきた。

私の盤面を見て、足を止める。盤面が進んでも立ち去る気配はないので、腰を据えて見るみたい。

「……ありません」

「ありがとうございました」

相手が諦めて、中押し勝ち。左側に地を作りたかったみたいだけど、左辺で上下を分断したから、生きている部分が激減してしまったのが決め手になった。

「ねえ、君が院生トップ？」

越智くんが私に聞いてきたので、小さく首をかしげた。

「みんなプロ試験中だから、この場ではトップだと思う。1組に上がる前にプロ試験が始まっちゃったから、1組の上位とは対局してないの。伊角さんって人が試験始まる前の1位だよ」

「ふーん」

それはそうと、ヒカルはどうだったのかな。見たら終わって検討しているみたいだったので、越智くんを置いてそっちに近づく。

遠目で見た感じだけど悔しそうだし、負けたんだろうな。

「ヒカル、どうだった？」

「……3目半差で負け」

結構惜しい。篠田先生の検討に混ざる。盤面を見る感じ、これという悪手はないけど、地に辛い窮屈な打ち方になってる気がする。初めてで緊張したのかな。

「ちよつとの差だね。1日に4戦するし、焦らず頑張ろう」

「ああ、でも、次は勝つさ」

「落ち着いて打とうね」

技術面では、佐為に敵う人はいない。篠田先生ですら、佐為なら圧倒できるはず。

ここで学ぶのは技術ではなく、同程度の実力者を相手の立ち回りだね。そういう意味では、私も早く伊角さんたち上位陣と戦ってみた

い。

今月いっぱいプロ試験でいないし、伊角さんが受かったら、打つ機会はなくなる。

午前中のもう1戦、午後からの2戦ともに、ヒカルは白星を上げられなかった。

「ヒカル、今日の対局内容、後で検討しよう。対局相手の棋風も分かっているから、私でなきや言えないこともあると思うし」

「ああ、頼むわ」

ヒカルが囲碁を覚えて強くなるにつれ、私もかなり強くなっている。ヒカルを見ていると、手を抜けないというか、一緒に上がっている感じ。

それはそうと、さつきは和谷くんがからかってきたけど、今は誰も茶化さない。

少しだけピリツとした空気が流れる。普段ずっと練習とかしていて、逆行してからは公式の大会とか出たことないけど、こういう緊張感も、たまにはいいよね。

「じゃあ、また。みんな、残りのプロ試験も頑張ってるね」

それぞれ挨拶をかわして、帰路につく。

家に帰らず、直接ヒカルの家に行く。

「ヒカル、今日はどうだった？」

「もうちよつとな対局もあつたんだぜ。結果は全敗だけどさ」

「うん。ヒカル、ずっと佐為と打ってるのはいいんだけど、同格の相手と打つのも勉強になるよ。必要な技術が変わってくるというか」

いかに序盤で有利に立って、そのリードを守るか。格上と打っていると技術は身につくけど、1目差を争うような細かな勝負は発生しない。

「検討しようか。一手ずつ確認していこう」

「ああ」

ヒカルが対局を並べて、気になるところを確認していく。私が気付

かなかったところも、佐為がきちんと指摘する。

佐為が指摘してくれる時は、私はあまり必要ない。それでも、時々意見を口にする。

「なるほどな。じゃあ、こういう手は？」

「うーん。左辺のやりとりだと意味はないかな」

「……佐為も、こっちのノビの方がいいって」

ヒカルと一緒に勉強するようになって一年足らず。院生になっても、こうやって打ってくれている。私が帰った後は、佐為と打っているらしいけど、そのうち忙しくなると、打つ回数は減りそう。

ちゃんと先を見据えて、布石は分厚く用意しておこう。

ヒカルの家から帰る時、おばさんといつものように話をする。ヒカルは玄関まで来てくれる時もあるけど、佐為と打ち始めるとおざなりだ。

「ごめんね、ヒカルったら、見送りにも来ないで」

「ううん。それより、毎日遅くまでお邪魔しちやつてごめんなさい」

「いいのよ。ヒカルがあれだけ碁にハマるとは思わなかったけど、あかりちゃんが詳しくて助かったわ。おじいちゃんも、碁は打つけど、業界については詳しくないみたいで」

困った、と顔に出すおばさん。おばさんに頼られるようになるのは、絶対良い方に天秤が傾くはず。

「あはは、週刊碁とか買うか、ネットで情報収集でもしないと難しいよね」

「そうなのよね」

「プロになったら一人暮らしするようになる人も多いし、私もヒカルも、もつと色々と自分で出来るようにならないと駄目なんだけどね」

「あら、お母さんから聞いてるわよ。料理もできるって」

「最低限の料理はできる、かな？」

「いいわねえ、女の子は」

「ヒカルが一人暮らしするようになったら、料理くらいは作りに行つてあげようかな」

「ぜひそうしてちょうだい。放っておくと、何も食わずに部屋に籠もるんだから」

お婆さんとそんな会話を楽しんで、家を出る。料理については、前世でお母さんから教えてもらっていたし、逆行してからも、小学生の時はお手伝いしていた。最初は手が小さくて、包丁を使うのもおっかなびつくりだったけど。

「ただいまー」

「おかえり。晩ご飯できてるわよ」

はい、と返事をして、洗面所に向かう。手洗い、うがいを済ませて、部屋着に着替えてから食卓に向かう。

せっかくお婆さんとああいいう話をしたし、持ちかけてみよう。お姉ちゃんもいるし、ヒカルとの仲は応援してくれているからうまく後押ししてくれる、はず。

「お母さん、今日、お婆さんと話していたんだけどね。プロになったから、一人暮らししていいかなあ？」

「……駄目とは言わないけど、大人になったらね」

「プロになったら、大人じゃない？」

「中学生でプロになったとしても、大人とは言いません」

「中学生でプロになれるとは思ってないけど。20になってなくても、プロになったら構わないよね？」

「お母さんが良いと言っても、お父さんが駄目っていったら駄目」
むう、手強い。

「じゃあ、ヒカルくんと一緒に住んだら？ 一人暮らしじゃなければいいんですよ」

さすがお姉ちゃん。的確なフォロー。後で秘蔵のチョコを持って、部屋に行くのかな。

「お母さんはいいいけど、お父さんが余計に反対しそうね……」

「ああ……」

お母さんの言葉に、お姉ちゃんも同意する。うーん、行き遅れるよりはいいし、お父さんの意見は無視しちゃっていいと思うんだけどな。

「お父さんはともかく、お母さんはOKくれる？」

「状況次第ね。極端な話、囲碁のために一人暮らしや同棲したいっていうなら賛成だけど、同棲したいから囲碁をダシにするっていうなら反対」

「それなら大丈夫。囲碁が目的だから。ヒカル、今は囲碁しか見えてないし」

ヒカルと親密な関係になるのは、それこそ成人してからでも遅くない。

「でも急にどうしたの。今までそんな話、あまりしてなかったのに」
「今日から院生研修にヒカルが来るようになったの。そしたら一気に世界が広がるから」

周りにも女の子が増える。学校だと誰も囲碁を打たないし、心配する必要なんてない。でも、院生の子はみんな、プロを目指して頑張っている。ふとした拍子に惹かれてもおかしくない。

「そっかそっか。あかり、しっかり見張っておきなよ」
「見張るって、それは窮屈で邪魔くさいと思われるよ」

そのあたりの見極めは難しい。ヒカルは奔放な性格だけど、その分束縛を嫌う。ヒカルが好き勝手に動いて、その後を付いていくというのは、私の性格にも合ってる。前世では、付いていくだけの棋力が無かったけど、今は違う。どこまでも付いていくって決めたんだ。

そんな私の決意とは打って変わって、ヒカルが悩んでしまっている。

2回目の院生研修でも、ヒカルは勝ちを掴めなかった。ため息をついているヒカルと一緒に棋院を出ようとする、緒方さんが立ち話をしていた。

「おや、藤崎。院生研修か？」

「緒方さん、こんにちは」

「こ、こんにちは」

ほんやりしていたのでヒカルを肘でつついて、挨拶をうながす。

緒方さんは当然ヒカルを覚えていて、フツと笑みをこぼす。

「進藤、お前も院生になったんだな。どうだ、結果は？」

「うーん、いまいち、かな」

「まあ、せいぜい頑張れよ。そうだ、アキラくんは今日も勝って、プロ試験合格を決めたぜ」

え？ もう？

确实とは思っていたけど、まだ5戦も残して、もう決めちゃったんだ。ヒカルがそのまま疑問を口にする。

「あれ？ プロ試験って今月末あたりまであるんじゃない？」

「残り全部負けても、今の4位には抜かれないそうさ。……直接聞いてなかったし、あらためて聞くが、お前も塔矢名人の研究会に来るか？」

そっか、前とは少し違う。少なくとも今は院生になってるし、棋力は測れるだろう。

「行かねーよ。俺は塔矢と一緒に勉強したいんじゃないんだ」

「くくく、そうか。じゃあ、きみとアキラくんの対局を待つとするかな」

緒方さんと話していた天野さんに軽く会釈をして、ヒカルと一緒に棋院を出た。

「塔矢のやつ、あっさりプロになっちまいやがった」

「うん。プロ試験を受ける子の中じゃ、頭ひとつ抜けていると思う」

というか、プロにも色々というけど、塔矢くんは勝てるプロになると思う。

さすがにずっと負けなしとはいかないけど、きっと低段者には敵なしだよな。

「俺も、こんなところでつまづいてる場合じゃねえよな」

うーん。でも、だからといって簡単に勝てるようになるなら、苦労はないんだよな。

「帰って、検討しよう。何か見えてくるかもしれないし」

急いで帰って、早速検討を始める。

「待って、この石の意図は？」

明らかにおかしな手。まるまる一手損になりそう。

「この手は、左辺から打たれた時に、こう……」

「それでさばける？　ちよつと苦しそうだけど」

「行けると思うんだけどな。……佐為は、その先を見ないと何とも言えないって」

「そう。じゃあ後でまた考えよう。続けて」

ヒカルの打つ様子を見ながら、やっぱり先ほどの一手は、意味がな
いまま終局した。

でも打った意図は分かった。確かに後々、左辺から中央に攻め込む
時、邪魔になっていただろう。

ただ、右辺での攻めに失敗したせいで、それ以前に碁が終わってし
まった感じ。

「……佐為が、ここぞという時の踏み込みが弱いつて。怖がつてるよ
うな手だつて言うんだ。ちゃんと打てたら、さっきの一手も意味を出
せそうなのにつてさ」

「ふうん。その一手、今のヒカルには打つタイミングが難しそう。早
すぎると、今みたいに他で損しちゃつて勝負にならないし、遅いとそ
れこそ手遅れだし」

でも、こういうのをセンスがあるつて言うんだろう。私はどう転ん
でも、ああいう手は打てない。

「佐為が、手加減無しで打つてみたらどうかつてさ」

今日は、私とヒカルが打つ日だったけど、検討するしやめておく方
がいいかなつて思つてた。でも、佐為は打つべきだつて言つてゐるら
しい。仮に序盤で崩れても、一見無茶な手でも、とにかく踏み込んでい
く立ち回りを意識させたいつてところかな。

「うん、分かつた。じゃ、早速打とう」

普段と違い、1手10秒の早碁のペースでどんどん打つ。実は私は
早碁は苦手で、逆にヒカルは結構上手い。意図せず、良い勝負になつ
ている。負けはしないけど、数目の勝負で、ちよつとした差で勝敗が
入れ替わつていた一面も多かつた。

そんな対局を繰り返すうちに、夜が更けていった。

第17手 中学1年生 その11

塔矢くんのプロ試験合格以降、ヒカルが勝ったり負けたりを繰り返しているうちに、11月になった。

ヒカルは2組のまま。越智くんは全勝で、あっさりと1組に上がってきた。

プロ試験も終わり、他の1組メンバーも合流する。楽しい対局が増えるといいな。

「みんな、お疲れ様。残念だったね」

「ああ。引きずってもしようがない。1年、鍛え直すさ」

研修部屋に人が集まってきた頃、

私のねぎらいに、和谷くんがぐつと拳を握る。伊角さんも頷いている。

明日美さんは思ったより結果が悪かったって、がっかりしている。16勝11敗。そこまで悲観するほどじゃないと思う。

「それはそうと、そいつがお前の彼氏？」

「え？」

わあああ！ な、なんてこと言うの！

「ち、ちがつ、あ、いや、嫌とかじゃなくて、でも違……」

「はいはい、落ち着いて。で、君が進藤？」

「あ、ああ」

明日美さんの質問に、ヒカルが目を白黒させつつ頷く。

あれー、さっきまで落ち込んでなかった？ なぜ楽しそうな顔になってるの？

「私は奈瀬明日美。よろしくね」

「よ、よろしく」

和谷くんと伊角さんも挨拶する。

「とはいえ、お前まだ2組だろ？」

「今は2組だけど、すぐ1組に上がってやるさー」

ヒカルの宣言に、お手並み拝見だなど返す和谷くん。

篠田先生が来て、残念ながらプロ試験に落ちてしまった人を少し慰めて、午前の対局が始まった。

2組が30分ずつの持ち時間に対して、1組は60分の持ち時間。対局数も、2組の半分。

どっちの方が良いかは分からないけれど、私は持ち時間が長い1組の方がやりやすい。

プロ試験を受けていた子が合流して第1戦は、フクくん。幼い感じで可愛い子だけど、いざ対局してみると、かなり強い。

相手はかなり早打ちだったけど、釣られず自分のペースで打つ。相手に惑わされず自分のペースを把握する練習は、ずっと森下先生から言われてやっている。

持ち時間はフクくんの半分以下になったけど、フクくんのペースも変わらない。そしてじっくり打っていると、フクくんが手打ちで悪手を放った。

それは駄目だよ、見逃せない。

「あ」

フクくんも気付いたようで、なんとかしようとして立ち回るけど、元々数目差でこっちが勝っていたし、挽回できなそう。

「負けました」

「ありがとうございます」

「失敗したー」

「うん。悪くない碁だったけど、一手のミスで崩れちゃったね」

早碁が得意なのは、良いことだと思う。それで焦る人もいるし、ゆっくり打つと強い人も相手の手番で考えられないから、お互いに遅い碁よりも碁が荒れる。

ただ、相手が秒読みになるまで五分に近い勝負ができたり、挽回できそうな荒れた碁にならない限り、明らかな有利が付くわけでもない。

「ちよっと手打ちでミスしてるところがあるみたいね。時間は凄く有利に展開できてるし、大事なところでは長考してもいいんじゃない？」

「うーん、そっか。打ってみて、ミスしたと思うけど、打つ前に気付かないんだよねー」

ある程度欠点も分かってるなら、それ以上言う必要ないね。私の苦手なタイプだし、緩急をつけて打てるようになれば、来年のプロ試験で強敵になりそう。

あ、ヒカルはどうか。

目を向けると、ちょうど1戦目が終わって検討を始めていた。碁石を片付けて、ヒカルのところに行く。

どうやらヒカルが負けたようで、少し消沈している。

「アイツどうだった?」

「負けたみたい」

「ふうん」

後ろで、和谷さんと伊角さんが小声で話している。

横から検討に混ざるわけにもいかず、私も見てるだけ。もうちよつとというところで、相手に良い手を打たれたみたい。篠田先生も相手を褒めている。

2組の倍の持ち時間がある1組でも、もう半分以上が終わっている。和谷くんはともかく、伊角さんの対局は見たかっただけに残念。

他に興味が惹かれそうなところはあるかなと周りを見ると、越智くんが対局中だった。初めて1組での対局にも関わらず、相手の子を圧倒している。これは随分強い。

結果は、越智くんの中押し勝ち。

「へえ、こつちの奴は強いな」

いつの間にか近くに来ていた和谷くんがつぶやく。ちよつと引つかかる言い方だけど、ヒカルが和谷くんから見て物足りないのはしようがない。

越智くんは確かに強いし、伊角さんも強いらしいし、今から対局が楽しみ。

午後からやる本田さんも強いという話なので、早く打ってみたい。

ヒカルは午前中、もう一局で勝利して、昼休憩に入る。

「え、まだ碁をやり始めて1年未満なの?」

「あ、ああ。去年の12月からだから」

「あかりちゃんに教えてもらったとはいえ、師匠もなしにたったそれだけの期間で院生になれたんだ……」

明日美さんが驚いていて、周りもみんな猜疑的な目をしている。

「ヒカル、どんどん強くなってるよね。始めはなかなか勝てなかったけど、今はそこそこ勝ってるもん」

「ふうん。お前、碁の勉強ってどうしてるんだ？ 藤崎と打つ以外にさ」

「えーと、うちで……」

「詰碁の本を読んだり、棋譜見て打ち碁を並べたり？ あかりちゃんと打ってるだけいいけど……」

「そんな程度じゃ上にこれねーよ。藤崎だつて、小さい頃から師匠の世話になって、塔矢名人のところにも顔を出してさ。進藤、お前も俺の師匠の研究会来てみるか？」

あ、和谷くんが誘ってくれた。私から言っても良かったんだけど、前に塔矢先生の研究会に断られてるし、言いにくかったのよね。

ヒカルが、首を小さく横に振る。あ、断るのかな。

「いや、俺は……」

「どうしたの？」

断ろうとして、うわつという顔になる。明日美さんが不思議そうにしてるけど、ヒカルは耳を押さえながらぼそりと。

「あ、いや……じゃあ頼んでくれる？」

「おう。毎週火曜、場所は控え室に使ってる部屋な。つて、藤崎が連れてきてくれるか」

「うん」

わーい。ヒカルと一緒にいられる時間が増える。和谷くんありがとー。

「嬉しそうだね」

「え？ うん」

あ。不意打ちで明日美さんに言われて、素で答えちゃった。

「あら、素直。あー、私も癒やしが欲しい。あかりちゃん、この後お

祝いがてらカラオケ行こう。プロ試験のお疲れ様会兼ねて！」

「え、でも私は受けてないし」

「いいからいいから」

明日美さんは、和谷くんや伊角さん、本田さんたちにも声をかけて、遊びの企画を立ててしまった。

まあ、たまにはいいか。

「ヒカルも行く？」

「んー……そうだな、和谷だっけ、あいつに研究会誘ってもらったし、付き合いつてことで行つとくか」

ホントに？ 暮は毎日のように打ってるけど、ヒカルと遊びに行くのは凄く久々。

「明日美さん、ヒカルも行くって！」

「あ、はいはい。じゃああかりちゃんと進藤、私に和谷、伊角さんで五人ね。飯島くんは行かないの？」

「ああ、俺はちよつと用事あるし。本田とかは誘ったの？」

「本田くんも師匠のところ顔出すからって」

飯島さんも1組で、プロ試験を受けてた人。賢そうな感じで、海王の大将をしていた人と、少し似てるかな？

フクくんも、遅くなつたら怒られるからって行かないとのこと。残念、幼児向けアニメの主題歌が似合いそうなのに。

カラオケボックスで、みんなワイワイと盛り上がる。明日美さん

と伊角さんは、思った通り結構上手い。和谷くんとヒカルは、うん。下手ではないよ。

みんな思い思いの曲を入れて歌う。

そんな中、予約した曲が途切れて、一瞬、静寂に包まれる。

「誰か入れるー？」

「んー」

明日美さんの声に和谷くんが答えるけど、動く気配はない。

しばらく時間が流れる。気の抜けた顔をしていた和谷くんが、ぽつりとつぶやく。

「また、1年頑張らねーとな」

「俺、今年で院生ラストだから、本当に次受からなきゃ、もう無理な気がする」

元氣よく振る舞っていたけど、内心ではショックが大きかったんだろうな。伊角さんも心底落ち込んだ様子。

明日美さんもちよつと困った様子だったけど、えいっとリモコンを手取る。

「もうっ、暗いの禁止！ 私は今年、全然惜しくもなかったけど、来年までには和谷はもちろん、伊角さんだつて追い抜いてやるんだから！ そのためにも、今日はストレス発散！」

そうだね、後ろを振り返っていてもしょうがない。

「うん。私もヒカルも、まだプロ試験は受けてないけど、絶対に突破してやるって意気込みだけは負けないよ」

気合いを入れるためにデュエット曲を入れて、ヒカルと一緒に歌おうとしたけど、嫌がられた。

しょうがないので明日美さんと歌って、その後も何曲か歌ったところで時間となった。

「じゃあ、火曜日、忘れんなよ」

「誰が忘れるかっ！」

あはは。1日だけど一緒に遊んで、距離は縮まったかな？

みんなと別れて、ヒカルと並んで家に帰る。

「院生研修とか、火曜日に行く研究会？ それもいいけど、俺、囲碁部で打ちたいな」

「……そうだね。明日、三谷くんにも声かけておいて、囲碁部行こう」筒井さんもあまり顔を出してないし、三谷くんは囲碁部ではなく、碁会所に行っているらしい。一人だと面白くないもんね。

前世の印象のせいで、三谷くんが辞めずに頑張るとは思わなかった。でも、よく考えるまでもなく、前世でもずっと碁は打っていたし、碁が好きなのは間違いないもんね。

月曜、昼休みに三谷くんのクラスに行く。部室で打とうと話してい

ると、夏目くんがおずおずと声をかけてきた。そっか、夏目くんは三谷くんと同じクラスだったよね。

「み、三谷くんって囲碁部なの？」

「あん？ ああ、一応な」

「僕、夏休みにちよつと覚えて、まだまだ全然下手なんだけど、見学に行っているかな？」

「そうなんだ！ 夏目くん、ぜひおいでよー」

前世ではヒカルと入れ違っていたけど、その時はこうやって三谷くんのクラスで囲碁部の話とかしなかったもんね。運が良かった。

「ありがとう、ええと……」

「あ、ごめんね。私、藤崎あかり。大会とか出られないし、あまり顔は出せないけど、囲碁部員なんだ」

初対面、というのをうっかり忘れそうになっていた。危ない、気が緩んでいた。

「俺よりこいつの方が強いから、たまに顔出した時に、打ってもらったらいいぜ」

「へえ。でも本当に僕はへっぽだから、足を引っ張っちゃうかなって」

引っ張るも何も、ほぼ三谷くん1人なんだから、人が来てくれるだけで嬉しいはず。

放課後の約束を取り付けて、教室に戻った。

そして、放課後。

約束通り、三谷くんが夏目くんを連れて来た。ヒカルには事情を説明済みで、今日は夏目くんに楽しんでもらう日。

「お前が夏目？ 俺は進藤。よろしくな！」

「よ、よろしく」

「さつきも言ったけど、こいつも大会とかには出ねえから、実質俺とお前、2人だけだな。あと1人いれば団体戦に出られるんだけどな」

今の時期からだとして、新入部員は難しいよね。来年、小池くんが来てくれたらいいんだけど。

ヒカルはバレー部の奴に学生服着てもらったら行けるだろうか
言ってるけど、それって金子さんのことだよな？

懲りないなと思いつつ、一発頭を軽く叩く。そんなこと、二重の意
味でできるわけないじゃないの。ルール違反だし、金子さんにそんな
無茶なこと言ったら、後が怖い。

三谷くんと夏目くんの対局は、当たり前だけど三谷くんが優勢。で
も、私たちと打つ時と違って、無理な攻め方はせず、ゆっくりとした
指導碁。

三谷くんって、こういう碁も打てるのね。もしかしたら相手に合わ
せるのはヒカルより上手いかもしれない。

「ヒカル、次、夏目くんに打ってもらったら？」

「ええ？俺が？」

「むちゃくちゃな打ち方せずに、三谷くんみたいにきちんとした碁を
打つの、多分勉強になるよ」

緩急の付け方とか、そういうのも大事。その後、夏目くんとヒカル
が打っている間に三谷くんと早碁をやったり、私も夏目くんと打って
もらったり。

囲碁の実力アップとは少し違うけど、楽しく充実した時間を過ごし
た。

そして火曜日、ヒカルと一緒に森下先生の研究会の日がやってき
た。

第18手 中学1年生 その12

ヒカルを連れて、棋院で行われる森下先生の研究会に向かう。和谷くんが伝えてくれてるので、直接行っても問題ない。

「はあ、研究会かあ。なんかなあ、プロの人達って怖そうだし、気が乗らねえなあ」

「そんなことないってば。院生じゃなくても若い人もいるし、白川先生もいるよ」

「え、そうなんだ。そういや白川先生もプロか」

うんうん。白川先生なら優しいし、安心できるよね。

「おつ、藤崎に進藤」

「和谷」

和谷くんが迎えに来てくれた。挨拶して、早々に部屋に向かう。挨拶をして部屋に入ると、白川先生が笑顔で出迎えてくれた。森下先生も、囲碁を覚えて1年未満だって言うのと驚いていたし、ヒカルが打倒塔矢アキラって言うのが気に入ったみたい。

「藤崎もそうだし、今度は進藤が1年未満で院生になるとか、白川くんは指導者として素質がありそうだな」

「え!? いえ、私は何もしてませんよ。藤崎さんは最初から囲碁を覚えてここに連れてきただけですし、進藤くんも、最初に2、3回教えただけですし」

私は白川先生の説明好きだけどね。何と言っても優しいし。

雑談はその程度で切り上げて、すぐに検討が始まる。実戦で悪手を打たれた場所、どう打てば上手く立ち回れたかという内容。

ここもいまいち、こつちもまずいと話していると、ヒカルが声を上げた。

「あの、ここは?」

「院生2組が何を言うんだよ」

馬鹿にしていると言うより、森下先生でも良い手が浮かばない盤面。普通に考えて私たちがじゃ思いつかないというだけのつもりなんだろう。

でも、この場合、佐為が騒いだのかなあ。だとしたら、和谷くんの心配は無駄になるね。

「いいよ、言ってみな」

「……」

ヒカルの示した手に、みんな感心している。和谷くんは、びっくりした顔。しようがない、早めに慣れてくれたらいいんだけどな。

夕方になって研究会が解散した後、和谷くんがヒカルに声をかけていた。

「お前、結構やるじゃん。1組に上がった時は、お前とやるの楽しみにしてるぜ」

「早く和谷とやれるように、1組に上がらないとなあ」

ため息まじりのヒカル。実際、2組の人にそう負け越すような実力じゃないと思うんだけど、何だろう。

ヒカルの家に着いたら佐為にも相談してみよう。

「勝てない原因？」

「うん。ヒカルが2組であまり勝てないの、なんでかなあって。こうやって毎日打っていると分かるけど、2組の子よりも強いと思うんだ」

「うーん、なんだろう。……ん？」

ヒカルが斜め上を見ながらふんふんと頷いている。佐為が何か、アドバイスしているのね。

「うーん、佐為が言うには、お前や佐為と打ってるせいであまり踏み込めなくなってるってさ」

「確かにヒカルって、性格に似合わない慎重な碁を打つよね」

乱暴な手がないのは良いことだけど、踏み込みが浅いとも言える。強引な手というか、荒らされる覚悟で荒らしに行ったりもできていない。

私も前世では全然できず、逆行してから打てるようになった。苦手を補おうとすると、かなり大変だけど、ヒカルならきつと、すぐに克服できるよね？

「お前なあ、性格に似合わずって、もつと言い方あるだろ」

「ごめんごめん。じゃあ、その点を意識しながら、打ってみよう。押すべきところで逃げてる手があれば、その都度止めるね」

他に言い方って言われても難しいよ。やっぱり佐為に教えてもらってるから、佐為の碁がヒカルの碁に大きな影響を与えている。それとは違って、私はあまり佐為の影響は受けていない。もちろん読みの深さや全方位を睨む一手など、私もできるようにになりたいし、常に意識しているけどね。

「ヒカル、今、日和ったよね」

「う、でもよ」

「怖がらないで相手の地を全部奪うくらいの気持ちで打とう。そう思えば、緩い手を打ってる暇はないでしょ？ 塔矢くんと打てば、きつと厳しい勝負になるし」

私相手に怖がってちや打てないよ。練習でしか打ってないけど、氣迫に押されて攻め損ねる時があるもん。

そんな話をする、ヒカルも思うところがあるのか、強引な手も打つようになつた。もちろん強気に打てば勝てるのか、そんな簡単な話じゃなく、余計にあっさり潰される。

でも今はそれでいい。どんなタイミングで押して、どんなタイミングで引くか。今まで引くのみだったんだから、押せるようになるのは絶対に必要。

佐為は凄い。言われたら確かにその通りなんだけど、ヒカルに何が足りていないか、佐為のアドバイスがなければ分からなかった。

ヒカルと一緒に佐為に鍛えられるこの時間は、ヒカルや私にとって、何にも替えられない貴重な時間。一秒も無駄にしないつもりで、せいっぱい学ぼう。

一ヶ月ほど経って、院生研修で伊角さんや越智くんと手合わせをする機会があった。研修では勝ったけど、何回か打てば負けることもありそう。本番の一発勝負だと、どうなるか分からない。それくらいの僅かな実力差。

越智くんは分からないけど、伊角さんとは場数が違う。私、大会に出たのって、実は前世での学生時代まで巻き戻らなきゃいけない。

逆行してから森下先生に教えてもらっていたけど、大会には全然出てなかったんだよね。このままだとプロ試験で苦勞するだろうから、何とかしたい。

「確かに、知らない人と打つのも大事よね」

「だよ。明日美さんは、碁会所にはよく行くの？」

「たまにかな。ちよつと打ちたくなつた時とか、ふらつと入つてみることはあるよ」

「凄い。私は怖くて、塔矢先生の碁会所とかの行き慣れたところ以外、全然行けないよ。」

「ふうん。じゃあ、私と一緒にどこか行つてみる？」

「えっ。どうしようかな。ヒカルも、あまり碁会所つて行つたことないよね？」

「お、俺が打つてるんじゃないかって、人が打つてるのを見てたことはあるけど……」

三谷くんが打つてたもんね。でも、ヒカルも何回か打つてたと思うけど……。

そっか、佐為が打つたのも数に入れてないんだ。純粹にヒカルがまともに打つたのは、確かになかった気がする。

「なんだ、進藤も碁会所に行つてないのか。伊角さん、冬休みつて忙しい？」

「どんどんと話が進む。気がついたら、明日美さんたちと一緒に、適当に碁会所をめぐろうという話になった。」

大丈夫かなあ。変なことに巻き込まれなきゃいいけど。

そして冬休み。院生研修が終わつた後、5人で碁会所へと向かつた。

「5人だと、全員は打てなそうね」

「かもなあ。多いところだと行けるだろうけど」

「ここでいいな、広そうだし」

伊角さんが、目に付いた碁会所へと足を向ける。囲碁サロン道玄坂。中に入ると、10人以上が打っている。おー、結構多い。

日曜だからか、おじいちゃんだけじゃなく、若い人もいる。怖そうなおおじさんも、少し。

「5人？ 場所を使うだけかな？」

「いえ、この人たちと打ちたいんですけど」

「そうかい。じゃあ、空いてる人は……」

お店の受付にいた女性が、店内を見回してるけど、和谷くんがまた何か思いついたって顔してる。嫌な予感しかしない。

「俺たち、ここにいる中で1番強い人たちと打ちたいんですけど」

もう、また変なこと言い出した。明日美さんをチラッと見ると、呆れた顔になってる。店の人も生意気だっけ言ってるし。ほんとごめんなさい。

「和谷くん、何言ってるの」

「団体戦って面白そうじゃねえ？」

「団体戦?! 楽しそう!」

ヒカルが乗っかかった。そうよね。ヒカルは部活でも団体戦楽しんでたもんね。

「じゃあ、誰が大将？ 私とヒカル慣れてないんだけど」

「私も団体戦やったことないなあ」

「だいたい強い順でいいんじゃないの？ 慣れてないってんなら、大将は伊角さん、副将が藤崎。俺が三将で奈瀬が四将、そして進藤が五将だな」

妥当なところかな？ 前世以来の団体戦。凄く楽しみ。わくわくしてきた。

「ふふ、団体戦、楽しそうじゃないか。私も入ろう。君たちが勝ったら、お金はいらないよ」

「やったあ」

「負けたら店にある碁石を全部洗うんだよ。それに、お金も当然払ってね」

お店のマスターっぽい人が出てきて、楽しそうに混ざってきた。そ

れはいいけど、たぶん奥さんだよ、店番していた女性がかなり怒ってる。

そもそもお金いらないうのはマスターが言ったんだし、負けたらお金払うのは当然として、なんで碁石洗わなきゃいけないの？

「はいー」

和谷くん元気に返事しちゃって。もー。

勝てば良いじゃんって簡単に言うけど、このお店にいくつ碁笥があるか分かってるのかな。

「進藤は負けるにしても、俺ら4人で3人が勝てばいいんだし、行けるだろ」

「なんで俺が負けるって決めつけるんだよー」

「だって、明らかにお前が一番弱いじゃん」

ぎやあぎやあと騒がしく言い合ってる。どうしようかな。

「騒がしくてごめんなさい。あ、5人揃いました？　じゃあ、お願いします」

さらっと騒がしいのを流しつつ、明日美さんが準備を進める。院生研修とかでも、騒がしいのに慣れてるんだろうなあ。

大将から順に椅子に座る。マスターが大将の席に座り、曾我さんという髪がないおじいちゃんが私の相手。当たり前のように煙草を吸い始める。ちよつと煙たいけど、しようがない。

「俺と和谷と進藤が黒、藤崎と奈瀬が白だな」

伊角さんがニギって、手番が決まる。相手も団体戦のニギリは知らない人がいた。個人戦は出ていても、団体戦は興味ないって人もいるよね。

「お願いします」

打ってみると、私の相手は結構強い。院生1組にも遜色ないくらい。負けたら大変なことになるし、気を抜くわけにはいかないの、きちんと打つ。対局時計を置くわけでもないけど、あまり時間をかけすぎるのは良くない。布石の段階ではともかく、進むにつれて相手の悩む時間が増える。そうすると、相手が悩んでいる間にこちらも考えられるから、ますます打つまでの時間が短縮できる。

「負けました。くそつ、強いな。お前ら何者だ？」

「ありがとうございました。私たち、院生なんです。私と、五将の子があまり碁会所とかも慣れてないって話になって。じゃあ打ちに行こうかって」

「院生だ?!？」

ざわり、と周りが騒がしくなる。まあ、院生がまとまって碁会所に行くとか、珍しいかもしれない。

河合さんは来てないか、とか言ってるけど、誰だろう、強い人かな。周りの様子を見ると、和谷くんは終局していて、和谷くんの勝ちっぽい。伊角さんも終わりが見えている。明日美さんとヒカルの碁盤までは見にくいから、前に座っている曾我さんに断って席を立つ。

「みんな勝ちそうだな」

「うん。ヒカルもなんとか勝てそうで良かった」

「……過保護」

和谷くんが茶化すので軽く睨むと、肩をすくめられた。

うーん、ヒカルの保護者をやってるつもりはないけど、そう見えるのかな。つてことは、ヒカルにもウザがられてるかも!? やだ、どうしよう。

「あかりちゃん、何を百面相してるの?」

「明日美さん。いやその、別に……」

「お、あかりも勝ったのか?へへん、俺も勝ったぜ!」

私の心配をよそに、ヒカルが嬉しそうにガッツポーズをする。良かった、大丈夫そう。でも確かに過干渉になってしまおうと嫌がられるだろうから、気をつけておかないと。

「よし、じゃあ次は本番、おじさん達が2子を置いて勝負!」

「2子だと?」

「碁会所で打つの初めてって奴がいて、ちよつと互先で慣れさせたんです」

2子だと、守られるとそれで負けるから、相手の地を奪いにいかないと勝てない。

私もだけど、それ以上にヒカルは攻めるのが苦手なので、荒らしに

慣れるためにも置き石は良さそう。和谷くん、そこまで考えてくれるのかな？

今度は置き碁なので全員白石。

当然、さつきとは全然違う展開になる。序盤からのんびりしてられないので、左辺と左上スミとの分断を狙って急戦を仕掛ける。

「むむ」

曾我さんはいきなりツケたのを警戒して、若干長考している。さつきは緩い手が多かっただけに、応手に悩んでいるんだろう。

ここでツケると、今後の展開が複雑で、私にミスがあると一気に崩れる。でも、ミスせず打てれば、相手の左上スミの黒が死んで、置き石分どころじゃなく形勢が傾く。

しばらく左上スミの攻防をやりつつ、こつそり左下に対しての有効手も散らしておく。佐為なら右辺にも影響力のある手を打てるかもしれないけど、なかなかそこまでは思いつけない。

佐為ほどじゃないけど、曾我さんも気付かない手を打てるし、悪くないと思う。

「くそっ、こつちもか」

舌打ち混じりに、曾我さんが左下の状態に気付く。左上は完全に分断できなかつたけど、置き石分くらいは減らせた。そして左下の攻防が不利になってるのに気付かなかつたせいで、形勢ははっきりと私が有利になった。

「ありません」

よかつた、曾我さんは本当にかなり強い。この盤面で、状況判断も的確だし。

周りを見ると、今回は私が遅い方だったみたいで、和谷くんも明日美さんも終わっていた。

「……sai」

え、和谷くん、今なんて？

「お前の碁、少しだけsaiに似てる気が……」

「そう？ 私としては、秀策の碁を参考にしてる部分も多いかなって

思うんだけど」

「ああ、秀策か。言われてみれば確かに……」

誤魔化したかな？ ヒカルの様子を見ると、まだ対局中でこちらのやりとりに気付いた様子はない。

「和谷、saiって？」

「知らねえの？ ネット碁の強いやつ。夏はしょっちゅう打っててさ。最近は週に1度見るかどうか。俺の知る限り負け無しで、一柳棋聖にも勝ったんだぜ」

「へえ。それは凄いな。で、あかりちゃんが似てるって？」

「そんな気がしただけ」

私の碁盤を眺めて、ふーんと明日美さんがつぶやく。

「先々週に進藤と打ったけど、進藤も少し似てるどころあるかな？」

「そうかも。ずっと一緒に打ってるから。私は森下先生の影響が強いけどね」

そういえば、森下先生も顔に似合わず、力押しをあまりしない技巧派よね。塔矢くんは甘い顔しつつ力碁を得意としているし、棋風って面白い。

「お、進藤も勝ったか」

明日美さんもヒカルも勝って、私たちの全勝。ふう、良かった。

「じゃあ次は本番、3子でやりましょう」

え、和谷くん何言ってるの？

「和谷！ 3子は厳しい。この人たちをなめてないか？ この人達はしつかり——」

「なめてなんかいいよ！ 俺たちは院生だぜ！ これをかわしていくくらいの勢いがなければ、来年のプロ試験を受からねーぜ！」

「そーだな、碁会所のおじさんくらい、3子でやつつけられなきやない！」

もう、また二人して！

「てめっ、このやろー！ なめきってケツかるー！」

周りにいたおじさんの1人が、ヒカルの頭をぐしゃぐしゃとかき混ぜると、鼻をギョツとつまむ。

酷いけど、和谷くんとヒカルの発言も大概酷いので、おあいこだね。

「和谷くん、ヒカル、意気込みはいいけど、他の人を馬鹿にするような言動は駄目よ。それに和谷くん。勢いだけじゃ意味ないよ。ちゃんと、実力で勝たないと」

曾我さんに3子。はつきり言って相当厳しいけど、楽しみなのも確か。自分の実力がどの程度か、腕試しとしてはちようどいいのも確か。

ヒカルの相手が変わって、他はそのままです子での勝負が始まった。

第19手 中学1年生 その13

3子で始まった勝負。曾我さんは置き石分のリードを守ろうとした手が多い。それに対して、私はどんどん攻めていかなきゃいけない。

普段なら打たないような手を打ち、一見すると荒れた碁になった。でも先を読んで、無理そうだと思った攻め方はしていない。相手のミスを待つ打ち方ではなく、上手く打ったら勝てそうな展開にしたい。

結果、曾我さんに読み合いで勝って、なんとか勝利をもぎ取った。疲れたー。

「嬢ちゃん、若えのに大したもんだ」

「ありがとうございます。えっと、曾我さんも強かったので、凄く楽しかったです」

周りから、儂もあの子と打ちたいとか聞こえてきたけど、大丈夫かな。孫の感覚で見られる分にはいいんだけど、犯罪の気配が漂うような人とは、ちょっと関わりたくない。

それはそうと、打っていて感じたことだけど、思ったより状況に左右されず打っている気がする。普段と違う場所で、普段と全然違う相手だったのに。どうしてだろう、つて考えたらそれらしい理由が思いついた。

普段、ヒカルの家で打っているのが、私にとって一番であり、特別なんだ。そこより緊張する場所なんて、今の私にとって、あまりない。それが良い方に働いているなら、良いことだと思っておこう。プロ試験の時とか、先々は分からないけどね。

周りを見ると、伊角さんは有利に進めている。明日美さんが互角で、和谷くんとはちよつと形勢が悪い。ヒカルは……思ったより頑張ってるけど、ちよつと相手に上手く打たれてる。

うわあ、3人とも負けたら、碁石洗い？ 頑張れー、と内心で応援しながら3人の碁を見ていると、伊角さんも終わった。

「どう？」

「明日美さんが勝てるかどうか。和谷さんとヒカルはちよつと厳しう」

言いながらも目は離さない。あ、ヒカルの中央に打った石、後々生ければ逆転の目が出るかな？

「終局だね」

「ちえ。途中、勝てると思ったんだけどな」

和谷くんが負けた。悔しそうだけど、ちよつと無茶な手が目立ってたから、しょうがないよね。

一方で、明日美さんは勝利を収めた。

「あかりちゃん、勝ったよ！」

「うん、見た。明日美さんで3勝だよ。ありがとう！」

「結構上手く打てたと思うんだけど、どうだった？」

明日美さんに良かったところと、気になったところを答える。ついでに、和谷くんも検討をしていたので、お互いの良かったところにも少し口を挟む。

明日美さんは、少し前まで勝負どころで緩い手を打つちやう時があったけど、最近明らかに減ってきた。塔矢先生のところでは検討をしていると、1局のうち1番大事な局面について話すことが多い。そういうのも影響して、緩んじやいけないという意識が高まっているのかもしれない。

もちろん、なんでも頭をぶつけて戦えばいいわけじゃないし、抜くところは抜かなきゃ駄目だけど、そのあたりは明日美さんも把握している。

「あ……」

伊角さんがヒカルの打った手に驚きの声を漏らす。ああ、さっきの中央の石が生きて、関係なさそうだった左辺で有利になった。これで10目以上稼げたから、後はミスなく打ち切れば、ヒカルの勝ちね。

全員の対局が終わり、扉の外にある自販機エリアで、一息。

「あんなこと言っちゃってた和谷くんだけ負けだね」

「うっせー。相手のおっちゃん、結構強かったぜ」

和谷くんが言い訳する一方で、ヒカルが相手のおじさんと意気投合して、また打とうって約束している。碁会所もいいけど、明日は森下先生の研究会だよ。忘れないでよ。

夜になつていたので、早々に解散して家路につく。

「佐為がさ、今日俺が打った手に気付いてたのは、お前だけだったつてよ。慣れてるのもあるけど、やっぱり伊角さんとかよりあかりの方が強いよなあ」

「うーん、そうなるのかな。勝負の場では分からないけど」

「そこなんだよな。お前、なんで強かったのに大会とか出てなかったんだ？」

ヒカルがいなかったからだよ。とは言えないし、どう言えればいいかな。

「強くなりたいていというのはあったけど、子ども囲碁大会とかは興味なかったの。勝つてもいたたまれないし、負けたらへこむし」
「いたたまれない？」

あ。そうよね、おかしいよね。えっと。あはは、どう言いつくろうかな。

「えーっと。私って昔から森下先生に教えてもらってるから。土台が違うのに、負けるわけにはいかないじゃない」

「ふーん。そんなもんかな」

「そんなもんなの」

ごまかせたようで、何より。もしかしたら佐為は何か気付いてるかもしれないけど、そこは気にしてもしょうがない。

「俺の今の目標は、塔矢も当然なんだけど、あかりに勝つことなんだけ」

そのためには、碁会所にも足を運ぶし、ネット碁でも鍛えるつて。

その言葉に、私の足が止まった。

「ん、あかり？」

「私も」

そうだ。私にはライバルがないなーって思っていたのは間違い

なんだ。元々、ヒカルと塔矢くんを、羨ましく横から見たかったわけじゃない。

「私も、ヒカルに負けたくない。それに塔矢くんにも追いつきたいし、2人と一緒に、いつかタイトル争いしたい」

塔矢くんとヒカル。2人がライバル同士というだけではなく、私もそこに入っていきたい。なんとなく燻っていた心のもやもやが、一気に晴れたような気分。

「過去に女性でタイトルホルダーどころか、挑戦者になった人もいないのに、何言ってるんだって話なんだけどね」

「なんだ、そんなこと。過去にいないってんなら、あかりが初のタイトルホルダーになっちゃえばいいじゃん。そんな話になったら、幽霊から囲碁を学んで院生になる奴なんぞ、いるわけねーじゃん」

ふふふ。なにそれ。ヒカルにしては気の利いた返しに、笑顔を向ける。

「うん。確かにそれはいないね。ヒカル、一緒にプロになって、ずっと一緒にタイトル争いしよう」

「おう。楽しそうだな」

遅くなっていたので、ヒカルの家での勉強会はなし。家に帰って、ご飯を食べてお風呂に入る。

今日は、本当にびっくりした。こんな日常の何気ない一日の中に、とても大きく心に響くことがあるなんて。

ヒカルと一生一緒に碁を打つ……。いいな、そうになりたい……。

「あかりー、お風呂長いけど大丈夫？」

「だ、大丈夫！ もう出るー」

おっと、あぶない。気持ちいいからって湯船で考え事していると、のぼせちゃう。

部屋着を着て、自室でその他ファイルに今日の棋譜を追加だけしてベッドに横になった。

「何だか感じが変わった？」

「そう?」

塔矢先生の家での研究会、お昼に近くにあつたおそば屋さんで注文したメニューを待っている時、明日美さんからそう言われた。

同じ席には塔矢くんもいて、子ども3人でおそば屋さんって渋いなあと思っていた時だった。おそばは好きだから、大歓迎なんだけどね。

「塔矢くんもそう思わない?」

「そうだね。何というか、藤崎さんと打った時、普段より勝つぞという気迫を感じた気がする」

「そ、そうかな」

きつとヒカルとのタイトル争いしようという約束が、その理由だろう。

「これは、何か良いことがあつたようね。何かな、お姉さんに言ってもららん。……進藤関係よね?」

「……明日美さん、顔」

お姉さんぶってるけど、顔はにやけていて面白がつてるよ。そして塔矢くんには聞こえないように耳元でささやいてきたけど、なんで分かつたんだろう。勘が良すぎじゃないかな。

「おっと、失礼。で?」

「明日美さんの思ってることは違うと思うよ。先週の碁会場の後、ヒカルと一緒にタイトル争いしようって言ったんだ」

「……確かに、思ってたのとは、ちよつと違う」

「進藤と? なぜ?」

おっと、塔矢くんが食いついた。そうだよ。塔矢くんはヒカルしか目に入ってない。これまでは気にしてなかったけど、今は少し違う。私の方にも目を向けさせたい。うぬぼれかもしれないけど、今、同年代で一番塔矢くんに近いのは私のはず。

やり直している私はずるいとは思う。でも、それは考えてもしようがないし、気にしないって決めている。

「ヒカルの目標が、塔矢くんに追いつくことだけじゃなくて、私に勝つことだって。それなら、私も負けないように頑張らなきゃ行けない

なって思ったの。だから、そのためにタイトル争いできるくらい強くなりたいたい」

へーって言いながら水を飲んでいた明日美さんが、水を嘔きだしかける。危ない、嘔いてたら塔矢くんが大変なことになってたよ。

塔矢くんも目を丸くしてる。何かおかしいのかな？

「あかりちゃんがタイトル争いっていうのは前にも言ってたけど、進藤が追いかけるからタイトル争いっていう意味がわかんないよ」

「藤崎さんは、進藤がタイトル争いするって思ってるの？」

「思ってるよ。塔矢くんは違うの？」

私の質問には答えず、何やら考え込む。そのまま黙っちゃったので、明日美さんと顔を見合わせ、お互い苦笑する。

「考え込んだら周りが見えなくなるね」

「うん。私は塔矢くんともあかりちゃんとも違って、気になるお相手っていうのがいないから、ちよつと羨ましい。あかりちゃんと塔矢くん、全然意味が違うけど……」

明日美さんは塔矢くんと私を同じ扱いにしてくる。

どう反論しようか考えていると、注文した料理が運ばれてきた。そこでようやく塔矢くんも意識がこちらに戻ってきて、雑談に興じる。

「もし2人が気にするほど進藤が強くなるなら、来年のプロ試験は厳しそうね。あかりちゃんに進藤、伊角さんに和谷、最近上がってきた越智も強いし」

「明日美さんも強くなってるし、プロ試験の頃には立場は逆転してるかもしれないよ」

明日美さんがプロだったかどうかは全然覚えてないけど、院生1組でやっていけるんだから、遠くないうちにプロになるんじゃないかな。

それにプロ試験って30才まで受けられるよね。だから、諦めていなければ、前世の時もプロになっていたと思う。明日美さんならイベントでも引っ張りだころうし。

「いやいや。あかりちゃんに追いつくの、ちよつとやさつとじやないから。それに理由はともかく、あかりちゃんも気合い入れて頑張るん

だよ。ますます追いつくの大変になるよ」

「そうだね。気を抜いたら僕も藤崎さんに抜かれちゃうな」

塔矢くんを追いつくのは、それこそちょっとやそつとでは無理だけど、私も院生1位になれたんだし、思ってるより実力が付いている。

まだ半年以上時間はあるし、苦手な戦い方を減らしてしつかり地力を付けていこう。

「私、早碁や力碁が苦手なの。でもプロ試験を突破して、プロとしてやっていくには苦手なんて言ってられない。なんとか克服しないとね」

「なるほどねえ。早碁って言えば、院生だとフクが一番得意かな？」

あと、進藤もフクと打つと異様に早く終わるよね。しかも進藤結構勝ってるし、早碁得意なんじゃないの？」

「進藤、早碁得意なのか」

意外そうにつぶやく塔矢くん。そうなのよね、ヒカルは早碁が得意なんだよね。

そして、乱戦になつても読みの深さは維持しつつ荒らしも意外と得意な塔矢くんは、力碁が得意と言ってもおかしくない。

2人に追いつきたいって言いつつ、苦手な棋風がその2人っておかしいな。ヒカルは早碁が棋風ってわけじゃないか、得意ってだけで。先週の碁会所のように、腰を据えた一局でも、ヒカルの強さはしつかり出ている。

「そうね、ヒカルは早碁も得意ね。塔矢くんは苦手？」

「いや。苦手じゃないよ。研究会じゃない日とかに、緒方さんや芦原さんともよく打つし」

「そっかあ。私もヒカルと打つようにしよう」

佐為と早碁で打てたらいいんだけど、ヒカルを介している分、どうしてもテンポが遅れる。本当、私にも佐為が見えて声が聞こえたらいいのに。

「早碁？」

夕方、ヒカルの家での勉強会。さっそく早碁を打ってほしいと切り

出してみた。

「うん。今日明日美さんや塔矢くんと話していた時に話題が上がったの。というか私が苦手って話をしていたら、フクくんやヒカルが得意だって明日美さんが言ってるね」

「ああ、フクとは打ちやすいな、打ってて楽しいし」

「だから私とも1手10秒の早碁で打ってもらえないかな？」

「おう、いいぜ。確かに早碁だとお前に時々勝てるもんな」

ヒカルが引き受けてくれて、早碁を何度も打つ。勝率は私の方がいいけど、やっぱり他に比べると格段に下がる。

というより、私の碁が早碁だと荒れるのに、ヒカルは安定して打っている。私が早く考えるのが苦手というのもあるけど、それにしただってヒカルの安定度は凄い。センスというか、状況を瞬時に読み取る力が凄いらるうな。

私はちよつと時間をかけて、全体を見つつ打つ方が楽しい。だから1組で時間が多いのは打ちやすい。多分、持ち時間半分だと伊角さんや越智くんにもあまり勝てないんじゃないかな。

「ヒカル、佐為とは早碁を打ってるの？」

「佐為と？ 打たねえよ。石並べるの両方俺なんだぜ。めんどくさくてやっつけられねえよ」

「あ、そっか。佐為と早碁打ってみたいなって思ってたけど、ヒカルも厳しいんじゃないかね」

私が言っちゃったせいで、佐為も打ちたがったみたい。ヒカルと一緒に良い案はないか考えるも、なかなか出てこない。

軽い気持ちで言っちゃったけど、早碁はヒカルと打って、佐為には読みや一手の深さを教えてもらう方が嬉しい。

「うーん。やっぱりゆっくり打つと落ち着いて考えられるけど、早碁だと布石はまだしも、序盤を越えたら相手の手を読むのなかなか厳しいよ」

「ん？ 早碁だと俺だって相手の手を読むとかできてないぞ。どっちかという直感というか、なんとなくここが薄いとか、そういうので打ってる」

「分かってるんだけどね。例えば一場面を見て、生き死にを見極めるとかならまだしも、それが続くと難しい」

「そうだなあ、俺の場合は……」

いつもと逆で、ヒカルに教えてもらいながらなんとか早碁のコツを掴もうと努力する。一朝一夕でできるものじゃないから、時間はかかるけど、ヒカルから良いところを学ばなきゃ。

卒業式まで大きなイベントもないし、しばらくはヒカルと打ったり、研究会に行く日々。

ん？ イベント？

……囲碁のイベントは何もないけど、そういえば2月にバレンタインがあった。院生研修のメンバーって、何かあげた方がいいのかな。後で明日美さんに聞いておこう。

去年までは小学生だし、あまり大仰に考えてなかったけど、今年は中学生、周りもそれなりに色気づく時期。それに、院生研修だと年上の子もいるし。明日美さんは大丈夫だと思うけど、他にもヒカルに近づこうとする人がいないとも限らない。お金は厳しいけど、いつもよりの手の込んだプレゼントを用意しなくちゃ！

第20手 中学1年生 その14

バレンタインデー。言わずと知れたチョコレートを贈って告白する日。

事前に明日美さんに電話で聞いてみたところ、個人で渡すとかは別として、院生で義理チョコを配る習慣はないらしい。せいぜい女子一同で篠田先生に渡すくらい。院生メンバーで考えたら女の子に対して男の子が多いし、負担もそこそこ大きくなるもんね。

そんな話をしたんだから、その流れでヒカルに渡すかどうか、という話になるのは当然。そこはもう、明日美さん相手に誤魔化してもしょうがないし、そもそも今さら誤魔化す気はない。

「進藤に渡すんでしょ?」

「うん。今年は中学に入ったし、少し豪華に行こうかなーって思ってるの。明日美さんは、誰かに渡す予定ある?」

「ん、今のところないかな」

そっか、残念。いつも遊ばれているから、たまにはやり返したかったんだけど。

ああ、そういえば塔矢先生の研究会に持って行く分、どうしよう? 「そうね、別々に用意してお互い気を使うのも嫌だし、半分ずつ出して、去年のより少しだけ豪華にしようか」

「うん、それだと助かる。個別に渡したりは、無くていいの?」

「無くていいよ。今は私も塔矢くんも、囲碁の勉強だけで手がいっぱい、それぞれどころじゃないから」

ちよつと最近、明日美さんの目線が気になっていたからかまをかけただけだね。

明日美さん、私は誰とも言っていないよ。

茶化すつもりは無いので、今はつつこまない。悪い方向に行くようなら見てられないけど、現状は黙って見るのが1番ね。

「じゃあ近いうちに一緒に買いに行こう。他の分も買っておかないと」

「あれ、進藤には手作りじゃないの?」

「ヒカルの分は、森下先生の娘さんのしげ子ちゃんと一緒に作ろうって約束してるの。私はヒカルに、しげ子ちゃんは和谷くんに」

「和谷に？」

「あつ！ ごめんなさい、聞かなかったことに……」

「しようがない、和谷をからかうのはともかく、しげ子ちゃん？ その子の迷惑になるとまずいもんね」

あああ、うつかりしてた。明日美さんにはヒカルに惚れているのがバレてるせいで、つい口が滑るんだよね。

クスクスと笑いながら、明日美さんが了承してくれる。

私の失敗でしげ子ちゃんの恋路の邪魔になったら大変。明日美さんは見逃してくれたけど、気をつけなきゃ。

しげ子ちゃんと相談した結果、トリュフを作ろうという話になった。

そこそこお手軽で口当たりもなめらかで食べやすく、もちろん美味しい。

バレンタインの前日、私は森下先生のご実家にやってきた。当然森下先生も和谷くんもおらず、いるのはしげ子ちゃんと、しげ子ちゃんのお母さん。

「お家までお邪魔しちゃってすみません」

「いいのよ。しげ子の面倒を見させちゃってごめんなさいね。この子、ワガママだから大変でしょう」

「いえいえ、そんな。いつも楽しくおしゃべりさせてもらって、助かってます」

「ふふーん。私もちゃんと相手を見て言葉を選んでるんだよ」

しげ子ちゃんの言葉に、しげ子ちゃんのお母さんと顔を見合わせて笑う。だから和谷くんには遠慮がないんだね。冴木さんにも結構な物言いだった気はするけど。

そして試しに作ると、無難に美味しく完成した。うん、基本はこれで良さそう。

しげ子ちゃんと相談して、余った材料を小分けにして色々と混ぜつ

つ味を変えてみた。

バナラクリームを入れると、口当たりは柔らかくなるけど、少し甘すぎる。私はいいけど、ヒカルには合わないかも？

ナッツを入れてみたり、オレンジのエキスを入れてみたり。

合うのもあれば合わないのもあって、しげ子ちゃんのお母さん曰く、普通なのが一番ね、だって。

うん、途中からそんな気がしてた。私の好みでいいなら、いくらでも調整できるけど、この場にはないヒカルの好みに合わせるのは難しい。そして、失敗したくないという前提がある以上、無難に何も混ぜないのが一番。

分かっているけど、少し手を加えたいという気持ちもあるんだよね。

結局、普通のを基本に、少しだけヒカルが好きな果物を混ぜた味を足しておく。全部同じ味だと、飽きちゃうから。

「長々とお邪魔しました。しげ子ちゃん、頑張ろうね」

「うん。頑張るっていうか、渡すだけ。和谷くん絶対喜ぶよ」

「そうだね。喜ぶと思う」

「お返しはケーキがいいなあ。あかりお姉ちゃんも、進藤くんって人に渡すんでしょ？ 頑張ってるね！」

「ふふふ、ありがとう。じゃあまた」

お礼を言っつて、手を振って家路につく。しかし、チョコのお礼にケーキかあ。しげ子ちゃんしっかりしてるというか、何というか。微笑ましいんだけどね。

ヒカルの分はともかく、余った分はどうしようかな。お父さんの分、市販のチョコ買ってなかったし、お父さんに渡せばいいか。

「ヒカル、これ」

「チョコ？」

「うん。バレンタインだから。あと、こっちは佐為に。と言ってもチョコは食べられないだろうから、最近の名勝負を集めた棋譜の本。ヒカルの勉強にもなると思うよ」

学校が終わった後、いつも通りヒカルの家で打つ前に、頑張っ

ラッピングしたチョコと本を渡す。

「どうだろう、気に入ってくれるかな。」

「ふーん。別にいいのに。……うっせー！ まあ、ありがとな」

「あー。佐為に言われてお礼言っただけね。ヒカルにそのあたりを求めても、しょうがないか。」

「分かっていたことだし、落ち込んでる暇はない。」

「今月から1組だし、そのお祝いも兼ねて。この調子で順位を上げれば、若獅子戦にも出られそうよね」

「若獅子戦？」

「あれ、知らなかったっけ。院生の16位までと、若手プロが出られる大会。一応賞金も出るんだよ」

「へえー。って、もしかしたらそれって塔矢も出るの？」

「うん、塔矢くんも当然出るよ。4月にプロになって、初めての大きな大会なんじゃないかな。普通は院生時代に出ることが多いけど、塔矢くんは院生じゃなかったから」

「初だけど、塔矢くんなら優勝しそうね。逆に言えば、塔矢くんに勝てればそこそこいいところに行けるかもしれない。」

「プロと打つ機会は少ないし、プロ試験前の良い経験になるよ。出られるように頑張ろう」

「おう。塔矢と打つまで勝ちたいな」

「16位以内に入らないといけないけどね」

「返事がない、心ここにあらずね。いいけどね、もう。」

「さて、今日はヒカルと佐為が打つ日。」

ヒカルが佐為の場所を言って、代わりに私が打つ。そうすると、佐為の考えが少し分かるような気がするの。最近は特に手加減なしでヒカルと打つから、結構早い段階で終わっちゃうんだけど、それでも一手一手、考えさせられることが多く、凄く楽しい。

「ふいー、疲れた。ああ、もらったチョコ食っていいよな？」

「う、うん」

目の前で開けてもらえるとは思ってなかったから、ちよつと嬉しい。どうかな、美味しいかな。

箱を開けて、チョコをひとくち。自室で碁を打ちながら食べると思ったから、ちゃんと楊枝も付けている。

「ん。美味しい。これ、どこのメーカー？」

「もー。手作りだよ。湯せんする前のチョコのメーカーはあるけど……」

「じゃあ無いのか。あかり、また作ってよ。頭使うと、時々甘いもん欲しくなるし」

ちよつと疲れたような顔のヒカル。佐為と打てば疲れるっていうのは、よく分かる。

そんなことより、思った以上に好感触。やばい、顔がにやけちゃう。

「うん。また作るね。……そうだ、院生順位が上がると作ってあげる」
「なんだよ、それ」

人差し指をピンと立てて、顔を引き締めつつ。惚れているのが伝わるのは構わないけど、うざったく思われると良くない。引き際は見極めて、慎重に。

「ご褒美がある方が、やる気出ない？」

「やる気で順位が上がるなら、いくらでもやる気はあるけどよ。あーもー、伊角さんにも越智にも勝てねえんだよなあ」

まあ、その2人は院生でトップクラスだからね。なんとか2人を抑えて1位を確保できてるけど、何かの拍子に落ちてもおかしくない。

とはいえ、伊角さんや越智くんも勉強はしてるはずだけど、きつと勉強の濃さでは負けてないはず。

塔矢先生や森下先生の研究会は当然、こうやってヒカルの家での勉強が凄く実力が伸びている実感がある。

佐為に教えてもらえるだけでなく、佐為の代わりに打つことで、佐為の打ち方を意識しないわけがない。佐為ならどうするか。それを考えるだけで、19路盤が狭く見える時もあるから不思議。

「ヒカル、良い手が思いつかない時って、どうしてる？」

「んー。どうもこうも、どこか打つしかねえだろ」

「私はね。佐為ならどうするか、森下先生ならどうするかって考

えながら打つの。特に最近、佐為の代わりに打つようになって、ヒカル相手にも加減せず打ってるでしょ。だから佐為なら、って」

「ふーん。佐為ならどこにうつか、ねえ」

「四方をにらんだ一手、いわゆる耳赤の一手とかもだけど。先を見越した一手を打つのも凄いし、その場で思いもよらない、だけど打たれたらそこが最善だって即座に分かる一手。読みの深さは、他の追隨を許さないものだと思う。……塔矢先生を除けば」

「耳赤の一手って何？」

「知らない？ 本因坊秀策が打った一手なんだけど」

私の言葉に、佐為が何らかの反応があったんだろう、ふんふんと話を聞いている。

「今教えてもらったけど、そんなにすげえの？」

「並べてみようか。佐為がそのまま黒、私が白を打つね」

言いながら、覚えていた棋譜を並べる。当時の緊張感はないだろうけど、同じ人が打っていると思うと、凄いよね。

そして、佐為の一手。

「どう？」

「確かに、上下左右、八方をにらんだすげえ手だな」

「そうよね。続きも打とうか」

一通り打ち終えて、少し補足する。佐為がいるから、もし気になったところがあれば、直接聞けるだろう。

「そんなわけで、佐為は凄いんだよ」

「……お前が褒めまくるから、佐為が気持ちわりいことになってるぞ。んで、塔矢のオヤジは、佐為より凄いのか？」

「うーん。そこは分からない。2人とも、私のレベルとは違うから推し量れないもん」

あえて言うなら佐為の凄さは塔矢先生よりも上の気がするけど、間違はなく上だと言って言えるほど、塔矢先生は浅くない。

「じゃあちよっと佐為ならどうするか、ってのも踏まえて1回打つか。あかり、相手しろよ」

「時間は……うん、大丈夫だね」

早めに終わったから、まだ打つ時間はありそう。ヒカルと打つのはいつだって大歓迎。

ヒカルが2月の後半そこそこ勝ち星をあげて、3月は16位には届かないものの、見事に順位を上げた。そして、明日美さんも少しずつ順位を上げていて、10位前後を確保している。

この調子で上がって8位以内に入れたら、めでたく予選免除なんだよね。2人とも頑張ってるし、3人で揃って8位以内に入れたらいいな。

「あかり、置いてくぞ」

「あ、ヒカル待ってよ。すぐ行くから」

今日は葉瀬中の卒業式。筒井さんと加賀さんが卒業する。2人も同じ高校に行くらしいし、なんだかんだで仲が良いよね。

前世ほどお世話にならなかったとはいえ、私もヒカルも囲碁部に在籍してるし、ヒカルは三谷さんと険悪にもなっていない。

三谷くんは面倒だと言っていたけど、なんとか引張ってきて、部員全員で記念写真を撮った。筒井さん、三谷くんと夏目くん。そして、私とヒカル。

きっかけが掴めず、金子さんと久美子が入っていないけど、私は大会に出られないし、しようがない。

中学2年になって一ヶ月後には、若獅子戦のメンバーが決まって、5月後半に開催される。

それが終わったら、プロ試験予選を経て本戦が始まる。ヒカルもだけど、私も大きな大会に出たことがない。

プロ試験の前にある最大の腕試し。

プロを相手に、勝てるという自信があるわけじゃないけど、胸を借りるつもりで、そして何より場に慣れるつもりで頑張ろう。

「あかり、若獅子戦はお前や塔矢と当たるまで勝つから、お前も負けんなよー！」

「うん、約束はできないけど、頑張るね」

「なんだよ、頼りねえな」

「相手はプロだからね。勝つのは簡単じゃないよ」

とはいえ、あっさり引くつもりは、当然ない。1つでも多く勝って、ヒカルや塔矢くんと対戦したい。

楽しみではない。プロ試験も、熱い戦いが繰り広げられるはず。

今は塔矢くんに先を行かれてるけど、ヒカルと一緒に、全力で追いかけてよう。

「なんだよ。やる前から諦めてんのか？」

「まさか。簡単じゃないけど、無理とは言わないよ。一緒に勝って、対局しよう」

若獅子戦で勝ちたい理由が、また1つ増えた。

ヒカルと一緒に、同じ目標に向けて頑張れる。よし、やる気出てきた！

第21手 中学2年生 その1

4月。塔矢くんがプロ入りして、初めての対局も無事に勝利を収めた。そうになると、次に話題になるのは若獅子戦だ。

「アキラくんが、優勝候補だな」

「そうだね、俺も倉田も、今年は21歳だし。最大のライバルは……もしかししたらあかりちゃんだったりして」

芦原さんがそんなことを言ってくる。こういうところが軽いなって思うけど、それも芦原さんの持ち味かもしれない。

「いや、プロの方が塔矢くんの他に15人もいるのに、私が最大のライバルなわけないじゃないですか」

「今年は他にパツとした子がいないよ。あかりちゃん、院生1位なんだろう?」

「芦原の戯れ言はともかく、藤崎も奈瀬も、公式の場でアキラくと当たれるといいな」

「うっ、頑張ります」

明日美さんは緒方さんの言葉でプレッシャーを感じたみたい。堅くなってるようじゃ駄目だよー。

「明日美さん、一緒に頑張ろう。まずは1勝」

「うん、そうだね」

軽口を叩いてると、緒方さんから追加で質問された。

「進藤は、若獅子戦に出られるのか?」

「ヒカルも出ますよ。打倒塔矢アキラに燃えています」

「へえ、そいつは楽しみなな」

緒方さんの言葉に、塔矢くんが顔をしかめる。

「……例の子か」

「例の子?」

塔矢先生がつぶやき、芦原さんが首をかしげた。明日美さんも不思議そうにしている。塔矢くんがヒカルを気にしているのは知ってるけど、理由は知らないし、ましてや塔矢先生や緒方先生まで気にしているとなれば、そりや気になるよね。

物言いたげな明日美さんだったが、空気を読んで黙っている。でも、緒方さんはお構いなし。

「奈瀬、院生研修で、進藤とは対局したか？」

「え？ ああ、はい。2ヶ月くらい前に1度やりましたよ。その時は、私が勝ちました。今月も対局がありますね」

明日美さんが、聞かれるままに答える。

あれ？ 今まで、私は1度も緒方先生に聞かれなかったよね？

「へえ。やってみた印象は？」

「性格に合わないしっかりした棋風、でしょうか……。あ、あかりちゃんが教えてるんだよね。だったら、しっかりしてるのも当然かな」

「いや、私がつてわけじゃないけど。自分でも勉強してるみたいだし」「ふうん。基本的に早打ちなんだけど、粗くはないから、ちよつと焦つちやう時がありました。持ち時間の差が出たので。時々、凄く鋭い手もありましたし」

なるほど、と聞いていた緒方先生が頷く。その様子を見て、明日美さんが首をかしげる。

「どうしてあかりちゃんに直接聞かないんですか？」

「ん？ 藤崎には、進藤関係なく研究会に来るよう誘ったからな。藤崎に聞くのは筋違いだろう」

誘ってくれた時に、私が反発しちゃったことを覚えてるんだろう。緒方先生つて、見た目に反して優しいから、気をつかってくれたのかな。言えないことも多くて、なんだか申し訳ない。

「それに、アキラくんが気にする奴なら、放っておいても上がってくるだろうからな。対局してみないと、実際のところは分からないし、待たせてもらうさ」

「僕は別に、気にしてなんか……」

さつきから黙ってたし、これで気にしてないって言われてもなあ。明日美さんも、何とも言えない顔になってる。

どうしたものかな。何か空気が重い。

「俺としては、進藤よりs a iの方が気になるな。あれだけの打ち手が、未だに正体不明というのも不可解な話だ」

「s a i……あれは……」

うわあ。緒方さんも話題を変えようとしてくれたんだろうけど、私としてはそっちの方が困る。塔矢くんも、じつと手を見ている。

分かる話題になったからか、芦原さんが口を出してきた。

「s a i、凄いですよね。一柳棋聖に勝っただけじゃなく、中韓のプロ相手にも負け無しですよ。読みの深さも底が見えないし、勝負になるの、塔矢先生くらいじゃないかな」

「ほう。俺じや力不足だど？」

「あ。いやいや！ 塔矢先生と緒方さんくらいかな！」

そのまま、なし崩しに空気が軽くなり、話題がまぎれていく。芦原さんがうかつで助かった。

でも、緒方先生も s a i と打つてみたいよね。s a i も絶対に打ちたいだろうし、なんとかする方法あるかなあ。偶然を装って対局させてみる？ うーん、塔矢くんがどう思うかな。s a i との対局後も大して何も言わないし。内心でどう思っているのか分からないのが、わりと不気味。

「s a i と対局、やってみたいですね。私もアカウント作って、時々見てみようかな」

「藤崎はアカウント持ってないのか？」

「家にパソコンがないですから。たまにネットカフェでインターネットとか触る程度だし、アカウント作ってもしょうがないです」

「あかりちゃん家、パソコンないんだ。あると便利だよ」

「明日美さんは家にあるの？ いいなあ、羨ましい。s a i と対局したことがある？」

「ないの、残念ながら。和谷は対局したことあるって言ってたな」

「うん。さんざん聞かされたよ」

パソコンが家にあるのは、本当に羨ましい。何とかしてパソコンを手に入れたいけど、高いから難しいんだよね。

若獅子戦で上位に入ったら、買えるかな？

「お小遣いで買えるようなものじゃないね。親にねだってみるとか？」

「うーん。ただでさえ碁でいっぱいお金使ってもらってるから、必須でもないパソコンまではなかなか。若獅子戦の賞金って、どんなくらいでしたっけ？」

私の発言に、明日美さんがぎよつとした顔になる。緒方先生も呆れ気味。あれ、何かやらかしたかな？

「えっと、優勝者が50万で、準優勝が30万だったかな。3位と4位にも10万。パソコン買うには10万だどちよつと厳しいかな。今まで院生ではベスト4にも入った奴はいないから、準優勝は大変だね」

「え、そうなんですか？」

優勝までいなくても、院生でも準優勝くらいはあると思ってた。

「ベスト4でも、3回勝たなきゃいけないからね。2回戦、3回戦もプロだとして、プロに3連勝は難しいよ。そんなことできたら、プロ試験はトップ通過できちゃうんじゃないかな」

なるほど。確かに考えてみたら、若手プロのみとはいえ安定して勝てるようなら、プロ試験も突破できるよね。そしてプロ試験を突破すると、翌年はプロとして参加。うん、院生で若獅子戦を勝ち抜くのは至難の業ね。

「明日美さんは、勝ったことある？」

「去年初めて出たけど、負けちゃったの。今年は勝ちたいな」

明日美さん、院生内での実力で見ると、かなり上の方に位置していると思う。

出会った頃はともかく、今は明日美さんより確実に上と言えるのは、伊角さんと越智くんくらい。和谷くんや本田さんとは、いい勝負だと思う。

元々弱かったわけじゃないし、この1年での成長は、ヒカルや塔矢くんを除けば一番かもしれない。私も伸びているはずだけど、自らを客観的に評価するのは難しいし。

「さて、話はそこまでだ。検討を始めようか」

塔矢先生の一言で、雑談に興じていた私たちは気を引き締めて盤面に向かった。

5月に入り、私は院生1位をキープ。明日美さんは7位、ヒカルは10位まで上がった。

これで、若獅子戦に出られるのが確定。あとは組み合わせだね。

いつもの、ヒカルの家での対局が終わり、帰る前の雑談で、考えていた提案を持ち出してみる。

「ヒカル、ちよつとタイミングを見計らって、明日美さんとs a iを打たせてあげたいんだけど、試してもらえる?」

「奈瀬と?」

「うん。偶然を装って、対局を演出できないかなって。上手くできたら、次は緒方先生とs a iで対局とかも、できるかもしれないし」

私が言うと、ヒカルが慌てて耳をふさぐ。

「わーった、分かったからちよつと静かにしろ! ……佐為が、絶対打ちたいってよ」

「うん、じゃあお願い。私が見つけたって明日美さんに連絡して、打ってもらったらどうかって言うってみるね。私は前に打ってもらったって言えば、なぜ自分で打たないかの理由にもなるし」

「ああ、それで少し前にわざわざネット碁で打ったのか。あかり、色々考えるなあ」

「だってヒカルのことだもん。佐為と仲良くやってるみたいだし、佐為が強い人と戦ったら、ヒカルの勉強にもなるでしょ?」

「そ、そりゃまあ」

ヒカルが一步ひるんだ、ように見える。おっと、押しすぎたかな。気をつけないと。

「じゃ、じゃあ今日は帰るね。さっき言ってた件、よろしくね」

「おう。任せとけ」

翌日、ヒカルがネット碁を始めたのを見て、近くの公衆電話で明日美さんの家に電話をする。

あらかじめ今週の予定は聞いていて、学校が終わったら家に帰るって言っていたので、問題ないはず。

「明日美さん、今ってネット碁できる!？」

「どうしたの、あかりちゃん。珍しく興奮してるけど」

「今、ちょうどsaiがいるの。もしかしたら打てるかもしれないから、試してみたらどうかと思って」

「へえ。ちよつと待ってね……。sai、うんいるね。対局中だけど」
「え」

ヒカルってば、待っていてって言ったのに。saiが打ちたがったのかなあ。

「あかりちゃん、すぐに見られる?」

「うん、電話するのに席を外したから見てないだけで、すぐに戻るよ」
「相手がちよつと弱いし、すぐ終わりそう。しばらく様子を見て、申し込めそうなら申し込んでみるわ」

「うん、分かった。急にかけてごめんなさい」

「だいじょーぶ! ありがとうね」

受話器を置いて、ネットカフェへと向かう。ヒカルが打っているネットカフェとは別のところ。

運悪く塔矢くんが通りかかったりすると、面倒だし、念を入れておかないとね。

ネット碁にログインして、対局状況を確認すると、saiが打ち終わったところだった。

「ほんとに早かった。さて……」

しばらく待つと、saiの対局が始まった。相手は、asumi。やった、上手く対局が始まった。

saiも相手が明日美さんって分かっているからか、無理な手をとがめつつも完全には殺していない。

明日美さんも負けているのは分かっているだろうけど、ヨセまで逆転の目がないか、必死に考えているのが分かる。

でも、持ち時間が1時間で、それもあまり残っていない。

そして終局。明日美さんの負けで終わったけれど、良いところもいっぱいあったし、面白い碁だった。帰ったら、また電話しよう。

「あかりちゃん、おかげでs a iと打てたよー」

「うん、見てたよ。善戦してたね」

「そうなんだよね。正直に言って、私が戦えるレベルじゃないんだけど、ところどころ緩めてたよね」

「s a iから見ても、実力があるのは分かっただろうから、楽しみたかったんじゃないかな」

「うーん。どうだろ」

電話越しで少しだけ検討して、長くなる前に電話を置く。さて、ヒカルの家で、どうだったか聞いておこう。

急いで向かって、おばさんへの挨拶もそこそこにヒカルの部屋に入った。ヒカル経由で、佐為の感想を聞く。

「佐為も面白かったつてよ。知ってる相手と打つのは嬉しいらしいし、奈瀬もそこそこ強いしな」

「あらら、上から目線だね」

「先月の対局では俺が勝ったからなー」

順位では負けているけど、そこは触れないでおこう。

明日美さんの打ち方で気になったところはないかと佐為から聞き、一段落したところで、それよりも、と棋院から届いた若獅子戦の対戦表の方に話題が移る。

「ヒカル、1回勝てたら塔矢くんと対局だね。頑張って初戦突破しよう」

「おう。お前は……当たるとしたら準決勝か。ちよつと大変だな」

「大変だけど、頑張るね。それより、打とうよ」

今日はヒカルと私が打てる日。話に夢中になるのも悪くないけど、打つ機会は逃したくない。

佐為には悪いし、佐為と打ちたがっている人にも申し訳ないけど、私はヒカルと打つ方が嬉しい。打てば打つほど、すぐ近くにいるという実感を得られる。

どんどん強くなってるし、簡単に追い抜かれないよう、頑張らないといけないのが大変だけどね。

これまでと変わらず碁を打つ日々が続き、迎えた若獅子戦。

ヒカルと一緒に会場へ入ると、すでにたくさんの人で賑わっていた。

「和谷、いよいよだな！」

「張り切ってんなあ」

ヒカルが和谷さんと挨拶するのを横目に、明日美さんと挨拶をかわす。

そうしていると、プロの人達の中から、1人の男の人が声をかけてきた。

「よお、みんな。久しぶり」

「真柴さん」

そうだ、そんな名前だった。プロ試験の前にも挨拶くらいしたような覚えはあったけど、すぐにプロ試験が始まったから、覚えてなかったんだ。

今日は伊角さんと対局みたいで、適度に煽っている。

「そういえば、伊角さん院生順位が2位になったんでしょ？ そんなんで大丈夫ですか」

「何よ。伊角くんが弱くなったんじゃないよ、1位になったあかりちゃんが凄いんだから」

ちよつと明日美さん、煽り返さないでよー。相手は腐ってもプロなんだから。

「藤崎さんだっけ。君みたいな女の子がねえ」

「えつと。はい。当たることがあったら、よろしくお願いします」

「はい、こちらこそ。つて、ブロックが違うんだから当たるはずないじゃん」

忍び笑いを漏らしながら、真柴さんが戻っていった。

うーん。今回の若獅子戦で当たらなくても、プロになった後に当たるかもしれないよね。そういった意図は理解してもらえなかったみたい。

みんな、伊角さんが勝つように応援、というよりプレッシャーを与えている。

「和谷、藤崎」

「冴木さん！」

「俺ら、当たらなくて良かったなあ。進藤くんも頑張れよ、打倒塔矢！」

「はい」

嫌みな態度の真柴さんと話した後だけに、冴木さんの笑顔に安心する。

さて、その塔矢くんは……。あ、来た来た。

「塔矢は——」

「きたよ」

ヒカルがきよろきよろと探したので、肩に手を置いて振り向かせる。

「塔矢」

「……」

スルツとヒカルを無視して通り過ぎて、私の前で少し歩調を緩める。

「おはよう、藤崎さん。奈瀬さんも」

「おはよう」

私たちが塔矢先生の研究会に行っているというのは、院生メンバーも知っているので、私たちだけに挨拶があることも、疑問は抱かない。それに、雑談するでもなく、塔矢くんはプロが固まっているあたりに行っちゃったし。

塔矢くんも緊張してるんじゃないかな。普段より表情が硬いし、不自然なまでにヒカルに目を向けなかったし。

しばらく話していると、場内アナウンスで席に着くよう指示される。

私の相手は、内山初段という方。調べてみたら、プロになって2年目で、初段のまま。だから多分、院生上位と大差ないと思う。

院生が黒の互先。黒の方が完全に有利というわけじゃないけど、やっぱり一手目を打てるのは気持ちいい気がする。私は、黒の方が好

き。

「はじめてください」

対局が始まり、それぞれに手を進める。厚みを持たせる打ち方をし、相手に大きな地を持たれたら、取り返せなくなるかもしれない。打ち間違いをしないように、荒らしながら地を広げたい。

しばらく打つと、相手が大きなミスをした。左辺の急所と思える場所を放つて、私の左上スミをつついてくる。これは駄目だよ、見逃せない。

遠慮無く急所を突いて、相手の左辺を殺す。打った瞬間、相手が気付いたようで、手が止まった。

左上スミに相手の地が少しできたけど、左辺が死んだら話にならない。

「負けました」

「ありがとうございました」

良かった、1勝。それも案外早く終わったから、周りの様子も確認できる。

相手と少しだけ雑談をして、すぐに席を立つ。

ヒカルは、まだしばらく打ってそうなので、それ以外にも目を向ける。あ、フクくんが終わった。負けたみたいで、相手からアドバイスをもらっている。

明日美さんは、まだまだ長引きそう。形勢は若干有利かな。でも、ちよつとした差だし、まだどうなるか分からない。和谷くんは少し不利。逆転の目はありそうだけど、このまま押されると負けそうかな。そして、塔矢くん。本田さんと対局中だけど、ギャラリー多くて、盤面はちよつと分からない。

ヒカルの対局を、じっくり見ようつと。

「緒方先生」

「藤崎か」

緒方先生が、先にヒカルの対局を見ていた。ペこりと頭を下げて、ヒカルと村上二段の碁盤に目を向ける。

ん？ ちよつとよく分からない。ここがこうなって、こうきて。

そっか、多分悪手を、上手く打ち回して好手に変えたのかな。そうでないと、この盤面は説明がつかない。

そのおかげか、五分より少しヒカルが良い。コミを入れて、2目半つてところかな。

その有利を保ったまま、ヨセに入る。

塔矢くんが打ち終わったみたいで、ゆつくりとやってきた。盤面を目にして、不可解そうな顔。うん、気持ちは分かるよ。

ヨセは、相手の村上二段が上手く打って僅かに差が縮まったけど、ギリギリ残った、かな。

「1目半差で、進藤の勝ちか」

「……くそっ」

相手の村上さんが悪態をつく。すぐに我に返って、ありがとうごさいましたと頭を下げた。

ヒカルもつられて頭を下げて、ふうつとため息。

「ヒカル、おめでと」

「あかり。おう、勝ったぜ！ つて、塔矢！」

ヒカルが私に笑顔を向けた後、すぐ横にいた塔矢くんを見て驚く。

ふふ、さつきは無視していたのに、対局を見ていたとなれば、そうなるよね。

「午後から、君との対局だね」

「おう！ 簡単には負けねえからな！」

ヒカル、熱いなあ。ずっと打ってる私よりも、ほとんど打てない塔矢くんと対局で張り切るのも当然だし、しょうがないよね。

「それはそうと、お昼行こう。塔矢くん、一緒に行く？」

「いや、僕は……」

「昼から対局するっていうのに、一緒に飯は食えないだろう。アキラくん、行くぞ」

逡巡した塔矢くんに、緒方先生がフォローを入れる。じゃあ、塔矢くんは緒方先生に任せよう。

お昼に、手近なお店に入る。ハンバーガーを食べながら他のメン

バーに話を聞くと、何人かは勝利をもぎ取っていた。

「じゃあ2回戦は、明日美さんとヒカル、伊角さんに越智くん、足立さんに私で、院生側は6人ね」

「16人中6人、まあ善戦した方じゃねえか」

そういう和谷くんは負けただけだね。

「塔矢相手じゃなきゃ、勝つ気だったんだけどな」

「なんだよ、本田さん。塔矢相手でも勝つ気で打たなきゃ」

塔矢くんと当たった本田さんはごく愁傷様だけど、ここはヒカルの言うとおりだね。

「ヒカル、午後からの対局頑張って。塔矢くんに勝つんでしょ？」

「おう。もちろん負ける気なんてねえよ。絶対に勝ってやるさ！」

「じゃあ私も、ヒカルと当たるまでは負けられないね」

私とヒカルが言い合っていると、明日美さんがやれやれ、と肩をすくめた。

「お熱いことで。って言いいたいところだけど、私も勝ってあかりちゃんと対局したいから、頑張るね！」

次、私と明日美さんが両方勝つと、3回戦で2人が当たることになる。そうなれば、凄く楽しいよね。ぜひ若獅子戦の場で明日美さんと対局したい。

「うん、頑張ろう！」

えいえいおー。みんなで盛り上がっていると、店員さんから軽く注意された。ご、ごめんなさい。

そうやって英気を養って、午後からの2回戦が、開始した。

第22手 中学2年生 その2

2回戦。

私の相手は、今年四段になった人。でも、まったく勝てないってわけじゃないはず。

明日美さんの相手は二段の方だけど、3年目か4年目で二段だから、あまり強いわけじゃない。上手く打てば、明日美さんなら勝てる可能性は十分にある。ヒカルと塔矢くんの対局も気になるけど、見たいからといって焦ると、逆に瞬殺されかねない。

「よろしくお願いします」

2回戦からは1回戦と違い、完全に互先で勝負する。私が先手になつて黒を持った。黒が欲しかったから、幸先が良い。

途中、悪い手があつたわけじゃないけど、少し石の形が悪い。緩めたつもりはないけど、少し厚めに打った結果、地が厳しくなつてしまった。上辺はまだしも、中央を押さえられて、下辺は確実に相手の地になっている。

巻き返せる場所を探して、長考する。佐為ならどうするか考える。下辺が確実つて、本当かな。相手は私みたいに、厚みを持たせていない。ところどころ薄い部分もある。

薄い部分を上手く攻めながら、同時に中央や右辺を荒らせば、活路が出てくる気がする。ううん、佐為なら絶対に活路を見出す。

ここ。見つけた。

下辺を攻め立てられて、右辺や右下隅も見据えた一手を打つ。下辺は攻める気はないし、囲だけ。2手ほど相手が下辺に打ったら中央も間に合うし、右辺にも手を入れられる。

「ちっ」

院生だからと私を甘く見ていたのか、相手が私の手に舌打ちする。私の望み通り、下辺に手を入れてくれたおかげで、中央は五分よりちよつと良いくらいになった。残り時間差は発生したけど、最近ヒカルと早碁の練習もしているし、打ち間違いはそうそうしない。

「……ありません」

ギリギリだった。私はもう秒読みに入っていたし、相手の残り時間も、10分を切っていた。

大きく息を吐いて、頭を下げる。

「ありがとうございます」

楽しかった。練習とは違って、必死に勝ちを取りに行く中で、これだけギリギリの勝負をしたのは、前世まで戻らないと記憶にない。

検討をするかな、と顔を上げると、明日美さんから声がかかった。

「あかりちゃん、おめでとう！ 凄い凄い！」

「明日美さん」

目を向けると、明日美さんや和谷くん、他にヒカルの姿もあった。え、えっ。何でこんなに周りにいるの。

見ると、ほとんどの対局が終わっていたようで。うん、残ったところに集まるのは道理だね。

「明日美さん、そっちはどうだった？」

聞くとにつこりと満面の笑みを浮かべる。うん、顔を見たら分かった。やったね。

「勝ったよ！」

「おめでとう！ じゃあ、来週は対局できるね！」

ヒカルはどうだったんだろう。目を向けると、しょんぼりしたような顔。負けたんだろうな。でも、去年の大会時と比べて、悔しさも大きそう。それだけ、近づいた実感もあったかもしれない。細かいところは、今日帰ってから話を聞かないと。

塔矢くんは、ヒカルに遠慮してか、少し離れた場所にいる。

「ヒカル、お疲れ様」

「ああ。負けちまったけどな、悪い碁じゃなかったぜ」

そっか。ちゃんと打てたなら良かった。前は途中まで佐為が打っていたから、今日がヒカルと塔矢くんの、実質の初対局だったね。

少し周りがざわめいているけど、どうしたのかな。少し耳を澄ますと、院生が結構勝ち残っているのが気になったようだ。私と明日美さん、そして越智くん。

ヒカル以外に、伊角さんと足立さんも負けたみたい。

その後は来週の時間などを確認して、帰路につく。

そして家に帰った後、早々にヒカルの家に向かう。ヒカルと塔矢くんの碁がどんな内容だったか、すごく気になる。

「ヒカル、碁の内容教えて」

「いいけど、負けた碁だしなあ」

「塔矢くんとは検討しなかったの？」

「してねーよ。……まあ、思ったより良い碁だったとは言われたけど」

塔矢くん、ヒカルのことを見直したのかな。去年の部活の大会から、たった1年でここまで強くなったんだもんね。

ヒカルが並べてくれた棋譜を見ながら、佐為からも指摘をもらいつつ気になった部分に口を挟む。塔矢くんは当然だけど、ヒカルも相当上手く打っている。途中、佐為が打ったのかと思うほど、このタイミングではここしかないという一手も見かける。ただ、どうしても拙い手もあるのが敗因かな。

「前と違って、相手の石を攻め立てるのも上手くなったよね」

「へへっ。お前がいけない時とか、碁会所にもよく行ってるんだぜ。置き石をいくつか置いてるし、地を取りに行かなきゃ負けるからな」

「そうだね」

今日の様子を見る限り、今なら早碁だと五分に近いんじゃないかな。時間を取って打つと、まだそれほど負ける気はしないけどね。

今日はヒカルと佐為が打つ日だったけど、検討をしているうちに遅くなっちゃったので、私は時間切れ。夜に2人で打つから、飛ばしてもいいとのことだ。

確かに、ヒカルと佐為が打つのを私が見ているのは、ヒカルのためというより、私のためだよな。今日、四段の人に勝てたのも、佐為とよく打っていて、佐為の碁を少なからず取り入れているから。

ヒカルと佐為に感謝しつつ、ヒカルの家を出た。

明けて、院生研修の日。

午前中は、昨日の2回戦で負けちゃった足立さんと対局。でも1回

勝っているだけに、打ち方から自信が感じられる。全体の棋力が上がるのは、プロ試験に受かりにくくなるとはいえ、研鑽の場としては非常にありがたい。

足立さんと真剣に打ち合った結果、中押し勝ち。

「お昼いこつ」

「うん。どこがいいかな？」

「俺、ハンバーガー食いたい」

特に反論もなく、ヒカルが食べたがったハンバーガーショップに入る。

「今年は結構勝ったよな」

「若獅子戦？」

「ああ。しかも、組み合わせの運が良いとはいえ、来週は奈瀬と藤崎だろ？ 勝った方が、院生初のベスト4入りだぜ」

和谷くんが、そんなことを言ってくる。

明日美さんと顔を見合わせ、肩をすくめる。

「誰と当たろうがベスト4目指して頑張るつもりだったけどね。私、今年はかなり良い感じだもん」

「まあ、プロ相手に2連勝できたんだから、そりゃ強くなってるよな。今年のプロ試験、周りが手強くて去年より厳しいかもな」

去年は塔矢くんだけが突出していた。今年は、私と明日美さん、越智くんが若獅子戦で2連勝、ヒカルも強くなってるし、伊角さんもいる。確定で枠が潰れたりはないけど、確かに勝ち抜くのは容易じゃないよね。

「ヒカル、午後から越智くんのだよね。プロ試験までに越智くんと対局できるのは最後だと思うし、頑張って」

「お、おう。越智にもあかりにも、簡単には負けねえよ。俺だってプロに勝てたし、塔矢とだって、あれだけの碁が打てたんだ。俺、もっと強くなるよ」

ギョツと握りこぶしを作って、気合いを入れている。元気で明るいだけだったのが、もうこんな引き締まった顔もできるようになってるんだね。

ぼんやりとヒカルを見てみると、隣の明日美さんがぼそりとつぶやいてきた。

「あかりちゃん、だらしない顔になってるよ」

ええっ、嘘。慌てて引き締める。

「はあ。なんで気付かないのかね」

「ホントにね」

和谷くんの言葉に、明日美さんが相槌を打つ。うつ、ヒカルことは自分で頑張るので、放っておいてください。

森下先生の研究会でも、塔矢先生の研究会でも、院生ながらに2連勝したのを褒めてもらえた。

私も明日美さんも、実力を認められたようで嬉しい。

「高段者との対局ほどではないが、勉強になるだろう」

「ふふふ、はい」

「何がおかしい?」

私が緒方先生の言葉に笑いを漏らすと、不審そうに首をかしげられた。ごめんなさい、馬鹿にしたんじゃないやなくて。

「森下先生にも同じことを言われました。勝負の場は、練習手合いとは違った緊張感があったはずだって」

「ああ。森下先生なら言いそうだな。森下先生も塔矢先生も、当然俺だって、ここで打つのとリーグ戦なんかで打つのでは、全然違うからな」

塔矢くんや芦原さんだけじゃなく、明日美さんまでうんうんと頷いている。

「次に藤崎と奈瀬の勝った方がアキラくんと対局か。ここから人数が減っていくから、さらに注目されるな」

「2人で対局って、やりにくいんじゃない?」

「そんなことないですよ。勝負事である以上、当たることはあるし、プロ試験では絶対に対局しますし」

明日美さんが気軽に言ってくる。こういうところは、去年のプロ試験を経験しているだけあるよね。でも、1年ずつと一緒に勉強してき

た院生で、星の潰し合いをするんだから、当たった時に勝ちを狙う姿勢は保たなきゃいけない。

「うん。ちゃんと、勝ちを狙いに行きます」

「簡単には負けないよ。塔矢くんにもね！」

「え、はい。僕も頑張ります」

「うーん？　なんだか気迫が足りないなあ。どうしたの？」

明日美さんが首をかしげるけど、本当にどうしたのかな。

様子を見てみると、緒方さんがぼそりとつぶやいた。

「で、思ったより強かったか？　それとも、期待外れだったか？」

「……大手合いで打つ相手より、強いと思いました」

ヒカルの話だね。今、塔矢くんが大手合いで打つのは、初段や二段が多い。そのあたりよりヒカルの方が強いってことよね。

少し前から思っていたけど、やっぱりヒカルの強くなる速度は異常。下手したら、プロ試験前に、私より強くなるかもしれない。

喜ばしいことなんだけど、置いていかれたくない。明日の対局、明日美さんに勝ちたいな。そして塔矢くんと、真剣勝負がしたい。

「ほう。じゃあ今年のプロ試験、楽しみだな」

私と明日美さんの方を見ながら笑う。

「知ってるか？　s a iがプロ試験を受けるかもしれないって話「え？」」

そんな話、聞いたことない。ヒカルが受けるんだから、プロ試験を受けると言えば受けるけど、佐為じゃないと言えば佐為じゃない。

何がどうなってそんな噂が流れているのか、聞いてみたい。

「s a iが現れて1年ほど。不定期ながら、頻繁に顔を出すし、プロではないのは確かだ。しかし、あれだけの腕を持っていて表舞台に立たないなんてことが、あると思うか？」

去年は間に合わなかっただけじゃないか、という話らしい。

良かった、何か確証があったわけじゃないだね。

「私、少し前に打ちましたよ。あかりちゃんから教えてもらって」

「え、藤崎さんから？」

「どういうことだ、何か知ってるのか？」

塔矢くんと緒方さんが、勢い込んで言い募る。ひゃあ、塔矢先生もこつちに目を向けてきた。睨んでるつもりはないだろうけど、塔矢先生は眼力が強すぎて、ちよつとひるんじやう。

「あ……。えーと。偶然だけど、s a iがいるってあかりちゃんから連絡があつたんです」

「ほう。藤崎は、打とうとしなかったのか?」

「私は、もう打ったことがあつたので、明日美さんに持ちかけてみたくです」

「へえ、それはそれは、俺にも打てる機会を教えてくださいなものだな」
「偶然ですから」

ああ、駄目だ。何とか塔矢先生や緒方さんと佐為を打たせてあげたいと思つていたけど、偶然を装うのは難しすぎる。

「今、いるかな。ちよつと確認してみるか。先生、パソコンを付けさせてもらいますね」

「ああ、いいだろう」

塔矢先生は、パソコンを使わないようだけど、棋譜整理とかで部屋にパソコンが置いている。

緒方さんは慣れた様子で起動させて、ネット碁のページに繋がれた。

「藤崎、お前の名前でログインしてくれよ」

「何故ですか?」

「前に対局したことがあるんだろう? 縁起良いじゃないか」

明日美さんだって対局してるんですけど。あからさまに怪しいけど、固辞するのも変だし。こういう時って、何か企んでそうで怖いよね。

「えーと。名前が g a i f u。パスワードが……」

さすがにパスワードを漏らすような真似はしない。自分で入力して、ログインする。

「g a i f u? どういう意味?」

「名前? 藤崎あかりだから、逆から見たらあかふじでしょ? 赤富士って言えば、北斎の凱風快晴が有名だから」

明日美さんの疑問に答えると、みんな驚いたような顔になった。

なんだろう。変なこと言ったかな？

「あかりちゃん、回りくどいのが好きだっけ？」

「そういうわけじゃないけど、簡単に個人情報に繋がるような名前を使いたくないなあって……」

あ。うっかり前世の気分で名前を付けたけど、まだまだネットリテラシーなんて浸透していない頃かも。そういえば、明日美さんも塔矢くんも、自分の名前を使ってるね。

和谷くんは、好きなゲームキャラの名前を付けてたっけ。

「ほう。なるほど、確かにg a i f uと見て、藤崎は想像できないな。s a iも自分の名前とは全然違うものだと思うか？」

「さあ、どうでしょうか」

えーん、緒方先生の追求が厳しいよう。ヒカルの際はスルーしてくれたのに。

「緒方くん」

「……はい。それはそれとして、s a iはいるか？」

塔矢先生が止めてくれて、ほつと一息つく。えーつと。ヒカルいるかなあ。

私がおここに来る時、ネット碁か碁会所なんだけど。

「s a i、いますね」

「今の対局が終わったら、申し込んでみろよ」

はいはい。どうなるか分からないけど、逆らう手は打てないし、打つ気もあまりない。

相手はすぐに投了して、s a iが空く。

対局待ちリストをページ更新して、すぐに対局を申し込む。他の人が対局を申し込んだ後ならエラーになるけど、エラーにならず待ちになった。

私だっというのにはすぐに分かるから、ヒカルと佐為で相談してるんだろうな。あ、受けてくれた。

「受けてくれましたね。塔矢先生か緒方先生、対局してみますか？」

「お前はいいのか？」

「明日、若獅子戦があるんですよ。今からs a iと打つって、疲れちゃ

いますもん」

私が言っていると、緒方先生が少し目を輝かせる。ふふ、緒方さんにもこういう面があるんだ。

コホン、と咳払いして、塔矢先生に声をかける。

「塔矢先生、いかがですか？」

「いや、私は遠慮しておこう。碁石を持つての対局じゃないのは譲るとして、自ら打てない碁を打つ気はないよ」

「じゃあ、どうぞ。塔矢先生、こつちで並べますね」

緒方先生に席を譲って、塔矢先生のそばに行く。緒方先生はもちろん、塔矢くんもパソコンに夢中。ランダムで先手を決めて、こちらが黒、佐為が白で対局が始まった。

「塔矢先生、もしs a iが緒方先生に勝ったら、ネット碁を覚えてみませんか？」

「私か？ 何故だね？」

「s a iと打つてみたくないですか？」

「表舞台に出ない者とは、打つ気はないよ」

塔矢先生は、前言撤回しない。うーん、どうしたものかな。

「もしかしたら、ネット碁しか打てないかもしれないですね。身体都合とか、立場とかで。その場合でも、やっぱりs a iは打つに値しないでしょうか？」

「ふむ……」

佐為と緒方先生の碁を盤面に打ちながら、話を進める。塔矢先生は、少し悩んで口を開く。

「緒方くんと碁も、ここからどうなるか楽しみだな」

はぐらかされた……のかな？

塔矢先生らしくないけど、私が性急すぎたかもしれない。焦ることじゃないし、今は緒方先生と佐為が対局できただけで十分かな。

「もし、緒方くんに勝つようなら……」

凄く小さな、間違っても対局中の緒方先生には聞こえないつぶやき。驚いて顔を上げると、塔矢先生は小さく笑みを浮かべた。

「それほど時間に余裕があるわけじゃないから、対局できるようにな

るのがいつになるかは分からないがね」

「はい」

塔矢先生には、私がネットの sai と何らかの関わりがあるって気付かれているかもしれない。下手したら、緒方さんにも。

でも、彼らはそれを言いふらすような性格じゃないし、様子見でいいかな。

対局が進み、佐為の優勢がはっきりと現れてくる。中盤を越えて、ヨセになる。緒方先生が、3目半ほど不利。この差を覆すのは、難しいだろう。

そう思っていると、緒方先生が舌打ちして、投了した。

「sai……。これほどか……」

打ってみて初めて、相手の強さが身にしみるんだよね。間違いなく強いのは分かっているけど、緒方先生ほど打てたら、自分なら勝てる目はある、と思うのが当然。実際、今まで見た中で、一番苦戦していたと思う。

「お疲れ様でした。すみません、私のアカウントで打ってもらっちゃって」

「ああ、そんなこと。むしろ悪かったな、負けてしまった」

負けたと言っても、相手は佐為だし。とはいえ、今は緒方先生も相手が佐為だとか関係ないだろう。急な対局だったとはいえ、本気で挑んで負けた。

なぐさめの言葉なんてかけられたくないだろうし、かける権利もない。

「遅くなっちゃったね。今日は解散しよう。来週、緒方さんと sai の対局を検討でいいかね」

時計を見ると、塔矢先生の言う通り、普段なら解散している時間になっっていた。手早く部屋の片付けをして、家を出た。

帰り道は、明日美さんと一緒に駅まで歩いている。

「あかりちゃん、運が良いよね」

「え?」

「sai。一週間に、多くて1回か2回だし、時間も不定期なのに、何

度も見つけてるし」

あはは。確かに、事情を知らなければ運が良いように見えるよね。あまりぼろが出ないように話を合わせる。

「ともかく、明日はよろしくね。簡単には負けないよ」

「うん、もちろん。私も全力で頑張ります」

明日、楽しみだな。明日美さんと本気の勝負をやって、勝てたら塔矢くんとも対局できる。

塔矢くんが負けたら別の人だけど、塔矢くんが負けるとは思えない。

打てば打つほど、塔矢くんの凄さが分かる。私たちはもちろん、冴木さんや芦原さんと比べても、読みが鋭い。むしろ塔矢先生や緒方さんに近いと言うべきかもしれない。

そんな人が、プロになってまだ二ヶ月弱だっというんだから、とんでもないよね。

家に帰って、早々にヒカルの家へ向かった。

「ヒカル、今日はごめんね」

「いや、全然構わねえけど、あれ、相手誰だったんだ？」

「えっと。緒方先生」

「ああ、なるほど。佐為が、今までで1、2を争う実力だっというからさ」

前に打った韓国の人とどっちが上か、というほどの強さだったという。

「おかげで佐為がはしゃいじゃって、ウザいったらこの上ねえよ」

「そうなんだ。でも、ヒカルも勉強になったんじゃない？」

「まあな。あれだけ佐為と打てるんだから、緒方さんだけ、あの人も大したもんだよな」

「うん。そうだ、そのうち塔矢先生とも打てるかもしれないよ」

私の言葉に、ヒカルがわっと耳を塞ぐ。

佐為ってば騒ぎすぎ。嬉しいのは分かるけど。

「ぜひ打ちたいってよ。でも俺、バレるのは嫌だぜ」

「うん。分かっている。バレない範囲でやってる。というか、決定的な証拠がなければ、何も言いようがないよ」

「ならいいけどよ。塔矢と違って打ったし、佐為がバレて俺が打てなくなるのなんて嫌だぜ」

「ヒカルはヒカルだし、佐為も佐為としてネット碁で打てるし、これからもきつと大丈夫」

ヒカルとそんな話をしつつ、1手10秒の早碁を打つ。早碁にも慣れたし、先週真剣勝負でミスせず勝ちきったからかな。打っている途中に焦ることもほとんどなくなった。

うん。先週の対局で、凄く手応えを掴めた。今年のプロ試験、ヒカルと一緒に受かりたい。

そのためにも明日、全力で打とう。

第23手 中学2年生 その3

朝起きて、いつも通りご飯を食べて、いつも通り家を出る。今日は若獅子戦の3回戦。

ヒカルの家まで行って、呼び鈴を鳴らす。おばさんと挨拶をして、待つこと少し。

「おはよ。ふぁー、眠い」

「おはよう。昨日は遅かったの?」

「佐為と打ってたら、遅くなっちゃった」

いいなあ。私もずっとヒカルと打っていたい。

ヒカルは既に負けているから対局はない。でも、塔矢くんの様子も気になるようで、一緒に棋院へ向かう。学校と違って、棋院へは一緒に行くことが多い。帰りも一緒。学校と比べて冷やかす人がまったくないのが原因かな。学校だと、男女がずっと一緒にいると、どうしても噂をされたりするし。

雑談しながら棋院へと向かい、会場に入る。勝ち残っているのは8人で、そのうち3人が院生。そのせいか、院生の見学者が結構多い。

「明日美さん、おはよう。今日はよろしくね」

「あかりちゃん、おはよう! 顔がちよつとこわばってるよ。緊張してる?」

「え、うそ」

気付いてなかったけど、緊張してるのかな。右手を頬に当てると、明日美さんがふふつと笑って、左側の頬をつついてきた。

「まあ、気楽には言わないけど、楽しく打とう」

「うん。明日美さんは凄いな、全然緊張してないみたい」

言われてようやく、確かに緊張してるって実感してきた。だって、ここに来るまでヒカルと何を話していたか、全然覚えてない。

うわあ、覚えてないなんてもつたいない。

って、それどころじゃなかった。

明日美さんは慣れた感じで、院生2組の、どっちが勝つか賭けようと言った子に説教している。どうしてだろう、先週は大丈夫だったの

に。

「明日美さん、落ち着いてるね」

「そりゃね。去年も若獅子戦に出てるし、それよりプロ試験本戦が大
事だし」

「なるほど」

「でもま、今日はちよつと違うけどね」

場数が違うってことだね。私も、もつと余裕を持って対局に臨みた
い。ずっと一緒にいる相手だから、余計にいつも通りを意識しちやつ
てたのかもしれない。

いつもと違う場所と状況なんだから、いつも通り打てるわけがな
い。それを分かった上で、いつも以上の碁を打てるように、頑張らな
いと。心の持ちようって難しいね。

「今日は違うって?」

「あかりちゃんに勝ちたいもん。気合いも入るよ」

ふん、と気合いを入れている。私が院生1位だから?

「私が強くなってるのは、あかりちゃんのおかげだから。これだけ打
てるんだよってのを、ちゃんとあかりちゃんに見せておかないと」

「えー!・明日美さんが強くなったのは、明日美さんが頑張ってるか
らだよ」

はいはい、と軽く流される。そうこうするうちに、時間がきて、対
局準備に入る。

明日美さんのおかげで、随分と落ち着いた。あのまま打ってたら、
とんでもないミスをしていたかもしれない。明日美さんとしても、私
がミスをして勝っても嬉しくないだろう。

ニギリの結果、私が白石。明日美さんの黒石で、対局が始まった。

序盤はお互いに地を広げつつ、必要以上に攻め込まない。左右で地
を確保しつつ、私の方が少し薄いけれど、明日美さんに先んじて中央
へと手を伸ばす。明日美さんも負けじと打ち込んできて、激しく打ち
合いが始まった。

中央での打ち込みを活かしつつ明日美さんが広げている右辺への

けん制もできればいいんだけど、なかなか良い手がない。

上辺の少し空いた空間が、今のままだと明日美さんの地になりそう。なんとかできないかな。こちらの左辺と絡めて攻めても、どう打ってもかわされる。中央との連絡をつけようとしても、分断されるのが落ち。だからといって、そのままだと面白くない。

右側から攻めたら、少なくとも2手くらいは損をさせられそうな気がする。その間に中央を補えば、地で勝てる。

少し考えて、ミスがなければ行けると判断する。中央にある薄めの浮いた黒石に、右側からツケる。

「えっ」

明日美さんが、驚いたように動きが止まる。ぱっと見、ただで石をあげます、と言っているような手だもんね。

でも、取りに来ると、私の方が何手も有利になる。放っておくと、その石を足がかりに、上辺から右上隅にかけて荒らされて、結局地が大きく削られる。

明日美さんもすぐに気付いたようで、どう打つのが被害が少ないか、考えている。

少し長考した結果、明日美さんは荒らされるのを覚悟で、中央での勝負を挑んできた。

うん、多分正解。それでも少し相手の地を減らした上で、中央も五分のまま展開できたから、コミの分がそのまま差がついた状態。

ヨセに入り、そのまま逆転されずに、終局した。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。ああもう、悔しい！」

「上辺への打ち込みがなかったら、危なかったと思う」

「うん。多分ギリギリ勝てるかなあって思ってた。油断してなかったけど、あの手は見えてなかったよ」

明日美さんと感想戦をやっていると、塔矢くんも対局が終わったようで、こちらに向かってきた。

「どちらが勝ったの？」

「私の負け。でも、結構頑張ったんだよ」

「うん、ちよつとの差だったよ」

「この手が良かった、こう打っていたらどうか。ヒカルや伊角さんも交えて、検討する。先週対局したのが良かったのか、ヒカルと塔矢くんも普通に話をしている。」

「え、でもこつちの手は？」

「そんな手はないだろう。こう打てばどうしようもない」

「えー、でもこうすれば何とかなるんじゃないか？」

うん。普通に話していると思ったけど、あまり長く話を続けると良くない気がする。周りも2人の言い合いに冷や汗をかいているし、どうにかしないと。

「まあまあ。次があるし、検討はこの辺で終わる。2人とも、気になるなら帰ってから自分で確認して。ヒカル、帰ってから試しに打ってみよう。相手くらいするから。ね？」

「あー。まあ別に、そこまでじゃねえけど」

斜めを見ながらいじけた様子で言っているのは、他人から見たら照れているか拗ねているか、という感じ。多分佐為に諭されたか何かだろうな。

塔矢くんもまだ何か言いたそうだったけど、ため息をついて気持ちを落ち着けている。イライラしていると次の試合に影響があるから、それまでに落ち着けてほしい。

「さて、じゃあ次の試合を始めるぞ」

時間がきて、準備を進める。対局は2つ。残念ながら越智くんも負けたみたいで、冴木さんが四段の人とやって、塔矢くんと私が対局。

塔矢くんも落ち着いたようで、普段通りの顔になっている。

「さつきはごめんね。ちよつと熱くなった」

「ううん。ヒカルと言いついてムキになってるの面白かった」

「別にムキになってたわけじゃ」

「ほらまた。ヒカルとの対局、面白かった？」

「……うん。思いもよらない手が多くて、色々と考えさせられたよ。まだまだ実力不足だとは思うけど」

「確かにそんなところあるね。でも、日に日に実力を伸ばしているし、

そう遠くないうちに一気に強くなるかもね」

「どうだろうね。僕が白だね」

「今日は、簡単には負けないよ」

「芦原さんじゃないけど、普段打ち慣れている分、一番手強いと思ってるよ」

話しながらニギって、私が黒で対局が始まる。

「よろしくお願いします」

普通にやっついては勝てない。第1手を4の五、高目に打つ。危ない碁になりやすいので、普段は取らない手。塔矢くんは気にした風でもなく、右下隅の小目に打った。

地は少なくとも、打ち合いになつたら勝てると踏んだのだろう。実際に今まで、塔矢くんと打ち合つて、まともに勝つたことは数えるほどしかない。

攪乱させるには自分の実力が不足しているかもしれないけど、打てるだけ打ってみよう。

しばらく互角の勝負をしていたけど、途中で読んでいない手を打たれて、少し形勢が塔矢くんに傾いた。その分でこちらも別のワカレで得は取った。でも、差は小さいながらも、このままだと負ける。

細かい部分より、全体を見て薄いところを探す。どこも厚みがあつて、攻めにくい。

こういう時、佐為ならどうするだろう。複数を同時に牽制する1手。今を逃せば、もう挽回の目はない。

上辺の付近に打つ。塔矢くんは小さく首をかしげる。ぱつと見たところ、悪手にも見える手。でも、この後を上手く打てたら、この1手が邪魔をして相手の応手を制限できる。

塔矢くんはしばらく考えて、警戒しつつも別の場所に打つ。何かあるとは思っているみたいだけど、意図が読めずに様子見つてところかな。

いくつか手を進めて……よし！

塔矢くんの手が止まる。考えた通り、さっきの1手が生きて、塔矢

くんの数手が無駄になったようなものだ。

これで、ほぼ五分。あとはミスせず、少しでも上回れば、勝てるかもしれない。

「半目差……」

上手く打ったと思ったけれど、ギリギリのところでは届かなかった。ヨセに入ってからでも、どこか打てる手がないか探した。僅かな綻びも見逃さないつもりだったけど、見つからなかった。

これが、塔矢アキラ。

「ありがとうございます」

どちらともなく挨拶を口にして、ため息を吐く。そう、相手は塔矢くんなんだ。

去年、佐為と打つための対局を除いて全勝でプロ試験を突破して、プロになってからも、座間王座との新初段シリーズを除いて、今まで数戦やって負けなし。週刊碁でも、未来の名人候補とまで言われる存在。

その塔矢くん相手に半目差なんだから、誇っていいくらい。

「ふ、藤崎さん？」

少しぼやけた、動揺した風の塔矢くん。慌てた様子なんて珍しい、というか初めて見たかも。

明日美さんも声をかけてくるけど、ごめん、今ちよつと待って。

「塔矢、検討とかは今度でいいよな。あかり、行くぞ」

ヒカルが手を掴んで引つ張る。もう。片付けずに行くなんてできないよ。

片付けようと手を伸ばすと、明日美さんが肩を叩く。

「いいから。やっておくから」

言葉に甘えるというより、ヒカルに引きずられるように連れて行かれて、外に出た。

建物の隅、周りからあまり見えない場所に来て、ヒカルがようやく手を離した。

「あーもう、しょうがねえなあ」

ヒカルがポケットからハンカチを出すと、私の顔をぐしぐしと拭き始めた。

「わっ、ちよつとヒカル」

「ちよつと黙ってるって」

しばらくさされるがままになっていると、少し気分が落ち着いてくる。

「ヒカル、ありがと。もう大丈夫」

「ほんとかあ？」

「うん。ふふ、まさかヒカルに慰められるとは思わなかったよ」

「へん、俺だつてたまにはな！　っていうか、あれだけ泣いたら誰だつてギョツとするぜ」

本当にね。ああ、恥ずかしい。しかもプロの塔矢くんとやっておきながら、負けたら泣くとか、何様なんだっていうね。勝てるつもりだったんだって、泣いてから気付いた。

「ふふ。ヒカルとおそろいだね。塔矢くんは若獅子戦で負けちゃったの」

「そんなのいらねえよ。……勝ちたかったな」

「うん」

そのまま、黙って数分経ってから気付く。

「ご、ごめんね。佐為もせつかく検討とか、言いたいこともあったかもしれないのに、こんな場所に連れて来ちゃって」

「いいって。佐為なんか気にしなくて」

「もう。またそんなこと言って」

でも、本当に戻らないと。

篠田先生、怒ってるだろうなあ。

「じゃあ戻るか」

「うん。先生とか、スタッフの方に謝らないと」

「俺も一緒に謝ってやるって」

「ヒカルが引っ張ってきたもんね」

「な！　俺はなあ」

「冗談。ありがと」

微笑むと、ヒカルがしようがねえな、って顔になる。うん、調子も戻ってきた。

棋院に入り、会場へと戻る。

「勝手に抜けちゃって、ごめんなさい！」

「藤崎さん、碁石を碁笥に入れて、対局が終わるんです。急に席を立つてはいけませんよ」

篠田先生から、お叱りの言葉を受ける。

はい、反省してます。塔矢くんが、周りと談笑していたので、そこらにも近づく。

「塔矢くん、さっきは本当にごめんなさい」

「いや、大丈夫。というか、ちゃんと終局していたし、構わないよ」

軽く笑みを浮かべて気にしないよう言ってくれた。でも、と言いかけたところで、明日美さんに抱きつかれた。な、何事!?

「そうよー、もう気にしない気にしない。おかげでなんとも言えない空気になったし、私と塔矢くんがせいっぱいフオーしてあげたけど、気にしない」

「……今度、ケーキでも奢るよ」

「やった。さすがあかりちゃん! ……でもおかげで、塔矢くんが周りにいた院生とも検討代わりの打った手の説明したりしてたし、結果的に良かったと思うよ」

ひとしきりはしゃいだ後、私にしか聞こえない小声で教えてくれる。

そっか、塔矢くんも気を使ってくれたんだ。本当に感謝だね。

明日美さんが離れて、周りで見えていた人にもごめんなさいと頭を下げる。院生みんなは気にしないように言ってくれたし、初対面のプロの方も、軽く手を振って気にしないとジェスチャーで伝えてくれる。

みんないい人だ。

「さて、じゃあ勝ったのは冴木二段と塔矢初段だね。おめでとう。来週の土曜、時間は今日と同じで。決勝戦のみだから、持ち時間は……」

冴木さん勝ったんだ! 凄い!

説明が終わった後、ヒカルや和谷くんと一緒に冴木さんに声をかけた。

「冴木さん、決勝戦進出おめでとう」

「ありがとう。藤崎さんも惜しかったね」

「あはは。お恥ずかしいところをお見せしました。勝てるかなーって思っただけけど」

「本当にいい勝負だったよ。俺も負けてられないな」

ヒカルと和谷くんもそれぞれ激励した、といっても火曜にまた研究会で会うんだけどね。

帰ってからヒカルの家で、今日の碁について検討をする。

私には思いつかなかったけど、佐為に指摘されて、いくつか追いつける手があったことを知る。

そして塔矢くんも気付かなかったけど、私にも甘いところはたくさんあった。佐為だけじゃなく、ヒカルも気になったところを指摘してくれて、私が気付かなかった点多々あった。

間違いなくヒカルも強くなっている。佐為の存在も大きいけど、塔矢くんの存在もまた大きい。

「先週、院生研修の時にも話に上がったけど、プロ試験楽しみだな」
「そうね。みんな必死に勝ちを狙いに来るし、1戦たりとも油断できない日が続くね」

また今度、和谷や伊角さんを誘って碁会所に行くというので、暇な日は付いていきたいとお願いする。

そして翌週、冴木さんは塔矢くんに及ばず、塔矢くんの優勝で若獅子戦は幕を閉じた。

閉じたんだけど……。

週刊碁で、若獅子戦の様子を取り上げられて、塔矢アキラが一番惜しい勝負をしたってことで私との棋譜が載っている。

それは別に構わない。実際、冴木さんとの勝負より、私との勝負の方が僅差だったんだから。

ただ、明日美さんとの対局の様子や、負けて泣いている写真まで載っているっていうのはどういうこと？

恥ずかしくて死にそう。普段から見ないだろうから大丈夫だと思うけど、ヒカルに見られないようにしないと……。

第24手 中学2年生 その4

月曜早々に発売された、若獅子戦について載っている週刊碁を読んだけど、火曜にある森下先生の研究会の時に文句を言いに行くわけにもいかない。ヒカルが一緒なんだから。

森下先生たちも、特に写真に触れるでもなく流してくれたから助かった。

そして水曜、1人で棋院に行く。うう、明日美さんに相談して、一緒に来てもらったたら良かったかなあ。

「おや、藤崎さん。今日は何か?」

「こんにちは。えっと、天野さんいますか?」

「ああ、ちよつと待ってね。おい、天野くん、お客様だよ!」

出版部の受付の方が対応してくれて、天野さんが奥から顔を出す。時々森下先生に連れられてイベントのお手伝いもしているし、だいたいの人は顔見知りになっている。

天野さんは私を見ると、ぱつと顔を輝かせた。挨拶もそこそこに、向こうから話題にしてくる。

「ああ、藤崎さん! 週刊碁見てくれた? いい写真だっただろう?」

「いえ、あの写真はないですよ。明日美さんと打ってるのは、他に越智くんの対局中の写真もあったから2回戦突破した3人ってことでいいですし、塔矢くんとの対局が載るのも、まあいいんですけど」

私が怒っているのが分かったからか、笑顔で近づいてきていた天野さんの顔が少し引きつり始めた。

周りには、あちゃーって顔をしてる。

「よりによって、あんな顔の写真にしなくても」

「いや、でもその」

「でも?」

「真剣勝負の後の、負けた悔しさが出ていて、とても良い顔だったと思うんだけど……。頑張っているプロの卵である院生の向上心を捉えた記事にも合っていたし」

確かに記事は良い出来だったけど!

でも、恥ずかしいものは恥ずかしい。

「それだけ藤崎さんの今後に期待してるってことだよ。名前は出してないし、顔も望遠気味で横顔だからはつきり分かるわけじゃないし」
何とかして煙に巻こうとしている。まったく、大人はこれだから。
とはいえ、出てしまったものを元には戻せない。できることと言えば、これを盾に取って無理を聞いてもらうくらいかな。

「天野さん。貸し、ひとつですよ」

「え、あはは。いやあ、参ったな」

「天野さん」

「はい、分かりました」

今後、私のことを記事にするな、なんて言えない。もうすぐ始まるプロ試験を突破したら、それこそ顔が出ちやうのも仕事のひとつと言える。まあ、もしプロになっても、勝てなきゃ埋もれるだけだから、週刊碁に載るようなこともないんだけど。その場合も、私じゃなくてもヒカルのことをお願いが出てくる可能性は高いし、貸しを作っておくのは悪くない。

貸しの念押しをして、棋院を後にした。釘は刺せたし、良かったあ。

夜、ヒカルと勉強をした後、明日美さんと電話で話をした時に事の顛末を伝えた。

「あはは。災難だったね」

「もうっ、笑いごとじゃないよ。明日美さんみたいに美人ならまだしも……」

「何言ってるの。あかりちゃんは可愛いよ。囲碁の腕前は憎たらしいけど」

「憎たらしいって、ちよつと明日美さん」

「ごめんごめん。でも、確かに悪くない写真と記事だと思うよ」
「もー」

こっちは恥ずかしさで悶絶したっていうのに。でもヒカルにはバレてないから、まあいいか。うっかり言いそうな和谷くんや、ヒカルと仲が良い伊角さんには口止めしたし。

って、私だけのことじゃないんだった。

「というか、明日美さんも書かれてるよ」

「望むところよ。あかりちゃんには負けたけど、今年のプロ試験に合格する気で受けるんだから」

「うん。一緒に合格目指して頑張ろう」

決意を新たに、気合いを入れる。

よし、まずは今日の佐為との対局を棋譜に残そう。まだ、佐為に勝ったことないんだよね。塔矢くんももちろん強いんだけど、研究会の場合なら勝ったこともある。

佐為は、そういうのとは別格の強さ。

定石を何もかも無視するとか、そういうわけじゃない。ただ、ここぞという時に、これしかないという一手を打つ。ヒカルが時々打つて、私も最近真似しているような、ぱつと見が悪手に見えつつ、後からじわじわと効いてくるような一手とは違う。例えば右辺で打ち合いの途中、一手前だと右辺がぼろぼろになるし、一手後だと間に合わない。そんなタイミングで、中央に右辺を睨んだ一手を打ち込む。今の私じゃ、その域には達していない。というかタイトル戦でも、そんな一手は滅多に見ない。

やっぱり碁打ちとしては、憧れを抱かずにいられない。

「ヒカルと打てて、佐為と打てて。きつと今は凄く幸せな時なんだろうな……。佐為、いつまでこの世にいてくれるかな？」

ずっといれば、ヒカルが荒れることもないんだろうなあ。

あ、でも、もしヒカルと付き合えたり、あまつさえ結婚できたりすると、見えないとはいえ佐為がいるって考えると色々と無理かも！

……うん。考えないようにしよう。なるようになる。というかなるようにならならない、とすべきかな。この場合。

週末、いつものように院生研修を終えて、ヒカルと明日美さん、和谷くんや伊角さんと一緒に部屋を出た。部屋を出てすぐ、和谷くんがカドワキという人がプロ試験を受けるらしいって話題を出してきた。

「門脇？ 何年か前、学生三冠を取ったっていう門脇？」

「伊角さん詳しいね。ネットで見たんだけど、なんかプロ試験を受けるかもってあったんだよ」

「外来も強いのが来るからなあ。去年は院生での合格者、真柴だけだぜ」

ふうん。門脇さんという名前は覚えがないけど、プロになった人なのかな。今年通らなかつたことだけは間違いないけど、来年以降はおぼろげにしか覚えてない。

雑談しながら棋院を出て、駅まで歩く。

みんなと別れて、ヒカルと一緒に電車に乗った。今日はヒカルと打てる日。最近、ヒカルと示し合わせて、コミは通常通りでヒカルが黒、私が白で打っている。

ヒカルは攻めるのが上手くなっているけど、まだまだ勉強したいからという理由で黒を持って、私は守るのをもつと上手になりたいから白を持っている。

「あと少して、プロ試験予選だね」

「あー、そうだな。俺も免除だよな。なんかここ最近の成績で8位以内だっけ?」

「うん。3ヶ月以内の成績ね。ヒカルの場合は7位だっけ?」

「上はお前と伊角さん、越智と和谷。あとは奈瀬と本田さんか。最終順位だと、本田さんと和谷を抜いて5位になったんだぜ」

「うん。一気に上がったよね。若獅子戦の結果?」

「そうかもな。なんだかんだで、塔矢と打てたのは大きかったよ。俺と塔矢の実力の差が分かったからな。立ち止まっていられねえよ」

「ふふ。塔矢くんの前に、まずは私だね」

「ちえっ、分かっただらあ。今日こそ勝ってやる!」

うん、頑張ろう。塔矢くんに置いていかれるわけにはいかないもん。

でもプロ試験も層が厚い。私もそれなりに自信があるけど、伊角さんに越智くん、明日美さんはそれほど実力が変わらないと思う。ちよつとしたミスで、勝ち星を取られるだろう。ヒカルも当然強いし、外来の門脇さんって人も、学生三冠を取るくらいだから、下手を

すると院生トップクラスの実力はありそう。

そんなこんなで碁に打ち込んでいたけど、夏休みを前にようやくお母さんを説得できて、貯めていたお年玉と若獅子戦の賞金で、パソコンを購入できた。

ネット回線を引くのと、月額使用料は、お父さんに甘えたら出して貰えることになった。パソコン自体は自室に置かず、リビングに置くのが条件のひとつ。他の人も使えるというのと、変なことしていないというのと。

家族は誰も囲碁が分からないし、もちろんsaiも知らないから問題ない。

「ヒカル、今日はちよつと、うちに来ない?」

「何かあんの?」

「ふふ、とっておきのお楽しみがあるの」

ヒカルが家に来るのは、凄く久しぶり。ずっと私が行っていたからね。

「じゃーん。どう?」

「うわ、パソコン買ってもらったの? いいなあ」

「ネットの月額とかは払ってもらってるけど、パソコンは自腹だよ。ほら、若獅子戦の賞金とかでね」

「へえ。……もしかして、俺のせい?」

「まさか。佐為が打つために来てくれて構わないけど、私もネット碁打つし、何かと便利なんだよ」

インターネットを楽しむ以外にも、これまでノートに付けていた棋譜は全部PCに移すつもり。ただ、データは消えちゃう危険性もあるので、ノートに書いてからPCに打ち込むのは変わらない。

あとは言えないけど、私がヒカルの家に行くばかりじゃなく、時々うちに来るというのも、色々と大事。

「ふうん。で?」

「で? って。ネットカフェに行かなくても佐為がここで打てるようになるよ」

「いいの？ やったぜ！ いちいちネットカフェに行くのも面倒だったし、三谷のおねーさんいない時はお金かかってたしさあ」

「ふふ。お母さんとお姉ちゃんに、私がない時でも使えるように言っておくから。あ、でも2人のどちらかが使ってる時は駄目だからね」

「わーってるよ。それで、打っていい？ 佐為が打ちたいってうるさいんだよ」

「うん。どうぞ」

「ありがとう」

さっそく、ヒカルがネット碁を開始する。ログイン早々、対局申し込みが入った。佐為は誰が相手でも気軽に受けるから、申し込みが多いんだよね。

ほとんどの相手があまり強くないけど、時々凄く強い人がいる。韓国や中国のプロとも、何度か対戦しているみたい。

今はプロ試験を控えているし、ヒカルの気を散らせるわけにはいかないから無理だけど、そのうち佐為と塔矢先生を対局させてあげたい。そのためには、ネットカフェじゃなくてここで打てるのは本当に大進歩だね。

「ネットで調べただけだね。佐為が誰かって考察してるサイトとかもあつたよ」

「へえ……。って、まずいんじゃないの？」

「大丈夫、ほとんどの外れだし、和谷くんの推理ほどの確なのは少ないから。面白いのだと、離島で医者かなにかじゃないかって説。他に医者がいらないから離れられず、プロになれない。でも実力が桁違いに高くて、ネット碁を覚えたから楽しくて仕方がないっていう感じだった」

「へええ、色々考える奴いるんだなあ」

「それだけ佐為と対局したい人が多いってことね」

一応セキュリティも気にしてるし、どこからアクセスしているか調べたりなんかできないはず。ネット碁を提供している会社が調べたら分かっちゃうかもしれないけど、さすがにそんなことするはずない

し。

話しているうちに佐為が勝って、次の対局申し込みが来る。一柳先生だ。

「お、ichiryuだ」

「一柳先生、時々いるよね」

「結構打ってるぜ。かなり強いから、佐為も喜んでるし」

かなり強いっていうか、凄く強いよ。でも、佐為には一度も勝てていないみたいね。一柳先生が弱いんじゃない、佐為が強すぎるんだ。

本当に、相手になるのは韓国のトッププロか、塔矢先生くらいだと思ふ。

それはそうと、佐為と一柳先生の対局。途中、一柳先生の渾身の一手があつて形勢が傾くかと思つたけど、佐為が負けじと何度も攻め立てて、主導権を握り返した。

「決まりだね。佐為は凄いね」

「ああ。ずっと負けなしだもんな」

一柳先生にも、他の誰にも負けない。そりや噂にもなるよね。

その日はずっとネット碁を打って、1日を終えた。

夜、お風呂上がりにひと息ついていると、座ってテレビを見ていたお姉ちゃんが、ニヤニヤと笑いながらからかってくる。

「あかり、パソコン買って良かったねえ」

「うん。買えなかったとしても、ずっと一緒に碁は打つけどね」

笑って返すと、ため息ひとつ。

「はあ、からかいが無いわね。あーあ、私も誰か探さないと。あなたの知り合いで、いい人いない？」

「……いると言えはいるけど、お姉ちゃんと付き合うとか、あまり想像できない」

まず頭に浮かんだのは、塔矢くん。まじめだし、見た目もいいし、将来性も高い。可愛いところもあつて、なかなか他にいない。

他にも緒方さんとか、伊角さんとか。現実的な線としては、筒井さんとか。和谷くんはしげ子ちゃんを応援してるので駄目。

加賀さんも凄い人なんだけど、義兄になるのはちよつと嫌かな。

「どこまで本気？」

「んー。本気と言えばどこまでも本気。本気じゃないと言えれば、ちつとも本気じゃない」

「もうっ、何よそれ。つまり本気じゃないってことよね」

「もしあかりが紹介してくれるなら、それは本当におすすめなんだろうし、まじめに話をするわよ。あかりの顔を潰すわけにもいかないからね。でも、あかりが紹介してくれるとは思ってないから、そういう意味では本気じゃない。というか、あかりの知り合いなら囲碁関係者でしょ？ 四六時中囲碁まみれは、私にはちよつと無理かもね」

うーん、なんだか煙に巻かれたような……。つまり、深く考えなくていいってこと、だよな？

「囲碁部の先輩とか、もしかしたらお姉ちゃんも知ってるかも」

「うん？ あんたの先輩ってことは、1つか2つ下？」

「1つ下かな。囲碁部の部長だった筒井さんって人とか、将棋部の部長だった加賀さんって人とか」

「筒井って人は知らない。加賀は悪名高い、あの加賀でしょ？」

ああ、やっぱり加賀さんは有名なんだ。まあ中学生で煙草吸ってるし、素行は良くないよね。頭は良いんだけど。筒井さんは知らないみたい。一学年下の、接点ない人を知ってたなら、それはそれで問題だね。

「他の知り合いは、どうだろう。明日美さんみたいな美人と一緒にいてもなびく様子もないし、結構難しいと思うよ」

「ああ、たまに電話で話してる子よね。可愛いのか？」

「凄く美人。年齢は、お姉ちゃんのひとつ下」

「ふうん。囲碁も強いのか？」

「強いよ。今年も一緒に合格しようって頑張ってるんだ」

「つまりあれね。プロの卵たちは、色恋沙汰をしている場合じゃないわけだ。そんな暇があったら、プロになるための努力をする、と。あかり、ヒカルくん追いかけてて大丈夫？」

「大丈夫。囲碁の勉強は手を抜いてないし」

「ああそう、ごちそうさま」

「お姉ちゃん、ヒカルに余計なこと言わないでよ」

「分かっているわよ。馬に蹴られたくないもの。プロになってから、告白するんでしょう？ まあ、頑張って」

そんなことを言い残して、お姉ちゃんはお風呂に向かった。

もう。言いたい放題なんだから。ヒカルに変なこと言わないか心配ね。私がない時は、ネット碁をするのはほどほどにしてもらった方がいいかも。

そんな日々を過ごすうちに夏休みに入り、プロ試験予選が始まる。予選が終わって、フクくんから経過を聞いた。

「じゃあ、フクは予選自体は通ったものの、門脇に負けたんだな？」

「うん。強かったー。去年やった塔矢くんほどじゃないけど、もしかしたら伊角さんくらい強いかもー」

強いと聞いて、警戒心を持つ。それは他のみんなも同じようで、伊角さんと和谷くんが話をしている。

「伊角さん、門脇知ってたよな。どんな棋風？」

「そんなこと知らないさ。あくまで、何年前だったかな、学生三冠取ったってくらいだよ」

「えつとね。僕と打った時は、地を優先してて、それほど攻めてこなかったー。でもこっちから攻めたのに、気がついたら受け手に回って、どうしようもなくなっちゃったんだ」

分かるような、分からないような。

警戒は必要だけど、だからといって、どうしようもないよね。

「俺も門脇とやったぜ。あれ、多分そうなんだと思う」

「小宮。やったって？」

近くで聞いていた小宮さんが、話に入ってきた。小宮さんは院生順位8位で、予選は受けてないよね。どういふことなんだろう？

「院生研修を終えて帰ろうとしてたらさ、ちよつと腕試ししたいってオッサンが話しかけてきたんだよ。帰っても1人で勉強するだけだし、せつかくだし受けたら、これが強くてさ。あえなく負けちゃった

んだよ」

小宮さんが負けるってことは、相当強いよね。どの対局も油断なんてしないけど、門脇さんとの対局は、特に気をつけておかないと。

「ふうん。なあ、伊角さん、和谷。また来週にでも、碁会所行かねえ?」

「空いている日ならいいぞ。えーつと、金曜なら」

「やった! 武者修行つてやつ、やりたかったんだよ。外来つてオツサンばかり来るんだろ? そういうのも慣れておかないとさあ」

「しよつちゆう河合さん達と打ってるじゃないか」

「そりやそうだけど、あそこはもう慣れちゃったんだよ。もつと別のところに行きたいっていうかさ」

ヒカルが、伊角さんや和谷さんに声をかけている。予定のない日なら付いていきたいけど、金曜は塔矢先生の研究会だから無理。残念だけどしょうがない。

ヒカルと一緒に碁会所を回るのも勉強になるけど、塔矢先生の研究会の方が良いはず。碁会所だと打つのはヒカルだし、佐為の話も聞けないし。

面白い対局があれば、帰ってから聞いてもいいからね。

そして金曜日、塔矢先生の研究会。塔矢くんの顔を見たら、お姉ちゃんとの会話を思い出しちゃった。

「藤崎さん、どうかした?」

「あ、いや。ごめんね、何でもないの」

不思議そうに塔矢くんが首をかしげる。そんなに変な顔をしちやっただかな。気をつけないと。

それ以外は取り立てて問題はなかったけど、塔矢先生の家を出た後、明日美さんに肩を抱きかかえられた。

「きやつ。明日美さん?」

「あかりちゃん。今日のは何? 浮気?」

「え、何が」

「塔矢くん見て少し顔を赤くして目を逸らすとか、怪しいなあ」

嘘、顔まで赤くなってた? それは良くない。勘違いさせちゃって

たらどうしよう。

「それはその、塔矢くんを意識したとか、そういうのじゃなくって」

「ふうん。じゃあどんな理由？ お姉さんに話してみなさい」

明日美さんがお姉さんぶって言うてくるけど、本物のお姉ちゃんはもつと馬鹿なことを言うんです。

渋っていたら、駅前でコーヒーショップに引っ張られた。これは、話すまで帰らせてくれない感じだ。どうしたんだろう、明日美さんらしくないけど。

「実はね……」

お姉ちゃんがいい人がいれば紹介してほしいって言うてて、塔矢くんが頭に浮かんだ、という話をする、明日美さんが目に見えて機嫌が悪くなった。

あれ、これは……。

「ふうん。で、あかりちゃんは、塔矢くんをお姉さんに紹介するんだ？」

「しないよ。しないけど、ちよつと思ひ出しちゃっただけ」

「……そう。それならいいけど、塔矢くんも昇段して忙しくなるし、あまり雑事で手を煩わせるのも良くないからね」

「うん。そうだね」

自覚があるのかどうか分からないけど、こういう時にあまりいじるのは良くない。ムキになって、逆効果つてこともある。塔矢くんもヒカルと一緒に、女の子なんて二の次だもんね。

いや、碁が1番で、佐為の謎が2番だから、三の次？ そんな言葉ないけど。

何度か確認されつつ、何も行動しないと約束して、ようやく解放された。つ、疲れた。

家に帰ってヒカルの話を聞くと、どうやら韓国の研究生と対局したらしい。えー、いいなあ。棋譜を再現してもらおうと、凄く楽しそうな一局だった。

「結果は俺の6目半勝ちだけだし、1手か2手ミスってたら負けてた

「かもしれないし、面白かったぜ」

「うん。ここの打ち回し、上手いよね。ヒカルらしきもある良い手」
「だろー。へへ。最近、佐為じゃなくて、俺自身が院生内や韓国の研究生にも勝てるようになってきてるし、塔矢だって佐為が打った碁を追いかけてるけどさ、そのうち俺の碁で消してやるさ」

ん？

「消す？」

「ああ。佐為の碁が俺だって思われてるからさ。俺の碁で上書きしてやんねーと」

ヒカル、思い違いをしてる。一局の大事さ、それは消えることなんてない。

棋譜に残っているかどうかだけじゃない、打った事実を消すということは、存在自体が消えるということ。

私の前世で私が打った碁は、この世にはないけど、私は今でも覚えている碁はある。中学最後の大会で打った一局。結婚の報告を聞く前、最後にヒカルと打ってもらった一局。

私の中にしかないけど、両方とも大事な、それこそ消えると私が消えてしまいそうな対局なの。

「小6の頃に、塔矢くんと打った碁は、佐為と塔矢くんの碁だよ」

「なんだよ、うるせーな」

「ヒカル、真面目な話。ここで打ってる、ヒカルと佐為の対局。私と佐為の対局。そして、ヒカルと私の対局。私はヒカルとの対局が一番大事だけど、佐為との対局もとても大事なの。もちろん、ヒカルと佐為の対局を見るのも大事」

「そりゃまあ、そうだけどさ……」

「勉強のためってだけじゃないよ。ヒカルとも佐為とも対局すると楽しいんだけど、ヒカルは違う？」

私の言葉に、ヒカルは気まずそうに顔を背ける。

「確かに塔矢くんは意味が分からないというか、ヒカルとの謎の碁になってると思う。でも、私たちは佐為を知ってるんだから。消す必要なんてないよ。ヒカルはヒカル、佐為は佐為。それでいいじゃない」

しばらく沈黙が続いたけど、ヒカルが、はあっと大きくため息を吐いた。怒ったかな？ でも、ここは引けない。引いちゃったら、私の全てが、意味を失う。

「わーったよ。悪かった。俺だって、別に佐為が邪魔なわけじゃないんだけどさ。ネット碁で佐為に打たせてたら、俺が打った分は、俺だって思っちゃったんだよ」

「うん。実際に佐為が見えて、佐為の代わりに打ったのはヒカルなのに、偉そうに言っでごめんなさい」

「いいって。もう分かったから。……佐為も、ありがとうだってよ」「うん」

怒ってないようなら良かった。安心したら、気が抜けた。

喧嘩というわけじゃないけど、こういう言い合い、やったことなかったし、嫌われたらどうしようって、今になって凄く怖くなってきた。

「ああもう、また泣いてる。お前、最近泣き虫だなあ」

「これは違うの。安心したというか」

「はいはい。……佐為、うっせーよ」

ん？ ヒカルが少し赤いけど、どうしたのかな。まさか知恵熱!?

「ヒカル、体調悪くない？ 知恵熱？ もうすぐプロ試験が始まるのに、倒れたら大変！」

「……はあ？」

すぐにおばさんに言って、ヒカル寝かさなきゃ！

第25手 プロ試験 その1

8月27日、プロ試験初日。

ついにこの日が来た。うう、緊張するなあ。

「あかり、忘れ物ないわね。ハンカチ持った？ お財布は？」

「大丈夫、全部持った。頑張ってくるね、行ってきます」

お母さんに手を振って、ヒカルの家に向かう。すると、珍しくヒカルが準備を終えて、家の前に出てきていた。

合流して、おばさんに挨拶してから、並んで歩き出す。ヒカル、結構背が伸びてきた。もう追い抜かれてるけど、そろそろ目に見えて差が分かりそう。

「おはよう、早いね」

「おー、おはよう。俺だって、今日くらいは早起きするさ」

「そうだね。今日は大事な日だし。でも、気負いすぎないようにね」

「だ、大丈夫。あー、今日は誰と当たるだろう」

「誰になるだろうね。ああ、1戦目でヒカルや明日美さんじゃなければいいんだけど」

私が少し憂鬱な気分になっていると、ヒカルは力強い声で励ましてくれた。

「必ずどつかで当たるんだから、1戦目でも問題ないさ」

「……うん。そうだね、ありがと。当たったら、簡単には負けないよ」

「俺だってー！」

あつけらかんと言ってくれる。

ヒカルってば、私よりずっと堂々としてる。本当、負けないように頑張らないと。

「誰が相手でも気は抜けないけど、特に手強いのは、お前を除けば伊角さん、越智、和谷と奈瀬あたりだな」

「うん、そうだね。門脇さんって人も、気を付けた方が良さと思う。あと、今まで2回対局してるけど、本田さんも強いよ。布石が安定していて、白を持つとコミ分をそのまま守るのが凄く上手いの」

「あー、確かに」

私の寸評に、ヒカルも頷く。ヒカルが打ったのは少し前だけど、その時は負けていた。他に気になる人は、というと。

「足立さんと小宮さんは、悪いけど今名前が上がった人よりは少し落ちるかな。ちゃんと打てば、勝てると思う」

「えっ、そりやそうだけど、勝てるって言い切るのは難しくねえ？」

「うーん。弱いわけじゃないんだけど、怖さがないの。そういう意味では、フクくんの方が苦手かな。院生研修で、唯一半目差のギリギリになったの、フクくんなんだ。早碁に釣られたんだけど」

「へえ。俺はフクには負けなしだぜ。すっげえ打ちやすいし」

「2人とも、早いもんねえ。プロ試験だと持ち時間が長いから、フクくんの長所が活かしきれないよね」

まだ小学生だし、強くなるのはこれからだろう。というか、去年もプロ試験本戦まで進んでいるのは、結構凄い。

そんな話をしているうちに、棋院センターに到着した。プロ試験の本戦は、本院ではなく、センターで行う。

「おう、進藤。藤崎も」

「和谷くん。おはよ」

着いて早々、和谷くんが声をかけてきた。他にも院生がちらほらいるので、挨拶をかわす。明日美さんはまだみたい。

外来も結構来ている。

雑談していると、飯島さんが寄ってきた。

「よう。お前ら、今日も一緒に来たのか？ 仲良いなあ」

「べ、別に俺はそんな！ ただ家が近いだけで！」

「ヒカル、落ち着いて。怒鳴るようなことじゃないよ」

あら、意外。飯島さんが盤外戦とは。

「羨ましいですか？ ヒカルの隣は変わってあげませんけどね！」

「……普通、進藤の隣じゃなく、進藤の位置じゃないのか？」

うふふー、と笑いを返す。適当なところで飯島さんが離れたけど、ヒカルもちよつと離れた気がする。

「あかり、今のは？」

「ここ一番の時に、ああやって気を散らす目的で色々と言ってくる人

もいるの。真に受けず冗談で返すのが一番だよ」

「冗談、だよな。うん。俺はお前の発言の方が驚いたぜ」

「あはは。じゃあ作戦成功だね」

佐為は見えないからどうしようもないけど、ヒカルの隣を渡したくないのは、本当。親友という立ち位置に納まるつもりもない。まあ、今はそれどころじゃないけど。

入り口の方をちらちらと気にしていると、ようやく明日美さんが到着した。

軽く手を振って、明日美さんと呼ぶ。

「明日美さーん」

「あかりちゃん、おはよー。ちゃんと眠れた？」

「うん、大丈夫。明日美さんは？」

「まあほどほどに。進藤は大丈夫？」

「うん」

私たちが話し始めると、ヒカルは和谷くんや伊角さんのところに向かった。

10分程度雑談していると、集まるよう放送が入った。

明日美さんと領き合って、対局場へ向かう。

順番に名前を呼ばれて、くじを引く。出た番号は18番。

1戦目からいきなり、ヒカルとの話にも上がった本田さん。これは気を引き締めないね。ヒカルは……飯島さんと対戦ね。

「いきなり藤崎か」

「当たっちゃいましたね。でも27戦、必ず全員と当たるから」

「そうだな」

さっそく準備を進めて、合図を待つ。ここから27戦、長丁場だから1戦ごとに一喜一憂せず、前の結果を次の試合に持ち込まないようにしないと。

「よろしくお願いします」

対局が始まり、私が白石になる。本田さんの攻めを避けつつ、逆に薄いところをこちらから攻める。昼を挟んで、早い段階で本田さんが守れず地に明らかな差が出てしまい、勝敗が決した。

「ありません」

本田さんの投了の言葉に、お互いに挨拶をかわす。良かった、勝てた。今日はちよつと緊張しちやつてたから、怖かったんだよね。

「じゃあ、押してきます」

一言残して、勝ちのハンコを押しに行く。

他の組み合わせを見てみると、私はヒカルとは23戦目、明日美さんは最終戦だった。明日美さんのひとつ手前が門脇さん。

うわあ、和谷さんと越智くんが隣り合ってる。そのせいで、ヒカルが26戦目が和谷くん、最終戦が越智くん。最後の山場になるかもしれない。

「お、藤崎も勝ったの?」

「うん。替わるね」

和谷くんが終わったみたいで、ハンコを押しに来た。横に避けて、和谷くんが押すのを見ながら、雑談に興じる。

「どうだった?」

「なんとかな。俺、次が門脇さんって人で、続けて奈瀬と本田さんだからなあ。結構きついぜ」

「続くと大変だよね」

そういえば、と部屋を見渡す。

門脇さんの顔を見ようと思っただけど、対局相手も外来のせいで、どちらが門脇さんか分からない。

邪魔にならないよう近づいて、盤面を見る。うわ、圧倒的。きつと、勝っている方が門脇さんね。確かに伊角さんと同じくらいに強いと思う。実際のところは、打ってみないと分からないし、相性もあるけど。

そのまま、周りの様子を見る。ヒカルも勝って、明日美さんも同じ院生の女性、佐々木さんに勝った。

フクくんは残念ながら越智くんと当たって負けただけど、他はだいたい勝ったみたい。

「あかりちゃん、勝った?」

「うん。明日美さんもおめでとー」

「ありがとね。でも、3戦目が和谷で4戦目が越智、序盤からシビアな相手が続くよ」

「うん。さつき和谷くんとも話してたけど、続くと大変だよね」

まったく同じことを言っちゃってるけど、本当にそう思う。

私は伊角さんとの対局が連戦に混ざらないから、比較的楽な位置にいると思う。あと、明日美さんは嫌がっていたけど、明日美さん自身も、すぐ後ろに本田さんがいるし、前に門脇さんがいる。そのせいで門脇さん、明日美さん、本田さんが並んでいるんだよね。あの明日美さんは、門脇さん、伊角さん、本田さんと並んでいる。相当大変な3連戦よね。

……。ん、あれ。門脇さんの顔、どこことなく見覚えがあつたし、この3人の並びにも見覚えがある気がする。

駄目駄目、今はプロ試験中なんだ。ちよつと気になるけど、よそ事に意識を向けている場合じゃない。

「あかりちゃんとは最終戦かあ。つてことは、受かろうと思ったたら、それまでに合格を決めておかないと駄目かあ」

「弱気じゃ駄目なんじゃない?」

「うん、まあね。でも、あかりちゃんに勝つのは、最終戦で全勝対決するより難しいと思ってるからね」

いやいや、そこまでじゃないよ。さすがにそれは買いかぶられている。塔矢くんほど圧倒的な実力じゃないし、どこかで取りこぼしは出るだろうし、立て続けに取りこぼしたら、合格も怪しくなっちゃうし。

でも明日美さんと当たった時、どっちも合格が決まっているというのは、凄く素敵な話だよな。そうなれるよう、途中で負けないように頑張らないと。

帰り道。ヒカルと一緒に歩きながら、プロ試験中の勉強会はどうするか相談する。

「どうしよつか。もし邪魔なら、行かないようにするけど」

「邪魔じゃねえよ。つていうかさ、俺が打ち始めてから、ずっとお前来てるじゃんか。今さら気を使ってどうすんだよ」

「うん。でもプロ試験だから。私も一応、ライバルなんだし」

「まあ、そうだな。お前とは、23戦目だったかな。だいぶ先だし、気にしすぎてもしよーがねえよ」

良かった。たった2ヶ月だけど、お預けになるのは寂しいと思っていたから、気にしないなら何より。

と、ふふつといきなりヒカルが笑った。

「どうしたの?」

「佐為が、しばらく自分のネット碁はいいってよ。佐為が打てる機会を譲るなんて、滅多にないぜ」

「あ、それは駄目」

「え?」

私が駄目を出すと、ヒカルが首をかしげる。あれ、分からないかな。

「もし佐為が、二度とネット碁を打たないならいいんだけどね。今後も打ちたいなら、プロ試験の期間だけ打たないっていうのは、避けた方がいいよ」

「ああ、そういうことか」

そう、まるでプロ試験に夢中だったから佐為が現れなかった、そう思われたら大変。

誰とは言わないけど、同じ年齢の、妙に最近大人しい男の子にね。「だから、ヒカルは、というか佐為はネット碁を続けなきゃなんないの」

「分かった。じゃあ、今まで通り、俺とお前、俺と佐為、お前と佐為、佐為のネット碁を日替わりで回す感じだな」

「うん。それが良いと思う。今までだって時々ずれていたから、必ず4日ごとじゃなくていいんだけどね。ついでに、本戦があった日は、その検討も少ししようか」

「おう」

プロ試験に挑む同士で情報共有するのはずるいかもしれない。

でも、勝ち星を奪い合うからといって疎遠になる必要なんてないし、実際にヒカルと当たった時は本気で挑むつもりだし、卑怯なことをしているわけでもない。

考えすぎると混乱するし、この件は深く考えない。

これまで通り。プロ試験で、緊張感のある対局が続くけど、それ以外は、何も変わらない生活が続く。そう思う方が、気負いすぎずに良いんじゃないかな。

続く2戦目。私もヒカルも、明日美さんも勝ったけど、和谷くんが門脇さんに負けた。

シヨックだったみたいで口数は減っていたけど、しばらくしたら復活した。さすが、場数を踏んでいるだけある。

でも和谷くんの次の相手は明日美さん。厳しい対局が続く。

夏休みが明けて、学校が始まってから行われた3戦目。明日美さんが和谷くんに勝った。和谷くんは2連敗。実力は十分なのに負けが先行すると、気が沈む。和谷くんは明日が本田さんと対局だし、ちよつと心配ね。

ちなみに、和谷くんに勝った門脇さんは、越智くんに負けていた。

「和谷くん。大丈夫？」

「ん？ 何が？」

「負けが続いたから、気落ちしてないかなって」

「大丈夫。俺が負けた相手、強かったからな。言っちゃ悪いが、格下だったら落ち込んでたかもしれないけど、俺も実力を出して打った結果だからしょうがないさ」

話を聞いて安心する。ちゃんと打てたのなら、何より。

「大丈夫そうね、良かった。3枠しかないから、人の心配している場合じゃないんだけど、実力を出せなかったら、後悔するもんね」

「そうだな。待ってるよ。俺だってここからだからな。直接負けたからって、それで結果が出るわけじゃない」

うん。お互い頑張ろう。

そして、4戦目。明日美さんが越智くんと当たって、越智くんが勝った。他には、全勝同士の伊角さんと小宮さんは、伊角さんに軍配

が上がった。同じく全勝だった足立さんも、外来の片桐さんという人に負けた。

明日美さん、落ち込んでいるかなと心配したけど、なんともなさそう。

「負けちゃった。そこそこ打てていたんだけど、越智は攻めにくくて苦手なのよね」

「今まで打った感じ、越智くんは地を気にしすぎるところはあるけど、攻めるのも守るのも、読みの鋭さも高レベルだよね」

「そうだね。ああ、悔しい。次やる時は負けないんだから」

次やる時、か。どちらかが受かったら、相当先の話になる。意識して言った言葉じゃないと思うけど、明日美さんのリベンジ、いつになるのかな。

5戦目、6戦目と順当に進み、6戦目終了時点で、ヒカルと越智くん、伊角さんと私が全勝、門脇さんと明日美さん、小宮さんが1敗で続く。和谷くんは2敗。外来の片桐さんも2敗。片桐さんは私と伊角さんに負けたけど足立さんに勝ってるし、かなり強かった。

「全勝が4人かあ。進藤も負けてないけど、今のところそれほど強豪とは当たってないな」

「ああ。他には、現状の全勝者にだけ負けているのは、門脇さんと奈瀬か」

「去年は塔矢が突出していたけど、今年もやっぱり厳しいよな」

和谷くんと伊角さんが話している。明日美さんもいたので近寄ると、成績表の前を空けてくれた。雑談を続けながらも、伊角さんがこちらを気にする。少し話して、すぐに移動し始める。ヒカルを待たせてるし、早く行かないと。

「伊角さん、明日はよろしくお願いします」

「ああ。お手柔らかに」

そして、7戦目。私は伊角さんと対局がある日。

伊角さんは最終月で越智くんに院生順位を抜かれていたけど、伊角

さんの評価が下がるわけじゃない。

警戒しつつ打っていたせいで、お互いにゆつくりと進行した。お昼の時点で、まだ序盤から中盤に入ろうとするところ。

時間は、お互いに1時間以上使っている。

さて、昼からは少しペースを上げないと、秒読みになって打ち間違っても気にしなくちゃいけないくなる。

「明日美さん、どう?」

「確実なわけじゃないけど、今のところ悪くないよ。伊角さんと、きつい?」

「んー。やっぱり強いね。でも今のところ、まだ中盤に入るかどうかってところだけど、そんなに悪くないよ」

私も結構慎重に打つ方だけど、伊角さんはそれに輪をかけて慎重な打ち方をしている。色々と考え過ぎちゃうのかな。こうして真剣勝負をしていると、色々と知らなかった部分も見えて、面白い。

「私も1敗したけど和谷には勝ってるし、残り全部勝つ気で頑張るよ」
うん。頑張ろう。

そして昼休憩を終えて、午後から続きを打つ。途中、上手く打たれて困る場面があったけど、別のところで相手の地を潰して、ギリギリ2目半差で勝利を収めた。

「くそっ、勝てそうだったのに」

「うん、危なかったです。こっちの地を潰しに行くのが一手でも遅かったら、間に合わなかったです」

自分でも上手く打てたと思う。佐為ならどう打つか、と考える癖がもう身についちゃった感じ。実際に佐為のように打てるわけじゃない。盤面全体を睨んだ一手なんて、打てるものじゃない。

でも、2つの意味を持たせた一手や、今しかないというタイミングでの打ち込みは、かなり安定してきたように思う。

だから塔矢くんとも良い勝負ができたし、研究会での手合わせでは勝つ時もあるくらい。とはいえ深く考えないと厳しいから、時間制限があるとそう何度も考え込めない。今はまだいいけど、普段はもっと早く打てるようにならなきゃ。

ヒカルが時々打つ、一見すると悪手だけど、打つていくうちに好手へと化けるような打ち方は、あまりしていない。読み負けたら丸々損になるし、私にはまだ早い。ああいう打ち回しは、もうすでにヒカルの方が上手なんだよね。

もっと相手に合わせてプレイスタイルを変えられると、勝ちやすいんだろうな。伊角さんと打つなら、ある程度早碁を意識したら、きっと伊角さんの持ち時間が厳しくなって、もっと楽になると思う。

つて、伊角さんとの対局は終わったし、次のことを考えよう。

2 試合挟んで、和谷くんと越智くんの連戦。負けないように頑張ります。

第26手 プロ試験 その2

伊角さんとの対局の後、8戦目と9戦目は順当に勝利を収めた。

この時点で、全勝は私以外にヒカルと越智くん。

私に負けた伊角さん、越智くんに負けた明日美さんと門脇さんが1敗で並んでいる。

そして10戦目、和谷くんとの勝負。

「和谷くんが森下先生の弟子になってからずっと打ってるけど、本気で勝負する場では初めてだね」

「ああ、そうだな。お前は全然プロ試験を受けなかったもんな。今年から院生になったのは、やっぱり進藤の影響か?」

「うん、そうだね」

「幼なじみとはいえ、碁を打ち始めてすぐの奴に影響されるってどうなんだよ」

「まったくです。照れてしまつて笑つてごまかすと、小さく肩をすくめられた。」

「何にせよ、やっぱり簡単じゃねえよな」

「そりゃ、プロになったら碁を打って食べていくってことだもん。大変だよ」

プロ試験自体は勝ち負けを競うけど、プロになっても、ただ勝負に勝てばいいってわけじゃない。

お客様がくるイベントで指導碁や解説をしたり、秒読みや棋譜の記録係も、お手伝いでやってる今より格段に増える。大盤解説はまだまだ先の話だけど、そのうちやれるようになりたいな。

とはいえ、受かつてないうちから考えることじゃないね。相手は和谷くん。強敵の1人。

真剣な顔で前を向くと、目が合った和谷くんが子どもっぽく笑う。ふふ、和谷くんも大変なはずだけど、プロ試験を楽しんでるのが分かる。こういうところは本当に和谷くんらしい。しげ子ちゃんに教えてあげよう。

かなり激しい戦いになったけど、結果は私の中押し勝ち。私の攻めを和谷くんがかわしきれずに、私が目数で上回って、決着が付いた。残念そうだけど、負けたことそのものより、検討したいらしい。

「いいけど、他の人を見なくていいの?」

「ああ……。ここ、お前が打った一手、俺が先にこつちを攻めてたらどうなった?」

「あつ、そつちは無視できないね。私が受ける側になるから、その先どうなるか分からなかったかも」

「そつか、俺もまだまだだな。ありがとうよ」

「うん、こちらこそ」

和谷くんが対局後に示した手は、思い付かなかった。和谷くんも、ネットのsaiを追いかけてるからかな? こそぞという時の、最善の一手を追求しているように感じる。実際、和谷くんが対局中に気付いていたら、負けていた可能性があっただろう。

他の結果を見ると、ヒカルと明日美さんが勝っている。休憩室に行つて、2人と合流する。伊角さんも混ざって話していると、越智くんが寄つてきた。

「藤崎は和谷に勝つたの?」

「うん、勝つたよ」

「そう。じゃあ、初の黒星を付けるのは僕だね。伊角さんにも期待してたんだけど、残念だったよ」

「なっ」

越智くんの言葉に、伊角さんが言い返そうとするも、その前に明日美さんが割つて入ってきた。

「越智、あんた偉そうに言ってるけど、あかりちゃんに勝つたことないでしょ」

「明日は勝つよ」

「そう。対局、楽しみにしてるよ」

越智くんは勝利宣言されたけど、軽く流す。

フンと鼻を鳴らして去っていく越智くん。

「何よあれ、感じ悪い。伊角さんも、言い返しなよ」

「今のは、伊角さんが言い返す前に奈瀬が割り込んだだろ」

「そんなことないよ」

あるある。明日美さん、負けん気が強いよね。

「あかりちゃんも！ 言われたい放題だったじゃないの」

「うーん。プロを目指してるんだし、ある程度牽制してくるのも当然だと思う」

「まあ、悔しいけど実力はあるよな」

こちらに向いた矛先を納めてもらおうとしていると、伊角さんも私に同意してきた。

口を開きかけた明日美さんに、ひと言付け足す。

「もちろん勝つ気で打つし、勝負で引いたりしないよ」

「そりやそうよ。誰だつて、一戦も手を抜いたりしない。そんなの分かっているけどさ」

への字口をしつつ、言葉通り、悔しそうにしている。

「今年が良い感じだし、合格したいけど、そうになると越智に負けたのは響くなあ」

「まだー敗だし、これからよ」

変に欲が出て、打ち方が荒くならなければいいんだけど、ちよつと心配。

そんな話をしていると、和谷くんもこちらに向かってきた。

トイレに行っていたようで、伊角くんにもつと籠もらなくていいのか、と揶揄されている。

なんだかんだで、みんな越智くんのことよく見てるよね。負けた後、越智くんがトイレに籠もるのも知ってるし。

「もう3敗してるけど、越智とは相性いいし、これ以上負けてられねーからな。伊角さんにだつて負けねーよ」

「確かに、和谷はちよつと負けが込んでるな。進藤が負け無しだったのに」

気合いを入れた和谷くんを伊角さんが茶化して、和谷くんが食ってかかる。

ここにいるメンバーは結構上位陣だと思うけど、ギスギスしないのは良いことだと思う。

ヒカルは来週の伊角さんとの対局を皮切りに、門脇さんと明日美さん、本田さんとの連続対局もあつて、かなり厳しい戦いが続く。最終戦とその手前が越智くんと和谷くんだし、本当に大変だね。

2日後の11戦目。越智くんととの対局が始まった。

「今日はよろしく」

「こちらこそ、よろしくね」

越智くんの弱点はハッキリしている。地にこだわりすぎるところ。こちらが大きく模様を広げて崩されなければ、勝ちは見えてくる。私自身、攻めるより守る方が得意だから、相性は良いかもしれない。今日の対局も、やっぱり越智くんは地に辛い打ち方になっている。それが悪いわけじゃないけど、攻め方が緩かったらなかなか盤面が有利にならない。越智くんの碁は、地味だけど悪い碁になりにくい安定さがある。でも、ヒカルの打つ後々活きるような一手はきつと打てない。

後半、越智くんが荒らしに来たけど、打ち間違うことなく最後まで耐えて、勝ちが確定した。

「3目半差、だね」

「……ありがとうございます」

小さくつぶやき、碁笥に碁石を片付けると、私より先に越智くんが席を立った。慰めるのもおかしいし、放っておくしかない。

「あかりちゃん、越智に甘いよね」

「わっ、びっくりした」

越智くんが去っていった入り口の方を見ていると、真後ろから声をかけられた。心臓に悪いので、是非とも止めてほしい。

「生意気なこと言われても気にしないし、今も心配そうに見送ってたし。なに、浮気？」

「そ、そんなのじゃないよ。あ、先にハンコ押してくる」

「そうだね。いってらっしゃい」

明日美さんに見送られて、勝ちのハンコを押す。他の対局は……特に気になるのはない。次は、ヒカルが伊角さんと当たるけど。

休憩室に移動して、話を再開する。

「あまり大きい声じや言えないけど、私の中では、越智くんってフクくんと同じ枠なんだよね」

「フクと？ えーっと、どういうことかな」

「つまり……お子様枠とでも言った方がいいのかな、フクくんは素直で可愛い感じで、越智くんは生意気盛りだけど可愛い感じ」

本人が聞いたら激怒すると思うけど、お子様って感じがするんだよね。越智くんは、ヒカルとひとつしか違わないのにな。

明日美さんも、若干遠い目をしている。

「それ、越智が聞いたら怒るよ」

「うん。黙っていてね」

人差し指を口元に当てて、黙っていてもらうようお願いする。しようがないな、と了承を得たところで、明日美さんが思い出したように口を開いた。

「そういえば、あかりちゃん。進藤が前に韓国の研究生と対局したの知ってる？」

「ああ、話は聞いたよ。どうして？」

「塔矢くんが知っていて、私にどう思ったか聞いて来たの。そんなの知らなかったから、何のことかと思ってね」

「……へえ」

私がいないうちに？ 塔矢くんってば抜け目ないなあ、と思ったのもつかの間。何かおかしい。何かがひっかかる。

そうだ、最近はずっと研究会に行ってるけど、塔矢くんと明日美さんで席を外した場面なんてなかったはず。

内心で首をかしげていると、気付いた風もなく明日美さんは話を進める。

「塔矢くんは中学校の先生から聞いたって言ってたんだけど、対局内容について話したかったみたい」

「塔矢くん、最近ヒカルを追いかけないと思ったら、細々と情報収集は

してたんだね」

「進藤を追いかける？」

「あ、ごめん。こっちの話」

ふうん、と首をかしげる。

「その碁、どんな内容だったか教えてくれる？」

「いいけど、今からやるには時間が足りないかなあ」

そんな話をしていると、ヒカルが和谷くんや伊角さんと談笑しながらやってきた。3人とも、勝ったようで、表情が明るい。

「お疲れ様。どうだった？」

「なんとか踏ん張ってるよ」

今のところ、全勝者はヒカルと私だけ。ヒカル、明日は伊角さんとの対局だし、これからが厳しくなってくるね。私も伊角さんと和谷くん、越智くんは終わったけど、ヒカルや明日美さん、門脇さんも残っている。

「そういうえば、伊角さんたちは進藤と研究生の対局を見てたんだっけ？」

「え？ ああ、そうだな」

伊角さんが怪訝そうに返事をする。

今話題にするのは、あまり得策じゃなさそう。塔矢くんがヒカルを気にしているのが広まったら困る。プロ試験中に、ヒカルがよそ事を気にするような話は遠慮してもらいたい。

こっそり明日美さんに耳打ちする。

「プロ試験中に塔矢くんの話題を出すのも変に気負わせかねないし、今度にしよう」

「え、そんなに気にすることかな？」

「分からないけど、念のため」

明日美さんは不思議そうにしていたけど、重ねてお願いすると素直に引いてくれた。無理強いしないのはありがたい。

言い訳に使っちゃったけど、実際に塔矢先生が絡むと、森下先生のプレッシャーは凄い。伊角さんはどう思っているのか分からないけど、和谷くんは元々塔矢くんがあまり好きじゃないみたいだし、余計

な情報は入れないに限る。

それからは当たり障りのない話だけで、早めに帰り支度を整え、研修センターを後にした。

しばらく火曜はプロ試験が続くから森下先生の研究会には参加できず、せいぜい顔を出す程度。

でも金曜は時間があるので、塔矢先生の研究会には明日美さんと一緒に参加している。

明日美さんには、いつ塔矢さんと韓国の研究生について話したのか聞いてみたいところだけど、プロ試験の途中に気が散るとよくないのでも聞けない。

ああ、でも気になるなあ。

検討が一段落して、休憩の時間。とりとめなくそんなことを考えていると、塔矢さんと明日美さんがプロ試験の話をしているのが聞こえてきた。

「じゃあ、全勝は藤崎さんと、進藤の2人？」

「うん。でも院生2位と3位の2人は、あかりちゃんに負けただけだし、進藤はあかりちゃんとの対局も、その2人との対局もまだだから、今の時点での成績は、そこまで気にすることじゃないと思うけどね。私も越智に負けた1敗だけだし、まだまだこれからよー」

「そうだね、十分にチャンスはあると思うよ。……越智っていう子が、院生の2位か3位？」

「越智は最後の月に伊角さんを抜いて2位になってたわね。どうかしたの？」

「棋院経由で、越智くんの親御さんから指導に来てほしいって依頼があったね。ちよつと暇がなかったのもあって断ったんだけど、そうか、院生の2位だったのか」

「何か気になるの？」

「いや、そういうことじゃないけど」

塔矢くんが、ヒカル以外を気にするのは珍しい。

何だろう、少し歯切れが悪い。

「指導碁を断ったのって、もしかして私たちのせい？」

「え？ いや、そんなことないよ」

明日美さんも気になったみたいだけど、塔矢くんが否定する。

塔矢くんが私たちに気を遣って、ライバルを指導するのを断ったのかと思っただけど、私たちが聞いてもそのまま言うわけないよね。問い詰めてもしようがないし、それはいいとしよう。

「そういえば、奈瀬さんはいつ進藤と当たるんだっけ？」

「進藤は16戦目だから、えっと、だいたい2週間後かな」

「そう……」

「ヒカルが気になる？」

直球過ぎるかな、とも思っただけど、聞かないと分からない。

割り込むように明日美さんに悪いと思っただけど、つい言葉が出ちゃった。若獅子戦でやったから満足したと思っただけど、そうでもないのかな。

「ああ、いや。進藤が気になるといっつか、碁の内容が気になるといっつか」

「進藤の碁？」

明日美さんは首をかしげる。塔矢くんはチラリとこちらを見ただけど、追求せずのため息ひとつ。

「それはそうと、そろそろ休憩も終わりだね。行こう」

聞きたいけど聞かないって決めてるのだろう。聞かれないのは助かるけど、その場しのぎでしかないし、いつかヒカルとも相談して、対策しないと。

そして週末。ヒカルが伊角さんと対局する日。対局のことを考えるのも大事だけど、気分 अच्छा したら本来の実力が出せなくなっちゃう。適度に関係ない話も織り交ぜつつセンターへ向かった。

到着して待っていると、伊角さんもやって来る。挨拶だけして、私やヒカルとは会話せずにすれ違う。

緊張してるのは分かるけど、ちよつと普段と違う気がする。

今日当たる飯島さんには悪いけど、小宮さんと当たるまであまり手

強い相手はいない。私よりも、しばらく激戦が続くヒカルの方が気になる。

伊角さん、門脇さん、明日美さんに本田さん。今のヒカルなら全員に勝てる可能性はあるけど、確実とは言えない。

早めに終わったら、ヒカルと伊角さんの対局を見ておきたい。

飯島さんとの勝負は、思ったよりも長引いたけど、ヒカルが終わる前に中押しで勝った。挨拶もそこそこにハンコを押して、ヒカルの対局を見に行く。

越智くんも見ていたようで、私が行くと和谷くんの方に向かっていった。

盤面に目を向けると、ヒカルが少し劣勢。まだ取り返す機会はあると思うけど、伊角さんが完璧に打ったら厳しそう。

時間は、伊角さんが秒読みに入っていて、ヒカルはまだ20分近く残ってる。もしかしたら、逆転の目が出るかもしれない。

邪魔にならないよう、少し離れて見守る。見始めて少し経った頃、明日美さんも横に座った。いい？ と小さく首をかしげたので、頷きを返す。1人で見るのは緊張感がありすぎたから、横にいてくれると嬉しい。

ヒカルは、中央でなんとか黒を分断しようとは画策しているけど、その手はどうか。

と、伊角さんが明らかに間違った方にアテかける。すぐに気付いて戻したから、手は離れてなかったと思う。

左からアテかけたけど、そのままだとコウになって中央で伊角さんの石が大きく崩れちゃう。右からアテたら、そのまま有利な手を打てる。

ヒカルも、少し戸惑った様子だったけど、ハッと気付いて、すぐに再開した。持ち時間がもったいないもんね。

ただ、間違いかけたのが効いているのか、一手一手が、少し遅い。秒読みで、かなりギリギリになっている。

ヒカルも感じたのか、少し考えて、今打つべきじゃないところに、手

を入れた。

これは、意図があるのかな。ヒカルが何の策もなく、こんな手を打つとは思えない。時間があれば読めるかもしれないけど、秒読みに入った状態で裏まで読むのは難しい。

そして、十数手進んだところで、ヒカルの意図が見えた。やっぱり適当に打ったんじゃないやなくて、ちゃんと先を読んでいたんだ。

「……ありません」

「ありがとうございます」

ふう。息つく暇も無かったとでもいうか、見ているこつちが疲れたよ。

「途中で伊角さん、アテ間違いかけただろ？ その後がちよつと焦つてたように見えたし、考える時間も無かったから、行けると思つただよ」

「そうだな」

伊角さんはすぐに席を立って、バタバタと急いで出て行った。あら、伊角さんらしくない。

ヒカルもハンコを押したのを見て、一緒に部屋を出る。

「え、本田くん負けたの？」

休憩室から、明日美さんの驚いた声が聞こえてきた。和谷くんから話を聞いていたみたい。

本田さんの今日の相手は……椿さんって人。ああ、ひげもじゃで声が大きいい人だ。負けが先行してるけど、確かに対局相手を見ると、厄介な相手がほとんど。

本田さんに勝てるってことは、しっかり実力を持つてるってことだね。当たる時は、気を引き締めておかないと。

「今日はお疲れ様」

「おー。へへ、伊角さんに勝てるって嬉しいな」

「あの手、時間があれば読みたかったけど、秒読みだったから、考えが及ぶ前に結果が出ちゃったのが残念だったよー」

ヒカルの家で、今日の検討をやっている。佐為からのアドバイスも

踏まえて、気になったのはアテ間違いの件とヒカルの一手。

「でもよ、佐為はあまり多用すると良くないって言うんだよな」

「へえ。やっぱり読まれたら不利になるから？」

「やっぱり、ってあたりもそう思ってたのか？」

「うん。佐為が打つ盤面全てを睨むような手と違って、打った時に悪手ってことは、好手に化けさせるのに失敗したら、重くのしかかるから。相手が初見の場合は十分に役に立つから、状況次第だけどね」

「言いたいことは分かるけど、難しいな」

「まあ、今は深く考えすぎない方がいいと思う。下手に考えすぎて萎縮しちゃったら大変だし」

慌てて付け足す。深く考えすぎて、勝てる試合を落としたら大変。

明日、ヒカルは相性の良いフクくんだし、普段通り打てば勝てるはず。来週には門脇さん、明日美さんとの対局もあるし、慌てず打たなきゃいけない。

「でも、もうすぐ半分なのに、2人して全勝って凄いよね」

「そうだな。佐為に鍛えてもらってるからかな？」

「それは大きいかも。私も佐為に鍛えてもらって、凄く伸びてるもん。そう考えると、塔矢先生の研究会に行って急激に実力を伸ばしてる明日美さんって凄いね」

「奈瀬も強いんだよな。和谷に勝ったし、越智にしか負けてないんだろ？」

そう。明日美さんと門脇さん、越智くんが1敗で並んでいる。

伊角さんだつてまだ2敗だし、まだまだどうなるか分からない。

最後まで油断せず、頑張らないと。

「ヒカルとの対局、全勝同士でやりたいね！」

「ああ、ホントにな」

やるからには絶対手を抜かない。それは院生になる時から、決めていたこと。

でも、実際にヒカルがギリギリの状態になっていたら、私はちゃんと打てるかな？

第27手 プロ試験 その3

ヒカルが伊角さんと対局した翌日の日曜日。

ヒカルはフクくんとは対局。他に注目するところは和谷くんと伊角さんの対局くらいで、それ以外には上位同士の潰し合いは発生しない。

「ありがとうございます」

外来の人に勝って周りを見ると、ヒカルも伊角さんたちも終わっていた。

部屋にヒカルがいなかったので、ハンコを押して、部屋の外に出る。

「藤崎、どうだった?」

「勝てたよ。ヒカル知らない?」

「あつちで座ってるぞ」

「あ、ほんとだ。和谷くん、ありがとうございます。そっちはどうだった?」

和谷くんはあまり浮かない顔をしていたので、負けたんだろうな、と思いつつ結果を聞く。

「勝ったよ。伊角さん、なんだからしくなくないっていうか、碁盤に意識が向いてない感じだったんだよ」

勝つたのに伊角さんの心配しているとは、本当に和谷くんは人が良いよね。伊角さん、昨日ヒカルに負けたのが響いてるのかな。気になると言えば気になるけど、私ができることなんてないだろう。

「負けを引きずっているのは、周りから何か言っても逆効果だったりするし、様子見るしかなさそうだね」

「ああ、そうだな。自分の碁を見失っても、自分で立ち上がるしかねえよな」

和谷くんは私の言葉に頷いて、挨拶をして帰っていった。

「ヒカル、お待たせ。どうだった?」

「ああ、危なかったけど、フクがミスしたのもあつて勝てたぜ」

フクくんには悪いけど、ヒカルが危なげなく勝てると思ってた。週末、ヒカルには大一番が待っているし、もし不安があるようなら取り除いてあげたい。

「そうなんだ。内容、聞いていい？」

「あー……そうだな、帰ったらな」

一瞬、嫌そうな顔になった。あつ、これは何か、ポカをしたのかも
しれない。それで佐為に何か言われたのかな。駄目なところを見つ
め直すのも大事ですよ、とか何とか。

明日美さんや周りの人に挨拶を残して、ヒカルと一緒に棋院セン
ターを出た。

並んで歩いていると、だいぶ目線が並行に近づいてきた。まだ少し
私の方が背が高いけど、来年には抜かれちゃうんだよね。

「なんだよ、じろじろと」

「んー？ ヒカル、背が伸びたなあって」

「嫌みかよ、お前の方が高いじゃねえか」

「女の子の方が成長が早いからね。来年の今頃には追い抜かれてる
よ」

小学生の頃は、圧倒的に小さかった。中学に入ってからもなかなか
伸びなかったけど、ここ数ヶ月で、一気に伸びてきた気がする。

成長期って凄い。

「だといいんだけどなあ」

ふふふ、身長を気にしてるヒカルも可愛い。プロ試験は大変だけ
ど、こうやってヒカルとずっと一緒にいる日が、永遠に続けばいいの
に。

って、現実逃避をしてもしょうがない。

「ヒカル、もし小さいままでも、プロになったらモテるよ、きっと」

「モテるう？ いや、それはうざってーだけじゃんか……」

「そう？」

「なんだ、お前モテたいの？」

そんなわけない。というより、ヒカルにモテたいよ。

「別に不特定多数にモテても、嬉しくないかな」

ふーん、って興味なさそうにしてる。ヒカルの場合、フリじゃなく
て本当に興味ないんだよね。一歩だけ、踏み込んでみてもいいよね？

「ヒカルと一緒にいられたら、それでいいの」

「なんだそれ。まあ、お前といるのは他の奴より楽だけだな」

「頑張つて、一緒にプロになろう」

いまいち伝わってないけど、こんな言い方じゃしょうがない。告白するのはプロになってからで、今は碁に集中しなきゃ。よそ事で気を散らせちゃったらいけない。

「明後日はともかく、来週末は大変だよ」

「ああ。門脇さんって人もここまで越智にしか負けてないし、奈瀬だってそうだな。連戦つてことを考えると伊角さんとの一戦より大変かもな」

確かにそうかも。伊角さんとの対局より、和谷さんと越智くんとの連戦の方が大変だった。

私が先に門脇さんと対局していればアドバイスができたかもしれないけど、ヒカルの方が先だから、私からは何も言えない。安定しているのは分かるけど、打つてみないとどんな碁を得意とするか分からないし、安易な言葉は逆効果だろう。

家に着いて、さつそくヒカルに今日の対局内容を聞く。

危なかったと聞いて心配していたけど、フクくんとヒカルがいつも通り早碁で打つたのと、あまり変わってない。これなら問題無さそう。

「ヒカルもところどころ打ち損じてるけど、フクくんがここで間違つたのが大きいね」

「あー、そうだな。俺も左辺の死活を、もうちよつと時間かけて考えりや良かったんだけど。久しぶりにフクと打つたから、調子良く打つてるうちに、つい」

勝てたから良いようなものの、ついで負けたら悔やみきれないよ。ヒカルも分かかってるみたいだし深くは突っ込まないけど。

検討は早めに切り上げて、ヒカルと私で一局打つ。私が白石を持つて打っていると、まるで佐為のような手が目立つ。盤面全体を見る力が上がってるのかな。

「……そこ、上手く打つたよね」

「あ、やっぱりそう思う？　へへん、俺だってお前や佐為に負けっ放しじゃないぜ」

「私は塔矢くんほどじゃないし、今のところ負けてないけど、確実に勝てるってほどじゃないよ。でも、佐為には勝てないよね」

「う、そりゃまあ、勝ててねえけど」

もし本気の佐為に勝てる実力があれば、私は当然、今の塔矢くんでもあつさり負けちゃうよ。

「でも、油断してたら負けるかもしれないだろ」

「それはそうだけど、佐為って碁で油断するような性格？」

「あー。碁では一切妥協しねえよな、こいつ」

「だよな」

実際に話したことはないけど、ヒカルを通じて会話する分には、凄く真面目な性格。それに碁を打つてると分かるけど、指導の仕方も優しい。

その一方で、碁に関する妥協は一切ない。この前、部屋に入って塔矢先生の棋譜が載った新聞が床が見えないほど散らかっていたのはビックリした。

ヒカルがおばさんに怒られてたけど、あれは佐為が原因だったし。

「2目半差かな？」

「ちえ、もうちよつとだったのに」

実際、いつもより上手く打たれたというか、本当に読みが鋭かった。試合ごとに、ヒカルは上達している気がする。

私とヒカルの対局の検討も済ませると、随分と遅い時間になっていった。わあ、早く帰って明日の学校に行く準備もしなきゃ。

「和谷の言うように、碁の勉強したら学校の勉強なんてしてらんねえよな。まあ、プロにさええなれば、卒業できりゃいいんだけどさ」

「でも、ある程度勉強しておく方がいいよ。絶対どこかで役に立つと思おうし」

「ええ、かったりいよ」

「今はしようがないけど、プロ試験終わったら、一緒に学校の勉強もしよう」

金子さんとか、凄く頭が良かったから、また教えてもらいたいくらい。あまり接点がないから、今さらどうやって仲良くなるかが難しいけどね。

「じゃあ、また明日」

「おー。さっさと寝ろよ」

うん。棋譜を書いたら、今日は寝ます。

火曜日の第14戦、私とヒカルは院生下位の子に勝って、伊角さんも3連敗せず、フクくんにも勝った。フクくんは相変わらずの早碁で、早々に決着がついて2人とももう帰っている。

そして3敗の和谷さんと1敗の越智くんは、越智くんにも軍配が上があった。ヒカルが勝った直後に、越智くんがハンコを押しに来ていた。何か少し話していたけど、何にでも首を突っ込んでウザがられても困るし、自重しておく。

席の方に目を向けると、碁盤の前でうなだれている和谷くんの姿。ヒカルに目配せをして、一緒に和谷くんのところに近づく。

「和谷くん」

「藤崎か。いい感じに打てたと思ったんだけどな。終盤、細かい碁になって、半目差で負けたよ……」

うわ、それは悔しいよね。半目差っていうのは、本当にほんの僅かな差でしかない。ちよっとした揺らぎで勝ち負けが変わる。それでも、負けた事実は覆らないのが勝負の常。

これで和谷くんが4敗。本田さんも4敗で、伊角さんが3敗。

私とヒカルが全勝で、1敗ラインに明日美さん、越智くん、門脇さんの3人が並んでいる。

このあたりが現状で合格できる可能性がある範囲だと思う。

とはいえ、私を含めて1敗までの5人が全員落ちていく可能性は極めて少ない。

「俺は残っている上位は進藤くらいだからな。他力本願だけど、上位でうまい具合に潰し合ってくれたら可能性はあるし、諦めちやいねーよ」

「うん。でも俺だって、簡単には負けねえさ」

和谷くんが一番の長所は、この前向きさだと思う。人間、負けた直後とかは駄目なところに目が行きがちだけど、和谷くんは違う。樂觀的というわけでもないのに、良いところを探すのは本当に凄い。

「藤崎と進藤、俺はこれから森下先生の研究会に行くけど、お前らはどうする？」

「え？ いや、俺はいいよ。あかりは？」

「私も遠慮しとく。和谷くん、しっかり先生に稽古つけてもらって」

あ、今のは上から目線で、ちよつと嫌みつぽかった。

「ごめん。今のは感じ悪いね。私はヒカルと打ちたいから、時間がなくて森下先生のところには行けないんだ」

「あはは、分かってるよ。別にそんなの気にしねえって。お前らはそうやって2人で打ってるのが1番だろうからな」

ひらひらと手を振って、部屋を出て行った。

そういえば、明日美さんの姿が見えない。もう帰ったのかな。同じく院生女子の佐々木さんに聞くと、さつき慌てて帰っていたとのこと。用事でもあったのかな。

後で電話してみようかな。

「ごめんね。対局が終わってたら声をかけようと思ってたんだけど、あかりちゃんも進藤も、まだ対局中だったから」

「ううん。何か急ぎの用事だったの？」

「うん、まあ」

歯切れが悪い。気になる。怪しい。

「……明日美さん、もしかして彼氏ができた？」

「ええ!? いや、塔矢くんはそんなんじゃないよー」

「へえ」

やっぱり塔矢くんと会ってたんだ。研究会の日でもない、プロ試験の直後に。

でも、彼氏かどうか聞いて否定したってことは、付き合ってるわけじゃないか、隠したがっているか。

「うーん、もうしようがないか。でも、誰にも内緒にしてくれる？ それこそ、進藤にも」

「うん。じゃあやっぱり？」

「何がやっぱり？ 違うよ、想像してるのと全然違う。塔矢くんはね、かなりしつかり指導碁を打ってもらってるの」

それは確かに予想外。……とまでは言わないかな。ここ最近、明日美さんの碁が凄く上達している。石の筋がしつかりしてきたというか。

それでいて、攻撃的な場面ではしつかり攻めていた。そうか、塔矢くんの碁に少し似ていたんだ。

「それは勉強になるね。塔矢くん、教え方上手いの？」

「うん、凄く上手い。それとね、院生のレベルを確認したいからって、越智にも1回だけ教えに行ってみたみたい。客観的に教えただけって言うってたけど、どんな碁を打ったのかな」

くすくすと笑いを漏らしながら、明日美さんが教えてくれる。

越智くんと塔矢くん……。確かに、2人とも意地っ張りで、どんな指導碁になるのか見当も付かない。

「それと、塔矢くんは不思議なことを指示してきたのよね。あかりちゃんにも意見を求めたいけど、ごめん、来週の進藤との試合が終わってからでいい？」

「うん。もちろん。塔矢くんと秘密にしようって言ってたんだよね、根掘り葉掘り聞いちゃってごめんささい」

「ううん、大丈夫。別に秘密にしたかったわけじゃないから。ただ、やっぱり私だけずるいって我ながら思ったから」

ずるい？ 明日美さんが？

「元々塔矢先生の研究会に行ってたのは、あかりちゃんなのに。塔矢くんが教えるにしても、あかりちゃんを教えずに私だけっていうのはね。塔矢くんに聞いたなら『藤崎さんには僕の指導なんか不要だから』って言われちゃったんだけどね」

そう、なんだ。それは、喜んでいいのかな。

そして、明日美さんの現状でずるかったら、小6の終わり頃から

ずっと佐為に打ってもらっている私は、もつとずるい。

「もつと聞きたかったけど、今は他人を気にしてる場合じゃないって言われちゃってね。確かにそうだと思っただし、待っていても合格枠は降ってこないし、塔矢くんに迷惑をかけることになってでもつかみ取りたいって思ったの」

「うん、それがいいと思う。勝つのが大事だからね」

私とヒカルにとって強敵なのは間違いないけど、もし明日美さんと一緒に合格できたら、それは凄く嬉しい。

ヒカルと私。そして、和谷さんと明日美さん。特に親しくしている人だけでも、3枠に入らないんだから、本当に狭き門なんだよね。

私が全勝でいることが信じられないくらい。

「じゃあ、また金曜に。本当に言わないでね？」

「うん、ヒカルにも言わないし、金曜も知らない顔しておく。安心して」

電話を置いて、少し考える。塔矢くんは、明日美さんを応援してるのも確かだと思うけど、きつとそれ以上にヒカルを気にしている。

小6の時に2度、指導碁もコテンパンにやられたのも忘れるわけがない。きつと聞きたくて仕方ないはず。あの碁は何だったのか、と。そして横で見ていた私にも、何を知っているのか聞きたいはず。

いつか、ヒカルが塔矢くんに言う日は来るのかな。

そして土曜日。ヒカルと門脇さん、伊角さんと越智くんの対決。

門脇さんは、鼻の形が少し特徴的な顔立ち。女の子を見る時、鼻の下が伸びている時があつたりするけど、強いのは確か。棋力だけで言えば伊角さんと同じくらいかな。大人だけあって、負けを引きずらないところとか、調子の波が少ないのが長所だと思う。越智くんに負けた後も、飄々としていたし。

その越智くんは、碁盤を挟んで伊角さんと向かい合っている。何か話しているけど、伊角さんが珍しく睨んでいる。あそこ大丈夫かな。ちよつと心配。

「よろしく願います」

時間がきた。まずは自分の対局に集中しなきや。今日は外来の人と対局だけど、相手はあまり勝ち星が稼げていない。実際に対局してみても、ちよつと力が劣る感じがする。院生の下位と同じか少し弱いくらい。

そのまま、危ない場面も特になく、順当に勝利を収めた。

周りを見ると、越智くんと伊角さんも、ヒカルと門脇さんもまだ対局中だった。まずは越智くんと伊角さんの対局を見に行く。地を重視する越智くんに対して、深く荒らしに行く伊角さん。力強く踏み込んでいて、あの左辺の白は一見取れそうを取りに行くとしのげる良い手。少し見ていると、越智くんは左辺に手を入れて、案の定しのがれていた。これで、大勢は決したかな。

顔を上げると、明日美さんと目があつた。ハンコを押しているの
で、勝つたみたい。

「あかりちゃん、勝てたよ」

「おめでと。ヒカル見てくるね」

「あ、私も行く」

ぼそぼそと無声音で会話して、ヒカルの方へ向かう。実は、さつきからかなり厳しい顔をしていたから、邪魔になつても悪いと思つて行きにくかつたんだよね。ただ、集中していたら周りは関係ないし、邪魔そうなら離ればいいかな。

盤面を見ると、五分というには、ヒカルがハツキリと悪い。ヒカルの石、繋がりが絶たれているところが少しあつて、無駄になつちやつた手が散見される。

これは後から化けさせる手も混ざっているんだろうけど、門脇さんに上手く打たれて、有効に生きなかつたんだろう。このまま行けば負けてしまうけど、だからといって、この盤面から取り返せる手が思い浮かばない。

「……負けました」

かなり巻き返したけど、ヨセに入つて、コミを含めて7目半ほど差がついていた。

ヒカル、凄く悔しそう。あとで、できるだけフォローして、明日の

試合に向けて気持ちを切り替えられるにしまぎやね。

気がつく、明日美さんが離れた場所で、和谷くんと話していた。気を遣ってくれたのかも。

「ヒカル、お疲れ様」

「あー。門脇さん、強かったぜ」

「うん、途中からだけど見た。後で、序盤の流れも教えてくれる？」
石の形でいたい分かるけど、聞いてみると結構思っているのと違ったりもする。

ああ、と頷きを返してくれたところで、門脇さんが戻ってきた。

「おや、こちらの嬢ちゃんはお友達？」

「うん」

「こら、ヒカル。はい、藤崎あかりです」

「うん、名前も碁の強さも、よく知ってる。今まで無名なのが不思議なくらいだ。こっちの進藤君も相当強いけどね」

相当強い、か。言い返したい気もするけど、今の時点で言えないし、私が言うことでもない。

ヒカルもぐつと堪えている。負けた後じゃしようがないけど、とりあえず帰ろっか。

「では、お先に失礼しますね。ヒカル、行こつ」

「おい、あかり」

なんだよ、勝手だなんて言われたけど、ヒカルには言われたくない気がする。

かなり自由に動いてるよね。

「……佐為のやつ、今日の負けは実力というより、ちよつと調子に乗っていたんじゃないかって言うんだよ」

「へえ？」

「地味だけど堅実な一手を打つべきタイミングで、無理な手を打つたって。帰ってから、ちよつと検討するから、一緒に考えてくれよ」
「うん、もちろん」

「明日は奈瀬との対局だし、あまり悠長にしてらんねえけど、とりあえず負けた理由はハッキリさせたいからな」

ヒカル、負けたこと自体は悔しそうだけど、引きずっている感じではない。良かった、これなら大丈夫そう。

「碁の勝負は、気の持ちようが大事だよ。変に硬くなったり勝ちを意識しすぎると、普段通り打てずに負けちゃったりするし」

「そうだな。普段通り打つのは、難しいな」

今日のヒカルの負けも、勝ちたいうって気持ちが行きすぎたから。普段通り打ってれば勝てたと言いつ切るわけじゃないけど、あんな言い方はされなかつたと思う。

「ヒカル、明日美さんは強敵だけど、頑張ろう」

「おう、連敗したくねーし、勝ってやるさ」

そして、ヒカルといつも通り打って、だいたいいつもと同じ時間にヒカルの家を出た。

あえて普段通りの行動にしようと思いをかけあつたりしていない。いつもより気合を入れていると失敗するし、意識しないように「いつも通り」と言い続けるのも、いつも通りじゃない。

本当に心ついて難しいね。

いつかヒカルに告白する日は、私は冷静でいられるのかな。プロ試験より緊張しそうな気がする。

第28手 プロ試験 その4

日が明けて、ヒカルと明日美さんの対局がある日曜日。

私がヒカルや明日美さんと対局するのも辛いけど、一緒に合格したいと思っている2人の対局を見るのも、結構辛い。

ヒカルと一緒に研修センターに入ると、明日美さんはすでに来ていた。

「あかりちゃん」

座って目を閉じていたから声をかけていいものか迷っていると、視線を感じたのか明日美さんが目を開けて、私の顔を見ると笑って小さく手を振ってきた。

ヒカルに目を向けると、ぽんと軽く肩を叩いてくれたので、明日美さんのところに向かう。

いつも通りとはいかないまでも、あまり硬くなりすぎても駄目だもんね。

「明日美さん、おはよう」

「おはよ」

今日の対局については話題に出さず、当たり障りのない会話に終始する。あと少しで開始かな。

「あ、そうだ。あかりちゃん、ちよつと進藤借りるね」

「え？ うん。別に気にしなくていいのに」

「まあ、念のため」

明日美さんがヒカルのところに行つて、何やら話している。塔矢くんのことを言つて揺さぶるのも思えないけど、どうしたんだろう。気になるけど、こつちから聞きに行くのは良くないし、勝負に影響があると困るし。

「始めます、会場に集まってください」

ああ、始まつちゃう。そのまま2人で話しながら、席に座る。

私も所定の位置につく。気になるけど、気にしてもしようがない。というか集中せずに対局して私が負けちゃったら駄目だし、周りを気にするのはここまで。

「では、始めてください」

挨拶をして、対局が始まる。

意識を切り替えて、盤面に目を向ける。私が白で、開始する。じっくり打つ碁の方が好きだけど、できるだけ早く終わらせたい。最近ヒカルや佐為との対局で攻めもたくさん学んでいるし、頑張ろう。

それなりに展開が早いけど、お昼までに終わるほどじゃない。お弁当を広げてヒカルと一緒に食べる。

聞いていいかどうか迷っていると、ヒカルから口を開いた。

「奈瀬のやつ、秀英と対局した棋譜を見たって言ってる。ちゃんと研究したから、ああいう手は通じないと思うってわざわざ言ってきたんだ」

「へえ、そうなんだ」

誰に聞いたか、とかは言っていないみたい。塔矢くんの名前を出すと、きつと動揺するもんね。

明日美さんも、事情は分からないなりに何らかの因縁があるっていうのは察しているんだろうな。気を遣わせちゃってごめん。今度、ケーキでも奢ろうかな。

「奈瀬、やつぱりかなり強いんだよな。なんとかしたいけど、かなり先まで読まれてる感じがする」

「へえ……」

ヒカルに絞って対策したとか？ でも、ヒカルが強敵だからってそこまでやると他の人との対局に支障が出かねない。

後で教えてくれるなら聞いておこう。

「午後からの対局、頑張って！」

「おうー。簡単には負けねえよー！」

さて、私も頑張らないと！

と勢い込んだは良いものの。すでに形勢は大きく有利で、よほどポカをしない限り負けなだろう。そして対局を進めるうちに、ふと明日美さんがハンコを押しているのが目に入った。

明日美さんがハンコを押してるってことは、つまりヒカルが負けた

わけで……。ヒカル、これで2敗だから、残りの対局と他の人次第で、合格が危うくなってきた。ヒカルは明日も本田さんで強敵だし、このままズルズルと負けちゃったりしたら……。

って、駄目。

よそ事を考えながら打っていたら、変な場所に打っちゃっていた。自分の地になるのが確定している右边をさらに厚くしていて、手を入れるべき左辺が手つかず。

こんな碁を打ってるようじゃ駄目ね。集中しないと。

……良かった、なんとか勝てた。結構ギリギリになったけど。

一息ついて立ち上がり、ハンコを押す。休憩室に行くと、明日美さんが座ってぼうつとしていた。

「明日美さん」

「あかりちゃん、どうだった？ って、勝ったよね」

「ちよつと危なかったけど勝てたよ。明日美さんも勝ったみたいだね」

「危なかった？ 今日には院生の沢井だっけ？」

明日美さんが不思議そうにしていたので、笑って誤魔化する。それより、ヒカル知らないかな。

「進藤、今日は先に帰るって言ってたよ」

「そっか。もしかして、伝言のために待っててくれたの？」

「いや、ちよつと休憩してただけよ」

明らかに待ってくれてたよね。ヒカルも気になるけど、一人で考えたい時もあるだろう。特に、負けた時は。

佐為がいるから、厳密には一人じゃないけど……。

「明日美さん、どこか寄っていく？」

幸い、今日は日曜日。次の対局は明後日だし、少しくらい時間が遅くなっても大丈夫なはず。

「いいけど、進藤を放っておいていいの？」

「こういう時は、ちよつと時間をおいた方がいいかなって」

「そっか、そうね。じゃあ行こう」

研修センターを出て、駅近くの喫茶店に入る。飲み物とケーキを注文して、食べ始めてから話し始める。

「聞きたいこともあるんだけど、まずは私の話からでいいかな」

「うん。色々聞きたい。特に、塔矢くんとの話とか」

指導してもらったの、ヒカル絡みっていうだけじゃないよね。

「そうそう。どうして進藤に執着するのか分からないの」

「塔矢くんには聞いてないの？」

「聞いたけど、濁された」

ふうん……。ヒカルとの対局がまだだったし、変に警戒し過ぎても困ると思ったのかな。実際、塔矢くんの基準で警戒すると、佐為と戦うことになっちゃおうし。

「韓国の子との対局は並べてくれて、こういう不思議な一手は気を付けた方が良いつて言われたの。実際に若獅子戦でも、塔矢くんも苦戦した原因みたいだし」

「なるほど。私も後から並べてもらったけど、あの対局はヒカルにとっても会心の碁だよ。若獅子戦の対局も、いい碁だったし」

それで知ってたんだね。でも、だとすると……。

「もしかして、毎日のように打ってもらってた？」

「え、そこまでじゃないよ、週に4日くらい」

思った以上に多かった。ヒカルに執着してるのか、それにかこつけて明日美さんに近付こうとしてるのか……。

「それで、自分が指導できない日は、秀策の棋譜を並べたらいいって。進藤の対策にもなるし、そうじゃなくても秀策の棋譜を学ぶのは凄く勉強になるからって」

ああ、ヒカルに執着してるだけの囲碁馬鹿だった。ほんの少し感じていた警戒心を下げる。

それにしても、秀策の棋譜か。佐為を知っている私を除けば、ヒカルのことを一番理解しているのは、間違いなく塔矢くんだと思う。「実際に進藤と打っていると、時々秀策のよく使っていた手を打つし、よほど研究しているんだろうね。あかりちゃんの強さも、そこが原因

？」

「あはは。うん、秀策の勉強をやってるのは否定しないよ」

秀策そのものに教えてもらってるけどね。考えるまでもなく、とんでもないことだよね。

明日美さんの事情を知れたのは収穫だった。ヒカルに言ってもいいか確認すると、対局が終わったし構わないけど、もし動揺するなら困るから、言うタイミングは私に任せてくれるとのこと。

明日美さんはこの後、塔矢くんに碁の内容を伝えに行くんだそう
で、嬉しそうに向かつていった。勝ったと報告できて、嬉しいんだろ
うな。こっちはヒカルの状況次第で、どうするのがいいか、悩ましい
のに。

とはいえ、もし落ち込んでいたら、早々に持ち直すようにしなきゃ
いけない。

「こんばんはー。ヒカル帰ってます？」

「あら、あかりちゃんいらっしやい。いるわよ、どうぞ。ヒカル！あ
かりちゃん来たわよ！」

ヒカルに声をかけつつ、上がらせてもらう。そのままヒカルの部屋
まで行つて、扉をノック。

「ヒカル、いいかな？」

声をかけると、おー、と声が聞こえて、扉が開いた。部屋には碁盤。
今日の対局内容かな？

「ちょうど佐為と検討してたんだ。あかりも参加しろよ」

「うん！」

良かった、それほど落ち込んでいないみたい。

検討した結果から見ても、明日美さんが秀策の勉強をしっかりと
いたのが分かる。

佐為からも同じような意見が出た。対局中から気になっていたそ
うだ。

明日美さんとの対局は終わったし、言っても問題ないよね。

「明日美さん、塔矢くんに鍛えられたみたいなの。今日聞いたんだけ

ど、塔矢くんが指導できない時は、秀策の勉強しろって」

「秀策の勉強ねえ」

「ヒカルも私も、佐為に色々教えてもらってるから。私は小さい頃から森下先生に教わってるけど、特にヒカルは佐為から学んだことが全てだし」

「昔の対局を覚えてんのか。あー、面倒だよなあ」

ヒカルがあーあ、とため息を吐きつつごろんと寝転がる。お行儀悪いよ。

何やら佐為と話していたようなので、碁石を片付けながら待つ。

「まあ、いいや。それより明後日は本田さんと対局だし、まだお前も和谷も、越智も残ってるからなあ」

「うん、手強い相手ばかりだね。プロ試験、楽じゃないね」

「そりやそうだけどな。あかり、門脇さんにも奈瀬にも負けんなよ」

「誰と当たっても、手は抜かないよ」

当然じゃないの、と返すと満足そうに頷く。今後抜かれるにしても、今は私の方がヒカルより実力は上だと思う。

だから、1局でも多くしつかり真剣勝負でヒカルと打ちたい。プロになっても、ヒカルと同じ場所に立てるとは限らない。

「あかり、打つぞ」

「うん」

「あ、後で佐為とも打ってくれよ。こいつ打ちたいってうるさくてさあ」

「そうなの？ 週に1回くらいはネット碁打ってるのに」

「ネット碁で打つのもいいけど、やっぱり人と向き合って打ちたいんだとさ」

なるほど。そういう望みもあるんだね。考えてみたら顔を見ながら打ちたいっていうのは当たり前前だと思う。もつとも、佐為自体はヒカル以外には見えないけど。

佐為がネット碁以外で他の人と打つのは難しいよね。まさかヒカルが仮面を被って打つってわけにもいかないし。

何か私にできることがあるといいんだけど、なかなか難しい。

「ともかく、今はプロ試験に集中しねーと」

「うん、そうだね。佐為の対戦相手探しは、後で考えよう」

「おう。とりあえずこうやってあかりと打てるのは嬉しいみたいだし、ネット碁で強い相手も増えてきたし、今のところ大きな不満はないって言うてるけどな」

ヒカルも、なんだかんだ佐為が大事だよな。いっつも気遣ってる。そして、ヒカルのおばさんに心配されるくらい遅くなっちゃったので、急いで家に帰った。

「ただいまー」

「おかえり。遅かったのね」

「うん、ヒカルが連敗しちゃったから、ちよつと検討とか長引いちゃって」

「ふうん。お母さん、碁のことは分からないけど、あかりは調子良いんでしょう？ ヒカルくんと対局で負けてあげるわけにはいかないの？」

「うん、それは無理」

勝ち星だけで考えると、ヒカルや明日美さんに勝たせたら、随分楽になるだろう。

ただ、それは絶対にやっちゃいけない。今後プロになってからも、絶対に悪影響がある。

「プロがゴールなら、それでもいいかもしれないけど、あくまでプロはスタート地点だから。ヒカルも私も、明日美さんだって、プロになってタイトルを狙って打つんだもん」

もちろん、一歩先に行っている塔矢くんも。

「大変ね。じゃあ、あかりが全勝で勝ったらご褒美用意しなきゃね。何がいい？」

ご褒美。ずっとやりたいと思っていたことがひとつある。反対されるだろうと思いつつ、口に出してみる。

両親の説得が大変だし、ヒカルも簡単には説得できないとは思うけど。まずはお母さんを味方に付けよう。

「あのね。じゃあ、合格してすぐとは言わないけど、中学を卒業したら家を出たい」

「えっ」

予想外だったみたいで、お母さんが一瞬固まる。うん、15で一人暮らしして言われたら、反応に困るよね。でも、止まるつもりはないの。

「それで、いつヒカルが来てもいいようにして、夜通し碁が打てる環境を作りたいの。私がイベントやらでない時も、ヒカルが使えるようにしておきたいし」

「……まあ、言いたいことは分かったわ。お母さんは反対しないけど、お父さんがね」

やった！ お母さんがいいなら、お父さんは何とでもなると思う。あまりにしつこく反対してきたら、一ヶ月も話しかけなければ折れるだろう。

ヒカルに、というかおばさんに話して、早めに味方にしておこう。あ、お姉ちゃんにも言っておかないと。時々戻ってくるつもりだし、部屋の荷物も、しばらくそのままにしてもらえたら助かるし。

「あかり、その顔、ヒカルくんに見られないようにね。だらしないよ」
「え、本当？ 気をつける」

いけない、ちよつと緩んでたかもしれない。
よし、やる気出てきた！

火曜日を迎えて、17戦が始まる。

ヒカルの相手は、本田さん。決して油断できない強敵。
会場に向かう途中、ヒカルに檄を飛ばす。

「ヒカル、頑張つて。何が何でも、今日は勝たなきや駄目」
「お、おう。そりゃ負ける気はねえけど……」

なんだよ、気合い入りすぎてねえか？ とか小さい声で言ってるのが聞こえたけど、佐為と話しているのかな。私だけ受かって、ヒカルが落ちちゃったら、せつかくの土台作りが台無しになっちゃうもん。ヒカルには受かってもらわないと。

まあ、今年落ちて来年受かっても、中学生卒業と同時にプロだから、間に合うといえ間に合うけど。

「よし、俺もあかりに負けてられねえからな。見てろよ！」

「うん！」

ヒカルもちやんと気合いが入ってる。気負いすぎたら駄目だけど、これくらいの重圧をはね返せなきゃ、将来タイトル争いなんてできないもんね！

結果としては、ヒカルがきわどいところで本田さんに勝った。昼の段階で、序盤の布石がよほど上手く打てたのか、白を持った本田さんががちり守って、優位に立っていた。仮に私が打っていたとしたら、追いつけるかどうか怪しいほど。

でも、早めに対局が終わったので見に行くと、ヒカルが細かなコウ争いを利用して僅かな隙を突いて、1目、また1目と差を詰めて、ついに逆転に成功した。

「……半目差、か」

本当にきわどい、本田さんの強さをしつかりと感じ取れた一局。ヒカル、プロ試験の最中にも、とんでもなく成長している。

「あかり、勝ったぜ！」

「うん、見てたよ。凄かった」

終わってすぐ、ヒカルが声をかけてきた。あまりはしゃぐと周りの迷惑だし、本田さんにも失礼だから、お互いに声は抑えめ。

と、そこに明日美さんが寄ってきた。

「あ、進藤。勝ったの？」

「おう。ギリギリだったけどな」

「おめでと。進藤は、後は強敵は足立とあかりちゃん、和谷と越智くらい？」

「他の人との対局でも、もちろん油断しないけどな」

「そりやそうね、ごめん。私は、週末に門脇さんで、来週が伊角さん。あああ、ここまで1敗とか、今までだと考えられないくらいの成績だけど、まだまだ先が長いわ」

「でも、本当に明日美さんもヒカルも、プロ試験中も強くなってる。ヒカルと当たる再来週まで、私も強くならないと」

さっきの本田さんとの対局、打ってるのが私だと、多分負けていた。それほどに、本田さんの会心の碁と言える程の内容だった。それを返す今のヒカルは、すでに私より上かもしれない。

「あかりちゃんが、今より強く？ まったく、どこまで行く気なんだか……」

明日美さんが呆れているけど、ヒカルの成長について行くには、全然間に合っていないよ。

前世と6才からの積み重ねが、ほんの2年未満のヒカルに追い抜かれそうになってるんだから。

とはいえ、私もヒカルが打ち始めてからの2年で、凄く密度の高い碁が打っている。

……ヒカルとの対局を、凄く楽しみにしている自分に驚く。

ヒカルが好きでたまらないけど、それと同時に、ヒカルと碁で真剣勝負が続けたい。プロ試験でのヒカルとの対局は、その大事な第一歩。

一手も緩めず、それこそタイトル戦の気持ちで挑もう。

第29手 プロ試験 その5

火曜にヒカルと本田さんが対局した週末。伊角さんと門脇さんの対局がある。

ヒカルも私も外来の人。私の相手は、椿さんっていう地声の凄く大きな人。見た目は凄くおじさんだけど、プロ試験受けているってことは、30歳未満なんだよね。

「おう、お前が藤崎か。よろしくな」

「よろしくお願いします」

「上位が崩れたら、まだもしかしたらチャンスはあるかもしれないねえかな！ そのためには、お前に勝って調子を崩さなきゃならねえ」

星数だけを見ると、確かに可能性は0じゃない。せつかくのプロ試験なんだし、完全に可能性が潰えるまで頑張る姿勢は好ましい。

声は、もうちよつと抑えてほしいけど……。

「そうですね。そうならないためにも、全力で頑張ります」

そして対局が始まる。普段打たない相手なので、どんな碁かわくわくしながら打った。

打ち方がちよつと荒いけど、棋風としては堅実で、意外と丁寧。もつと力碁で押してくるかと思った。ヒカルもそうだけど、やんちゃでも丁寧に打つてというのが、囲碁の面白いところだね。

「……ありません」

「ありがとうございます」

対局は、椿さんが上手く地を広げられないうちに大きく囲って、守り切って勝ち。良かった、できればこのまま、ヒカルと当たるまで全勝を維持したい。

さて、伊角さんと門脇さん、どうなったかな。ハンコを押した後に目を向けると、明日美さんが真剣な顔で盤面を見ていた。

目が合うと、明日美さんは無言で盤面を指さした。目を向けると、伊角さんの良いところが顕著に出ている盤面だった。ちよつと慎重すぎるところもあるけど、守るべき部分をしっかりと守って、主導権を握っている。

途中、ヒカルも対局が終わったようで、寄ってきた。

かなり細かい碁になっているけど、少しだけ伊角さんが優位に立っている。門脇さんも左上スミで巻き返せる場所はあるけど、打ってる2人は気付いていないのかも。

「2目半の差で、伊角さんの勝ちだったな」

「うん、かなりギリギリだったけど、やっぱり伊角さん強いね」

結局、門脇さんは急所に気付かず、伊角さんも手を加えずに終局した。

ヒカルの言葉に、私が同意していると、明日美さんが首をひねった。「でも、門脇さんが終盤に左上スミにあつた隙を見落としてなかった？」

「ああ、そうだな。伊角さんも手を入れなかったし、先に手を出していたらひっくり返っていたかもな」

かなり判断の難しい局面だったけど、ヒカルも明日美さんも気付いていたんだ。これは本当に、ヒカルとの対局も明日美さんとの対局も、気が抜けないね。

翌日の日曜、明日美さんが門脇さんと対局する日。

ここまで、私が全勝で明日美さんが1敗。ヒカルと越智くん、門脇さんが2敗。

伊角さんもまだ3敗だし、上位陣の星の取り合いがかなり激しくなってくる。

ヒカルのことを考えると、明日美さんが勝って、門脇さんを勝負から一步後退させてくれる方が、ヒカルが合格する可能性が上がる気がする。私が明日美さんと一緒に合格したいから、余計にそう思うのかもしれない。

もちろん、私も人ばかり気にしてられない。今日は小宮さん。あの程度安定しているけど、逆に言えば本田さんみたいな怖さは少ない。

油断はできないけど、しつかり打てば互角以上の勝負は間違いなく

できるはず。

「ヒカル、今日も頑張ろう」

「おう、いつだって本気だし、手は抜かないさ！」

「うん。プロ試験で油断なんてできる相手、いないもんね」

ヒカルと話しながら歩くうちに会場に着く。楽しい時間は一瞬で過ぎるよね。

明日美さんも来ていたけど、目を閉じて精神集中している。話しかけて調子を崩してもまずいし、話しかけないようにそつと離れた。

時間になり、対局が始まる。午前では勝負が付かず、お昼ご飯を食べてから続きを打つ。

小宮さんが強引に攻めてきた手を潰して、私の勝ちが確定した。

私がハンコを押していると、ヒカルが寄ってきた。

「勝ったの?」

「おう、中押し勝ち！」

へへん、と嬉しそうにヒカルが笑う。こういう時の態度は、碁をやり始める前と変わらないね。

周りは、まだ対局中のところも多い。声に出して雑談していると迷惑になるので、話はせずに移動しないと。

明日美さんの様子を見に行くと、明日美さんが盤面優勢に進めている。

この調子だと勝てそう。門脇さんも苦しそうな顔をしているし、門脇さんが優位になるような、これという打開策は思いつかない。

「負けました」

よし、明日美さんの勝ち！ 明日美さん、まだ越智くんにはしか負けてないって凄いよね。その越智くんは伊角さんと私に負けているだけなんだけど。まだ2敗で、残る強敵は小宮さんとヒカルくらい。かなり合格の可能性が高い。

明日美さんがハンコを押してから、荷物を取りに席へ戻ってきた。

「……院生って、思った以上にレベルが高いんだな」

「え?」

「若獅子戦でベスト4に入った奴が強いのは分かってたけど、他にもプロと遜色ないどころか、今でもプロの中で活躍できそうな奴がごろいやる」

「どうなんだろう。プロに入って活躍できるかは分からないけど、私はここ1年くらいで強くなれたのは、あかりちゃんのおかげね」

明日美さんが言うほど、私がおかをしたわけじゃない。強くなったのは、明日美さんの努力だよ。

「越智は、実力で劣っているとは思わんが、まあまだ幼いし、途中で崩れて総合では勝てるんじゃないかと思っただよな。伊角も途中で崩れたし、直接対決で勝てば行けるだろうってな。まさか、途中で負けるとはな……」

「それはそれは、残念でした」

「あ、悪い。別に馬鹿にしたわけじゃなくて。なんていうか、自分の実力を過信してたっていうか。ともかく、可能性は下がったけど、まだまだ十分にチャンスはあるからな。特に、無敗の藤崎に勝てたら、な」
過信していたとは言うけど、かなりしっかりと状況把握していたんだろう。だから、明日美さんに負けて、計画が崩れちゃったって思ったんだ。

明日美さんがここまで1敗でも、門脇さん、伊角さん、私が残っているから、それで4敗になるとでも思っただのかもしれない。

ヒカルも視界に入っていないみたいだけど、私と越智くんには負けると見越したのかな。

「簡単には負けませんよ」

「そりゃ、簡単に勝てるとは思ってないさ」

「あかりちゃん、そろそろ行こっか」

「あ、うん」

じゃあ、とペこりと頭を下げて席を立つ。

ヒカルは越智くんの対局を少し見た後は部屋を出て行ったから、休憩室にいるかな？

「ふん、馬鹿にしちゃって」

「明日美さん、ひそかにかなり怒ってる？」

「だって、私には勝てるってナメてたもん。簡単には負けてられないわ」

「うん、そうだね」

頑張ろう、と言いながらヒカルと合流して、帰路につく。

夜、ヒカルと対局しながら話していると、中盤くらいで上手く打たれて、優位だった盤面が逆転した。

その後も取り返せる部分を攻め立てたけど、僅かに届かず、1目半差で負けてしまった。

「ヒカル、この部分、上手く打ったよね。佐為かと思うくらい。実際、佐為ならどう打つか考えたら、ここ以外ないよね」

「そうそう。やっぱりあかり相手だと佐為のことを隠すとか面倒なことを考えなくていいから楽だな……。佐為が『私ならどう打つか、とこのを考えてもらえるのは光栄だけど、自分なりの最善の一手を追求するのも忘れないでくださいね』だよ」

「うん、それはもちろん！ でも、やっぱり佐為の読みの深さには、まだまだ追いつけないよ」

「プロ試験対局前に、1勝しておきたかったんだよね」

ヒカルがようやく勝てたぜ、と嬉しそうにしている。

私としては、前世を含めると何年かかっているか分からない今の実力に、2年足らずで追いつくヒカルの才能が眩しすぎる。

でも、思ったより焦りはしない。プロ試験の間は負けたくなかったけど、しょうがない。

「でも、プロ試験で簡単に勝てるとは思わないだよ」

「当たり前だろ。たった1勝できただけなんだしよ。よし、もう1回打とうぜ」

「うん、と言いたいところだけど、もう時間が遅いから。明日は佐為とヒカルだし、明後日は私と佐為だから、その次かな？」

「えー！ せっかく勝てたんだから、もう1回打ちてえな」

うう。ヒカルに求められるなんて、断れないじゃない。

「じゃあ、遅くなるって家にかけるから、ちよっと電話借りるね」

「んー。それなら飯を食った後、お前ん家に行くよ。そっちで打つなら、そんなに文句もねえだろ？」

なるほど、確かに。だいたい時間を約束してから部屋を出て、おばさんに挨拶をして、いったん帰る。

お姉ちゃんとお母さんが帰っていて、今日の結果を聞いてきた。

「ただいまあ」

「お帰り。どうだった？」

「ついに負けちゃったー」

「そう……。まあ、でもまだ1敗でしょ？ 残り頑張れば、受かるのよね？」

お母さんが慰めてきた。あつ、そっか。

「あ、ごめん。プロ試験は勝ったよ。負けしたのは、ヒカルの家で。これまで負け無しだったんだけど今日初めて負けちゃったの」

「あら、そうなの？ でもヒカルくんともまだプロ試験で当たってなかったのよね」

当たった時が大変ね、なんて楽しそうに言っちゃってる。いいんだけどね。

「それはそうと、今日、ヒカルが来てもう一局打つから、早めにご飯食べちゃうね」

「ふうん。仲良さそうで羨ましいこと」

お姉ちゃんがからかってきたので、ふふんと胸を張る。

「うん、頑張ってるからー」

「はいはい。ごちそうさま」

話しながらご飯を食べて、少し休憩しているとヒカルがやってきた。さつきと自室に入って、盤面を挟んで座る。

「じゃあ、にぎるね」

「おう」

そして、私が白石で対局が始まる。さつきは私が先番だったから、逆だね。

布石はお互いに様子見から入って、あまり戦わない。このまま盤面互角だと、コミの分だけヒカルが負ける。どこで攻めてくるか、とい

うのが大事。

ある程度お互いに陣地が確保できたかな、というところで、私の左辺に手を入れてきた。私は、これを受けるか流すか、それとも無視してヒカルの右辺に攻め込むか。

いつも受けていて、さつきも受けて失敗した。今回は受けずに流してみる。こういう場面で攻め込むのが塔矢くんだと思う。私には、まだそこまで攻守のバランス良く綱渡りをするだけの實力はない。

結果として、今回は私の勝ち。

「今回はあかりに上手く打たれちゃったな」

「うん、連敗まではなかなかね。でも、本当にヒカルは強くなってるよね。もう私とほとんど互角かな？」

「どうだろうな。だったら塔矢にも近づいたし、嬉しいんだけどな」

やっぱり塔矢くんかあ。私は通過点なのかな。

……あつ、駄目だ。この思考は良くない。

「ヒカル、今の対局、佐為は何か言ってる？」

「ん？ あー……」

佐為にも混ざってもらい、対局の検討を行う。ちよつと露骨に話題を逸らしたけど、ヒカルに気付いた様子はない。

今は、塔矢くんの名前も、明日美さんの名前も出してほしくない。せつかく私の部屋で、佐為がいるとはいえ2人で打ってるのに。

2日後、火曜日。明日美さんと伊角さん、門脇さんと本田さんの対局がある日。

明日美さんは、大変な対局が続く。ヒカルは来週、日曜に足立さんとの対局、火曜に私との対局があつて、再来週は和谷くんや越智くんとの対局もある。

「和谷くん、中盤頃には4敗したけど、その後はずっと勝ってるね」
「ああ。状況次第だけど、4敗でプレーオフとかもあり得るし、油断できねえよな」

うん。気を抜ける相手じゃない。ヒカルも、それが分かっているならきつと大丈夫。

それより今日は明日美さんの方が気になる。

「あかりちゃん、おはよ」

「おはよう。明日美さん、今日も正念場だね」

「うん。伊角くん、院生研修で勝ったことないんだよねえ」

意外といえは意外だけど、1組での対局が数ヶ月前なら、おかしいってほどでもないのかな。

「でも、明日美さんも若獅子戦でプロに2連勝してるし、絶対に互角以上の戦いができると思う」

「うん。ありがと。頑張るね」

にっこり笑う明日美さん。今日勝てば、かなり楽になるはず。逆に負ければ、残りの対戦相手を考えると、勝ち星とは逆で伊角さんがかなり優位に立つ。

考えると厄介というか、まだ本当に誰が合格するのか、見当も付かない。

「うん、頑張ろう。私も頑張る。できることは、1戦ずつ、油断せずにしっかりと全力を出し切ることだね」

当たり前前だけど、その当たり前がずっとできるかどうか、ということかなり難しい。

プロでも精神的な揺さぶりはやるし、緊張で寝られないなんて話も聞く。冴木さんも、1度名人戦の二次予選の最終戦で、勝てば三次予選ってところで、緊張で眠れずに負けたって言ってたし。

明日美さんは寝不足というわけでもなさそうだけど、緊張してて硬くなっているように感じる。でも、何かを言って逆効果だったりするといけないし、自分で乗り越えるしかない。

そんなことを思っているうちに時間がきて、対局が始まった。

……伊角さん、やっぱり強い。

越智くんや門脇さんに勝っているんだし、私も凄く苦戦したんだから当然なんだけど。

明日美さんの攻めが生きず、地を荒らされてはどうしようもない。「負けました」

ぺこり、と頭を下げつつ宣言する明日美さん。悔しいだろうけど、表面上はなんともなさそう。

「いやー、辛かった。どこを打っても上手く生きずに、良いようにやられちゃった」

伊角さんの強いところがきちんと出た碁だった。明日美さんも、言うほど悪くないんだけど、こういう日もあるよ。

門脇さんも本田さんに勝って、3敗を守った。

これで、20戦目が終わって、私が全勝。

ヒカルと明日美さん、越智くんが2敗。

伊角さんと門脇さんが3敗で、和谷くんが4敗。

本田さんは門脇さんに負けて6敗だから、さすがに厳しい。他には……外来の片桐さんも6敗で、ヒカルと門脇さん、明日美さんの対局も残っている。

このあたり、油断して番狂わせが起きると、どう転ぶか分からなくなる。

ヒカルには念のため、後で注意するように伝えておこう。

私も、ヒカルや明日美さんと一緒に合格したければ、間違っても門脇さんに負けるわけにはいかない。ヒカルや明日美さんとの対局で手を抜くわけじゃないけど、注意して打たないと。

来週は、ついにヒカルとの対局。

しっかりと体調を整えて、万全の状態で挑まないと勝てない。はっきり言って、プロ試験の序盤で当たったら、ほぼ間違いなく勝てたと思う。

プロ試験の2ヶ月足らず。短いと思っていたけど、ヒカルが打ってきた碁の時間を考えると、十分に長い。つまり強くなって当然。最終戦じゃなかった分だけ、マシなくらい。そう考えると、越智くんは可哀想かもしれない。

「ヒカル、プロ試験はあと7戦。悔いの無いように、全力で挑もうね」「ああ、当然。いつも通りの打ち方をするっていうのは簡単じゃないし、いつも以上の力を出すのはもっと難しいけどな」

そうだね。どんな状況でも普段通り打つ、その難しさ。

今のところ、動じずに打てる人は、知ってる中では佐為と塔矢先生、そして塔矢くんの3人くらい。緒方先生や森下先生は、意外というか見ての通りというか、気分や感情によって結構碁が変わる。

今はプロ試験に挑んでいる段階で、まだまだだけど、私もいつか、その域に達したい。

第30手 プロ試験 その6

伊角さんが本田さんに負けた。意外といえば意外、納得と言えば納得の相手。

明日美さんは本田さんに勝ったけど、伊角さんが本田さんに負けた。

この2人は院生歴が長く、研修で打つ機会もかなり多い。お互いに手の内は分かっているのですが、本田さんの先行逃げ切りの作戦が見事にはまったという感じだった。

「これで、伊角さんは4敗か」

「そうだね。和谷くんも小宮さんに勝ったから、和谷くんもヒカルと当たるまで4敗を維持できると思う」

ヒカルも今日、足立さんに勝って2敗を維持している。

そしてついに明後日の火曜に、ヒカルとの対局。

お互い、まったく気にしないってわけにはいかず、あえて話題に出さない。

それでも、夜はヒカルの家でいつも通り打つ。今日はヒカルと佐為が打つ日。

私は佐為の打った手を代わりに置くだけなんだけど、佐為の考えていることが分かるような気がして、とても勉強になる。ネット碁で増え続けるsaiの棋譜をまとめるサイトなんてものも出てきているくらいだし、佐為の一手、その意味を考えるのは楽しい。

今やっているヒカルと佐為の対局も、佐為の勝利で幕を下ろした。

「負けました。くそ、結構上手く打てたと思ったんだけどな」

「うん、こことか凄く良い手だね。佐為はなんて言ってる?」

「えーと。続く手が失敗しているって。読み筋が難しい手だけど、ぜひ積極的に打っていくべきだったさ」

「なるほど」

佐為は、私やヒカル相手に無敗。というより、ネット碁で中国や韓国、日本のプロを相手にしても無敗。

私も後から和谷くんに聞いて知ったけど、中国のトッププロや韓国

の九段の人相手にも、勝っているらしい。

そんな佐為も、ヒカルに成長してもらいたいと思っっているんだろう。持っている技術をたくさん教えている。

まるで、いつか消えるのが分かっているかのように。……いや、佐為のことだから、強くなったら自分と真剣勝負ができると思っっているかもしれない。ともかく、私もヒカルも、棋風に佐為の影響が濃い。たまに和谷くんや研究会で突っ込まれる時もあるけど、秀策の勉強をしっかりしていると誤魔化している。

そして迎えた火曜日、運命の日。

これまでの勝負で手を抜いていたわけでもないし、門脇さんや明日美さんとの対局もまだ残っている。でも、やっぱりヒカルとプロ試験で打てるというのは、私にとって、何よりも重要な出来事。

「ヒカル、おはよ」

「おう。……わざわざセンターまで行ってやるのも面倒だよなあ」

ふふ、確かにヒカルの家でも、いっぱい対局してるもんね。でも結構えというか、環境というのも大事だよ。

「まあまあ。家で打つのと公式戦で打つのは、全然違うよ」

「そりや分かってるけどさ」

まだぶつぶつとつぶやくヒカルに、本音をぶつける。

「いつか、お互いにプロになって勝ちを重ねて、幽玄の間でタイトル戦が打てたら、最高だと思わない?」

「タイトル戦? 俺とあかりで?」

「うん」

ぶはつと笑いを漏らしたけど、私が茶化さずに真面目に頷くと、ヒカルもちよつと考えてから笑みを浮かべた。さつきまでの笑い顔と違い、どことなく澄んだ良い顔をしてる。

「そうだな。それもいいかもな」

「うん」

それきり雑談もなく、だからといってギスギスしているわけでもなく、穏やかな気持ちを持ったまま、研修センターへと向かった。

「呆れるくらい普段通りね」

「明日美さん。おはよう」

「おはよ。もつとピリピリしているかと思ったけど、今日も仲良く一緒に来るとはね。恐れ入ったわ」

「んー。やっぱり普段とは違うよ。でも、なんて言うんだろう、ピリピリしているとか、険悪な感じじゃなくて。凄く楽しみなもの」

「ふうん。ま、緊張してなければ大丈夫だね、頑張つて」

「ありがと。明日美さんも負けないようにね！」

お互いに櫛を飛ばしあつて、時間を待つ。

他に話しかけてくる人はおらず、開始の時間となった。

対局が始まり、ヒカルがにぎる。今日は先番が良いな。ヒカルに負けた時、私が先番だったから。

ヒカルがにぎった数は偶数、私が置いた石の数は2個。私が先番。「お願いします」

一手目、決めていたというわけでもないけれど、右上スミ小目。

佐為と打つ時、今もこの手が多い。そのせいかな、自然と右上スミ小目から打つと落ち着く。

ヒカルも、ふつと微笑んだような気がする。そして、打った手は左下スミの小目。つまり、ヒカルから見ると右上スミ小目。

まだ始まったばかりだというのに、ヒカルとの意思疎通が楽しい。深いところで繋がっている気がしてくる。

早く打ちたいと思う気持ちを落ち着けて、慎重に、でも手控ええなんてしないようにしながら、一手ずつ重ねていった。

「お昼の時間です。打ち掛けにして休憩に入ってください」

お昼。碁に集中していたせいで、時間の経過が抜けていた。もちろん、対局時計は進んでいて、お互いに持ち時間が減っている。少しだけ私の方が時間を多く使っている。

けれど、盤面は、少し私の方が良い。途中、ヒカルが悩んだ上で無難な一手を打ってきたところがある。仕掛けてくるか悩んだ末に、私

が上手く対処したら逆効果だと思ったんだろう、一見失敗に見える変わった手は打ってこなかった。

打たなかったのは、正解だと思う。今日の一局は、自分でもびっくりするくらい盤面が見えている。先の細かいところでの死活が普段より深く読める。でも、それはヒカルも同じようで、私が踏み込んだ一手にも、冷静に対処している。

「あかり、飯行くぞ」

「あつ、うん」

碁に集中しすぎて、ご飯食べに行くの忘れかけてた。ヒカルが心配そうにしていたので、笑顔を浮かべて立ち上がる。

「ありがと。今日は、特に気合い入れてお弁当作ったんだよ」

「それはいいけど、寝不足とかじゃねえだろうな」

「大丈夫。ちゃんと早めに寝てるから」

ちゃんとご飯を食べておかないと、脳に糖分が行かず、考える力が落ちちやう。

ヒカルも美味しそうに食べてくれるので、ひと安心。とはいえ、食べ過ぎて眠くなると困るし、プロ試験中はずっと少し物足りないくらいの分量に留めているので、ヒカルはちよつと不満かもしれない。

食後の休憩でぼんやりしていると、外に出ていた明日美さんが戻ってきた時に私を見て何か言いたそうだったけど、近くに行こうとしたら手振りで押し留められた。

帰りにでも聞けばいいかな。

「あかり、そろそろ時間だな。続き打つか」

「うん」

休憩が終わって、碁盤の前に座る。

状況は、コミを入れても私の方が3目半ほど勝っている。でも、まだまだヨセまで行ってないし、これくらいの差は簡単に覆るから油断できない。

右辺と中央、上辺を地にした私と、左辺と下辺を地にしたヒカル。中央を手に入れている分、左上スミや右下スミもヒカルが荒らしている。

私あまり相手にせず、中央に大きく構えたので、地はこちらが勝っているけど、見た感じは少し危ない。

そしてヒカルが薄い中央に争いを持ち込んだ、そのタイミングで、左下の隙に一手打ち込んだ。

「……これは」

つい、言葉が漏れるヒカル。すぐに黙って考え込む。中央を守りつつ、左下スミをおろそかにすると、一気に攻め込むぞという意思表示。若干悔しそうな顔をしつつ、ヒカルが一手ずつ、必死に応じてくる。私もこれまでにない充足感を味わいつつ、対局を進めていった。

「負けました」

「ありがとうございます」

ヒカルの言葉に、お礼で応じる。しっかりと打ち合って、ヒカルに勝てた。今になって震えてきた。

プロ試験中、1局ごと目に見えて成長するヒカルに対して、私は全然成長したと思えなかった。でも、この1局は昨日の私には打てない碁だった。

たったの1局。でも、成長したと思える碁だった。

「なんで、勝ったあかりが泣きそうなんだよ」

「な、泣いてないよ」

「んじや、さっさとハンコ押しに行けよ」

そうだった。ヒカルに促されて席を立て、ようやく周りに人だけができていのに気付いた。

明日美さんと和谷くん、伊角さんだけじゃなく、越智くんまで見入っていた。若干顔色が悪いけど、大丈夫かな？

「あかりちゃん、凄い碁だったね！」

「えっ、うん。ありがとうございます？」

「あはは、どうして疑問形なのよ。これだけの碁、私も打ちたいなあ」
ちよつと明日美さん、大げさすぎるよ。確かによく打てたと思うし、凄く楽しかったけど。

ハンコを押して、席に戻る。

ほとんどの対局が終わっていたので、少しだけいつもの院生メン

バーで検討を行った。

序盤や中盤も色々意見が出たけど、1番熱が入ったのは、左下スミに打ち込んだ一手だった。

「この一手は凄いな。タイミングといい場所といい、これは取れないし、地合いが大きく削られる」

「この鋭さは、まるでsaiのようだな」

和谷くん、またそれか。と思ったたら、まさかの伊角さんからの一言だった。チラリと和谷くんを見た時に、ニヤリと笑われた。

「進藤もだけど、藤崎もかなりsaiの影響受けてるよな」

「いや、別にsaiの影響ってわけじゃないよ。秀策はヒカルと一緒に勉強してるから、そっちじゃないかな」

和谷くんってば。否定するの分かつてるくせに、こうやって茶化してくる。

これで誤魔化せると思ったら、明日美さんが弱音を吐いた。

「私も最近、よく秀策は並べてるけど、こういう一手を思い付ける気がしないよ……」

「うーん。でも、明日美さんが秀策を並べ始めたのは最近でしょ？」

もつと学べば、もつと色々と見えてくると思うよ。あと、和谷くんじゃないけど、saiの碁も勉強になると思う」

「ああ、佐為の打ち方はホントにすげーもんな」

今のヒカルの言葉は、ネットのsaiじゃなくて隣にいる佐為を意識したよね。こっちはバレないように気を遣ってるのに、気楽そうに言ってくれちゃって。

というか、ヒカルはこれで3敗なんだし、もうちよつと悔しそうにしてもいいのに、結構あっさりしている。気になるけど、今聞くようなことじゃない。

あまり長々と残るわけにもいかないので、途中からは片付けながら話をして、帰り支度も済ませる。

「じゃあ、また週末」

残り試合は、あと4戦。私は門脇さんや明日美さんとの対局が残っ

ていて、ヒカルは和谷くんや越智くんと対局が残っている。

帰りの電車で、私は対局後から持っていた疑問を口にした。

「ヒカル、今日は私に負けたのに、あまり気にした風じゃないよね？」

「ああ。佐為とも話していただけどよ。たまたま1勝したとはいえ、まだ俺よりお前の方が実力は上だからな」

「へえ」

「諦めたわけじゃねーぞ？ あかりにも、ちゃんと公式戦で勝ってやるさ。それに、今日負けてもまだ3敗だし、俺が残り全部勝てば、何人になるかわかんねーけどプレーオフは確実だろ。じゃあ、細かいことは抜きにして、残り全部勝てばいいって分かりやすいじゃん」

「まあ、確かにその通りだね。私が明日美さんや門脇さんに負けたとしても、明日美さんは2敗で門脇さんは3敗。ヒカルが勝てば越智くんもだけど、3敗で並ぶね」

単純というより、吹っ切れた感じかな？ 良い方に働けば、残りの対局で、良い結果になりそう。

「ああ。それより、さつさと帰って今日の対局検討しようぜ。さつき話してても、佐為がうずうずしてて邪魔でしょうがなかったぜ」

言ってるから、耳を軽く押さえる。もう、佐為が文句を言うって分かってて邪魔って言うんだもんなあ。それだけ仲が良いとも言えるけど。

そしてちよつと長めの検討を終えて、私とヒカルで打った後、家に帰った。

「あ、ちよつと帰ってきた。ちよつと待ってね」

お母さんが、受話器を押さえて私を呼ぶ。

「明日美ちゃんよ」

「あ、はい」

明日美さんから電話だったみたい。すぐに受話器を取り、話し始める。

「はい、お待たせしてごめんなさい」

「ううん。今日はお疲れ様」

「明日美さんも、お疲れ様。それで、どうしたの?」

「実はさっき、塔矢くんから電話があつて、今日の対局内容を教えてほしいって言われたんだけど、伝えてもいいかな?」

塔矢くんが? えっと、わざわざ明日美さんに?」

「うん。構わないけど……」

「そう、良かった。一応、あかりちゃんに聞いてからつてことで返答はしてないんだ」

「気を遣わなくても大丈夫だよ。さっきの対局、結構たくさん見てたし」

「それはそうなんだけどね」

明日美さんは思ったよりも義理堅い。少し突っ込んで聞きたいこともあるけど、プロ試験中に明日美さんの気を散らしちゃったら大変だし、無事に合格したら聞こう。

それ以外は特に塔矢くんの話題にはならず、私もだけどヒカルも負けないくらい打っていたのが凄いつて話も持ち上がった。

「うん。ヒカルは本当に、日を追うごとに強くなってる気がする。でも、明日美さんもプロ試験が始まってから今までで、随分と強くなつたよね」

「本当? そうだったら嬉しいな。塔矢くんに教えてもらつて、秀策の棋譜を勉強して、結構大変だったんだよ」

明日美さんは、本当に疲れたとため息を吐いた。塔矢くん、一切妥協しないもんね。

無事にプロ試験が終わつたら、一緒にケーキを食べに行こうと約束して電話を置いた。

ご飯を食べ終わつてから部屋に戻り、ベッドに倒れ込む。疲れた。普段の何倍も気力を振り絞つた。

これで良かったのかどうかは、残り試合が終わるまでは分からないし、もしヒカルが落ちたら、私もショックを受けると思う。でも、最善を尽くすのは、これからプロとしてヒカルと打つには必要不可欠だった。これから一生を勝ち負けの世界に身を置くんだ。

でも、今日だけはもう碁から離れて、ゆっくりお風呂に入って、さっさと寝よう。

第31手 プロ試験 その7

週末の土日にあった第24戦、第25戦は上位陣に動きがなく、私も連勝できた。

そして25戦が終わった段階で、プロ試験合格が確定した。

「おめでとう、藤崎さん」

「ありがとうございます」

篠田先生にお祝いの言葉をいただき、素直に頭を下げる。篠田先生は、ため息まじりにつぶやく。

「全勝自体が減多にないけど、全勝でここまで合格が決まらないのは初めてだよ。残り2戦だけど、どの子がプロになってもおかしくない実力を持っているよ」

「そうですね、皆強かったです」

全勝の私が言うのもおかしいかもしれないけど、本当に強い人が多い。ヒカルは当然、明日美さん、越智くん、和谷くん、伊角さん。さらに門脇さん。今は私の方が強いけど、プロになった後、追い抜かれる可能性が十分にある。私だってプロになるんだし、簡単に追い抜かれるつもりはないけど。

「今日勝てば合格だったけど、緊張はしなかった？」

「はい。今日より、先週の火曜の方が緊張しました」

「ああ、進藤くんとは仲が良いみたいだね。でも彼もここまで3敗、頑張ってるね」

うん、ヒカルは頑張ってるし、一緒に合格したい。残り2戦、和谷くんや越智くんには悪いけど、ヒカルに勝ってほしい。

篠田先生とはそれくらいのやりとりで切り上げて、ヒカルと合流して帰り支度を済ませた。

「ヒカル、あとは和谷くんと越智くんだね」

「おう。えーっと、和谷って合格の可能性はあるのか？」

「うん。私が全勝して、ヒカルが和谷くんに負けて、明日美さんが26戦が足立さん、最終戦で私に負けたら、合格が私と3敗の越智くん、最後の枠を4敗の人で争うことになるね」

「そっか。今の奈瀬が足立さんに負けるとは思わないけど、可能性があるなら、和谷も必死だな」

「そうだね。ついでに言うと、26戦でヒカルが勝って、最終戦でもヒカルが勝ったら、明日美さんの結果次第で越智くんとプレーオフが待ってるからね。越智くんも最終戦、必死で向かってくると思う」

私とヒカルの対局で驚いていたけど、それで萎縮するようなぬるい碁は打たないと思う。最後の2戦、ヒカルにとって、正念場だよな。

「私は合格したし、あと数日、ヒカルと佐為を中心に打つ？」

「んー……。いや、普段通りにしようぜ。下手に変えて感覚が狂うより、いつもと同じように打つ方がよさそう。お前と打つのも勉強になるしな」

「そ、そう？ なら普段通り打とう。私もその方が嬉しい」

私と打つと勉強になるって。ふふふ。嬉しい。ここが自室のベッドの上なら、転がり回りたいくらい。残念ながら電車の中だから、そんなことできないけど。

「あかりも佐為と一緒にだなあ」

「え、何が？」

「今は打たなくていいって言いながら、打てるようになったら喜ぶし」

「あー、うん。でも佐為とは少し違うと思うけどね」

佐為に比べると、動機が不純でごめんね。

そして迎えた第26戦。私は門脇さんと対局。ヒカルや明日美さんが合格するためにも、今日は負けられない。

ヒカルと一緒に棋院センターまで行くと、入り口に明日美さんの姿が見えた。

「明日美さん！」

「あかりちゃん、おはよ」

「おはよう」

中に入らず、どうしたんだろう。

聞いていいか考えていると、明日美さんが笑顔を見せた。

「ちよつと緊張しちゃって。中にいると息が詰まるから、外で時間を

潰そうかなーって」

「そっか。私も一緒にいてもいい？」

「うん、もちろん。でもいいの？」

ちらりとヒカルを見て、明日美さんが首をかしげる。

ヒカルは先入ってるぞ、と言葉を残して中に入ってた。

「いいみたい」

わざわざヒカルにいいかどうか聞くことじゃないし、そもそもヒカルにしても、ずっと私が一緒だろうざったく思うかもしれないし。

……そういえば佐為はずっと一緒だけど、よくヒカルは平気だね。幽霊だし気にしてないのかもしれないけど。

明日美さんの話に乗って雑談しているうちに、時間が近づいたので中に入る。和谷くんが伊角さんと話していたので近づく。

「俺たちだって可能性は低いけど、0じゃねーんだ。最後まで諦めずやってみるさ」

「うん。頑張れ」

伊角さんも和谷くんも、自力では無理な状況だけど、だからと言って手を抜くわけがない。

対局室に入り、席に着く。ヒカルより先に和谷くんが座っていたけど、和谷くんの真剣な顔を見て一瞬躊躇したヒカルに、当の和谷くんが笑みを浮かべる。

「よお、進藤。早くやろうぜ」

「おうー」

本当に和谷くんは器が大きい。メンタル面では、伊角さんや越智くんよりしっかりしてるかもしれない。

その結果が、序盤に4敗しながら、途中で取りこぼしをひとつも出さなかった部分だろう。安定度が凄い。

「さて、よろしく。藤崎さんは合格が決まったんだろ？ 羨ましい限りだよ」

「合格は決まりましたけど、1局が大事なのは他の誰とも変わりませんよ」

手は抜かないという宣言。そんなことするまでもなく、門脇さんも分かってるだろう。

「そりゃまあな。大事な彼氏が合格するかどうかの瀬戸際だ。藤崎さんは俺に勝たなきゃいけないし、そもそも彼氏が負けたら終わりだけどな」

「……彼氏じゃないです」

「え、そうなんだ？ 俺はてつきり……」

私も、ヒカルと付き合ってます！ って言いたい。でも世の中、そんなに簡単じゃないし、特に今はそれどころじゃない。

言い返しても良かったけど、舌戦をやったというより、世間話に近い。むしろ話題に出した門脇さんの方が気まずそう。

「よろしくお願いします」

時間になり、私の黒石が始まった。

お互いに序盤からしつかり時間をかけて、慎重に打つ。

初めて打つ相手だけど、確かに強い。でも、不思議とあまり負ける気がしない。先週打った時のヒカルの方が強かったと思う。

お昼の時点で、かなり有利な状況。もちろん油断はできないけど、ミスさえしなければ勝てそう。

お昼をヒカルと一緒に食べた後、ヒカルがちよつと外で身体を動かすと言って外に出る。私はゆつくりしたいから部屋に残ると、外でお昼を済ませた明日美さんが近くにきた。

「明日美さん、どんな感じ？」

「今のところ悪くないよ。それより、進藤がかなり互角な感じね」

「うん。さつき盤面見たけど、和谷くんが凄く上手く打ってるよね」

「今日の結果次第で、和谷も合格する目があるし、そりゃ必死になるよね」

ヒカルは、上辺をほとんど全て和谷くんを押さえられていて、放っておくと地が足りない。割って入るしかないけど、かなり厳しそうに見える。

私と門脇さんの対局も、ちょうど和谷くんに似た感じになっていく。左辺を中心に、私が地を広げていて、このままだと門脇さんの地

が足りないから、どこか攻めてくるだろう。攻めてきた時に、しっかりと潰せたら私の勝ち。

「さて、そろそろね。今日しっかりと勝って、万全の態勢で最終戦に臨みたいわ」

うーん、と伸びをする明日美さん。そうだね、私も頑張ろう。

そして午後から、門脇さんが深くまで打ち込んできたけど、先まで読めば潰れる手が多かった。実際に2度ほど潰したところで、門脇さんが投了してきた。

「いや、まいった。まさかこんなに強い子がいるとはね」

「同年代で、もつと強い子もいますけどね」

「……噂の塔矢アキラ？ プロになって、まだ負け無しだろ？」

「はい。練習だともかく、公式戦で勝てる気がしないです」

今はまだ大きな差がある、と思う。先週、ヒカルと打ってから、かなり自信がついたというか、盤面がよく見えるけど、多分塔矢くんには敵わない。

話していると、少し離れたところで打っていた明日美さんが立ち上がり、ハンコを押しに向かうのが見えた。門脇さんも目に入ったようで、ふうつとため息を吐いて自嘲気味の笑みを浮かべる。

「準備をあまりせずにプロ試験に挑むのは早かったな。1年しっかりと打って出直してくるさ。プロになった時、リベンジさせてもらうよ」

「その時はよろしくお願いします」

門脇さんなら、近々プロになるだろう。その時には、負けないように頑張らないと。

私も立ち上がり、ハンコを押し。明日美さんもすぐに気がついて、ちよいちよいとヒカルを指さした。

「まだやってるね」

「うん。ちょっと見てみようか」

明日美さんに促されて、ヒカルと和谷くんの対局を見に行く。盤面を見ると、ヒカルの攻めた手が和谷くんの白石を分断していて、盤面が形勢逆転している。

「負けました」

和谷くんは手がないかと悩んでいたけど、しばらく経って負けを宣言した。

これで、ヒカルが合格するかどうか、明日に繋がった。逆に明日美さんは、合格が確定しなかったことになる。

「……sai」

ぼそり、と和谷くんがつぶやく。ヒカルがビクツと反応する。ついでに、私も。

「前にお前の碁がsaiに似てるって言ってただろ？ 今日の一局は、sai並みだったぜ」

「……うん、ありがと」

お礼も変な気がしたけど、saiが強いくらい分かってるし、それほどおかしくないのかな？

ヒカルがハンコを押しに行つて、和谷くんが顔を上げる。

「ああ、藤崎と奈瀬か。そういや、お前らはどうだったんだ？」

「勝ったよ」

明日美さんが答えて、そつかとつぶやく。

「奈瀬も何年も院生やってて1番調子良いだろ？ さつさと受かったやえよ」

「あはは。うん、受かりたいけどね。最終戦がちよつと」

「簡単に全勝させるなよ」

簡単じゃないもん。結果として今の時点で全勝だけど、途中で取りこぼしていたら、順位も大きく変わっていたと思う。

これで、明日美さんと越智くんが2敗で、ヒカルが3敗。合格圏内はこの3人。

越智くんが勝ったら私と明日美さんの結果にかかわらず、合格者が決まる。越智くんが負けたら、私と明日美さんの結果次第で、2人でプレーオフか3人でプレーオフになる。

「明日美さん、金曜の研究会どうしよう？ 私、行かない方がいいかな？」

「え、どうして？ あかりちゃんが遠慮する理由なんてないよ。私の方が誘ってもらって行くようになったんだから、遠慮するしたら私

だよ」

うーん。私だけ行って明日美さんが行かなかつたら、塔矢くんが
がっかりしないかな。

明日美さんが気にしないようなら、普段通りで大丈夫かな？

「前日だし、明日美さんが特訓とかするかなーって思ったの」

「特訓ねえ……」

ふむ、と顎に手を当てて悩む素振り。

「あかりちゃん、研究会で特訓相手になつてよ」

「もう。真面目に話してるのに」

「あはは、ごめん。大事な一局だけど、結果だけじゃないから。金曜の
研究会は研究会、土曜のプロ試験はプロ試験よ」

ふん、と気合いを入れている。そっか、そうだね。

「ありがと。じゃあ今日は帰るね！」

「うん。また金曜に」

ヒカルが待っていてくれたので、明日美さんに手を振ってヒカルと
合流する。外に出て、歩き始めてからヒカルが笑い出した。

「和谷がさ、s a i って言っただろ？ あれ、本当に佐為に話しかけて
いるのかと思って焦ったぜ」

「うん、横で聞いていて、私もビックリしたよ」

和谷くん、本当にネットの s a i が好きだもんね。棋譜を集めて研
究もしてるみたいだし。

いつか、佐為といっぱい打たせてあげたいけど、なかなか難しいよ
ね。

「和谷も強かったけど、勝てて良かったぜ」

「うん。あとは越智くんとの対局で、勝てばプレーオフだね」

越智くんも、年下とは思えないくらい強い。ヒカルも強くなつてい
るけど、勝てるかどうか、やってみないと分からない。

「ヒカル、分かつてると思うけど、越智くんは、負ける時つて地を意識
しすぎる時が多いの。そういう碁が悪いわけじゃないけど、越智くん
の場合は、守る時に厚みを持たせて、攻めるのに向かない形になつ
ちやうんだよね」

「ああ、そういう傾向があるよな。じゃあ、布石で大きく構えて、待ち構える方がいいのかな」

「うーん。露骨にしたら、越智くんなら気付いて上手く打ってきそうだから、難しいところだね」

2人で越智くんへの対策を話していたけど、ヒカルの家に着いたら、後は普段通り、佐為も一緒に打ち合う。

外では佐為に話しかけられないけど、ヒカルの部屋だと気兼ねなく話せる。越智くんの印象を佐為にも聞いて、どうするかを話し合った。

でも、結局のところ。

「自分の力をきちんと出せたら、きつと勝てるよ」

「そんな簡単じゃねえと思うけど、色々と考えすぎても逆効果だからな。自分の碁を打てるように頑張るさ」

うん。色々と話したけど、それが1番良い。確実に勝てる対局なんてないし、ヒカルならきつと勝てる。

翌日からは越智くんの対策とか考えずに、楽しく対局を重ねて過ごした。

そして、やってきた土曜日。ついに最終戦。

「ヒカル、落ち着いてね」

「ああ。多分お前より落ち着いてるよ」

私、そんなに落ち着きないかな？

「落ち着いてって、それ朝から3度目だけ。佐為も笑ってるぞ」

こら、電車で周りに人がいないとはいえ、そんな気軽に佐為の名前出しちゃ駄目でしょ。

「大丈夫だって。あかりは気にしすぎだよ」

「そんなことないよ。ヒカルが大雑把すぎるの」

確かにちよつと浮ついていたかもしれない。ヒカルに言われて、いつもの調子が出てきた。

碁とは関係ない雑談をしながら、棋院センターに到着した。

休憩室に明日美さんが来ていたので、挨拶に向かう。

「明日美さん、おはよう」

「あかりちゃん。おはよ。今日はよろしくね」

「こちらこそ」

明日美さんと言い合っていると、越智くんもやってくる。ヒカルと何やら言い合っているけど、越智くんって意外と盤外戦も躊躇しないよね。そういうところ、真似する気はないけど、凄いと思う。

「そろそろ時間ね。行こっか」

明日美さんの言葉に時計を見る。もう間もなく、という時間になっていたので、連れだつて対局室へと向かう。

向かい合つて座つて、篠田先生の合図を待つ。

ヒカルと明日美さん。私にとって、2人は特別だと思う。和谷くんとも付き合いは長いし仲がいいけど、特別かっていうと、そうでもない。

ヒカルが私にとっての特別なのは当然、明日美さんも、女性でプロを目指しているというところが同じで、私よりも純粹に碁を打っている。

女だからと馬鹿にされたら怒るし、碁打ちとしてやっていく覚悟もある。一緒にプロになれば、きっと凄く楽しいと思う。

「よろしくお願いします」

時間がきて、お互いに挨拶をして碁笥を持つ。にぎった結果、私が黒石。

明日美さんが、ヒカルの対策として塔矢くんに教わっていたとしたら、私の碁も同じように対策しているかもしれない。

でも、ヒカルが越智くんの対策を考えていた時に言っていた通り、下手に小細工するより、自分の碁を打つのが1番勝ちが近づくはず。

少しだけ悩んで、結局は1番打ちやすい、右上スミ小目に一手目を置く。明日美さんは四の16、星。明日美さんは、塔矢くんに影響されたのか、最近はよく攻める碁を打っている。

調子に乗らせると危ないので、今日は私から力かっていって、明日美さんが守りに入るように打ち回す。

中盤に入る頃には、私が明日美さんの地を荒らす展開となってい

た。そこまで深く踏み込むつもりはなかったのに、明日美さんの守りが堅く、あの手この手で攻めている。

どうするか考えていると、お昼の時間になった。

「お昼だね」

「うん」

お互いに、碁の内容には触れない。終わった後の感想戦ならともかく、お昼に途中の段階で話すことなんて、何も無い。

ヒカルの様子を見ると、今のところはヒカルの方が良さそう。一見して意味がない絡め手も、中央の上辺寄りに打たれている。越智くんはちよつと警戒したように打っているけど、意図には気付いてないと思う。

「ヒカル、お昼食べよ」

「おう」

休憩室で、持ってきたお弁当を広げる。

食べながら今日の調子を聞く。

「んー。悪くないよ。まだどう転ぶかわかんねえし、まだまだここからだけどな。あかりは？」

「それが、今のところ明日美さんに上手く打たれてる。何か踏み込む手を考えなきゃいけないから、凄く楽しいよ」

「これまで明日美さんと打ってきた中でも、特に上手く打たれている。でも、まだ試したい手はあるし、勝負はここからね」

「ここまで来たら、あかりに全勝してもらいてえけどな」

「えっ？ そうなの？」

「これまで、そんなこと一度も言っただけよな」

「負けたのは悔しいけど、塔矢と一緒に、いつか勝ちたい。他の奴にあつさり負けるよりは、勝ち続けている方が燃えるじゃん」

なるほど。そういうことなら、なんとしても勝ちたい。とはいえず手に勝ちを狙いすぎて気負ってもしようがない。

勝ちを狙うのはさつきまでと一緒にだし、よりいっそう気合いを入れて臨む、それだけのつもりで。

時間がきたので、対局室へ戻る。そして対局が再開して、打ち始め

た。

盤面をしつかり見て、明日美さんの薄いところを探す。これだけ広く打っているんだから、どこかほころびが生じているはず。

ヒカルはよく佐為ならどうするか考えるし、私も時々やるけど、知っている人でこういう時の攻め碁が一番得意なのは、間違いなく塔矢くん。

でも、塔矢くんならどうするかと考えられるほど、塔矢くんの碁を知っているわけじゃない。他人頼りにせず、自分で攻め碁を打たなきゃいけないよね。

長考を経て、右辺の詰まっっているとところに手を加える。無理なようにも見えるけど、明日美さんがミスをしなくても、細い勝ち筋があるはず。

打ち進めるうちに明日美さんが気付いたのか、手が止まって長考に入る。最初に気付いていれば潰せたかもしれないけど、今となっては、もう遅い。

凄く打ち辛い碁になったけど、なんとか勝てそう。

「……負けました」

「ありがとうございます」
「あー、悔しい。途中まで良い碁だったのに。最後の打ち筋、全然見えてなかった」

「最後まで良い碁だったよ。凄く強かった。それに、楽しかった」
「うん、楽しかった。あーあ、合格できるかどうかは、プレーオフ次第ね」

ハンコを押して、ヒカルの様子を見に行く。

激しい打ち合いをしたようで、かなり盤面は荒れている。終盤のヨセに入っていて、どちらが勝っているか目算すると、ヒカルが4目半ほど勝っている。

まだ終わってないけど、このままだと勝てる。

息を詰めて勝負の行方を見守る。

「4目半……」

目算通り、ヒカルが4目半差で勝利を掴んだ。

良かった、これでプレーオフに繋がった。あ、でも明日美さんの合格が決まらなかったし、がっかりしているかな。

「やっぱり進藤が勝ったね」

明日美さんは、ヒカルや越智くんには聞こえないくらいの声で、つぶやいた。

隣にいたから聞こえちゃったけど、多分無意識に出た言葉だと思う。深く聞くのは、全て終わってからにしよう。

「あかり、勝ったぜ」

「お疲れ様。私も勝ったよ」

周りもザワザワとしている。2枠を争って、3人でのプレーオフ。全部の対局が終わってから、篠田先生が3人を呼んで説明をしている。漏れ聞こえる言葉から、明日からの3日間で終わらせるらしい。クジを作って、これから引くのだとか。

しばらく待っていると、3人が出てきた。

「どんな順番？」

「最初に俺と越智、次に俺と奈瀬。最後に越智と奈瀬だな」

ヒカルと明日美さんが、2日続けての対局なんだね。越智くんは1日空いちやうと打ちにくいかもしれない。

「ところで、全員が1勝になったら、どうするんだろ？」

「ああ、篠田先生に聞いたら、最終月の院生順位が上の人間が勝ちだつてよ」

院生順位は、越智くんが2位で明日美さんが4位、ヒカルが5位。

ヒカルが1番不利かあ……。

「まあ、あかりに負けた時に言った通り、全部勝てば関係ないからな」
ふふ、そうだったね。強がりかと思っただけど、今のヒカルなら、勝つてくれると信じてる。

「うん。2人に勝ってプロ試験合格を決めちやおう」

ヒカルが合格した上で、最終戦で明日美さんが勝てばいいけど、ヒカルが簡単に勝てるとは思わない。

特に最近、明日美さんの棋力がどんどん上がっている。ヒカルも上

がっているし、プロ試験の本戦中に打った時とは違うけど、どうなるか予断を許さない。

ヒカル、あと2戦、頑張つて。

第32手 プロ試験 その8

プレーオフ初日は、ヒカル対越智くん。

篠田先生に聞いたら観戦してもいいとのこと。

「ヒカル、見に行ってもいいよね？」

「別にいいぜ。奈瀬も来るだろうしなあ」

ヒカルと一緒に帰りながら、明日見に行ってもいいか確認する。邪魔になるようなら控えようかと思っていたけど、気にしてないみたい。

ヒカルの家に到着して、いつものように対局する。今日はヒカルと佐為が打つ日。

ヒカルが指し示す場所を、佐為の代わりに打っていく。徐々にヒカルが不利になっていって、勝負が付いた。

打ちながら、私がヒカルならどうするかを考えたり、佐為の手について考えるけど、まだまだ佐為との差は大きいとしか言えない。

「いつか、佐為に勝ちたいな」

「うん。いつまでも指導ばかりじゃ、佐為もつまらないもんね」
思っていたことをヒカルが口に出したので、ビックリした。

しばらく待って、佐為からの返事。

「今も楽しいけど、俺たちが強くなるのは期待してるってよ」

「うん。ヒカル、一緒にプロになって頑張ろう」

そのためにも、明日と明後日、頑張る。

そして、翌日。棋院センターに行くと、すでに越智くんは来ていて、への字口で椅子に座っていた。

私たちが部屋に入ったのに反応して、越智くんがヒカルに声をかけてきた。

「おはよう」

「おはよ」

「今日も藤崎と一緒になんだ。気楽なものだね。昨日僕に勝ったからって、今日ももう勝った気での？」

「そんなことねーよ。昨日は昨日、今日は今日だからな」

うん、ヒカルは問題なさそう。慢心していないし、だからといって萎縮するでもない。自然と普段通りに打てるのが一番なんだけど、考えすぎて気負うと駄目だし、本当に難しい。

「フーン！」

越智くんが苛立たしげに立ち上がり、対局室へと向かう。越智くんの方が普段通りじゃないみたい。大丈夫かな。

「あかりちゃん」

「明日美さん、おはよう」

越智くんと入れ違いで明日美さんが入ってきた。

「今日は見学なのに早いね」

「うん、しっかりと見たいから」

きつと、しっかりと見て、しっかりと対策するんだろう。

私も、ヒカルと明日美さん、越智くんの対局は勉強になると思うし、しっかりと見ておきたい。

時間がきて、ヒカルが対局室へと向かった。打ち始めるまで明日美さんと私は、部屋の外で待つ。

遠目で見ていると、越智くんがニギリ、そのまま越智くんの先手になった。ふふ、と明日美さんが笑ったので、小さく首をかしげた。

「あかりちゃん、授業参観に来ているお母さんみたいだよ」

「え、嘘。そんな顔してた？」

「うん。大丈夫かな、ちゃんとできるかなって、心配そうにしてた。もつと信頼してあげなよ。進藤、本当に強くなってるから」

困ったことにね、と笑う。明日、明後日と対局を控えている明日美さんに気を遣わせちゃうとか、悪いことしちゃった。

うん、大丈夫。ヒカルはきつと勝つ。そう信じて、あらためて目を向けると、ちょうど対局が始まった。

越智くんが、昨日は後手に回って負けてしまったのを意識してか、序盤から積極的にしかけている。ヒカルも冷静に対処しているけど、今のところヒカルが少し悪い。

ヒカルが少し長考した後、中央から右辺寄りの無難な場所に打ち込んだ。中央の黒を攻めるにも、右辺の黒との連絡を断つにも中途半端で、役に立たない。今のタイミングで打つ場所かな、という疑問が浮かんだけど、ヒカルが打ったんだから、何らかの意味があるだろう。意味が盤面に出るまで、意図を考えてみよう。

手が進むにつれ、少しの差を取り戻せる場所は減っていく。でも、ヒカルは焦ることなく、越智くんの黒石を攻め立てる。

越智くんも、今日は早めに攻めているせいで、守りがかなり薄い。ああ、さっきの一手はこの後にある攻防のためだったんだ。

今は右上スミから上辺で打ち合っているけど、越智くんは右辺と繋げたいはず。でも、さっきの一手が邪魔していて、上手く繋げない状況。それに対して、ヒカルの白石は上辺の争いで有利なだけではなく、越智くんの右辺に割って入る時に、絶妙に効いている。

目算で、2目半ほどヒカルが負けていたけど、今のワカレで一気にヒカルが3目半ほど上回った。まだ少し目数の増減はするだろうけど、ヒカルがポカをしなければ、このまま勝てそう！

「……負けました」

凄く悔しそうに、絞り出すように負けを宣言する越智くん。もうヨセに入っていて、逆転の目がなくなると、同時に、越智くんが投了して、検討もそこそこに部屋を出て行った。

「あ、荷物……」

「部屋に荷物を置いたまま。あれね、前に本田さんが言っていたやつ」「あー、トイレに籠もるっていう」

多分、一人で反省会やってるんだろう。負けた時の行動をパターン化するのには避けた方がいいと思うけど、今言うのもかんに障るだろうし、そもそも私がどうこう言うことでもない。

「進藤、明日はよろしく。じゃあ私は先に帰るね」

ヒカルが片付けるのを手伝っていると、明日美さんが立ち上がった、さっさと出て行った。

私たちの片付けが終わる頃に越智くんが戻ってきて、挨拶だけして

別れる。

「ヒカル、まず1勝だね」

「ああ、明日はリベンジだし、奈瀬がある程度俺やあかりの碁を研究していたとしても、簡単には負けないよ」

「うん。明日も勝って、きっちり合格を決めちゃおう」

もし明日ヒカルが負けると、明後日の明日美さんと越智くんの勝負によって、ヒカルがどうなるかが決まる。人任せになるより、しっかりとヒカルに勝ってもらいたい。

今日は私がヒカルと打つ日。付け焼き刃でも、明日美さんが選べるような強引に攻める碁を打ってみよう。

明けて月曜、明日美さんとの対局日。

休憩室で、普段より少し顔がこわばった明日美さんと挨拶。

ヒカルに勝って欲しいけど、明日美さんが力を出せずに負けて、明日に響くのも困る。

「奈瀬も緊張するんだな」

「え？ そりゃまあ」

「あかりはプロ試験中、ずっと変わらねえし。なんかコツでもあるのかと思っただけど、こいつ鈍感なだけかもな」

ヒカルの言葉に、明日美さんが笑い声を上げる。笑った後に私を見て、気まずそうな顔。

「ごめん、進藤が変なこと言うから。鈍感っていうのに同意したわけじゃないよ」

「……何も言っていないけど」

わざわざ念押ししたってことは、ちよつとは思ってる？

でも、ヒカルの言葉で、明日美さんから堅さが取れた。

「合格を人任せにしたくねえからな。ちゃんとお前の碁も研究してきたし、きっちり勝って合格してやるさ」

「ふふん、私だって進藤やあかりちゃんの碁は研究してるもん」

「……塔矢にも鍛えてもらってるんだろ？」

「うん、進藤に勝てるように鍛えてもらったからね。塔矢くんにも、私と

進藤の結果も見せてるよ」

「塔矢に……」

「今日も私が勝って、進藤は私より下だよって伝えないとね」

「ちよつと、明日美さん！」

明らかに言い過ぎ。明日美さんってば、何を考えてるの？

でもヒカルは引き締まった顔で、大胆不敵に宣言した。

「じゃあ、俺が勝てば、もう塔矢はすぐそこだぞ、ってことになるな」

「勝てればね」

ヒカルが気合いの入った様子で、休憩室を出て行った。

「ごめんね、あかりちゃん」

「私に謝ることじゃないけど……。私もごめんなさい、口を挟ん

じやって」

「ううん。わざわざ煽ったからね、後で進藤にも謝るわ」

謝るくらいなら、どうしてあんなことを言うんだろう。しかも結果

として、ただヒカルに気合いが入っただけのようにも見える。

「不思議なのよね。塔矢くんが、進藤を気にする理由」

「それは……」

「ああ、あかりちゃんから聞こうとは思ってないよ。進藤か塔矢くん

が話してくれるならともかく」

そっか、塔矢くんは明日美さんに、昔のヒカルと打った碁の内容は

教えてないんだ。必要以上にヒカルを警戒させないためかな？

理由はどうかあれ、確かに塔矢くんの行動は不可解だろう。同年代の

ライバルというには、現時点での塔矢くんとヒカルの実力差は大きく

すぎる。

「2日ともちゃんと勝って、きっちり塔矢くんを問い詰めないとね」

今日1番の笑顔。塔矢くんの話をする時、凄く楽しそう。すっかり

緊張もなくなつたみたいだし、私も2人の碁を私も楽しもう。

そうして始まった対局。

予想通り、序盤から明日美さんが攻めてヒカルが守る展開になつ

た。昨日と似た構図だけど、乱戦になると越智くんよりも明日美さん

の方が上手い。

読みの深さは、もしかしたら越智くんの方が上かもしれないけど、全体を見て攻める部分と控える部分のバランスが良い。だから、ヒカルが打つ妙手とでも言うのか、後から効いてくる手は上手く活きない可能性が高い。

そう思っていると、ちょうどヒカルが、右辺の攻防をしている最中に、左下スミにそういう手を打った。大丈夫かな。

しばらく明日美さんが長考してから打ち始めたけど、やっぱりヒカルの狙いは読まれてそう。打ち進めると、その石は何も効力がなくて、丸々損になってしまった。

それもあってヒカルが不利な状況だけど、慌てず少しずつ明日美さんの地を減らしにかかる。ヒカルも明日美さんも自陣が薄く、ちよつとしたミスで決壊しかねない中、ギリギリの攻防が続く。

少しずつ、ヒカルの方が押し気味になる。ヒカルが結果として打ち損じた手の分の不利を、ひっくり返した。

明日美さんもこのままだと駄目だと思っただろう、ヒカルの陣地になっていく右辺の中に、深く踏み込んだ手を打ち込んだ。どう見ても悪手。でも、何か意図があるかもしれない。ヒカルも長考に入る。ここまで時間は明日美さんの方が随分と少なく、ヒカルはまだ30分以上残っている。ここで残り10分くらいまで使ってもいいだろう。

……凄く細かいけど、もしかしたらヒカルの手によっては、右辺が丸々潰れてしまうかもしれない。横から見ている分には気付けたけど、もしヒカルが気付かなければ、ひっくり返る可能性が高くなる。

ヒカルの残り時間が15分を切ったあたりで、ヒカルが応手を打つ。うん、心配なかったみたい。ヒカルはきちんと明日美さんの打てる手を潰して、勝ちを掴んだ。

「ああ、負けちゃった」

「悪いな」

「でも楽しかった。今度は私が勝つからね！」

「おう、今度打つ時を楽しみにしてるよ」

これでヒカルが2勝、プロ試験の合格を決めた。

「ヒカル、おめでどう！」

「へへ、ありがと」

ヒカルが篠田先生に呼ばれて、いくつか説明を受ける。それを待つ間、明日美さんと話をする。

「進藤、少し前に打った時より強くなってる」

「うん。家で打つ時も、時々負けてるし」

「え、あかりちゃんが!？」

「まだ2回くらいだけだね」

プロ試験が始まるまで負けなしだったのに、プロ試験中にもどんどん強くなっていった。

そもそも碁を覚えてから2年でプロになるなんて、信じられないくらい早い。

「それはそうと、越智くんは来なかったね」

「うん。家で勉強してるんだらうね」

「越智も強敵だけど、勝ちたいなあ」

「きつと勝てるよ。塔矢くんに鍛えてもらってるんだし！」

「……進藤に負けたけどね」

ヒカルは、佐為に鍛えてもらってるからね。塔矢くんも凄いけど、佐為の凄さは次元が違う。

さて。家に帰って、ヒカルと打って。明日はヒカルと私の合格祝いをしてくれるので、相談は今日のうちにしておきたい。

お母さんに伝えた上で、お父さんが帰ってくるのを待つ。晩ご飯を食べて、ひと息ついたところで、話を切り出した。

「お父さん、合格祝いで欲しいのがあるんだけど」

「ん？ 珍しいな、あかりがお願いとか」

「そうかな？ えっとね。プロになったし、自立したいなーと思うから、中学卒業したら、一人暮らししたいの」

お茶を飲んでいたお父さんが固まる。

「……まだ、早いんじゃないか？」

「そうかな？ 高校から寮に入る子もいるし、寮がない学校だと一人

暮らしする子もいるし、おかしくないと思うけど」

「高校生なら、3年経てば戻ってくる可能性があるだろう。学校に行かず一人暮らしをするのとは、意味が違う」

そっか、私の感覚だと同じようなものだったけど、就職して家を出るとなれば、確かにもう戻ってこない可能性が高い。前の時も、就職して家を出たら、たまに帰る程度だったし、お姉ちゃんもそうだった。「それに、プロになったら、碁の勉強もこれまで以上にやるんだろう？」

それに家事も加わって、やっていけるのか？」

「家事はなんとかなると思う」

でも根拠と言われたら、まさか社会人の経験があるとは言えないし。

何か妥協案を出してみても、どう思うか確認してみようかな。

「じゃあ、例えば試しに1ヶ月ごとに更新できるようなアパートで、3ヶ月だけ試してみるとかは駄目？」

「ん、3ヶ月か……」

それくらいなら、と顔に書いている。ちょうど、夏休みの時期に戻ってくるように、家に戻ってくる。最初はそれくらいで、徐々に期間を延ばしたりできればいいな。

そして、すぐには無理だけど、ある程度稼げるようになったら、ずっと借りておいて、研究会なんかやってみてもいいかもしれない。

ヒカルや和谷くん、明日美さんだけじゃなく、塔矢くんも呼べたらいいな。和谷くんは嫌がるかもしれないけど、塔矢くんに教えてもらうのは、きつと院生のメンバーにとっても有益なはず。

「ずるずると延ばすようなことは駄目だぞ」

「うん」

やった！ わーい、お父さん大好き！

まだ先の話だけど、対局料をもらったら、ちゃんと何か買ってこよう。

「ん。どっちにしろ中学卒業後だからな」

「うん、もちろん。お父さん、ありがとう」

良かった、これで安心。

「認めるのは、一人暮らしだからな。ヒカル君と一緒に住むとかは駄目だからな」

「あ、うん。たまに何人かで合宿とかはすると思うけど、一緒に住むとかは考えてないよ。ヒカルと付き合ってるわけじゃないし」

今はまだ告白もしていないし、ヒカルが恋愛沙汰に興味あるのかどうかも怪しい。

できれば中学卒業までになんとかしたいけど、なかなか難しいと思う。

碁を止めていた時期もあるし、あれがもし佐為が消えたのなら、なんとかしたい。

姿は見えないけど、佐為はヒカルと仲良くしているし、優しいし、絶対に消えて欲しくない。

お父さんから許可をもらった翌日、学校がある日だけど、昨日に続いて休みをもらって朝から見に行った。

「明日美さん、勝てるかな」

「どうだろうな。越智も強いからな」

うん、私たちより年下で、あれだけの強さは本当に凄い。聞いた話だけど、お家が結構な資産家で、しょっちゅうプロを呼んで稽古をつけてもらっているらしい。

それが強さの理由なんだろう。それでいて、地を意識しすぎるなどの悪癖が残ってしまったっているのも、1人が長時間指導していない結果だろう。

私は、小さい頃から森下先生に教えてもらって、たくさんあった欠点で、ちよつとずつ改善できた。

少し前まで攻めるのはまだ苦手だったけど、最近はそれもかなり上手くなってきたと思う。

「ヒカルの対局でもそうだったけど、プレーオフは、勝ちたいという気持ちと自分の碁をどれだけ打てるかに左右されそうだね」

「ああ、そうかもな。プロ試験の本戦より、1戦の重みがあつて、プレッシャー凄かったもん」

そうだよね。でも、そのわりには普段通りに打っていた気がするけど。

「若獅子戦で塔矢と打てたのは大きいかもな。あれよりは楽に打てるからな」

確かに、大きな舞台で打った経験は大きい。相手が塔矢くんなら、なおさら。

相手が私じゃないのは残念だけど、ヒカルと塔矢くんはお互いに意識する相手だし。

そんな話をしているうちに、棋院センターに到着した。

すでに明日美さんが来ていて、私たちを見ると笑顔で近づいてくる。

「あかりちゃん、来てくれたんだ」

「もちろん！」

合格するのを見に来たとか言っちゃうと、プレッシャーになりかねない。若干言葉を選びながら応援を送る。

「そういえば、越智はもう対局室にいるの。ピリピリした感じで、ちよつと居づらいからギリギリまでここにいようかなって思ってるんだ」

「越智も必死だろうからな」

勝った方が合格、負けた方が不合格。非常に分かりやすい。

時間が来て、明日美さんが対局室に向かう。しばらく待って、対局が始まってから部屋へと向かった。

先番は明日美さん。布石もそこそこに、右上隅の越智くんの陣地が厚くなる前に攻め入っている。越智くんは一昨日と違って普段通りの地を生かそうとした碁。早々に潰しに行つた明日美さんは正解だと思う。

そして予想通り、早めに攻められて、越智くんの地が小さく生きるのみで、右上の広さを生かせていない。

中盤で越智くんも左辺を攻めて盛り返そうとしたけど、変わりに上辺を削られて、痛み分けに終わる。

「4目半、私の勝ちね」

最後まで必死に追いかけたけど、一步及ばず、明日美さんが勝利を収めた。

明日美さんの勉強してきた強さが全部出せたような勝ち方。

「明日美さん、おめでどう!」

「ありがとう! ついに勝てたよー」

わあ、明日美さんがぼろぼろと泣き始めた。ハンカチを渡そうとしたら、バッグからハンドタオルを取り出して、しっかりと自分で拭う。

「大丈夫?」

「あはは、うん。ごめんね、まだスタートラインに立っただけなのは分かっているけど、プロになれないんじゃないかなって思った時期もあったから……」

院生の中に強いのがいっぱいいて、後からも私より強いのがいっぱいくるし。そう言って照れ笑いを浮かべる明日美さんは、びっくりするくらい可愛かった。私が天野さんなら、週刊碁の一面にするくらい。

「今日は、お祝いだね!」

「あ、うん。そうだね」

嬉しそうだけど、一瞬だけ戸惑った様子を見て、ピンときた。お邪魔虫にならないうちに、さっさと帰ろう。

「私たちも、今日は家でお祝いするの。明日美さんの合格も見届けたし、そろそろ帰るね」

「あれ?」

ヒカルが首をかしげるけど、今は黙って欲しいかな。肘でヒカルをつついて、笑ってごまかす。

「そうなの。あ、あかりちゃんと進藤も、合格おめでどう」

明日美さんにお礼を返して、篠田先生が明日美さんと呼んだのをきっかけにヒカルと一緒に棋院センターを出た。駅までの道を歩きながら、ヒカルが疑問を口にする。

「呼べそうなら奈瀬も呼ぶって言ってなかったか?」

「んー。明日美さん、先約があるみたい」

「え、そんなの言っただけだぞ」

「見ていたら分かるよ。多分、この後は塔矢くんと約束してるんじゃないかな」

私の言葉に、ヒカルの足が止まる。

「奈瀬と塔矢が？ それ、もしかしたら……」

「あ、鈍いヒカルでも分かった？ 塔矢くんはその気があるかどうか分からないけど、明日美さんの方は間違いないよ。あれだけ格好良くて囲碁が強くて、プロ試験中にも親切に囲碁を教えてくれたら、そりゃね」

「ふーん。どうせ俺は、塔矢ほど強くねーし、格好良くもねーよ」

「嫉妬？」

「別にそんなんじゃないよ……」

「そのうち塔矢くんと同じかそれ以上に強くなると思うし、私にはヒカルの方が格好いいよ」

私としては大いに攻めた、つもりなんだけど。

「うーん。そう言われてもな。まあ、いつか追いつくつもりだけどさ」
後半は触れずに流されたけど、少し耳が赤くなってる気がする。しつこく絡んで避けられても困るし、今はこれで充分と思う。

第33手 中学2年生 その5

プレーオフが終わった翌日から、各所に挨拶をして回る準備を進めた。

最初は森下先生の家。ヒカルと一緒に行くこうと思ったけど、ヒカルはヒカルで行くって言うから、1人で向かう。

「まあ、実力は十分だったからな。全勝は驚いたが。藤崎、おめでとう」

「ありがとうございます」

にこにこ珍しく笑顔を浮かべていたが、ちよつと困ったような、眉間にしわを寄せて、何か言いにくそうにしている。

「和谷の奴、駄目だったとだけ言っただけ言っただけやがって、顔も見せやがらねえ。もし時間が取れそうなら、藤崎から様子を見に行つてやってみるか?」

「構いませんけど、逆効果じゃ?」

「あいつはそんなに柔じゃねえよ」

やわじゃなくて、わだもんね。ともあれ、森下先生がそういうなら話をしてみよう。でも、一人で行くより。

「森下先生、しげ子ちゃんも一緒に行つてもいいですか?」

「しげ子? あいつは何の役にも立たねえだろう」

「そんなことないですよ。しげ子ちゃんの明るさで気が紛れるかもしれないまし」

森下先生はそんなもんかねえ、とつぶやく。私よりも、自分を慕ってくれる子が慰める方が、効果は大きいと思うんだよね。

おうい、と森下先生がしげ子ちゃんを呼ぶ。学校から帰ってきていたしげ子ちゃんが、私を見て合格祝いしてくれた。

「うーん、あかりお姉ちゃんには言えないなあ」

「え、何を?」

「冴木さんの時は、ケーキ奢ってもらったんだ。和谷くんだったら奢ってもらおうと思つてただけ」

「何を馬鹿なこと言つてんだ。いいからちよつと、和谷の様子を見て

「はい」

森下先生に急かされて、しげ子ちゃんと一緒に家を出る。

「和谷くんに会いに行つた後、一緒にケーキ食べようか」

「いいの？」

「うん。私もケーキ好きだし。和谷くんも誘おう」

私の言葉に、しげ子ちゃんは無邪気に喜んでくれる。ふふ、可愛いな。

和谷くんの家に行くと、お母さんが出迎えてくれた。和谷くんは帰ってきていて、部屋にいらつたこと。

「おう、しげ子ちゃんと藤崎か。どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも、お父さん心配してるよ」

口火を切つたしげ子ちゃんに、ちよつとばつが悪そうな顔になる。

「ごによごによと言ひ訳らしきものを言おうとするので、家から引つ張り出す。」

「ケーキ屋さんに行こう。近くにある？」

「え、もしかして俺が奢るの？」

「心配かけられたし奢ってもらいたいけど、ここは私が出しとくよ。しげ子ちゃんの分もね」

「え、いいの？ わーい。あかりお姉ちゃん大好き」

あらら。和谷くんの前で浮気は駄目だよ。

ケーキ屋さんに入り、注文をしてケーキと飲み物が揃つたところで話題を戻す。

「ちよつと負けた対局を検討してたんだよ。そればかり考えてたら火曜に行き損ねて、そのままズルズルと……」

「ふうん。じゃあ、今日のうちに電話して、明日には顔を出す。そう伝えるね」

「……ああ。ちゃんとするよ。今年受からなかつたから、親も高校行けつてうるさくてさ。碁の勉強する時間は増やしたいけど、なかなか思うとおりに行かぬえなあ」

元々も何もないけど、前世では和谷くんと越智くんが今年受かつたというのもあつて、どうにも申し訳なさがある。どうしようかな、何

かできることがあればいいけど。

「和谷くん、平日のどこかで、勉強会しない？」

「勉強会？」

「うん。私とヒカル、明日美さんもだけど、院生メンバーとせっかく仲良くなってるのに、しばらく接点がなくなるよね」

「うん、まあ合格しないと同じ場所には立てねえよな」

「だから、勉強会やると楽しいと思わない？」

私やヒカルにとっても、同年代の子と切磋琢磨する機会が多いのは刺激になるはず。

「いつやるんだ？」

「うーん、とりあえず木曜が妥当かな？」

土日は院生研修があるし、プロになった後はイベントとかで埋まりやすい。火曜は森下先生の研究会だし、金曜は塔矢先生の研究会。水曜が大手合いが入りやすいから、空いてる日は月曜か木曜。

月曜だと院生研修と続いちやうから、木曜の方が都合が良いはず。

「よし、じゃあ誰を呼ぶかだけど、嫌だつて奴はいる？」

「ううん。院生の人なら大丈夫」

足立さんや越智くんは、声をかけても来ないだろうなあ。

「伊角さんと本田さん、フクにも声をかけてみるかな」

「うん。フクくんは他の人と随分打ち筋が違うから、是非お願いしたいな」

あえて言うならヒカルと似ているところもあるけど、ヒカルよりも直感に特化している。まだまだ甘いところが多いけど、それがなくなれば強くなるはず。

「場所はどようする？」

「棋院は難しいよね。区民センターか何かで借りるか、どこか碁会所に相談とかかなあ」

毎週同じところは無理だろうけど、月に1回ずつローテーションするくらいなら、貸してくれるところがあるかもしれない。

そこは行きつけの碁会所がある人に交渉してもらおうと良さそう。乗り気になった和谷くんと一緒に、詳細を決めていく。

途中で我に返り、しげ子ちゃんの存在を思い出す。

「しげ子ちゃん、ごめん」

「ん、いいよー。和谷くんも元気が出たみたいで良かった」

なんて良い子なんだろう。頭を撫でつつ、ケーキを追加。

そんなこんなで過ごして、和谷くんにしげ子ちゃんを送ってもらおうよう押しつける。しげ子ちゃんは笑顔で和谷くんと手を繋いでいるし、多分正解。

「でも、俺たちとの勉強会って、藤崎にあまり利点がないような気がするけど」

「そんなことないよ。森下先生や塔矢先生の研究会ももちろん大事だけど、忌憚なく言い合える場も重要だよ」

実際に色々と研究するのに、若い人だけっていうのは面白い場だと思う。院生研修は対局と検討が中心だから、どうしても一手の追求という点ではおろそかになりがち。和谷くんや伊角さんがあと一歩踏み込めないのは、もったいない。

挨拶して、駅へと向かう。ちよつと疲れたけど打ち合わせは楽しかった。和谷くんと相談して正解かもしれない。ヒカルはこういうの面倒がるだろうし、面倒見の良い人に頼むのが一番ね。

ヒカルの家に行つて、早々にこの話をすると、ヒカルも喜んで乗ってきた。

「伊角さんとの対局は、伊角さんが途中でミスして崩れたし、また打ちたかったんだ」

「うん、色々勉強になると思う。それと、もう一つ相談んだけど……」

明日、塔矢先生と約束している。

ヒカルが佐為ではないという前提で、佐為と繋がっているのを伝えるてもいいかの相談。

「そうだよなあ。佐為を、塔矢先生と打たせてやりたいよなあ。俺から動くより、あかりが動く方が危険が少ないかもなあ。無理そうなら止めるよ」

「うん、無茶はしない。佐為、すぐとは約束できないけど、近いうちに実現させるから、待っててね」

「……飛び跳ねるほど喜んで。まあ、でも本当に無茶すんなよ」

ヒカルが心配そうにしているけど、うん。私にはヒカルの反応しか分からないから確実なところは分からないけど、佐為は喜ぶし、佐為が機嫌良かったらヒカルも嬉しいだろうし、頑張ろう。

佐為が消えたのは、強い人と打てない日々が続いて絶望したからかもしれないし、上手く打たせてあげると良いかもしれない。

佐為が何やら騒いでいたようで、うるせーって怒鳴るまで、ヒカルは耳を塞いでいた。

そして、翌日。学校が終わって早々、塔矢先生のご自宅にお邪魔した。

「お忙しいところすみません。塔矢先生にたくさんご指導いただきで、無事にプロ試験合格できました。ありがとうございます」

「いや、藤崎さんが受かったのは、藤崎さんが頑張ったからだよ。おめでとう」

少し雑談に入った後、そういえば、と話題を変える。

「そういえば、ネット碁でもうされていますか?」

「まだ碁は打ってないがパソコンには少し慣れてきた。そろそろ、ネット碁を打ってもいいかもしれないな」

「じゃ、じゃあ。もし良ければ打って欲しい人がいて……」

勢い込んで言おうとすると、手を出して押しとどめられた。慌てすぎたみたい。前のめりになっていたので、咳払いして姿勢を正す。

「藤崎さんには、合格祝いを何かしようかと思っていたんだ。あまりないことだが、良ければ、互先で一局打とうか」

「あ、ありがとうございます」

わ、それは嬉しい。どうしても研究会で打ってもらう時は、置き碁になる。もちろんすぐに負けちゃうと思うけど、それでも僅かでも互先で打ってもらおう価値があると思うてもらえたら何よりのご褒美だね。

でも、今求めていたのはそれじゃない。

「ああ、でも今日はかなり遅くなってしまった。今から打つと、親御さんも心配するだろう」

「……ええ」

まだ外は明るいし、研究会でもっと遅くなる日もある。でも、そういう話じゃないだろう。塔矢先生の言葉を、じっと待つ。

「今度、私の都合になってしまいが、ネット碁で対局しようか。それなら互先でも、おかしくないだろう？」

「そうですね」

「藤崎さんと打つのは、その日の夕方あたりとして、午前中からも慣れるようにネット碁を打つとしよう。誰か、それなりの実力がある相手からの申し出なら、受けやすいだろう」

「なるほど。では、塔矢先生が打てる日を、また教えてください。私も準備がいりますし、その日、偶然誰かが塔矢先生に対局を申し込むかもしれませんね」

「そうだね。それと名前なんだが、私は本名で打つとするよ」

「塔矢先生なら、本名で打つ方が、周りの人は喜ぶでしょうね」

でも、どうしてそこまでしてくれるんだろう。

「アキラは、同年代だとしても孤立してしまっていてね。私のせいもあるが、親しい友人もおらず、寂しい日が多かったと思う」

「あー、それは……」

あはは、否定できない。ヒカルと一緒に初めて会った時も、つまらなそうな感じだったもんね。

「きみや進藤くんに出会って、苦悩もしたようだが生き生きとしていてね。奈瀬さんにもお礼はしなければいけないが、君たちがいなければ、アキラは今のようにな長していなかっただろう」

親馬鹿だ。前にも思ったけど、やっぱり塔矢先生は親馬鹿だ。

「まあ、そういうわけだ。ただ、悪いが私は手加減というのがあまり上手くなくてね。これまで新初段シリーズに出なかったのも、新しい子を本気で叩くわけにはいかなかったからね」

「塔矢先生に本気になられたら、逆コミなんて意味ないですもんね」

「そこまで言わんが、人によつてはやる気無くしかねないからね。でも、今年はお出ようかと思っていたが、不要になりそうかね？」

「……ヒカルと？」

「うむ。アキラが気にしている以上に、進藤ヒカルという存在、なかなか面白い」

「そういえば、昔ヒカルが打った子ども大会とかにも、顔を出していたもんね。ある程度知っていてもおかしくない。」

「……私とネット碁で打ってもらう日、确实じゃないけど、ヒカルは忙しいかもしれない。何せヒカルつてば、棋譜は書けても、棋譜に時間を書く方法や秒読みも知らないんですよ。一から勉強させないと」
「なるほどね。確かに勉強が得意そうな感じではなかったね。じゃあ、新初段シリーズ、楽しみにしておこうか」

話は終わり、とばかりに塔矢先生が立ち上がる。私も席を立ち、頭を下げる。

「色々と、本当にありがとうございます。塔矢先生が全力を出すにふさわしい相手になれるよう、頑張ります」

「ああ」

明子さんと挨拶して、塔矢先生の家を出る。そのまま駅に向かう途中、一気に疲れが襲ってきた。

あ、無理。どこかで休憩しないと。

明日美さんとよく行く喫茶店に入り、ほっと一息。本当に疲れた。でも、塔矢先生の配慮には感謝しかない。

小一時間休憩してから、ヒカルの家に向かう。

「ヒカル、上手くいったよ」

「え、マジ？ どうなったんだ？」

ヒカルが驚いた反応を示したので、状況を説明する。

もう少しネット碁に慣れてから、午前中は私でもヒカルでもない、saiと打ってくれる。それも、本気で。

偶然を装って、ということはお聴する気も無いだろう。

「佐為がありがとうってよ。何かお礼したいけど、何も用意できない

身が恨めしいってよ」

「ううん。もう、佐為からたくさんもらってるから。それにこれからも、たくさん教えて欲しいし」

「任せとけて。っていうか、俺もあかりに公式戦で勝ちたいし、塔矢ともまた打ちたいし。のんびりしてらんねえな」

「うん」

「……ただ、もしできれば、塔矢先生が幽玄の間で打つような時と同様の意気込みで打って欲しかったってよ」

「うん、そうだね。でもネット碁でそこまで気合を入れて打つのは難しいね」

「だよなあ。何か機会があればいいんだけどな」

「うん。そういう機会を作れないか、考えてみるね」

ぶつちやけてしまえば、ネット碁で、優勝者がトッププロと戦える権利をもらえる大会を開けば、単なる野良試合よりよほど真剣に戦ってもらえると思う。逆行する前は、それに近い大会があったと思う。

ただ、私から持ちかけるのは難しいし、時間がかかるから、佐為がどうなるか分からない。

あ、今なら自然に聞けるかもしれない。

「そういえば、佐為って怪我はしらないと思うけど、病気になるの？」

「え？ したことねえな。過去にも、無かったみたいだぜ」

「そっか。もし塔矢先生と打つ時に体調崩してて本調子じゃなかったりするとも、もったいないから」

「なるほどなあ。でも、心配ねえよ」

「でも、もしもってこともあるから、佐為の体調や様子は注意して見ていてよ」

いつか佐為は消えてしまう。私が佐為を知ったから前世と同じとは思わないけど、消える可能性があるとして、来年以降は特に気を付けないと。

もし佐為がずっといてくれるなら。ネット碁の大会とかで、単に打つよりも真剣な場で打たせてあげる機会があるかもしれない。

先の話だけれど、そんな日がきたら、きつと佐為は今以上に喜ぶはず。

あ、それはそうと、ヒカルに伝えておかないと。

「あ、忘れてたけど、もしかしたらヒカルの新初段シリーズの相手、塔矢先生かも」

「え、なんで!？」

「さっきの佐為と対局する流れで、ヒカルかどうか暗に聞いてきて。ヒカルじゃないって答えたら、興味あるっておっしゃってたの。もしかして、というくらいだけど、佐為だけじゃなくてヒカルも打つ機会があるかもね」

へえーって軽く返事をしてきたけど、すぐに真剣な顔になった。

「でも、新初段シリーズじゃなくて、塔矢のオヤジさんとも、そのうちちゃんと打ちたいな」

「ちゃんと打つには、何年後かになつちやいそうね。タイトル戦の予選を勝ち抜いてリーグ戦入りして、挑戦者にならないと」

「ふーん」

「まあ、そのうち教えるね」

ヒカルは必ず挑戦者になる。そういえば、ヒカルがトッププロになった時の相手は塔矢先生じゃなかったと思うけど、塔矢先生は調子を崩すのかな。

そこまで詳しく囲碁界全体を追いかけていたわけじゃないから、詳しく知らなかったんだよね。今となっては少し悔やまれるけど、考えてもしょうがないね。

私は私のできることを、精一杯やるだけ。

とりあえずは、うん。今日は佐為と私が打つ日。簡単に負けないよう、気合いを入れて打とう。

第34手 中学2年生 その6

塔矢先生とお話をした翌日の金曜。祝日なので、朝から研究会に参加している。午前中、芦原さんに対局してもらって、お昼休みに、和谷さんと企画している勉強会の話題を出した。

「へえ、面白そうね。行ける日は行きたいな」

明日美さんは即答で参加を決めた。塔矢くんに目を向けると、小さく肩をすくめられた。

「僕は……院生に仲が良い人がいるわけじゃないし」

「ヒカルも参加するんだけど、良かったら打ってもらえないかな？」

「試しに、一度だけ参加してみたらどう？」

塔矢くんは不参加の気配だったけど、理由があまり前向きじゃない。明日美さんと顔を見合わせ、少し押ししてみる。

明日美さんの口添えでも考え込んでいたけど、しばらく経ってから顔を上げた。

「進藤は、何か言ってた？」

「塔矢くんが参加するかどうかは、塔矢くんに任せるって。本気で打つのは公式の場でやりたいけど、前哨戦も悪くないって言った。偉そうでごめんね」

「ううん、藤崎さんが謝ることじゃないよ。でも、それなら1度参加してみるよ」

「本当？　ありがとう」

ヒカルは当然、明日美さんもいるから、塔矢くんが義理で参加を決めたわけじゃないはず。塔矢くんも、明日美さんを憎からず思っているはずだけど、感情が読みにくい。ヒカルと話している時は、あれだけ感情豊かなのにね。

週が明けて、火曜日。先週はプレーオフを優先したけど、久しぶりに森下先生の研究会。

ちゃんと和谷くんも来ていたので、ひと安心。聞いたら森下先生とも話したらしい。というか、説教されたみたい。

始まる前に、伊角さんが院生や九星会を辞めたという話を和谷くんから聞かされた。篠田先生は、碁の勉強だけじゃなくて、自分を見つめ直すのも大事だと言っていたらしい。確かに和谷くんや門脇さん、越智くん比べて、伊角さんは精神面でちよつと弱い気がする。

伊角さんが参加しないとちよつと寂しいけど、それも伊角さんの選択だからしょうがない。

話は、勉強会の予定に移る。

「本田さんと小宮さんと越智が来るって。フクは来年四月から中学生になるから、それからなら来られるってよ」

「越智くんが来るとは思わなかった。よく誘えたね」

「ああ、さすがにあいつも、藤崎が自分より実力があるって認めてるんだよな。そのうち追い抜くとは言ってたけど」

「うん。負けず嫌いだもんね」

他に声をかけた足立さんや飯島さんは来ないそうだ。足立さんとはともかく、飯島さんは来ると思ったけど、来ないのかな。

「俺と進藤と藤崎、奈瀬も来るんだろ？ それに本田さんと小宮さんと越智、冴木さんで合計8人か。結構多いよな、どこかい場所があるかな」

「1回目は、知り合いの伝手で碁会所で開けることになったから。後で集合場所の最寄り駅を教えるね。それと、もう1人誘ってみたから、来るって言ってたから、合計9人ね」

「へえ。院生じゃないよな、プロの誰か？ 冴木さんの知り合い？」

「いや、俺は関係ないよ。藤崎さんの知り合いだよな」

少し離れたところで検討していた冴木さんが寄ってくる。

塔矢くんも来るって言ってもいいんだけど、せっかくだからサプライズにしておきたい。ヒカルにも、言わないように伝えている。

「というか、言うにしても森下先生がいない場所の方が良さそう。」

「まあ、当日のお楽しみってことで」

「……まさかな。あの野郎が来るわけねえし」

何やら和谷くんがボソボソとつぶやいていたけど、聞き取れなかった。

和谷くんの言う通りかなり人数が多いし、勉強会そのものが雑にならないように気を付けなきゃ。でも、みんな必死だから大丈夫だよ
ね。

そのあたりで話を切り上げて、森下先生を中心に検討が始まった。

そして2日後の木曜、早速勉強会の日がやってきた。ヒカルと一緒に集合場所に行くと、何人か来ていて、雑談している。

「こんにちは、遅くなつてごめんなさい」

「まだ揃つてないし、問題ないよ」

冴木さんが気さくに微笑む。少し年上だけど、本田さんとは院生で被っていたらしく、顔見知りだった。少し待つと、最後に越智くんがやってきて、全員揃う。

「これで全員？ 和谷からもう1人いるって聞いたんだけど？」

「うん。場所を借りる碁会所、その人のお父さんが経営していてね。直接そっちに行つてるの」

「ふーん。あまり勉強に向かない環境なら、僕は次からは遠慮させてもらおうよ」

私が説明するより早く、明日美さんが口を開く。

「1回試してから次にどうするか考えたらいいじゃん。絶対に残る方がいいと思うけど」

「着いてからでいいじゃん。もう行こうぜ」

ヒカルが促して、移動し始める。と言つても、駅からそれほど離れていない場所に碁会所がある。

「え、ここつて」

「やっぱりか……」

冴木さんは知っていたようで、ためらったように声を出す。和谷くんも予想していたみたい。まあ確かに、考えたらすぐ分かりそうだね。

「はい、塔矢名人が経営してる碁会所です」

中には既に塔矢くんが来ていて、入り口で市河さんと一緒に出迎え

てくれた。思い思いに挨拶をしているけれど、塔矢くんが目線はヒカルに集中していた。

もう、明日美さんもいるのに。でも明日美さんは気にした風でもない。というか、市河さんが少しきつい目を明日美さんに向けてるけど、何かあったの？

「じゃあ、こつちのあたりを僕たちの勉強会用にかけているから。さっそくだけど、打ってみる？ それとも検討する？」

塔矢くんが、こちらに目を向ける。今日は顔合わせの意味もあるし、対局すると、院生同士になった場合にあまり意味がなくなっちゃう。

「今日は人数が奇数だし、検討にしよう。どうしても打ちたいって人がいれば、打ってもいいけど」

ヒカルも塔矢くんも、目を合わせつつ自重している。

「じゃあ、僕は塔矢と打つてみたいんだけど」

「……今日は指導じゃないからいいけど、年上に呼び捨てはどうかと思うよ」

わあ、越智くんの性格忘れてた。打つ機会があれば、挑むよねえ。前に明日美さんから指導碁に行ったという話も聞いたし、どうなることやら。

どうしようかと悩んでいると、和谷くんが方針を決める。

「んじゃ、塔矢と越智が1手20秒の早碁で対局。俺たちは少し離れて、その検討ってのはどうだ？」

「良いんじゃないか。あ、塔矢くん越智くんが良ければね」

冴木さんが同意すると、塔矢くんも頷いた。要望が通ったのに、越智くんはへの字口のまま。それというのも、塔矢くんはずっと目をヒカルに向けているから。目は口ほどに物を言う、ってね。越智くんとしては、眼中にないって言われているようで面白くないんだろう。

そして対局が始まり、序盤はお互いに地を広げる。越智くんが好き な形になっているけど、塔矢くんは焦った様子もない。

「ここ、もうツケた方が良いんじゃないか？」

「でもこう上からハネられたら、こうきてこうなって……手が狭まる

よ」

「ああ、そっか」

お互いに我慢する碁になっていて、本田さんの案にもヒカルが反論する。ヒカルも、こういう盤面では我慢するよね。塔矢くんの場合、行けるとみたらしつかり攻めるけど、今はあえて越智くんの碁に合わせる気がある。

早碁だけあって、さほど時間がかからず、越智くんの投了で終局した。越智くんが離席している間に、塔矢くんが検討に混ざる。

塔矢くんや冴木さんが教える側になって、他のメンバーが出す意見に対して回答をする。でも、それだと塔矢くんや冴木さんの利点が少ない。

そんなことを思っていると、ヒカルが別の打ち筋を提示した。

「なるほど、こうなると、こういう狙いが……」

塔矢くんも考えていなかったようで、熱心にどう変化する手があるか検討が進む。塔矢くんの勉強にもなって良かった、と思った途端、塔矢くんがヒカルの手に苦言を呈した。

「ちよつと待った、さっきのはともかく、その手は無いんじゃないか」

「いや、行けるって。こう打てば、十分に形になってるじゃねえか」

「こんな不安定で形になっている？ どこが？」

あ、やばい。ヒカルもムキになっているし。っていうか、ずっと塔矢先生の研究会に行っていたけど、塔矢くんがこうやって言い合うの、久々に見たよね。

周りのメンバーは、目を白黒させている。

「はいはい、そこまでにして。二人だけならいいけど、今は勉強会だから」

二人ともハッと我に返り、軽く謝る。

「ふふ、塔矢くんがそんなになってるの、初めて見た」

「……もつとお高くとまってるもんかと思ったけど、進藤と言いつてるのを見ると、案外普通っぽいところもあるんだな」

こそこそと、後ろで明日美さんと和谷くん、本田さんが会話している。聞こえないように気をつけてよ。

「じゃあ、先週あった塔矢名人と座間王座の対局の検討とかやってみる?。」

少し落ち着いたところで、冴木さんが提案してくる。トッププロの対局は、色々深い読みがあつて勉強になる。

まだ途中だけど、塔矢先生が優位だし、五冠の目も出てきている。「師匠の研究会じゃ、塔矢名人の対局を検討する機会、極めて少ねえからな……。」

和谷くんが愚痴を言つて、冴木さんも笑いながら同意する。森下先生にとっては、塔矢先生は研究相手じゃなくてライバルなんだろう。ライバルの碁を研究するのも悪くないと思うんだけど、その代わりに、韓国の棋戦やsaiの碁をよく研究している。saiの碁は、一柳先生と打った時くらいしか検討していないけど、韓国の碁は凄く勉強になる。佐為も興味津々みたい。

検討が一通り終わり、そろそろ解散という時間。今後について相談する。

「次からも、こんな感じでいいですか? やりたいことがあるとかあつたら、遠慮無く言つてくださいね」

「私は問題ないよ。楽しかったし。でも、冴木さんと塔矢くんは、あまり勉強にならなかつたかもしれないですね」

明日美さんの言葉に、冴木さんと塔矢くんに目線が集まる。

「俺は十分に勉強になつてるし、構わないよ」

「僕も、有意義な時間だった。参加できる時は参加させてもらおうよ。でも、次の本因坊戦二次予選の最終戦に勝てば、三次予選は木曜だから、その時は参加できないと思うよ」

「え、もうそこまで行つてんの?。」

ヒカルつてば。週刊碁くらいチェックしないと。あ、でもヒカルが囲碁界の情報をあまりチェックしないから、前の若獅子戦の記事も見られずに済んだし、こつちから言うべき情報だけ伝えればいいかな。

「というか、まだ負けなしだよね」

「うん。今のところは負けていないけど、次の名人戦の二次予選で、倉

田さんと当たるから、そこが正念場だと思ってるよ」

今年受からなかった和谷さんと越智くん、本田さんと小宮さんの4人は、羨ましそうな顔をしていて、冴木さんは塔矢くんの言葉に気合を入れ直している。

ヒカルは凄く悔しそう。気持ちは分かるけど、これからだよ、ヒカル。

「僕が行ける時は、ここを使って勉強会をしよう。父さんにも了承をもらってるから。代わりに、暇な時にでもここに来て、お客さん相手に指導碁を打ってあげてよ」

「でも、俺たちはプロじゃねえぜ」

「……越智くんはプレーオフに出るくらいだし。和谷さんも5敗、本田さんは9敗で小宮さんは11敗だったかな。本田さんは4敗の人に勝ってたと思うけど、それが実力なら、指導碁を打つには十分だよ。小宮さんは、もうちょっと地力を付けないと合格は難しいと思うけど、ここで指導碁を打つには十分な実力だと思う」

驚いた。塔矢くんに質問されてメンバーは伝えただけど、プロ試験の結果を確認して覚えているっていうのは、予想外だった。

他のメンバーも同じだったようで、一様に驚いた顔をしている。あ、越智くんだけはあまり変わらなすつとしたままだった。

「今後、時間がある時に、良かったらそれぞれ打ってみよう」

自然と指導する側に回っているけど、実力を考えると、誰も反論できないし、する意味もない。みんな、実力を向上するために来てるんだから。

「若獅子戦じゃ負けたけど、ぜってー追いついてやるからな」

「ああ、楽しみにしてるよ」

しばらく塔矢くんは参加可能なようで、次回以降もこの碁会所での勉強会で確定した。それぞれ連絡先を交換して、解散となった。

「あかり、帰るぞ」

「うん。みんな、また来週、明日美さんと塔矢くんは、また明日ね」

「お疲れ」

口々に挨拶して、走るヒカルを追いかける。もう、子供なんだから。

「ヒカル、早いってば。どうしたのよ」

「早く帰って打つぞ。一日でも早く、アイツに追いつかねえと」

「ヒカルもプロになったし、これから一局ずつしっかりと打って勝っていけば、塔矢くんと公式大会で打てるようになるよ」

「……ああ。なあ、あかりから見て、俺と塔矢の差ってどれくらいあると思う？」

「実力の差は、なかなか掴みにくい部分もある。棋風もかなり違うし。」

塔矢くんの碁は、塔矢先生に近い。引くべき時にちゃんと引いて、押すべき時にちゃんと押す。凄くバランス感覚が良いというか、見極めが上手い。それでいて、無理に攻めるのも守り続けるのも普通に打ち回すんだから、とんでもない。

それに対してヒカルの碁は、相手が好きに打つ時は我慢して、自分が好きに打てるような時にしかける感じ。相手が慣れてなければ、変化についていけず一蹴できる。その反面、正解が難しく、打ち間違えると一気に形勢が悪くなる。

佐為は相手の打つ手によって、都度変化する。なかなか読めないけど、深いところまで読んで応手を変えているから、どんな相手でも得意な盤面を作らせず、佐為が優位な盤面になっている。

ここぞという時は、相手が攻める気になった時や、逆に守ろうとした時に、相手より早くそこしかないと踏み込んだ手を打っている。耳赤の一手もそうだけど、打たれて始めて分かる会心の一手。あれは佐為にしか打てないと思う。

ヒカルは当然、私も佐為の碁を意識しているけど、全然実力が違うせいで、なかなか上手く打てない。

「ヒカルが打ち間違ったりしなければ、今でもきつと良い勝負ができるよ」

「うーん……佐為が、まだまだ甘い手があるってよ」

「あはは。うん、じゃあ早く帰って打とう」

「だからそう言ってるじゃねえか！」

はいはい。しばらく黙って歩く。ヒカルが百面相しているので、佐

為と何か話しているんだろう。

「ネット碁もいいけど、佐為も真剣勝負の場が欲しいってよ」

ああ、やっぱり前の話を引きずってるよね。うーん、言っちゃってもいいものかなあ。不満があるなら、伝えておいた方がいいかもしれない。

「そのうちね、ネット碁の大会があると思う。素人もプロも混ぜつつ打てるような、公式大会として」

「え、誰か言ってたの？」

「ううん、そうじゃないけど。だって、正体不明の打ち手が、一柳棋聖を破るんだよ？　そこそこ話題になってるし、中国や韓国でも、s a iの正体を気にしてる人は多いし」

「s a iの正体か……」

「だからね。一般参加枠で佐為が打てば、きっとトッププロとの真剣勝負ができると思うよ」

ヒカルが、嬉しそうに笑う。

「佐為、お前にありがとうってよ。何かお礼したいけど、声も聞こえないし何も持ってないから、お礼できないって」

「ううん。いつも打ってもらってるから、むしろ私がもっとお礼しなきゃいけないくらい。これからも、ずっと打って欲しいな」

「気兼ねなく打てるのは俺も楽だからな。あかりが佐為に気付いてくれて良かったぜ、ほんと」

「むしろ、未だに他の人に隠せてるのが不思議だけどね」

特に塔矢くんとか、緒方さんとか。小学生の頃に打った碁を忘れるはずないし。

塔矢くん、色々と考えた結果、黙っているんだろうな。彼の中でどんな結論が出ているのか興味があるけど、こっちから聞くわけにもいかない。

しばらく学校に行きながら勉強会に参加して、年末年始の準備も色々としていくうちに、棋院から電話が入った。

「はい、新初段シリーズですよね」

「そうそう。相手は一柳先生になったよ。一柳先生、相手が女の子だつて言うと言喜んじやつてね」

「あはは。せいっぱい頑張ります」

「うん。頑張つて」

「あ、ごめんなさい、他の人が誰と対局するか、教えてもらえますか？」

「え？ ああ、別に構わないよ。えーつと、進藤くんが塔矢先生、奈瀬さんが桑原先生だね」

「分かりました、ありがとうございます」

「やっぱりヒカルの相手は塔矢先生ね。そして明日美さんは、桑原先生かあ。新初段シリーズ、凄く楽しみ。」

「一柳先生とは随分前にネット碁で1回打たせてもらったけど、勝負にもならなかった。あれから1年以上経っているし、今ならちよつとは戦えるようになってるかな。」

「そうしているうちに、年末が近づきクリスマスイブの日がやってきた。」

「今年はお互いプロ試験に合格したし、凄く良い感じ。」

「今日、私は、ヒカルに告白する。」

第35手 中学2年生 その7

12月25日。学校から帰ってきて、いつも通りヒカルの家に行く。

日課のようにヒカルの家で碁を打っていて、飲み物もおばさんに任せるんじゃない、台所を借りて淹れるようになった。今日も、私が淹れてヒカルの部屋に運ぶ。

「お待たせ」

「あながと。今日はあかりと佐為が打つ番だな」

「うん、そうなんだけど、その前にこれ、クリスマスプレゼント」

「え、わざわざ?」

ヒカルが受け取り、早速袋を開けて中身を取り出す。

「手袋? これ、あかりが作ったの?」

「うん。久しぶりに編んだから、ちよつと下手なところもあるけど」

「ふーん」

ずっと打っているから、ヒカルの手の大きさは把握している。少しずつ大きくなっていく手。

「プロ試験合格のお祝いも兼ねて。食べ物じゃ素っ気ないかなって」

「食いもんでもいいけどな。まあ、ありがたくもらつとくよ。暖かそうだし」

良かった、受け取ってくれた。ここでいらないうって言われたら、どうしようかと思った。

「ヒカル。好きだよ」

「え?」

ヒカルが分かっているかないかのように首をかしげる。そんな仕草も可愛いけど。

「碁を始める前からね、ずっと好きだったの」

「えーっと」

「だから、その。付き合ってください」

困ったという風に、キョロキョロと周りを見る。

「どうしたの?」

「いや、佐為が逃げやがったから……」

「逃げたって」

ヒカル、もうちょっと言い方があってでしょう。

「えーっと、付き合う？　って言われても、何すればいいのかわかんねえよ」

「ああ、そっか。そうだね」

うーん、どうしよう。付き合うって言っても、別にイチヤイチャしたいわけじゃないし、他の女の子に色目を使わなければ、とりあえずいいんだけど。まだ中学生だし。

「時々デートしたり、一緒にいたり。他の女の子に接近しすぎるのは止めて欲しいとか、そんな感じ？」

「デートはともかく、かなりずっと一緒にいるよな。碁を打ってるんだけど」

「まあ、そうだね」

「別にあかりが嫌いなわけじゃねえし、他の女にって言われてもよく分かんねえけど、お前が塔矢と付き合うとか言われたら、多分腹が立つし」

うーん、と悩みながらヒカルが言葉を口にする。

「でも、佐為がずっと一緒だけど、それはいいのか？」

「何を今さら。というか、佐為ってヒカルから離れられないと思ったんだけど、今はいないの？」

「ああ。いつも俺が風呂に入ってる時とか、ここで棋譜見たりしてるし、少しは離れられるぞ」

思いがけず、狙っていた状況になった。じゃあ、佐為が戻ってくる前に少し話しておこう。

「ヒカル、少し小声で話すね。佐為って、最近どう？」

「ん、何だそれ？」

「色々と考えただけだね、幽霊が成仏する条件って、何だと思う？」

私の言葉に怪訝そうにしながらも、ヒカルは返事をしてくれた。

「満足した時か、お祓いされた時？」

「うん。あとは諦めた時かな、とか思ってる」

なるほど、と言いながら、目線で先を催促してくる。

「最近、真剣勝負がしたいって言ってるでしょ？ もし無理だと思ったら、諦めて成仏しちゃわないかなとか。真剣勝負したら、満足して成仏しちゃわないかなと思っただろう。どうすればいいんだろう？」

「あいつはそんな殊勝なタマじゃねえけどな。千年待つような奴だぜ？」

「千年待っても、実際に打ったのは秀策の時とヒカルの時だけでしょ？ 秀策は病で道半ばで亡くなったようなものだし」

「言いたいことは分かるけど、つまり何が言いたいんだ？」

「もし諦めるようなら、ヒカルも塔矢くんも、もちろん私だってまだまだ強くなるし、佐為を退屈させるのはもう少しの期間だけだよって言っただけ。そして塔矢先生との対局で満足するようなら、まだまだそんなものじゃないぞって。今は塔矢先生がトップだけど、ヒカルがトップに立つ頃には、今の塔矢先生よりずっと強くなるって知ったら、満足している場合じゃないでしょ？」

私の言葉に呆気にとられていたけど、すぐに少し笑いを漏らした。

「もしかして、お前それが言いたくて付き合うとか言ったの？」

「え？ ううん。ヒカルが好きで付き合いたいのは本当。今のも聞きたいことだったから、付き合えたら、どこかのタイミングで、佐為ってどこか席外せる？ とか聞いてみるつもりだった」

ヒカルが真っ赤になってる。顔が熱いし、私も顔は真っ赤なんだろうけど。

「考えてもみてよ、好きでもないのに、こんなにずっと一緒にいられると思う？」

ヒカルが、私の言葉で考え込んだ。あれ、よく考えたら、これってヒカルにも当てはまる？

まあ、私よりも佐為の方が、ずっと一緒にいるんだけどね。

「あ、佐為」

戻ってきたみたい。何やら話しているから、しばらく待とうかな。

待つことしばし、ヒカルと佐為の話が終わったみたい。

「お待たせ。一応、佐為には説明しておいたから。その、付き合うから時々席外せよって」

「え？ ええつと。いいの？」

「あー。まあ、さつき言った通り、何か変わるってわけでもねえだろ？」

「まあ、そうかも」

じゃあいいじゃん、と笑われる。煙に巻かれたような気もするけど、少なくとも周りに女の子の影があっても牽制できるし、問題ないよね。

「じゃあ、ちよつと話が逸れちゃったけど、打とう」

「ああ、そうだな。さつきも言ったけど、今日はあかりと佐為だな」

「うん」

少し遅くなったけど、いつも通り打ち始める。さつきの話じゃないけど、いつまで佐為と打てるのか分からないし、一局ずつがとても大事。それでなくても、佐為ほどの実力者が毎日のように打ってくれるのは凄いことだし。

そういえば、とヒカルが口を開く。

「新初段シリーズ、言われていた通り、塔矢名人だったよ。お前は？」

「私は一柳先生。佐為との対局は何度も見ているけど、私は1回しか打ってないし、新初段シリーズは楽しみだね」

「おう。一応、佐為とは話をして、俺が打つってことで納得してるから」

「うん。直接対面して打つわけじゃないけど、来年、1月か2月で塔矢先生が空いている時に打ってくれるって話になってるから」

佐為も新初段シリーズはヒカルが打つのに不満は無さそうだし、大丈夫だと良いんだけどな。

その日も佐為には負けたけど、結構良い碁が打てた。検討を済ませて家に帰り、お姉ちゃんに報告する。

あつさりと、本当にあつさりと流されてむくれていたら、むしろまだ付き合っていないのが不思議なくらいだって言われた。

見ていてまどろっこしかったようで、そう言われちゃうと、ごめんなさい。

「あ、ついに？ おめでと」

「ついに、って」

「どう見ても付き合ってたようなものでしょ」

明日美さんに伝えても、お姉ちゃんと同じような反応。おかしい、そこまで露骨だったかな。

「あかりちゃんは好きだっていうのが前面に出ていたけど、ある意味では進藤の方が分かりやすいよ。あかりちゃんを見る時だけ、目が優しいもん」

「ええ？ そんなことないよ？」

「はいはい。そういうことにしてあげるよ」

「もうっ。あ、そういうえば新初段シリーズ、桑原先生なんだよね。私は一柳先生なんだけど、お互い頑張ろうね！」

話題を囲碁に持っていくと、明日美さんからの声質が変わる。

「うん。桑原先生は新初段シリーズによく出てるけど、上から潰すというよりは試すような碁を打ってるの。去年は塔矢くん、座間先生に負けるから、勝って自慢したいんだ」

「あはは。確かに、たまには塔矢くんに自慢したいよね。でも、今のところ公式戦では負けてないんだよね？」

「うん。連勝記録とかも更新してたはず。でも、倉田さんとの対局が延びていてまだだから、それが難関だって言ってたよ」

倉田さんが二次予選にいるのは塔矢くんの不運だけど、強い人と対局できるのは羨ましい。私と明日美さん、ヒカルは、来月にある新初段シリーズから、ようやく一步目が始まるんだ。

「まずは新初段、そして各棋戦の予選だね。そういえば女流って、予選が少しあって、本戦トーナメントなんだっけ？」

「本因坊と棋聖はそうだね。名人はリーグ戦で、挑戦者を決める感じだね。それ以外はタイトル保持者も混ざってトーナメントとかのもあったはず」

「頑張って、一緒に本戦まで進めようね！」

「うーん、あかりちゃんはともかく、私には厳しそう」

そんな弱気じや塔矢くんに追いつけないよ。連勝記録を塗り替えるくらいの気持ちで挑みたい。

「もちろん私だって勝ちたいよ。でも、目標を高く持ちすぎて、目の前の試合を落としたら駄目だし」

「うん、それもあるよね。無理しすぎないように頑張ろう」

明日美さんとの会話を終えて、部屋で今日の碁の見直しをして、秀策の棋譜を並べて勉強する。

もうそろそろ日が変わりそうな時間になったけど、今日は、寝られそうにない。

ヒカルと恋人……えへへ。

年が明けて早々、ヒカルが一番手で新初段シリーズが始まった。

ヒカルに佐為の様子を聞いたら、ネット碁以外で打てる時はないか、って言ってたそう。私には内緒って言われてみたいけど、私が色々打たせてあげようとしてるからだ。当然だけど、ヒカルには遠慮せず言いたいことを言って、私はまだまだ遠慮されている。姿も見えなければ声も聞こえないんだから、しょうがないんだけど。

「ヒカル、頑張って！」

「おう」

ヒカルが塔矢先生と一緒に部屋に入っていくのを見送って、控え室に行く。

中に入ると、桑原先生と緒方さんがいた。え、なんで？

「……進藤とは一度すれちがっただけでな」

え、桑原先生の言葉、どういうことだろう。

「……ばかばかしい」

「こ、こんにちは」

後で緒方さんに聞いてみよう。そう思って挨拶すると、桑原先生がこつちを見て、目線だけで挨拶を返してくれる。

正面の位置は陣取られたから、端の碁盤が置いている場所に座る。

「お嬢ちゃん、そんな隅っこに座らんと、こっちに來なさい」
「えっと、はい」

席を移動して、桑原先生の隣にお邪魔する。

「ふむ。お主も今年の合格者じゃの？」

「はい。藤崎あかりと申します。よろしくお願いします」

「よろしくの。お前さんも、なかなか面白そうじゃの」

「ありがとうございます」

何が面白そうなのか。何も分からない。緒方さん助けて。

「藤崎、あまり相手にしなくていいぞ。第六感で進藤に目を付けて、わざわざ来るくらい暇なだけの爺さんだからな」

「ふおつふおつ、手厳しいのお」

え、ちよつと待つて。桑原先生、囲碁が強いだけじゃなくて靈感もあるの？ そんな話、聞いたことないよ。

混乱しているうちに、塔矢くんと明日美さんがやってきた。

「藤崎さんと緒方先生……桑原先生？」

「キミは名人の息子じゃったかの？」

「はい。はじめまして。塔矢アキラと申します」

「ふむ。お主も進藤が気になってるんじゃの？ となれば、名人も注目してるというわけじゃの。面白い」

完全に桑原先生の独壇場になってる。明日美さんに挨拶する暇もない。

「そっちの嬢ちゃんは、儂の新初段シリーズのお相手じゃの？ なんといったかの」

「奈瀬明日美です。よろしくお願いします」

「そうそう、奈瀬さんじゃったか。塔矢門下なんじゃろ？」

「は、はい」

「悪いが、緒方くんの妹弟子には負けてられんのお」

桑原先生、悪そうな顔になってる。これは明日美さんをからかうというより、緒方さんを挑発してるよね、絶対。

「ふん。奈瀬、桑原本因坊とはいえ、逆コミもあつて負けてるようじゃ、二度と指導してやらんぞ」

「ええつ。そんな無茶な」

「緒方さん、大人げないですよ」

明日美さんが嘆いて、塔矢くんがフオローする。あらら、いい感じじゃない。

「さて、それはそうと、緒方くん。楽しみな一局になりそうだし、どっちが勝つか賭けんか？」

「賭けですか、面白いですね」

いやいや、緒方さん。乗ろうとしないで。もう、普段は芦原さんや私たちを指導する立場なのに、どうして桑原先生の前だと子供みたいになっちゃうの。

結局、桑原先生が先にヒカルに賭けて、緒方さんが塔矢先生に賭けた。まあ、立場上そうなるよね。

「そろそろ始まる時間じゃの」

時間が来て、対局が始まる。

と、なかなかヒカルが一手目を打たない。時間がかかるところじゃないし、もしかしたら佐為が何か言ってるのか？

不安になっていると、ヒカルが一手目を打つ。

「あ、やっと打った」

明日美さんがつい、という風に声を漏らす。数分はかかっていたよね。どうしたんだらう。

「結構かかったな。緊張していたというわけでもないだらうが」

「そうですね、今日も朝から楽しみにしてましたし」

話していると、部屋に天野さんが入ってきた。

「緒方さんに、桑原先生まで。どうしたんですか」

「進藤という小僧が気になっての。前にすれちがった時に、ピンときたんじゃよ」

「ピンと？ それだけで？」

「勘だそうですよ」

「ふおっふおっ、勘を馬鹿にしてるようじゃ、儂には勝てんぞ」

緒方さんが馬鹿にしたように言うけど、私としては、桑原先生への警戒心が増すばかり。

「でも、勘だとしても桑原先生に注目されるとは大したものですよ。緒方さんも来てるくらいだし、塔矢先生も、進藤くんを指名したくらいですし」

「それは、塔矢くんがライバル視しているからじゃないですかね」

「ライバルなの？ 塔矢くん？」

「それは……」

簡単には認められないよね。今の段階では塔矢くんより確実に弱いし、でも小学生の時に負けてるし。いつか、ヒカルは塔矢くんに明かすのかな。

「お、進藤が仕掛けたの」

「進藤、ちよつと無茶じゃないかな」

「多分、ヒカルはこういう意図だと思うけど、どうかな」

明日美さんに返事しつつ、いつものヒカルらしくないな、とも思う。逆コミをもらっている打ち方じゃないというか、普通に互先で打っているような打ち方。塔矢先生にそんな打ち方をしたら、潰されるだけなのに。

でも、佐為じゃない。ちゃんとヒカルが打っている。

「でも、父さんも無理に攻めなかった。逆コミを埋めようと思ったら、もつと攻めないといけないのに」

「お互いに、逆コミじゃないような打ち方だな」

塔矢くんのつぶやきに、緒方さんが同意する。チラリと天野さんを見ると、首をかしげられた。

そんな話があったわけじゃないみたい。となると、何も言わずに互先のような打ち方になってるのかな。

「この手は……」

「ふうむ。面白い手じゃの」

ヒカルが、いかにも取りに行きたくなるような手を打つ。緒方さんが反応して、桑原先生が笑う。

「名人は、取りに行くと思うか？」

「どうでしょう。細かいけど、取りに行ったら荒れそうな場所ですね」
「そうじゃの。普通にやっても勝てんし、それこそ賭けに出たといっ

たところかのう」

打ち進める途中で、和谷くんが部屋にやってきた。あ、院生研修の対局が終わったんだね。

そういつた判断に迷う手を時々打ちながら、やっぱり打ち方に無理が出てしまったのか、ヒカルの投了で終わった。

逆コミという目で見たら、ヒカルの2目ほどの負けだと思う。

「なかなか面白い碁じゃったな」

桑原先生がつぶやき、緒方さんは肩をすくめる。桑原先生も気になるけど、今はヒカルだ。

天野さんを筆頭に席を立ち、検討を行う対局室へ向かう。

対局室では、ヒカルはあまり口を挟まなかった。一手目から検討しているけど、自分から考え方を言うのは少なくて、聞かれたことに答える程度。

まあ、悔しかったからというのもあるだろうけど、それだけじゃないよね。

少し遅れて塔矢くんと明日美さんがやってきた。桑原先生は来ないので、そのまま帰ったんだろう。

「じゃあ、こんなところでしょうか。お疲れ様でした」

天野さんが解散を宣言して、三々五々帰っていく。

ヒカルが席を立ったので、私も周りに挨拶をして棋院を後にした。

「ヒカル、お疲れ様」

「おう」

どうだった？ って聞きたいけど、部屋についてからの方がいいかな。

黙ったままのヒカルと一緒に、家まで帰る。

部屋に入って、ヒカルが口を開くまで待つ。

「佐為と塔矢のオヤジが打つ前にさ。俺と塔矢のオヤジが、どれくらい差があるんだろうって思ってたよ。あかりには悪いけど、今日は俺と佐為で打たせてくれねえ？」

「あ、うん。いいよ」

「あんがと」

佐為とヒカルの差。塔矢先生とヒカルの差。もちろん、一局打つだけで分かるようなものじゃないけど、ヒカルとしても気になったんだろう。

「すげー強かったのは確かだけど、佐為とは随分打ち方が違うよな」

「うん。塔矢先生はバランス感覚が凄いやね。攻めている時でも、引くべきだと思ったら即座に切り替えられるし」

「そうだな。それでいて、読みも深いんだから、そりやなかなか負けねえよな」

負けたけど、あまり落ち込んでいないし、ヒカルも佐為のことを考えているのが分かる。佐為の様子は分からないけど、打っている内容から判断すると、今日は色々楽しかったんじゃないかな。嬉しそうな空気が碁に出ているもん。

「今日さあ、俺と塔矢名人の対局見てたら、打ちたくてしようがねえって佐為が言つてさ。今度どこかに連れて行きたいんだけど、なんかあるかな?」

「あ、うん。じゃあ、近々ある碁のイベント調べておくね」

「おう、よろしく」

デートだ! あれ、私の家族とヒカルの家族みんなで行ったお正月の初詣を除いたら、初デート? これは気合いを入れれないと!

第36手 中学2年生 その8

ヒカルとの約束で、一緒に地方のイベントへやってきた。せいっぱいおめかししたけど、ヒカルは気付いた様子がない。しょうがない、ヒカルだもんね。

「近くであつたら良かったんだけどな。ちよつと時間かかるよな」「うん。でもたまには遠出も良いんじゃない?」

今日を逃すと、来週は明日美さんの新初段戦、その2週間後には私の新初段戦があるから、行ける日を作るのがなかなか難しくなる。

中は人がいっぱい、いろんな催し物をやっている。

「ヒカル、どうする?」

「……ちよつと対局でも見に行つてみるよ」

フラフラと自由対局場の立て札があるあたりに向かう。小さく何か言ってるので、佐為が先導しているのかもしれない。

ヒカルに付いていくと、ひとつの対局を見始めた。私も横から見ると、二人とも一応打てるという程度の腕で、大石がアタリになつても気付いていない。

ふふ、昔は私もこうだったな。

ヒカルと話しながら会場をうろつく。ヒカルが物販のコーナーに目を向けたので、一緒に向かう。

碁盤や碁笥、対局時計が売っている。やっぱり良いのは高いね、数十万もしてる。おじさんがいずれ欲しいと言って、店員に勧められている。ちよつと強引な押し方をすると思っていると、ヒカルが思わぬことを口にした。

「じゃあ、カヤつていうのは嘘?」

え、カヤじゃない? 言われてみると、ちよつと違う気がする。見た目だけじゃ分かりにくい。

「誰だ、イチヤモンをつけてるやつは。商売の邪魔するんじゃないよ」

「御器曾先生」

店員がやってきた人に目を向けて、ホツとした様子。うーん?

あ、ヒカルが碁石を手に取ったと思ったら、カヤだつていう碁盤に石を打った。

パチツと音が鳴るけど、うん、少し鈍い。これは確かにカヤじゃない。でも、見ただけで分かるとは、佐為は凄い。

「売りもんの碁盤に石を打つなんて！」

店員は怒るけど、それどころじゃないよ。

「どうしました、さつきから騒がしいようですが」

運営スタッフがやってきて、店員と話しはじめ。

子供がいたずらしたことになれそうだけど、黙ってられない。

「それ以上言いがかりをつけると、お前が傷物にした碁盤を弁償させるぜ」

間違いない、この人達グルだ。御器曾って人がプロだとしても、売り物を勝手に弁償させるなんて普通は言えないもん。

「あの。私たちが子供って言われたらその通りですけど。今は碁盤の素材を偽っている方が重視するべきではないですか？」

「え、偽る？」

「適当なこと言ってるじゃねえよ」

困ったな、私もヒカルも、まだ免状はもらってないからプロじゃないし、どう説明したらいいだろう。

「秀策の打った碁盤!？」

「それは先日、古物商から手に入れたばかりのものですわ。どないですか、見事なもんでしょう」

目を向けると、碁盤に文字が書かれていて、高松で署名したものだとか何とか。

ヒカルが険しい顔をしていると思ったら、手を繋いで引つ張られる。

「あかり。あれも偽物だ。佐為が言うんだから、間違いないよ」

「やっぱり？」

「やっぱりって？」

「碁盤で材質を偽るような人達だよ。ああいう真偽が分かりにくい過去の偉人に関するものとか、偽物がたくさん出回ってるから」

「へえ」

「売ってる人が騙されていて、気付かず転売している場合もあるけど、今回は騙すつもりでやってるでしょうね」

「どうしよう。さつきもちゃんと相手してもらえなかったし、悪徳業者なら、何を言っても無駄だろうし。」

ヒカルと話しているうちに、秀策の碁盤を見ていた人はどこかに行った。そりゃ、あんなのをポンと買う人はいないよね。

「とりあえず、さつきの運営の人に言ってみよう」

「ああ、そうだな」

御器曾プロに指導碁の時間だからと言っていた運営スタッフに声をかける。

「あの、さつきの件なんですけど」

「ああ。君たちはちよつとこつちに来てもらえるかな」

「言われるままに付いていくと、歩きながら話し出す。」

「さつき、碁盤が偽物って言ってたけど」

「うん。あれはカヤじゃないよ。それに、秀策の碁盤も偽物だよ」

「やつぱり。カヤじゃなくて、あれは新カヤじゃないかと思ってたんだ。それと、秀策の文字が偽物って？」

「私たち、秀策の棋譜を勉強しながら、秀策の人生も興味が湧いて調べてみたんです。私も覚えてるけど、秀策の文字とは全然違いましたよ」

「去年の碁盤屋に色々教わったらしい。御器曾プロの紹介らしいけど、ヒカルを煽ったところといい、余計に怪しい。」

碁盤屋はスタッフの人が注意するってお話だけど、致命的な問題になる前に撤去すべきだよな。どうしようかな。

「やれやれ、せっかく遊びに来たのに、ぶち壊しだな。どうする、他のところ見る？ あかりと佐為は……って、あーあー、怒ってるなあ」

私は別に怒ってないから、佐為が怒っているんだろう。気持ち分かるよ、うん。秀策との思い出を汚されたもんね。

あ、御器曾プロが指導碁やってる。

「ヒカル、あれ」

「行ってみようぜ」

近付くと、ヒカルが耳元でこっそりつつぶやく。

「客の一人、碁盤を見てて、買わなかった人だ」

「……本当だ」

ひゃ、急に耳元で声を出すから、ビツクリしちゃった。でも、対局を見ると、一気に冷や水を浴びせられたような気分になる。

「酷いね」

「ああ」

見ていると、御器曾プロがおじさん相手に暴言を吐く。本当に酷い。

「……もうどうにも……駄目ですネ」

「駄目じゃないよ、おじさん、頑張れよ」

「え？」

ヒカルがフォローしようとしたけど、お客様は逃げてしまった。いやいや、盤面を見るに、ここから逆転はいくらなんでも無理だと思う。相手もプロなんだし。

「生意気な口を叩いたんだ、代わりにやったらどうだ。そのかわり、負けたらとつと会場から出て行くんだな」

「いいぜ。でも、俺が勝ったら秀策の碁盤を引っ込めろ」

「やれるもんならやってみろ」

御器曾プロが、馬鹿にしたように言い放つ。この状況から勝つには、きつと佐為の力を借りるんだろう。こんな人を相手に手加減は不要だし、やっちゃって良いと思う。

でも、念のために別の方法でも手を打っておこう。おじさんが気分を害したままっていうわけにはいかないし。

「ヒカル、ちよつと席外すね」

「ん？ おう、分かった」

「佐為、絶対に勝つてよ」

ヒカルにも聞こえないほどの小声で、佐為を激励する。聞こえる範囲にいたかどうか分からないけど、気持ちの問題なので聞こえなくても構わない。

本部になっている場所を確認して、そちらへと向かう。見知った顔があると助かると思っていたら、運良く天野さんが本部に座っていた。

「天野さん、こんにちは」

「あれ、藤崎さん。今日はお手伝いとかじゃなかったよね？」

「はい。遊びに来たんですけれど、ちよつと気になったことがあって。責任者の方とお話できますか？」

「うん？ どういった内容？」

「場内販売をしている碁盤屋なんですけど、ちよつと売り物に問題がありそうで。あと、指導碁している先生がお客様に酷い指導をしていたので、フオローをお願いできたらと思って」

天野さんは私の言葉で眉間にしわを寄せて、少し待つようにと言い残して、席を立った。奥の方に入っていたので、誰かに相談に行つたんだらう。

数分待つと、責任者という方が出てきた。

「ええと、藤崎さんだったかな。売り物に問題があるとは、どういうこと？」

「今日、友人と遊びに来ていたんですけど、売っていたカヤの碁盤が、どうも新カヤっぽくて。棋院のイベントで、嘘を吐いて偽物売って後から気付いたら、大ごとになると思っただので、確認してもらいたいと思っただんです」

「なるほど。天野さんは、適当なことを言うような子じゃないと言っているし、本当なら大ごとだね。確認させましょう。それと？」

良かった、この方はまともだ。もし御器曾プロと手を組んでいたら、どうしようかと思った。

「あと、お客様への対応もお願いしたいと。細かいお話ですけど、その碁盤屋で買わなかったお客様が、指導碁で無茶な打ち方をされてまして。もしフオローができそうなら、融通を利かせてもらえないかと思っただんですが、どうでしょう」

「ふうむ。それはなんとも言えないな。誰か余裕があればいいんだが。一人だけかな？」

「ええ、私が見た限りではお一人だけ。それ以前にあったとしたら、分からないんですが」

「なるほど。それなら、一人だけ融通を利かせるというのもあまり良くないね」

一人だけ特別対応して、別の気分を害した人が後から知ったら、余計に苛立つ場合がある。おっしゃっている内容にも一理あるけど、そういう問題じゃない。

あの盤面を見ていないから分からないんだ。指導碁でもなんでもない、ただのいじわるだったもん。

「じゃあ、俺が指導碁やる時に、その人を増やそうか。さつきちよつと話もしたし」

急に横から声がかかって、そちらを振り向くと、ヒカルと一緒に倉田先生がやってきていた。

えっと、どういうことだろう。

「こっちの進藤から御器曾さんの話を聞いてね。間違いなく新カヤだったよ。それと本因坊秀策の碁盤も下げさせるように言っておいたから」

他にいたらどうするかってまだ責任者の人が言っているけど、別のスタツフが、御器曾プロはさつき指導碁をやり始めたところなので、別の客には害を与えていないはずだって説得していた。

多分、想定通りに進まないのが納得いかない人なんだろう。言いたいことも分かるけど、融通が利かなすぎる気がする。

でも、後は倉田先生や天野さんに任せてよさそう。倉田先生がやってくれるなら、私がでしゃばることは無かったかな。

「ヒカル、お疲れ様。後は任せようか。この後はどうする?」

「そろそろ帰ろうか。疲れたよ」

「うん」

挨拶だけして去ろうとしたら、倉田先生に止められた。

「あ、ちよつと。女の子の方」

「え、私ですか?」

「キミも新初段の子だよな? なんて名前だっけ?」

「藤崎あかりです」

「ふーん。御器曾プロに勝ったそつちの奴より、プロ試験の成績良かったの?」

「良かったも何も! 倉田さん、藤崎さんは全勝で合格したんですよ」
横で聞いていた天野さんが、自慢げに説明している。えーと。

「へえ。じゃあ、キミも結構強いのか」

「……倉田先生に比べたらまだまだですけど」

「そりやそうだ。僕に勝てたら、もうリーグ戦入りできる実力ってことになるからな。あ、そろそろ時間かな。まあ、キミたちのことは本因坊秀策の署名鑑定士として覚えておくよ」

「署名鑑定士い?」

ヒカルが呆れたような声を出す。うん、私も気持ちは一緒だよ。なんだらう、署名鑑定士って。

会場を出て、歩きながらヒカルに話しかける。

「帰ったら、佐為がどんな碁を打ったのか教えてね」

「ああ。やっぱり佐為はすげえよ。俺も色々と考えたけど、俺じゃ逆転とか無理だったもん」

「うん。私も無理だったと思う。でも、ヒカルも私も、これからだよ。一緒に頑張らう」

「おう!」

プロにも色々という。それに、佐為の凄さもあらためて感じられたし、来た意味はあった。あまりデートという感じじゃなかったけど、トラブルもあつたししょうがない。

家に帰ってから、佐為の碁を見せてもらう。どう考えていたかも教えてもらい、私やヒカルが思いついた手を言つて佐為からの意見ももらう。

佐為は序盤で不利になる展開がほとんどなかったけど、こうして検討だけじゃなくて実際の打ち回しを見たら、劣勢からの逆転手も奥が深い。

地方のイベントへと足を運んだ翌週、明日美さんの新初段戦がやつ

てきた。ヒカルと一緒に、早い時間に家を出て棋院へと向かう。

ヒカルの時もそうだったけど、まずは棋院の前で挨拶をして写真を撮る。

明日美さんは緊張した風だけど、桑原先生に話しかけられても丁寧に対応できている。

「今年は女子の台頭が目立ったようだよ。男連中がふがいなかったのか女子連中が良かったのか分からんが、大したもんじゃのう?」

「えっと、ふがいなかったわけでもないですけど」

「フオッフオッフオッフ、じゃあ実力十分な男連中に勝てるだけお主は強いんじゃないの。あっさり負けんように胸を借りるとしよう」

「いやそんな。えっと、よろしくお願いします」

「緒方くんの妹弟子には負けてられんからの?」

しかし桑原先生も意地が悪いよね。前からそうだけど、からかうような言い方が多い。

でも、ヒカルに注目していることといい、油断ならない人だ。

「ヒカル、前にも言ったけど桑原先生には気をつけてよ。勘でヒカルが気になるって言ってた人なんだから」

「ああ。靈感とかってあるのかなあ?」

「佐為がいる以上、他にも幽霊がいるかもしれないし、それを感じ取る人がいてもおかしくないけど」

桑原先生がどこまで分かっているのかは分からない。

桑原先生と明日美さんが幽玄の間へと向かったのを確認して、私たちも控え室に入る。今日はまだ誰もいない。

準備していると、塔矢くんがやってきた。ヒカルを見て、驚いたような顔になる。来てるのがそんなに変かな?

「塔矢」

「進藤か。早いな」

「あかりに連れて来られて。もうちよつと寝ていたかったんだけどな」

「え、私のせい? じゃあ黙って来た方が良かった?」

「最初から見たかったし、いいよ」

あれ？ 私のせいみたいって言われてるけど、放っておくとヒカルは起きなかつたよね？

首を傾げていると、ヒカルが口を開く。

「そういや、先週のイベントの時にさ、倉田さんが桑原のじーちゃんのことを、必死で本因坊の座を守っているけど、近いうちに緒方さんが倉田さんに負けると思うって言ってたけど、桑原のじーちゃんってそんなに強くないの？」

「なんてことを言うんだ。父さんが5冠の今、タイトルホルダーは父さんと一柳先生と桑原先生の3人なんだ。棋聖と名人と本因坊は大三冠と言われていて、特に争いが激しいタイトルだ。確かに倉田さんもリーグ戦入りしているくらいだし、緒方さんだって言わずもがなだけど、桑原先生が弱いはずがないだろう」

言いたいことを代わりに言ってくれるのって楽だね。まあ、本因坊戦に全力を注いでいる分、他の棋戦は手を抜くし、こういう記念対局も遊び半分な気配はするけどね。

「見ていれば、どれだけ打てるか分かるだろう。よく見ておくといひさ」

「言われなくても見るよ。偉そうに」

「進藤。プロになれた努力は認めるが、自分の実力はきちんと把握しておくべきだ。そうすれば、間違っても桑原先生が弱いなんて発言はしなくなるだろう。だいたい、キミは発言がうかつで……」

元気良いというか、二人とも言い合いながらも楽しそう。そろそろ始まるけど、放っておいていいかな。

と、部屋に誰か入ってきた。

「あれ、アキラと藤崎さん。それと、えーつと」

「芦原さん。どうしたんですか？」

「酷いな。可愛い妹弟子が桑原先生に挑むからって、わざわざ見に来たんだよ」

ヒカルと塔矢くんも毒気を抜かれたように落ち着く。この場は芦原さんの脳天気さの勝ちね。……でも、可愛い妹弟子って、まさか明日美さんを狙ってないよね？

「こっちは進藤ヒカル。私たちと一緒に合格した友人です。で、こちらには芦原四段。塔矢先生のところまで学んでいる、私たちの先輩だね」
「よろしくお願ひします」

「進藤くんか、よろしくね。今年はプレーオフまであって、大変だったみたいだねえ」

気さくに話しかけてくる芦原さんに、ヒカルもホツとして応対する。大丈夫だよ、緒方さんと違って、芦原さんは裏がないから。

そんな話をしているうちに、明日美さんの対局が始まった。

逆コミがあつて明日美さんが有利だけど、本気でかかられると一気に負けてしまうだろう。

明日美さんがしつかりと地を確保していき、桑原先生が攻めるも、今ひとつ攻めきれない。互先の気持ちで挑んだヒカルと違い、明日美さんは逆コミの有利を活かして立ち回っている。

「こっことか面白い手だよ。数目与える代わりに、これ以上荒らせなくなるし、差は縮められるけど逆転には届かないように頑張ってるな」

「うん。ちよつと薄くて気になるところもあるけど、桑原先生も無理に攻めておられないから、このままいけばなんとかなりそうだね」

途中でやってきた天野さんたちも一緒に検討しながら対局を見守る。結果、予想通り桑原先生の攻め方は緩くて、明日美さんがギリギリだけど勝ちをものにした。

塔矢くんや芦原さんが検討に向かうのを見送り、ヒカルと2人だけの控え室で話をする。

「桑原のじーちゃん、あまり本気じゃなかったな」

「うーん、本気じゃないというか、相手を見定めるような打ち方だったと思う」

「そうだな。勝ち負けよりも、こういう盤面でどうするかを見て、実力や読みの深さを測るような感じだった」

「塔矢先生は本気で打って、桑原先生は探るような打ち方。一柳先生はどつちかな」

「どうだろうな。佐為との対局を見る限り、結構本気で打ってきそうだけど」

「でも、一柳先生が格下と戦う時、結構手を抜いてるよ」

「そっか。じゃあ、手を抜いたら駄目だってところを見せてやればいいんじゃないか?」

うん、そうだね。序盤で手を抜くと駄目だって分かってもらえたら、本気で打ってもらえるかもしれないね。

本気で打ってもらえるように、精一杯頑張ろう。

そんな決意をしつつ、明日美さんの勝利を祝うために、私たちも検討室へと向かった。

第37手 中学2年生 その9

明日美さんの新初段戦が終わった翌週の水曜、塔矢くんの連勝記録が止まった。相手は、あの倉田さん。低段者では敵なしだったけど、倉田さんには惜しくも敵わなかったようだ。でも、1目半の負けだったらしいから、ほんの少しの差しかない。

でも、その週は木曜の勉強会に塔矢くんと明日美さんが来なかった。これはもしかしたら、落ち込んだ塔矢くんを明日美さんが励ましているのかな？

勉強会の後、明日美さんに電話をしてみると、まったく別だったらしい。

「それがね。全然落ち込んでないんだよ」

「へえ。精神的に強いんだね」

「というか、倉田さんとの対局で、逆に手応えを掴んだって言った。高段者との対局は、囲碁の実力だけじゃなくて流れを持って行かれないようにしないと駄目だって。今日はそっちに行かずに、倉田さんとの対局を検討していたんだ」

勉強会に来てでもできそうなものだけど、わざわざ2人で？ 怒られないくないし、変につついてこじれても嫌だし、必死に笑いをこらえる。

「でも強い人と互先での対局は羨ましいね」

「うん。そこまで行きたいね。……行ける、かなあ」

「行けるよ。明日美さんなら。一緒に行こう」

不安がつている明日美さんを励まして、電話を置く。と、同時に電話が鳴った。

「はい、藤崎です」

「夜分に失礼、塔矢と申しますが」

「と、塔矢先生!?!」

「ああ、藤崎さん。ちょうどよかった。今、時間は大丈夫かな？」

ビックリした。明日美さんと塔矢くんの話で盛り上がったから、よけいにビックリした。

あ、もちろん時間は大丈夫です。

「前に言っていた、ネット碁での対局なんだが。藤崎さんの新初段戦の翌週土曜はどうか？ それを逃すと、十段戦が始まるのでね。しっかりと時間が取れるのは、数ヶ月は先になってしまいうだろう」「えーっと。はい。大丈夫なはずです。もし無理そうなら、すぐにご連絡しますね」

「ああ。では、土曜の10時に。よろしく頼むよ」

「こちらこそ、わがママを言っでごめんなさい。ありがとうございますます」

「いや、なんの。合格祝いだからね。気にしないでいい。それに、碁を打つのは楽しみだ」

電話を置いて、すぐにお母さんに声をかける。

「お母さん、ちよつとヒカルのところに行つてくる！」

「え、この時間に？」

「ちよつと伝えたいことができただけだから。すぐ帰るよ」

呆れた様子のお母さんに見送られて、ヒカルの家まで走る。

ヒカルの家に行くと、おばさんにもビックリされつつ、中に入れてくれた。

「なんだよ、急に」

「ごめんね、勉強中だった？」

「ああ、まあ棋譜を並べて佐為と検討してただけだから、大丈夫」

対局中なら、中断はまだしも中止になったらもつたないから待とうかと思っただけど、検討していたなら言っても大丈夫そうだね。

ヒカルと佐為に、塔矢先生から電話があったこと、新初段戦の翌週土曜に約束をしたことを伝える。

「はは、佐為が泣いて喜んでら」

「うん、ようやくだもんね」

佐為と塔矢先生の対局は凄く楽しみ。でもそれより、ヒカルが碁を打たなくなるまで、あと半年もない。それはつまり、佐為が消えるまでの日数とも言える。推測だけど、これだけ仲が良いんだから、消えちゃったらショックも大きいだろう。

佐為と塔矢先生の対局が終わったら、1度しっかりと話してみよ

う。

新初段戦の対局当日。

予定の時間より早い時間に、棋院へと向かう。ヒカルも一緒に行くか、後から行くか聞いたら、一緒に行くって言ってくれた。ふふ、小さなことだけど、面倒がらず来てくれて嬉しい。

「佐為との対局や棋譜を見ると、塔矢のオヤジの方が強いと思うけど、ichiryuだって凄え強いよな」

「そりゃ、今の囲碁界でタイトルを維持するのは大変だよ。塔矢先生はもちろん、去年塔矢くんが負けた座間先生や、若手でも挑戦者になってる緒方さんや芹澤先生、それに少し前に会った倉田先生だって凄く強いんだからね」

「そういや、どんな人がいるかってあまり知らねえな」

「日本だけじゃなくて、韓国や中国にも強い人はいっぱいいるし」というか、今は韓国の隆盛が凄い。塔矢先生がいなければ、韓国の一強とも言える勢いがある。

「ああ、確かに一柳……先生以外の強い奴は、中国や韓国の奴が多かった気がするな」

「うん。トップクラスでネット碁をやってるのは一握りだろうけどね」

話しているうちに棋院に到着する。早速中に入り、職員と挨拶しながら時間が来るのを待つ。ヒカルは始まるまで適当に時間を潰すって言って、どこかに行っちゃった。

そして予定時間の少し前に、一柳先生が棋院に入ってきた。

「おはようございます」

「おはよう。きみが藤崎さんかい。思ったよりべっぴんさんだねえ。それに全勝だろう？ これだけ可愛くて全勝するほど強いとか、将来が楽しみだ。俺が棋聖のうちに挑戦者になってくれたら話題になるし絵も映えるし、ぜひ頑張っって欲しいね」

う、うわー。あまり接点がなかったけど、一柳先生ってよくしゃべるといっつか、よく舌が回りますね。

「あ、ありがとうございます。まだまだ若輩者ですけど、せいっぱい頑張ります」

「今日はそんなに固くなってちやいかんよ。きみたちは高段者と打てる。俺たちは可愛い若手と打てる。お互い楽しまなきや損つてもんだよ」

本当によく喋る。頭の回転が速いのだろう。

そんなことを話していると、天野さんがカメラマンと一緒にやってきた。

「一柳先生、おはようございます。藤崎さんもおはよう」

「天野さん、おはよう」

早速記念写真とのことで、棋院を背景に一柳先生と並ぶ。パシャパシャと何枚か撮り、向かい合って握手をする。何か話せと言われて、どうしようかなと思っていると、一柳先生が質問してきた。

「そういえば藤崎さんはネット碁をやってる？ あれは良いよ」

「あ、はい。実は、一柳先生とも1度だけですが、ネット碁で対局していただいているんです」

「へえ。気付かなかったな。プロ試験全勝ほどの強さなら、覚えていてもおかしくないね」

「いえ、そんな。まだまだこれからですから」

「ネット碁といえば、saiと打つたことはある？ 彼は強いよ。何度も打ってるけど、一度も勝てやしない。未だに正体が分からないのはシヤクだけだね」

「あ、saiとも一度。相手が少し緩めてくれたので、凄く勉強になりました」

そんな話をしているうちに、カメラマンから声がかかり、棋院の中に入る。うう、寒かった。

そして、一柳先生に続いて幽玄の間に足を踏み入れた。入るのはまだ数回だけど、空気が少し引き締まるような気になるのは、これまでも何度も凄い勝負が繰り広げられてきたからかも知れない。

部屋の空気に吞まれちゃうと、緊張してまともに打てない。大きく深呼吸してから、一柳先生の前に座る。

「藤崎さんは、ここに来るのは初めてかい」

「いえ。院生の時に、何度か記録係で来てます。打つのは初めてですけど」

「ははは、そりゃそうだ。今のうちに味わっておいた方がいいよ。なかなか来られる場所じゃないし、ね」

女流のタイトル戦でも使う場合はあるけど、混合戦より難易度は低いとはいえ、決して簡単に行けるようなものじゃない。一柳先生の言葉に頷いて、改めて盤面に目を向けた。

時間が来るまでに気持ちを整えて、開始の合図で礼をする。

そして第一手。私も普段の対局ではあまり打たない手だけど。ヒカルと一緒に、佐為に学んできた証。右上スミ小目。

一柳先生はこれまで何度も佐為と打っているから、後々の追及くらいはしてくるだろうけど、秀策やsaiの棋譜を勉強していたと言えばごまかしは利くはず。佐為と私の実力差は、残念ながらそれくらい隔絶している。

一拍おいて、一柳先生が左上の星に一手目を打った。そして布石が続いて、私が最初に打った場所から秀策のコスミへと変化したあたりで戦いが始まってから、一柳先生が口を開いた。

「俺はね。塔矢さんと違って、こういう記念対局はあまり本気で打たないんだ。ま、桑原先生のように巫山戯て打ったりもせず、真面目に打つけどね」

何が言いたいのかと首を傾げると、一柳先生は普段の愛嬌がある顔を引つ込め、獰猛な笑みを浮かべた。

「こんな布石を見せられちゃ、本気で打つしかないな」
「ぜひ、お願いします」

そうでない、後を気にせず踏み込んだ意味がない。ヒカルと違って逆コミを含めて計算して打つけど、手を抜かれるのはもったいない。ネット碁はともかく、顔を合わせてトッププロと打てる機会なんて、今後の私にあるかどうか分からない。

最初の1度が、人生で1度かもしれないんだ。

時間が許す限り、思い付く限りの手を考える。かわせるだろうと考えたところも、深く追及してくる。そして気を取られて余分な手を打ってしまおうと、他の場所で不利になってしまう。

読みの深さそのものは、佐為や塔矢先生には及ばないけど、機を見る目は確かで、少しずつ逆コミの猶予が削れていく。

守ってばかりだと、押し切られる。そう踏んで、左下の大石に手を出しつつ、布石の段階から仕込んでいた中央に対して地を主張する。通れば勝ち、通らなければ盤面は五分。通る算段が強いけど、油断はできない。相手は佐為並みと思って打つ。

「うーん、ここまではか。2目半の負けだな」

「ありがとうございます！」

危なかった。中央の争いを押し切って、ヨセに入ったけど、そこでも少し詰められた。

結果としては勝ったけど、問題点もたくさん見えた。私の打ち方で行きたければ、何かが得意というだけじゃなく、苦手を持たないのも大事。

人によつては、欠点が多くてもそれ以上の利点がある戦法なんかも選べるかもしれないけど、私じゃ無理ね。

「いやあ、プロ試験全勝はさすがだね。打てて良かった」

「そんな。一柳先生と対局させてもらえて、凄く勉強になりました。ありがとうございます」

「それに、同じ相手を目標にしてそうだ。俺もよく打ってるが、あくまで俺の打ち方で上回りたいんだよな。相手の棋風を柔軟に取り入れられるのは、若さかねえ？」

「あ、あはは。よく一緒に勉強している人たちも、s a iの碁は参考にしていますよ。それに、秀策の碁も」

「秀策か。ああ、そういえばきみのネット碁での名前を教えてくださいました。いいかな？ またネット碁でも打とう」

「良いですか？ ありがとうございます！」

まさかそんなお話をいただけるとは思わなかった。

名前を言つて、意図を聞かれて北斎からの連想と伝えると、笑われた。

「いや本当に、公式戦での対局を楽しみにさせてもらうよ」

「はい。対局できるように精進します」

その後は検討室にいたヒカルや明日美さん、和谷くんたちが来て、検討をしてから解散となった。

塔矢くんは来ていない。用事があったのかもしれないし、別にいいんだけど、これは明日美さんからの一方通行じゃなくて、塔矢くんも憎からず思っているのかな。

少しつついてみようかな。

ヒカルの家に着いてから、佐為にも参加してもらつて今日の碁の検討をする。私が思い付かなかった手を佐為はたくさん指摘してきた。ヒカルからもいくつか案が出て、それも含めて検討する。

「しかしお前の打った手、びっくりしたぜ。布石のあたり、佐為を意識していたよな？」

「うん。ああやれば、一柳先生は本気で打つてくれるかな、つて」

「あれだけ露骨に煽ればなあ。部屋に入った時、和やかに話していて安心したんだぜ」

ああ、なるほど。険悪になる可能性もあつたもんね。でも、そつか。心配してくれたんだ。

そういう優しさが、凄く嬉しい。

「私に限らず、やっぱり女子は高段者との対局機会は少ないから。まだ七大タイトルのリーグ戦まで駒を進めた女性っていないからね」

「ふーん。でも、他人は関係ないだろ」

「それはそうなんだけどね」

私自身は色々動いてるけど、なかなか強くなる土壌が作りにくい。特にプロになったら、女流棋戦に時間が取られて、塔矢くんや倉田さんのような若手の実力者も参加する大会に出る機会があまりない。

いつか大人になって落ち着いたら、女性でプロになる人の棋力を、

プロ以降も伸ばせるような仕組みが作れるといいな。

「それはそうと、来週は佐為の番だね。頑張つて！」

「……おう。お前と俺に恥じない碁にするつてよ」

そういえば、ヒカルに言っておきたいことがあったんだ。

「えつと。ちよつとヒカルと2人になりたいんだけど、佐為に席を外してもらおうようお願いできる？」

「……あー。もう下に行ったよ」

色々佐為には誤解されそうだけど、今は気にしない。それに、いつかは本当に……。

それはそうと。

「佐為の様子は、問題なさそう？」

「塔矢のオヤジさんと打てるつてんで色々とうるさいけどな。特に変なことは言つてねえよ」

「そつか。じゃあ、塔矢先生と打った後の数日は、特に様子を注意して見ておいて欲しいの」

「いいけどよ。なんでそこまで心配するんだ？　それが分かんねえよ。佐為、千年前からいるんだぜ？　あと数十年で何が変わるんだよ」

ヒカルから見ると、私が過剰に心配しているように見えるだろう。

今は佐為の集中を乱したくないから言えないけど、それが終わったら。

佐為と塔矢先生の対局が終わったら、ヒカルと佐為に、逆行のこと、そして推定だけど佐為が消えたことを伝えたい。

第38手 中学2年生 その10

佐為と塔矢先生が打つ前日の金曜日。

お昼、いつものように明日美さんと塔矢くんと3人で近くのお店に入る。

「あかりちゃん。ひとつ質問いいかな」

「どうしたの、あらたまって」

「進藤って師匠がいなくて言ってるけど、本当？」

「本当って？」

今さら、ヒカルの師匠？ どうしたんだろう。気になることでもあったのかな。

「小6の時の棋譜をね、塔矢くんに見せてもらったの。あかりちゃんの邪魔になるといけないから、新初段戦が終わった後に聞こうと思ってる」

なるほど、それで気になったってわけね。

「私は、ヒカルが人に教えてもらっているのを見たことないかな。小6の頃も、時々私と打ったけどね。ヒカルのおじいちゃんも碁は好きだけど、アマの域を超えないよ」

嘘は何も言っていない。だって、佐為は私には見えないもん。

でも、誤魔化してるように聞こえるだろうな。特に、塔矢くんには。「それにしては……いや……」

塔矢くんは、何か言いたそうにしつつも、首を横に振る。明日美さんにも塔矢くんにも悪いけど、ヒカルがいない場所で、ヒカルについて何かを言うつもりなんてない。

「ヒカルに直接聞いて。と言っても、ヒカルは何も言わないと思うよ」ヒカルは誤魔化し方が下手というか、いかにも適当って感じなんだよ。だからその場逃れに見えちゃう。

明日美さんとはかく、塔矢くんには誠意を持って答えてもいいと思うけど、どう考えてるんだろうな。

「うん、確かに。進藤のいない場で、あかりちゃんに聞くことじゃなかったね。ごめんなさい」

「ううん」

頭を下げる明日美さん。きつと、2人の時に塔矢くんが考え込むのを見て、いてもたってもいられなかったんだろう。普段は冷静な明日美さんが、塔矢くん絡みで普段と違う行動を取るっていうのも面白い。

「それより、注文したのが来るまで、反応なさそうだね」

「あー、うん」

塔矢くんが深く考え込んだ。ヒカルの正体、気になってるんだろうなあ。きつとs a iを絡めて考えてるはず。そのあたり、かなり勘が良いんだよね。

お昼が済んで戻ってからは、特に問題なく勉強に打ち込めた。少し塔矢先生がピリピリしている気がしたけど、来月から始まる十段戦で緒方さんと対局だからだと、みんな思ってるんじゃないかな。緒方さんは普段通りに見えるけど、対局が近づいてくると今よりピリピリしそう。

「いよいよ明日。私にとっても、凄く楽しみな一局。」

「緒方くん、明日は何か予定はあるかな?」

「いえ、特には」

「そうか」

塔矢先生、緒方さんの予定を聞いておきながら、聞いただけ。予定があった方が良かったとしても言わんばかりの態度に見えちゃう。

「アキラは……ああ、芦原くんと若手の勉強会と言っていたかな?」

「はい。俺の友達連中で集まるんですよ。珍しくアキラも空いてたから」

ふむ、と考え込む塔矢先生。

「お父さん、何かあるの?」

「いや、別に何も無い。ただ、ちよつとな」

明日美さんが不思議そうにしているから、それに倣っておく。したり顔で頷いていたら、後から問い詰められそうだし。

何も言わないし、顔から判断しにくいけど、もしかしたら佐為との

対局を緒方さんや塔矢くんに見てもらいたいのかもかもしれない。

でも、今は言えないだろうし、難しそう。

「すまない、時間を取らせたね。今日はこのあたりにしておこう」
塔矢先生の言葉で、解散となった。

帰って早々、ヒカルの家に向かう。今日は佐為とヒカルが打つ日。

「明日なんだけどよ。お前ん家で打たせてもらっていい?」

「うん。都合良く家族みんな出かけてるし、気兼ねなく使えるよ」

ネットカフェで打って、もし誰か知り合いに見られたら大変だし、私の家が一番良いはず。

「塔矢先生も、気合い入ってたよ。佐為、頑張ってたね」

「……任せとけてよ」

ふふ、頼もしい。でも本当に、塔矢先生と佐為の対局は楽しみ。

その日は、明日に備えて早々に切り上げて、家に帰った。

「んじゃ、お邪魔します」

「はい。もう電源入れてるよ」

パソコンは立ち上げていて、ログインすればいいだけの状態。約束の10時まで、まだ30分近くあるから、温かいココアを入れて話しながら時間の経過を待つ。

そして、10時少し前。

「うわあ、いきなり対局申し込みが」

「本当だ。普段あまり断らないから、たくさん来るね」

たくさん来る対局の申し込みだけど、しばらくカチカチと断る操作を続ける。あ、今、一柳先生がいたよね。

「一柳先生いたね」

「ああ。でも、今はしょうがねえよ」

うん。しょうがない。あ、塔矢先生が来た。

「ヒカル、塔矢先生だよ」

アカウントは toya koyo。非常に分かりやすい。ヒカルが断りを入れつつ、塔矢先生に対局を申し込んだ。

塔矢先生の返答は、当然イエス。コミは5目半、互先。持ち時間が最大の3時間。

手番は……塔矢先生ね。佐為、黒番の方が得意だけど、大丈夫かな。

そんな心配は無用だった。序盤の布石から、深い読み合いが展開される。塔矢先生が中央から模様を作って、佐為が邪魔をする展開。

と想像していたら、塔矢先生が左上スミに仕掛けてきた。佐為が上手く避けているけど、右辺のあたり、塔矢先生の読み通りになっている。でも、佐為は慌てずに被害を最小限に留めて、中央にらみを利かせている。

塔矢先生が会心の一手を打ったのに、盤面は五分。地力では、少し佐為の方が上かもしれない。

塔矢先生もそれ以上は踏み込めず、五分のまま対局が進む。

しばらく佐為が長考しているので、私も考える。中央は、手を加えるようがない。下手に加えると、自らの地を消してしまいかねない。それよりは、左下を攻めて塔矢先生の地を削れないかな。

そんなことを考えていると、佐為が中央の右辺より一手打つ。え、そんな手が？

塔矢先生もびつくりしたみたいで、少し止まる。中央の黒地が消えて、一気に盤面が佐為有利になる。

2目……いや、3目くらい佐為が有利？

そのまま手が進んで、結果、大ヨセの終盤で、塔矢先生が投了した。投了後、何か言うかと思っただけど、塔矢先生はそのままログアウトした。閲覧者の数が凄かったし、今日は、対局しない方が良さそう。

「……凄い対局だったね」

「ああ……でも……」

ヒカルが、盤面から目を離さない。気になるところがあったのかな。

「こっちの左下スミで、切断に備えた手。それよりこっちのスミにオキを打ったら、実戦より縮まってるよな」

「……うん。確かに。でも、それだと……」

ヒカルの言うのは確かだけど、その場合、別の手が生じそう。

「……。佐為が、あかりはどう思うかだってよ」

「ちよつと待ってね。こっちの左辺、こう佐為が打てば、そのオキは効かないと思うけど」

私の言葉に、佐為も同意見なようで、ヒカルがあーって頷く。

「佐為も同じ意見だってよ。じゃあ、結局2目半の差が残ったままかな」

「うん、多分」

でも、ヒカルが指し示した手は、思い浮かばなかった。結構集中していたけど、まだまだ甘かった。

「佐為、お疲れ様。それとヒカルにも、ちよつと話があるんだけど、いいかな?」

「ん、なんだ?」

「えーつと。どうしようかな。あ、コーヒー飲む?」

「そうだな、ちよつと休憩しようぜ」

ネット碁をログアウトして、ほつとひと息。

「いきなりだし、信じてもらえないかもしれないけど。私」

プルルル、と電話の呼び出し音。凄くびっくりした。

「……先に、電話に出るね」

「おう」

電話を取ると、明日美さんだった。佐為と塔矢先生の対局を見たらしく、興奮気味に語り出す。少し落ち着いた頃合いを見て、来週の勉強会で研究しようかと約束して受話器を置いた。

「奈瀬? どうだったって?」

「凄かったって。間違いなく歴史に残る名勝負だったねって」

「ああ、まあな。それで、さつき言いかけてたのは?」

「そうだね。信じてもらえるか分からないけど。」

いつ頃に逆行したか、なぜ逆行したかはぼかして、2度目の人生だと伝えた。

「……じゃあ、あかりは1度、成人してからガキの頃に戻ったの？」

「うん。物語だと時々あるよね、こういうの」

「ふーん」

「ふーんって。びつくりしないの？」

「いや、びつくりしてるぜ」

そのわりに、冷静というか。いつも何かあつて慌てるのはヒカルなのに。私の方が冷静じゃないみたい。

「まあ、変わった経験したつてのは分かったよ。俺と違って、今は普通なんだろう？」

「俺と違って、つて……」

「うわっ」

ああ、そうか。佐為がいるから、不思議な現象があつても、受け入れられるのかもしれない。

「佐為が、私が普通じゃないのかつて怒るけど、どう考えても普通じゃないよな」

ああ、まあそうだね。普通じゃないのは確か。

「んで、それだけ？」

「それだけつて言われたら、うん。それでね、最近、ずっと佐為がどうかつて気にしてたでしょ？ 前の時は、私は佐為に気付いてなくて。

というか、多分誰も気付いてなかつたと思う」

「ふーん。じゃあ、あかりは俺と一緒に碁の勉強しなかつたんだな」

「うん。全然強くなかつたから。今でもプロになるなんて信じられないくらいだよ。それでね、プロになって少し経つた頃、つまり数ヶ月後、ヒカルが碁から離れた時期があつたの」

「俺が？」

首を傾げるヒカル。そりゃ、今のヒカルとは無関係だもんね。

「後から聞いた話からの想像だけど、佐為が消えたんじゃないかつて思ったの。だから余計に、塔矢先生と打つて満足しちゃわないか心配だったというか……」

私の言葉を聞いていたヒカルが、何やら佐為と話をしている。待つこと少し。

「……え？」

「ヒカル、どうしたの？」

「いや、佐為がな」

怪訝そうな顔のヒカル。まさか、満足しちゃったとか？

「俺とあかりが、最後の變化に気付くとは思わなかったよ。今の対局は、間違いなく佐為の全てで打って、塔矢のオヤジも全力で応えてくれたって。それで、塔矢のオヤジが気付かない手に気付くほど、そしてその応手にもきっちり対応できるほど伸びてるのが嬉しいってさ」

「うん」

それはいいとして、それだけ？

「佐為がさ。俺やお前を成長させるために、自分がいたのかもしれないってよ」

……今の対局を見せて満足したってこと？

「俺もだけど、お前も佐為と同格になれるはずだってさ。そしたらもっと高みに上がれるってよ。そんな一足飛びに強くなれるわけじゃねえけどなあ」

「ヒカルは十分、一足飛びに強くなってると思うけど。じゃあ、佐為はこれからもずっと私たちを鍛えてくれるの？」

「楽しみにしてるってよ」

それが本心なら、満足して成仏する線はない、かな？

佐為、不安も不満もないみたい。ネット碁で鍛えられるのも、嬉しいみたい。

「んで、あかりが2度目ってことは、これから先のことってどうなるんだ？」

「まず、碁については全然分らない。さっきも言ったけど、プロになつてないし、趣味で打ってただけだから。それ以外も、それほど時間が経っていたわけじゃないし、あまり役に立つ話はないと思う」

政治家の汚職事件とか、手に余る。

それ以外も、身近で大きな事件は起きていないし、自分が関わっていない問題に手を出すには、私の声は小さすぎる。

何度か、覚えていた事件については匿名でテレビ局や警察に手紙を送ったこともあるけど、結果は変わらなかった。

「佐為がさ。千年前に死んだはずの佐為がヒカルの人生を変えたように、何年後かのあかりが戻ってヒカルの人生を変えてるのは、自然な流れじゃないかってさ」

うん。そうだね。私自身の力で人生が巻き戻ったわけじゃないし、考えても仕方ない。

「それより、打とうぜ。さっきのを見てたら、打ちたくなってきたさあ」

「うん。ヒカルの家に行く?」

「あー、そうだな」

席を立ててから、ヒカルがぼそりと耳打ちしてくる。

「あのさ。その、前の時って、あかりは他の奴と付き合ったりしてないよな?」

何事かと思ったら、まさかの浮気疑惑だった。

「うん。他の誰とも付き合っていないよ」

「そっか」

安心したようにほっとため息。ずっと私からの一方通行だったけど、ヒカルからも、好かれていいると思っていよいよね?

そんな話をしていると、また電話が鳴った。電話に出ると、なんと塔矢先生からだった。

「急にすまないね。先ほどの対局結果は見ての通りだが、私は力を出し切った。今は負けたが、また機会があれば、再戦したいものだ」

「見せていただきましたが、凄いい対局でした。多分、相手のsaiもまた対局したいと思ってるんじゃないでしょうか」

「そう願いたいね。ところで、今日の対局なのだが……」

「はい」

「偶然とはいえ、あの対局の後に打つと、変に勘ぐられても問題かと思ってるね」

元々、今日は打てないと思っていたけど、わざわざ電話してくれるとは、塔矢先生も律儀だよね。

「そうですね、あの対局の後ですし、やめておく方が良さそうですね」
「うむ。また研究会で、検討もしようか」

「はい、ぜひお願いします」

電話を置いて、ヒカルに説明する。

「なんか色々と考えてんだな。佐為も、また打ちたいってさ」

「うん。ネット碁だけど、時々打てると思うよ」

遅めのお昼ご飯を食べてから、ヒカルの家で、ヒカルと打つ。

「碁盤が、なんか小さく見えるな」

「そう?」

「どういうことか、と思ったら。盤面に広く打って、こちらの手を随時とがめてくる。まさか、さっきの碁を見て、一気に引き上げられたの?」

「……負けました」

結構粘ったけど、4目半ほど負けた。悔しいけど、それ以上に驚き
が大きい。

「佐為が、俺と打ちたいってよ。あかり、いい?」

「うん。見ておきたい」

私が佐為の分を打つ。ヒカルの読みが深くなっているのは間違いない。佐為と打つと、それがよく分かる。深く読むだけじゃなく、ヒカルはそれが早いんだ。だから余計に、焦ってしまって手が狭まってしまった。

さすがに佐為には及ばず、途中で負けを宣言する。

「結構上手く打てたのに。この右辺のところ、失敗だったかな?」

「ヒカル、早碁が得意だけど、考えるべきところはしっかり和我慢した方がいと思う。右辺のもそうだけど、下辺のこれも流れで打ちやってるよね」

打った瞬間に、私もおかしいと気付いたし、ヒカルも失敗を悔やむ顔をした。佐為が気付かないはずがなく、遠慮なく攻めて碁が崩れた。

「そうだな。どうする、もう一回打つ?」

「体力は大丈夫？ それなら、お願いしたいな」

少し休憩を挟んで、もう1回、私とヒカルで打つ。さっきは急な変化で驚いたけど、今度はもつと真剣に打つ。そう、塔矢くんと打つと思うくらいでちよいどいいと思う。

「お願いします」

対局時計を置いて打つたらどうなるか分からないけど、練習で打つ分には、なんとか勝負になる。

「ちえ、負けたか」

「1目半、本当にギリギリだったし、私、時間使いすぎたね」

「予選はだいたい3時間だろ？ 今の、そこまではかかってねえし、許容範囲だろ」

それはそうだけどね。

「佐為が、俺もお前も、成長してるって」

「ヒカルは間違いなく強くなったけど、私も？」

「強くなったって、お前、俺に勝ったじゃねえか」

少し口を尖らせて、ヒカルが文句を言う。あはは、そう言われるとそうだね。

「実際、俺も視野が広がったというか、打つのが面白くなった気がするぜ」

「うーん、私はそんなに実感ないけど」

「あかりは、多分読みの深さは俺と似たようなもんだけど、特に守るのが上手いよな」

「うん。佐為に教えてもらう前から、攻める碁より守る碁の方が好きだったもん」

同じように佐為に教えてもらって、それぞれ佐為の碁を吸収しているけど、好みは違う。

だからこそ面白いし、打つ価値がある。

「今日は時間があるし、次はあかりと佐為で打てよ」

「うんー！」

明日も休みで、特に予定はない。ちよつとぐらい遅くなっても大丈夫。

と思っっていたら、夜の10時を回っちゃって、帰ったらお母さんに怒られた。

打つほどに成長できる気がして止まらなかったんだから、しょうがないよね？

第39手 中学2年生 その11

週明けの月曜日。週刊碁に、塔矢先生とsaiの碁が載っていた。それに、一柳先生の談話まである。一柳先生、凄く強いしタイトルホルダーなのに、妙に腰が軽いというかおおらかだよな。

『塔矢さんが負けた碁だけど、大した碁だったよ。碁を見て間違いない本物だと思ったけど、塔矢さん本人に確認しても肯定していたよ。俺、実はsaiとはよく打っているけど、読みの深さが凄い。塔矢さんもsaiの強さを認めていた。また打ちたいと言っていたので、持ち時間3時間は贅沢だよって論しておいたよ。俺なんてずっと持ち時間1時間なのにさ。今度時間がある時に、持ち時間3時間でsaiと打ってみたいね。申し込んだら受けてくれるかなあ。ともかく、俺の知る限りsaiは負けなしだったけど、塔矢さんに勝つとは、これは間違いなく世界的に見ても最強クラスだね。いったい誰なんだろう、思いつく棋士は海外含めて思い当たらないねえ。(インタビューに)きみ、誰がsaiか知らない？ そう、知らないか。もし判明したら教えてくれよ』

話はまだまだ続くところ。これを紙面に載せるとか、棋院の編集部も凄い。

一柳先生の意見とは別に、記者は『タイトル戦とは違うから、塔矢行洋名人の全力ではないと思われる』って書いてるけど、あれほどの碁は、タイトル戦でもそう見かけないよ。

ヒカルの家に着いてから、新聞を見せる。

「へえ、佐為、お前の碁が載ってるぜ」

ヒカルが佐為に目を向けて話している。

「……ああ、またそのうちな。それにしても一柳先生もおもしろいな。佐為、3時間の持ち時間で打ちたいってよ」

ヒカルが話す内容から、佐為がまた打ちたいって言ったのは分かる。

ヒカルが佐為と話している時は、口を挟まない。無い物ねだりしてもしようがないけど、私も佐為と話ができればいいのに。

確認するとやはりまた塔矢先生と打ちたいって話だったので、スケジュールを考えながら説明する。

「しばらく十段戦で忙しいと思うから、それが終わってからかもね。6月には碁聖戦の防衛が始まるから、5月なら時間を作れるかも。ゴールデンウィーク前後に打てるかどうか、機会を見つけて聞いてみるね」

「だってよ。塔矢のオヤジさん、そんなに忙しいのか?」

「それでもまだ春から秋あたりまではマシな方だよ。9月から名人戦、10月から王座戦と天元戦が始まるの。ひとつも気を抜けないし、複数のタイトルを維持するのは大変よ」

「でも、強い奴といっぱい対局できるのはいいよな。佐為にも、大会とかが参加できれば良いんだけどな」

うん。私たちが動くと不自然だけど、塔矢先生に相談したら、何とか早くならないかな。

「ネット碁で、そのうち大会があると思う。最初はアマばかりだけど、佐為が勝って話題性があれば、プロも参加すると思わない?」

「へえ。ネット碁で大会か、面白そうだな。あー、でも俺は出られないか」

「どうして?」

「佐為と俺が当たったらどうすんだよ」

それは、上手くやればなんとでもなると思うよ。

「そんなすぐに開かれる話じゃないし、その頃にはもう1台パソコン買ってるよ。2台並べて、私が佐為の分を打つよ」

「ああ、そういう手もあるか」

佐為がネット碁の大会参加って、凄く楽しそう。優勝しても、賞品も賞金も受け取れないけど、些細なことよね。

佐為も週末に塔矢先生と打って楽しかったんだろう。尽きることなく話し続けた。もちろん、対局しながらだけだね。

火曜日、森下先生の研究会。学校から棋院へと向かう。部屋に入ると、すでに和谷くんも来ていて、佐為と塔矢先生の対局を並べていた。

「お前らも見たか？」

「うん。凄え碁だったな」

挨拶もそこそこに、対局内容の検討に入る。終盤、塔矢先生が投了したあたりの話になると、ヒカルが塔矢先生の新手を示して、意図について説明する。

最初に来た時に、佐為の力を借りた時は少し恥ずかしそうだったけど、今回はヒカルが自分で気付いた手。自信を持って説明している。「まあ、でも応手がこうなったら、佐為の勝ちは揺るがないんだけだな」

「ああ、なるほど。この手も進藤が気付いたのか？」

「こっちはあかり、俺が言ったのに対して手がありそうって」

「ほう」

森下先生が私を見て、感心したように頷く。私とヒカルが検討した内容を話していると、和谷くんが焦ったような顔をしている。

少し気になったので、ばれない程度に様子を見てみると、普段ならsaiの碁には色々意見や感想を言うのに、口数が少ない。さつき、ヒカルが示した一手に気付かなかったので不安になったとかかもしれない。

和谷くんも時々ネット碁で打つとはいえ、ヒカルや私とは佐為と打った数が違うし、気にしすぎてもしょうがないと思うけど、私が言っても意味がない。

「冴木さん、ちょっといいですか」

「ん、何だ？」

みんなが盤面に集中しているので、こっそり冴木さんに声をかける。冴木さんはそつと輪を離れて、少し離れた碁盤を使って、同じ盤面を打っていく。私が対面に座って、不自然にならないように打ち進めながら小声で会話をする。

「和谷くん、ちょっと様子が変だから。私やヒカルには話せなくても、冴木さんなら相談に乗れるかなって」

「ああ、そういうことか。進藤に内緒でデートのお誘いかと思ったのに。じゃあ、今日の夜にでも飯に連れて行ってみるよ」

「どう転んでも冴木さんを誘うなんてないので安心してください。ありがとうございます。ガス抜きになれば良いんですけど」

帰りしな、冴木さんが和谷くんを誘っていると、森下先生に捕まっていた。あらら。でも、森下先生ならうまい具合に話を聞いてくれるだろうし、任せておこう。

帰り道、歩きながらヒカルが小さく首を傾げた。

「さつき、冴木さんと何を話してたんだ？」

「和谷くんが、不安そうだったから。森下先生の弟子で自分だけプロ試験に落ちたの、気にしないようにしてるみたいだけど、焦りもあるように見えたから、ちよつとね」

「……和谷、碁を辞めたりしないよな？」

不安そうな顔のヒカル。あれ、そんなに不安を煽るような言い方になっちゃったかな？

「大丈夫だよ。ちよつと焦りがあつたから、気になっただけ。和谷くん、何年森下先生の弟子をやつてると思つてるの。あれだけ強くてプロにならない人なんて、ほとんどいないよ」

「ならいいけどよ。なんだかんだで、色々と教えてもらったからな。辞めちまうとつまんねえじゃん」

うん。和谷くんがいないとつまらないよね。私たちがフォローしようとしても、逆効果な気がする。和谷くんにもプライドがあるし、年下に弱みを見せられないっていう意識も働くと思う。

今年のプロ試験も厳しいと思うけど、何とか受かつて欲しいな。

木曜日の研究会では佐為の碁について検討すると思つていたけど、集まつたのは私とヒカルを除くと、塔矢くんと明日美さん、和谷くん、小宮さんの6人。ちよつと少なめで、あまり佐為の話題を出したくないメンバーだね。できれば話を逸らしたい。

そんなことを思っていると、ヒカルが佐為も同じことを思つたのか、関係のない話題を持ち出した。

「そういえば、和谷って塔矢とあまり打ってないんじゃないかねえか？」

「打ったことはあるぞ。2年前だけど」

「私も塔矢くんと初対局はプロ試験だったね。今は時々打つてもらってるけど、そういうえば和谷があかりちゃんに言ってくれたんだっただね」

「和谷さんが?」

塔矢くんが、明日美さんの言葉に驚いて和谷くんの顔を見る。

「なんだよ」

「いや、他人の世話をするんだなって思ってた」

塔矢くんの気持ちは分かるけど、言い方がかなり失礼な気がする。ほら、和谷くんが不機嫌な顔になっちゃった。

「どういう意味だよ」

「和谷さんが面倒見が良いか悪いかかって話じゃなくて。あ……奈瀬さんをお父さんの研究会に呼べば、ライバルが強くなるし」

塔矢くん、今、言い間違わなかった? 気のせいじゃないよね?

突っ込みたいけど、今は駄目。ヒカルや和谷くんに知られた時の明日美さんの反応も怖いけど、それより市河さんが怖い。

「前に、院生の別の人にも言われたことあるけどよ。強くなる奴は、放っておいても強くなるって森下先生がよく言ってるぜ。俺は別に、慈善事業してるわけじゃねーし、誰でも世話を焼くわけでもねーよ」

確かに、森下先生がよく口にしてるね。でも、足踏みしている人を引き上げるのは、間違いなく和谷くんの力だよ。本当に面倒見がいいし、プロになった後、指導者に向いてそう。

塔矢くんが考え込んだ。今の言い方だと、和谷くんが明日美さんに気があってもおかしくないように聞こえるんじゃないかな。

「じゃあ、和谷くんはどういう相手に世話を焼くの?」

「ん? うーん。もったいねえって思った奴とかかな。何かあれば強くなるのに、変につまづいていたりとか。そんなこと言ってる、奈瀬や進藤が合格して俺が落ちてたら世話ねーけどな」

自虐的に笑う和谷くんに、これまで黙っていた小宮さんがフォローを入れる。

「でも和谷って、進藤を指導しながら強くなったよな。進藤来るまで、

俺や足立よりちよつと下かなくて思ってたけど、一気に抜かれたも
ん」

「ああ、確かに。私が言うのも何様だって感じだけど、和谷は進藤が来
る前より随分強くなったよね」

「今年の成績で言えば、進藤や奈瀬が沈んでたととしても、越智と伊角さ
ん、門脇にだって負けたからな。っていうかさ」

そこで言葉を切って、何故か私を見る。え、何かあるの？

「藤崎に負けてる段階で、追いつくためなら何だってしないとな。今
年は伊角さんにも越智にも、もちろん門脇にだって負けねーよ」

「おい、俺は無視かよ」

「だって小宮さんには去年勝ってるもん」

「こいつ。俺だって今年はもつと上を目指して頑張るさ」

小宮さんは、格下との勝負で取りこぼしが多いのが厳しい理由だと
思う。上位陣に勝てないのは、ここで格上と対局するのがいい勉強に
なりそう。

「なるほど。和谷さんは、今は地力を付ける時期だと思う。森下先生
のしつかりとした教えが浸透しているから、精神的にぶれることも少
なそうだし。技術的な面では僕もある程度力になれるだろうし、良
かったら一度、父さんの研究会に来てみる？ 小宮さんも、一気には
無理でも、プロ試験までに来てみたら、いい刺激になると思う」

塔矢くんの言葉に、和谷くんや小宮くんはもちろん、ヒカルも明日
美さんも驚いている。私だって、塔矢くんの内心で何があったのか、
凄く気になるんですけど。

「いきなりなんでそんなに親切なんだ？ 気持ち悪い」

「気持ち悪いとはなんだ。ただ僕は、人を押し上げながら自分も上が
るのも良いなって思っただけだよ。碁は、1人じゃできないんだか
ら」

うん、それは確かに。うーん、でもなんていうのかな、どこことなく
とってつけた感じがするとか、本音は語ってない気がするとか。
か。

「いいの？ 是非お願いしたいね！」

小宮さんが、嬉しそうに話に乗った。フクくんとは違って単純なわけじゃないけど、こういう時に躊躇しないのは、小宮さんの魅力だと思う。

「小宮さん、フットワーク軽いよね。俺はまあ、先生に聞いて許可が出たら」

「私が行ってるんだから、大丈夫だと思う」

ここで駄目だしする意味はないもんね。それに、和谷くんが合格できなくて、一番気を揉んでいるのは絶対に森下先生だし。

「やれることは何でもやろう。プロ試験で揉まれるのは、絶対にプロになってからも役に立つから」

塔矢くんの言葉に皆で頷き、対局をし始めた。

そして夕方、検討が終わって帰る前に、他の人に聞こえないよう明日美さんに声をかけた。

「明日美さん。夜、電話していい？」

「ん？ どうしたの？」

「ちよつとね。最近、塔矢くんとどうかなーって」

笑顔で伝えると、明日美さんの頬が少し赤らむ。やだ、明日美さん可愛い。

頬が緩むのを堪えていると、ぼそりと小さくつぶやいた。

「進藤や和谷には黙っててくれる？」

「うん、明日美さんや塔矢くんが了承しない限り、言わないよ！」

ホツとした様子の明日美さんに、安心してもらうよう頷く。もしかしたら小宮さんも気付いたかもしれないけど、そういうのを茶化す性格じゃないし、大丈夫だと思う。

ヒカルや和谷くんが、気付くはずないし。

「こんばんは」

「あかりちゃん、こんばんは。ええとね」

夜、約束通り電話をしたら、言いよどむ明日美さん。こっちらから振ってみよう。

「塔矢くん、奈瀬さんじゃなくて明日美って言いかけてたでしょ？」

「あー。うん。正確には『明日美さん』だけどね。あ、でもね！ 付き合っているとかじゃないんだよー！」

「へー」

「信じてないね。きつかけは、私が塔矢先生と塔矢くんじゃ呼びにくいつていう話を出してね。そうしたら、アキラでいいつて。緒方さんや芦原さんも、アキラつて呼んでるから」

「なるほど、確かにね。それで？」

「呼び捨てにする気はないし、アキラくんつて呼ぶようになったの。そしたらね。奈瀬さんつて言われるとバランス悪いし、明日美でいいよつて」

言つてゐることは分かるけど、院生メンバーの研究会はまだしも、塔矢先生の研究会でも塔矢くんと奈瀬さん呼びだよ。呼びにくいから名前で呼ぶのに、塔矢先生がいる場で使わないつて、本末転倒だよ。ね。

「そのわりに、他の人いる時に使つてないよね？」

「う。それはその。碁会所だと市河さんの目が怖いし、塔矢先生の研究会だと、その、ね？」

「間違いなく緒方さんや芦原さんはからかってくるよね」

「そう！ そうなの！ だから。2人だけの時に」

はい。他の人がいなくて2人の時だけ名前で呼ぶつて、どう考えてもねえ。

「うん、仲が良さそうで何よりです」

「もー、馬鹿にしてる？」

「ううん。微笑ましいなーつて」

「あかりちゃんと進藤の方が、よつぽどじれつたかつたし、見てて微笑ましかつたよ」

「うん、まあ否定しないけど。恋愛感情だつていうのは認めるんだ？」

一瞬言葉につまりながら、しどろもどろに言い訳する。

「う、うん。少なくとも、私はね。最初は真面目でお堅いなーつて思つてただけど、進藤絡みでむきになるのも可愛いし、何より真剣に碁を教えてくれたし。教え始めの頃は、進藤の試金石扱いかなつて思つ

てただけけど、利用できるものは何でも利用しちゃえって思ってた」
「ああ、確かにヒカル相手に、熱くなるよね。それも囲碁絡みなんだけ
ど」

「うん。小学生の頃の棋譜も見せてもらった。何あれ。本当に進藤
？」

「そうだね。私にもよく分からない。それで、いつ頃から？」

「やっぱり、プロ試験あたりから、かなあ。プレーオフで進藤に負けた
でしょ？ それで終わりかなって思ってたなら、その日の夕方にも越智
対策で打ってくれたの。アキラくんだって忙しいのに、進藤との対局
は終わったのにね。そこからだと思う」

「うん。なるほど」

アキラくん、か。確かに市河さんには聞かせられない声音だった。
見ている感じ、塔矢くんも憎からず思っているだろうから、後は時間
の問題かな。

「分かった、話してくれてありがとう」

「誰にも言わないでね」

「もちろん！ 私も、ヒカルとの関係を黙ってくれてたし！」

「そっちは、当人同士を除いてみんな分かってたけどね。それこそ、越
智やフクですら」

フクですらって。言葉悪いよ。隠してなかったし、いいんだけど
ね。

「私からのアドバイスは、1個だけ。塔矢先生は結構親馬鹿っぽいから
気を付けて。多分、明子さんを先に味方に付けた方が良いと思う」
「え、塔矢先生が親馬鹿？ そうかな？」

あれは間違いない。塔矢くんが連勝していた時も凄く嬉しそう
だったし、塔矢くんが友人ができたってだけで、私にあれだけ配慮す
るくらいには。

「じゃあ、また明日。楽しみにしてる」

「もう、何を楽しみにするのよ。あ、そうだ。あかりちゃんにばれたっ
て、塔矢くんに伝えるよ」

「私と話す時も、アキラくんがいいよ。さつき言ってたし」

「え、うそ。言ってた？」

言ってた言ってた。

笑っていると、明日美さんがごほんと咳払いして、話題を変える。

「それはともかく。明日はs a iの話題にもなると思うけど、塔矢先生が負けちゃったし、気をつけないとね」

「うん。私たちから話題を出すのはまずいと思う」

「芦原さんあたりが言っちゃいそうだね」

明日美さんは時々凄く辛辣だね。塔矢くん、苦労しなきやいけど。

さて、それはそうと、明日はどうなることやら。

第40手 中学2年生 その12

明日美さんと話した翌日の金曜日。

佐為と塔矢先生の対局後、初めての研究会。何事もなく終わればいいんだけど、どうなることやら。

「先週の見た？ 凄かったよね！」

今日は厄介なことに、芦原さんがいた。普段は重くなりがちな研究会を明るくしてくれるからありがたいけど、今日ばかりは空気の読めなさが怖い。

「芦原。塔矢先生が負けた対局だから、先生の前で嬉しそうに話すんじゃないぞ」

「分かってますよ。俺だつてそれくらい配慮しますよ」

「どうだかな」

良かった、緒方先生が抑えてくれそう。緒方先生も色々聞きたいだろうけど、このあたりが大人だなって思う。

塔矢くんや明日美さんは、苦笑している。話したいのは2人とも同じなのだろう、塔矢くんが緒方先生に質問する。

「で、緒方さんもあの対局見たんですよね。どう思いましたか？」

「そうだな……。塔矢先生とs a iの凄さを、あらためて感じたよ。だが、絶対に辿りつけない場所じゃない」

私は、どうだろう。他人の前で、これだけしっかり辿りつけるとは言えない。

辿りつきたいという願望はあるけど、それはタイトルを取るより難しい。

「s a iがいる時間に法則があれば、また対局を申し込むんだが、なかなか合わないからな」

「柳先生はよく打ってるって言ってますけど、緒方さんは運が悪いですよ。日頃の行いかな？」

「芦原」

「あ、いや。またすぐ打てますよ。先生が来て、許可をもらえたら、また今いるか見てみたらどうですか？」

本当に迂闊というか、さつき嬉しそうに話すなって言われたの、忘れてそう。

そんな話をしていると、塔矢先生が部屋に入ってきた。

「緒方くん。s a iと打ちたければ、いつでもパソコンで確認しても構わないよ」

「いえ、結構です。今は塔矢先生と打つ方が大事です」

「そうか。芦原、人が打った碁を研究するのは良いが、身に付けなければ意味がないぞ」

「は、はいっ」

ある程度聞こえていたみたい。和室だし、障子で仕切られていても声は結構通るもんね。

塔矢先生に叱られた芦原さんは、慌てて返事をする。

「話が出たついでに、s a iとの碁について、少し触れようか。あの碁を検討するのは勉強になるだろう。緒方くんにとっても」

「……そうですね。先生はよろしいので？」

「うむ。負けたとはいえ、私が手を抜いたわけでもなく、全力を出し切った結果だよ。誰に恥じることもない、塔矢行洋の全力だ。もつとも、負けたままにするつもりはないがね」

塔矢先生の言葉に、重みを感じる。佐為と塔矢先生の碁は、それだけ塔矢先生自身の心にも響いたのだろう。

佐為には及ばなかったけど、塔矢先生もまだまだ上を見ている。明確に自分より上がいるというのは、目標としても申し分ない。

佐為との対局について検討を終えた後、塔矢先生に電話が入り、少し休憩の時間になった。

各々、お菓子を食べたり、席を外したり。明日美さんとチョコレートのメーカーでの味の違いについて盛り上がっていると、珍しく緒方先生が雑談を振ってきた。

「そういえば藤崎は、塔矢先生とs a iの対局を直接見たのか？」

「はい。ヒカルと一緒にネット碁を打とうと思っていたら見つけたので」

「ほう、進藤と」

緒方先生は、顎に手を当てて考え込む。

「朝から一緒なほど仲が良いのか」

「はい、まあ。特に予定がなかったから、ヒカルと打つ前にネット碁を打とうと思って」

ぼかしているだけで、嘘ではない。saiの凄さを語るならいくらでも語りたけれど、ヒカルの詮索は避けたい。別の話題を振ろうとすると、明日美さんから横やりが入った。

「仲が良いというか、良い仲だよね」

「あ、明日美さん」

別に何も隠していないけど、面と向かって言われると恥ずかしい。大丈夫かな、赤くなってるのかな。

「へえ、藤崎さんって同年代の子と付き合ってるんだ？」

芦原さんが驚いたように声を上げる。どういう意味かな？

首を傾げて目を向けると、笑いながら説明してくれた。

「いや、藤崎さんってアキラや奈瀬さんに負けず劣らずで大人っぽいから。同年代の奴って子どもっぽいなと思うんじゃないかなってさ」

「別にそんなことないですよ。普通の中学生です」

「そうそう。オシヤレだってしたいし、美味しいもの食べたいし。ねー」

明日美さんが同意して、うんうんと頷く。すると、芦原さんをいじれる好機とみたのか、緒方先生も乗ってきた。

「お前は逆に、もうちよつと年相応の落ち着きを持った方がいいな。精神年齢は1番低いだろう」

「緒方さん、ひどいなあ。そこまで子どもなわけないじゃないですか」

口を開くたびにうかつな発言が増えていく気がする。けれど、そういうのも芦原さんの魅力かもしれないね。

「sai。進藤は、saiじゃない……けど……」

ビックリした。油断していたら、塔矢くんがつぶやいた。思わず振り向いちゃったけど、どうしようかな。

「saiが進藤？ どういう話だ？」

当然、緒方先生は話を広げる。芦原さんは進藤？ と首を傾げているけど、明日美さんは黙って話を聞いている。

「いえ、何でも。若獅子戦や研究会でも打つてますけど、彼はsaiじゃない。分かっているんですが」

「そうだね。ヒカルは佐為じゃないよ。佐為については分からないけど、ヒカルとは別人だよ」

多分、塔矢くんは言いたいことが上手く言葉にならないんだと思う。小学生の時に、ヒカルと打ったあの対局が引つかかっているのは間違いない。もう、ヒカルってば迂闊なんだから。

と、今さら小学生の時の話を蒸し返してもしょうがない。どうにか誤魔化さないかね。

「まあ、saiの碁はプロレベルどころじゃないからな。……藤崎、お前はsaiじゃないのか？」

「え？ 私？ 私が佐為なら、女性初のタイトルホルダーになれちゃいますね」

休憩だというのにピリピリしていたのを気にしたのか、緒方先生が冗談を飛ばした。良かった、ヒカルの話題が続くと緊張するんだよね。

そんな話をしたせいか、帰り道で明日美さんが助言してくれた。

「あかりちゃん、ちよつといいかな」

「どうしたの、あらたまつて」

「えつと。気付いてないかもしれないけど、進藤の話になったら、あかりちゃん子猫を前にした母猫みたいになってるよ。特にsai絡みでね」

「え、そうかな？」

「自分では気付かなかつたみたいだけど、緒方先生が『藤崎がsaiじゃないのか？』って言った時、あからさまにホツとしてたよね。普段が結構落ち着いてるだけに、余計に怪しんでくれて言ってるようなものだよ。緒方先生も、そのつもりでかまをかけたんだと思う」

えー、気付かなかつた。というか、本当にかまをかけられたのかな。

「緒方さんは、アキラさんと進藤の最初の対局を知らないから。あれを知っていたら進藤が怪しいというアキラくんの話も分かるけど、知らなければ進藤よりあかりちゃんのほうが怪しいよ」

「怪しいって、明日美さんちよつと」

「私は知り合っただのが中学生になってからだけど、常識の通じない、大人顔負けの子どもだったんだろうなって思うもん」

そんなことないよ。囲碁を打っていた時は頑張っていたつもりだけど、それ以外は子どもらしく振る舞ってたもん。

「まあ、私は進藤もあかりちゃんもs a iじゃないと思ってるよ。s a iなら、プロ試験の対局は何だったのって話よね」

「うん、そうだね」

ヒカルと打てば、s a iじゃないと思うのは確か。だから塔矢くんも、ヒカルじゃないと思ってる。でも、ヒカルが直接、佐為と塔矢くんの対局を目の前で打ったから、余計に混乱しているんだ。ありえない、って。

「明日美さん、ありがと。また来週！」

「またね」

駅で明日美さんと別れて、家に帰る。ヒカルに、今日の話をしておこう。

いつかヒカルは、佐為のことを誰かに言うのかな。塔矢くんや和谷くん、明日美さんには伝えてあげたい。みんなも佐為と打てば間違いなく強くなるし、佐為も嬉しいはず。何か手があればいいんだけどね。

ヒカルが佐為の代わりに打っているって言えなくても、知り合いだっけ言えたら、随分と気が楽になると思う。塔矢先生には実質伝えたいようなものだし、上手く伝えられたらいいんだけどね。

そんなことを考えながら家に帰ると、お母さんから伝言があった。

「あかり、棋院から電話が入ってたわよ。取材したいとかなんとか」

「棋院から？ 天野さんかな」

時間を見ると、まだ夕方、天野さんがいそうな時間だったので、こ

ちらからかけてみる。

「藤崎さん、わざわざすまないね。取材の件なんだけど、実はテレビ局からだね。女性で初の全勝でプロ試験を突破したのもあって、密着取材したいんだって」

「み、密着？」

話を聞くと、どうやらドキュメンタリー番組として取り上げるらしい。いやいや。恥ずかしくて死ぬので無理です。

「天野さん、それって断れませんか？」

「駄目かな？」

「プロとして活躍してからならともかく、まだ何もしてませんか」

「うーん。やっぱり無理かあ。じゃあ、カメラを回しながらのインタビューだけでも受けてくれるとありがたいんだけど」

「それくらいなら、まあ」

細かい話は後日として、電話を置く。

よく考えたら、テレビでのインタビューだけでも十分に恥ずかしい。これまではあくまで囲碁関連の新聞や雑誌だから、あまり気にせずに済んだのに。

最初に断られる前提の話を持ってきて、後で本来の希望を通すっていうのは常套手段だよな。天野さんってああ見えて策士だから、今後は気をつけないと。

帰りに明日美さんから聞いた話に気を取られていて、油断した。

今日は色々と疲れたから、ヒカルに癒やしてもらおう。

「へえ、インタビューかあ」

「うん。天野さんに返事したし、受けておきながら断るのも悔しいからいいんだけどね。まさかそんな話が出るとは思わなかったよう」

「がっかりとうなだれると、ヒカルが頭をぽんぽんと撫でてくれた。

「まあ、あかりなら上手く切り抜けられるだろ。そういうえば塔矢も取材とか受けてるのかな？」

「えへへ、ありがと。塔矢くんも、時々受けてるみたい。でもちよつと昼間のニュースでやるくらいで、大きく取り上げられる程じゃないみ

たいだし、大丈夫そうだよ。史上初の記録達成とかになると、少し違うかもしれないけどね」

頭を撫でてくれるヒカルの手を握って微笑む。うん、満足できた。「連勝記録も、倉田さんに止められたから。でも、もし順調に三次予選を突破したら、中学生にしてリーグ戦入りだよ」

リーグ戦までは突破できないと思うけど、塔矢くんならやりかねない。

話を聞いて、ヒカルがきゅつと握り拳を作る。頭から手が離れていて良かった。撫でている途中なら、頭が潰れたかもしれない。

その後、今日は私と佐為が打つ日だったので、対局してから検討する。密着取材とやらを受けたら、こうやってヒカルの家で打つのも控えないと駄目だし、断って良かった。

インタビューは天野さんもフォローしてくれて、無難に終わった。まだ何も実績がないので、あまり面白いものにもならないと思う。どうして今の段階でそんな企画が上がったのか不思議だね。

塔矢くんの密着取材があって、その談話というなら分かるんだけど。

それでも見る人は近くにもいたようで、放送があつた翌週、月曜の放課後に、久美子が声をかけてきた。

「あかり、テレビ見たよ」

「久美子、おはよう。テレビって、インタビューの？」

「うん。もう、びっくりしたよ！ 偶然見たから良いけど、教えておいてよ」

「恥ずかしいからやだ。それに、教室で話すのも避けたい。」

「恥ずかしいから、ここじゃちよつと。今日は部室に行くんだけど、久美子も行く？」

「えー。でも部外者が行くと迷惑じゃない？」

「構わないよ、多分。それに、もし良かったら、覚えてみる？」

ヒカルほどじゃないけど、久美子も長い付き合いだよ。今世でも仲良くなれるか少し不安だったけど、自然と仲良くなった。

私が囲碁をやっているのも知ってるし、お互い気兼ねなく接せられる相手。

「うん。あかり楽しそうだし、興味はあるんだけどね。でも、今さら行っても、邪魔にならない?」

「大丈夫。金子さんって知ってるよね?」

「知ってるよ。有名だし」

「バレエ部が休みの時とかに、時々打ちに来てくれるんだよ」

金子さんは、三谷くんの相手として時々来てくれるようになった。

三谷くんも私やヒカルとよく打っているためか、随分と強くなっている。

「じゃあ、ちよつと行ってみていいかなあ?」

「うん、行く」

久美子を引っ張って、部室へと向かう。

「あれ、津田さん?」

夏目くんがすでに来ていて、私と一緒に入ってきた久美子を見て首を傾げる。

「ちよつとお話のついでに、囲碁部の見学にね」

「へえ、いらつしゃい」

ヒカルと三谷くんが来るまで雑談していると、それほど経たずに2人とも顔を見せた。

「んで、どうしたんだよ?」

「久美子が、インタビュー見たつていうんだけど、教室ではちよつとね。ここなら気兼ねなく話せるから」

「なんだよ、雑談かよ」

三谷くんの憎まれ口に、久美子が気後れしている。大丈夫だよ、三谷くんは口だけで優しいから。

「雑談だけどね。久美子が少し囲碁に興味を持つていたから、見学も兼ねてるの。金子さん、次はいつ頃に来るかな?」

「知らねえけど、あいつが何かあんのか?」

「久美子の相手をしてくれたらなつて。私もあまり来ないし、本当の初心者だから」

「え、三谷に打ってもらえばいいじゃん。俺も最初の弱い頃から打ってもらったし」

ヒカルの言葉に、しゃあねえな、と三谷くんがガリガリと頭をかく。「その代わり、お前らが来た時はちゃんとお前らが相手してやれよ」「うん、もちろん！ 私が久美子と打つから、ヒカルが三谷くんや夏目くんと打つてよ」

そして、久美子に囲碁の打ち方を説明しながら、インタビューについての雑談にも花を咲かせる。

「じゃあ、今後も勝てば、テレビ局に呼ばれたりするの？」

「うーん。何か記録を作ったら、もしかしたらね。一応、今回のプロ試験の全勝合格が、女子で初めてだったっていうのがちよつと話題になったみたいだし」

「へえ。じゃあ、今のうちにサイン貰っておかないと？」

「止めてよ。書かないってわけじゃないけど、久美子にサイン求められるのは……って、そうだ、ヒカル」

「何だよ？」

三谷くんと夏目くんの2人と二面打ちをしながら、ヒカルが顔をこちらに向ける。

「ごめん、手を止めちゃって。」

「ヒカル、書道の練習もしないと！」

「書道う？」

「うん。タイトルとか取った時に、名前書いたりするもん。それに、お客様にサインしたり」

「え、必要になってからでいいよ、面倒くさい」

ヒカル、分かかってない。書道も囲碁と一緒に、一朝一夕で上手くならないんだよ。

とはいえ、まだプロとして1局も打っていないうちからサインの練習もないかな。

「まあいいか。でも、本当に字の練習はしておく方がいいよ」

はいはい、と話半分のヒカル。今は三谷くんたちと打って楽しんでるし、まあいいか。

でも本当に、そのうち綺麗な字をかけるようになっておく方がいい。いぎタイトルを取って、下手な字を書いちゃったら興ざめだもね。

その日は久美子に色々と教えたり、三谷くんと打ったり、充実した時間を過ごした。

いよいよ来週末に、新入段の授与式がある。私もヒカルも、スーツを用意したし、準備万端。いよいよ、プロとしての生活が始まるんだ。

最近ヒカルの家で打っているのも、勝てる頻度が減ってきている。私が弱くなったというより、ヒカルが異様に強くなった。佐為と塔矢先生の対局前は、あまり負ける頻度は高くなかったけど、今では五分より少し悪いくらい。

それでも、圧倒的に取り残されたというほどじゃないから、食らいついていけないとね。

第41手 プロ1年目 その1

3月、新入段の授与式。塔矢くんの連勝賞や勝率第一位賞、塔矢先生の最優秀棋士賞もある。

ヒカルと一緒に会場に入ると、塔矢くんと明日美さんの姿が見えた。

塔矢先生や緒方さんの姿もある。

「ヒカル、あつちに行こう」

「おう」

ヒカルと一緒に塔矢くんたちのところへ行こうとすると、倉田さんから声がかかった。

「進藤だ」

「倉田さん。おはようございます」

「藤崎も一緒？ おはよ」

挨拶だけして倉田さんが離れると、ヒカルが肩をすくめる。

「倉田さんって変な人だよなあ。あの人、なんで来てるの？」

「なんでって。最多勝利と最多対局数で表彰されるからだよ。今のところ、若手の急先鋒として緒方先生や芹澤先生があげられるけど、倉田さんも変わらない実力の持ち主だよ」

「へえー」

分かってないね。倉田さんの凄さは、そのうち対局すれば分かると思う。

「塔矢くんの連勝も、倉田さんが止めたんだよ」

「え、塔矢の？ そりや凄えな」

身近な実力者と比較すれば、強さが分かりやすいよね。周りの棋力からの判断だけだと、今の私やヒカルと倉田さんの差は、逆コミなら勝てると思うけど、コミなしの定先だと、五分かちよつと厳しいくらいかな？

「あかりちゃん、進藤。おはよう」

「明日美さん。おはよー。塔矢くんも」

「うん。おはよう。……進藤も」

「どうでもいいけど、お前ら、結構一緒にいるよな？」

あ！ ヒカルってばなんてことを！

明日美さんの動きが固まる。塔矢くんは、虚を突かれたように目を見開く。

「……同じ塔矢門下だからね」

「ふーん。あ、そーいやあかりって、どうなってんだ？」

深い意味はなかったみたいで、ヒカルはその後の追求もなかった。

「私は森下先生の門下だよ。どうして？」

「あかりも塔矢のオヤジのところにも行ってるじゃん」

「あくまで森下門下で、塔矢先生のところは勉強させてもらってるよ
うな扱いだね」

話しているうちに、明日美さんが再起動した。少しぎこちないながらも、なんとか元通りになって良かった。

順当に授与が進み、最後に新入段の3人を集めて研修会があった。
大きな封筒を渡され、中を確認する。

「あ、大手合いの組み合わせ表ね」

明日美さんが中に入っていた冊子を開いて確認していると、説明の
方が教えてくれる。一番後ろを見て、自分の名前を見つける。

「え」

自分より、その2つ上にある進藤ヒカルの文字に目がとまる。とい
うより、その横。

塔矢アキラ二段。

「初戦が塔矢くんだね」

「ああ」

明日美さんの相手は、真柴さん。若獅子戦で伊角さんに負けた人。
私の相手は、山田さんっていう人。この人は記憶にない。

研修会を終えて外に出ると、塔矢くんが待っていた。明日美さん待
ちだね。

「進藤、見たか？」

「ああ」

ヒカルと塔矢くんが火花を散らす。明日美さんの顔を見ると、しよ
うがないなあ、と言いながら腰に手をやっている。

「はいはい、道の真ん中でやると邪魔だから。駅に行くんでしょ。歩
きながら話そう」

ヒカルも塔矢くんも、ぼつが悪そうに歩き出す。うん、明日美さん
が正しいね。

「お昼どうする?」

「どこかで食べて行くかうか」

私が聞くと、塔矢くんが応じる。明日美さんにもヒカルにも反論は
ないので、近くの定食屋に足を運んだ。

「進藤。塔矢も?」

中には、倉田さんが一人で食事を食べている。あれ、さつきインタ
ビューしていた気がしたけど、見間違いかな?

「倉田さん。どうしてこんなところに?」

「逃げてきた。飯食う時間もくれなそうだもん。食ったら戻るよ」

「やっぱり。天野さんたちも困ってるだろうなあ。」

「お弁当とか用意していたら、どうするんですか」

「え、出してくれたら食べるよ。何言ってるんの」

倉田さんの体型、そうやって維持してるんだね。

言っても無駄なようで、私たち4人も、倉田さんに近い席に腰を落
ち着ける。

「塔矢、新初段の3人と知り合いだったんだ」

「奈瀬さんは父さんの門下だし、藤崎さんも研究会に来ているから。」

進藤は、昔にちよつと打つ機会があつて」

「へえ。こいつ変なことに詳しいよな。秀策の文字とかさ」

「秀策の文字?」

「そうそう。こないだイベントでさ、偽物っぽい秀策の文字を見て切
れてんの」

あ、よくない流れな気がする。

どうしよう、私が割り込んでも怪しいだろうし。

「先に注文しちやおう。話はそれから」

明日美さんが言つて、各々食べたいものを決めて注文する。ひと息置いたおかげか、話は別のところに向かつていく。

明日美さんありがとう、と目線で礼を言つと、にこりと微笑まれた。うー、最近、明日美さんのお世話になりっぱなしだ。

「今年は女性2人つて珍しいよな。しかも2人とも新初段勝つてるじゃん」

「ええ。2人ともかなり打てますよ。藤崎さんは、練習手合いだと時々負けますし、奈瀬さんもプロ試験で進藤に近い実力を見せましたし、女流の梓には収まらない活躍を見せると思います」

「へん。あれから半年以上経つてるし、俺だつて成長してるぜ」

「奈瀬さんもね。まあ、進藤の成長はかなりのものだけど」

つい最近、院生メンバーでの研究会の話だろう。

1手10秒の早碁での練習手合いとはいえ、互先でヒカルが塔矢くんに肉薄していた。

研究会では私以外には負けていないから、勝てなかったとはいえ、かなりざわざわとしていた。

勝つたと言つても、私も10回やって1、2回勝てるかどうかつていう程度なただけどね。

「私もあれからも伸びてるつもりだけど、あんたらにはついて行けてないよ。越智や和谷に負けることも多いし、自信なくしそう」

「越智くんや和谷くんも相当強いから」

私のフォローに、塔矢くんも頷く。

「確かに。一昨年の僕が受けた時、和谷さんはいたけど越智くんはいなかったよね」

「越智は、そのプロ試験後に院生に入ったから」

「ふうん。1年早ければ、間違いなくプロになれていたと思う。同期の辻岡さんはそこそこ安定して勝っているけど、もう1人はあまり勝ててないようだし」

ああ、若獅子戦で伊角さんに負けていた真柴さんだね。確か、今年まだ初段のままだったはず。

そんな話をしていると、倉田さんが席を立つ。

「何にせよ、塔矢がある程度認めてる3人ってことで、ちよつと気にしてみるか」

「倉田さんが気にするほどじゃないですよ」

私の言葉に、ムツと口を歪める。あれ、何か気にくわなかったかな。「気にするかどうかは、俺が決めるさ。俺は、下の人間の方が厄介だと思ってるんだ」

ひらひらと手を振って店を出て行く。塔矢くんは対局しているから分かるけど、他にも目を向けるとは、倉田さんも見た目によらず目配りが細かい。

ヒカルに目を付けるのは、正しいんだけど。

その後すぐ料理が運ばれてきて、話しながら食事をして、店を出る。駅に着くと、特にそれ以上は長引かせず、私とヒカル、塔矢くんと明日美さんに分かれて家へと向かった。

「ヒカル。塔矢くんと明日美さんをからかうのは禁止ね」

「え、からかうって。え？」

「別に付き合ってるとかじゃないけど、お互いに意識してるのは間違いないし。つついてこじれたら悪いでしょ」

「あ、うん。へえ、塔矢が」

悪い顔になっていたので、ヒカルの頬を軽くつねっておく。大げさに痛がるけど、ふにやつとつまんだ程度で、痛いはずないよ。

「へーへー。別にそんなことからかつたりしねえよ。それより、いよいよ公式戦か。勝てる可能性もあるよな」

「うん、絶対ってことはないよ。1年前だと絶対に勝てなかったかもしれないけど、今なら」

特に佐為と塔矢先生の対局を経験してから、実力の上がり幅が凄い。

「佐為も、俺と塔矢の対局は楽しみだつてよ。それより倉田さんと打ってみたいってうるさくてさあ」

ああ、そうだよ。倉田さん強いし、佐為は打ちたがるよね。倉田さんがネット碁をやっているって話は聞かないけど、打つ機会は来るかな。なんとかしたいけど、難しそう。

塔矢くんや明日美さんとも、また打つ機会を作りたいけど、こっちはもつと難しい。

「研究会で集まってる塔矢くんや和谷くんたちとも、打つ機会を設けたいよね」

「ああ、バレなければ打つてもいいけどよ」

うん。何か方法がないか、考えたいね。

そして、院生メンバーと塔矢くんが集まっている研究会。塔矢くんが木曜の手合が増えてきて、参加が減ってきたのを理由に、土曜に変えた。他の曜日は、本田さんや冴木さんに研究会の予定があったり、なかなかみ合わなかった。

土曜だと、毎月1回院生研修があるけど、それ以外の日はかなり集まれる。

そして、新メンバーとして、中学生になったフクくんも参加し始めた。

「きみが福井くん？」

「うん。フクでいいよ。塔矢くん、よろしくー」

塔矢くんを前にして物怖じしないのは、凄いと思う。

篠田先生や年配のプロにはそれなりにきちんとしているから、相手を見て大丈夫そうならこういう態度なんだろうけど。倉田さんとかだと、フクくんがどういう態度になるか、会わせてみたい。

「せっかくだから、塔矢くんに打ってもらったらどうかな。参加メンバーの実力を見るのも、大事だし」

「うん、そうだね。じゃあ打とうか」

そして、塔矢くんとフクくんの対局が始まり、異様に速く終わった。

2人が打ち始めてから、他の人も各々対局し始めたけど、ほとんど中盤に至るあたりで終局していた。

「筋は悪くないけど、好きに打ち過ぎているね。もうちよつと相手を咎めないと、こことかここも、応手に困っただろう」

「うん。こことかもきつかったー」

意外と話が合うというか、フクくんは相手の意見にあまり反発せ

ず、受け入れて考える傾向があるから、立場が上の人との打ち合いが向いている。

和谷くんととの相性が良いのも、和谷くんがフクくんが色々と教えて、その結果、和谷くんの打ち方に慣れたのが原因だと思う。

「フク、塔矢なんかに負けてんなよ」

「塔矢くん強いよ。和谷くん、勝ったことあるの？」

「う。今は無理でも、そのうち勝ってやるさ」

「僕も今のままじゃないけどね」

和谷くんの憎まれ口に、塔矢くんも切り返す。あはは、なんだかんだで、結構仲良くやってるよね。2人とも、ヒカルの面倒をよく見ているのも共通するし、世話焼きだし、似通った部分もあるもんね。

と、よそ事はその辺で、今は越智くんととの対局に集中しよう。今までも真面目だったけど、プロ試験に落ちて、人を馬鹿にしたような態度はなりを潜めている。

負けた後にトイレに籠もるのは変わらないけど。

対局を終えて、昼からは検討の時間を取る。

休憩や雑談の時に、不自然にならない程度に、ネット碁をしているかどうか、いつ頃やってるかを聞いて回る。

聞きにくかった塔矢くんにも、ついでに聞いておく。

「最近、あまりネット碁は打たないな」

「あれ、そうなんだ。道理で見ないと思った」

「藤崎さんは打ってるの？」

「打ってるよ。2、3週間に1回くらいだけど、一柳先生にも打ってもらってるの。1回だけ、一柳先生に了解を得て、ヒカルとも打ってもらったんだよ」

私の発言に、それぞれ羨ましいだの声上がる。一柳先生、ネット碁だと誰からの対局でも受けるけどね。

「なあ、藤崎」

「ん、どうしたの」

和谷くんが、真剣な顔で声をかけてきた。

「越智とフクってさ、師匠いねえじゃん。一柳先生に頼めないかな？」

プロ未満の若い奴が弟子にいつて話は聞かねえだろ？」

「うーん。私、そこまで一柳先生と関わりがあるわけじゃないから、どうだろう」

ネット碁の後とかに言ってみるのはいいけど、いくらなんでも受けてくれるとは思えない。

首を傾げていると、塔矢くんも和谷くんの意見に賛同した。

「越智くんは、自宅にプロを招いて打ってもらっているようだけど、合わない人だと無駄になるし、プロによっても考え方が違う。それはそれで勉強になるだろうが、どうしても細かく指摘できるほどには見てもらえないからね。特定のプロに師事するのは良いと思う」

「ああ、そうだな。みんなで打つのもいいけど、師匠がいるとありがたいぜ。それもタイトルホルダーなんて、そうそう機会ないし、ダメ元でも頼んでみたらいいじゃん」

小宮さんも同意しているので、話題が上がっている2人に目を向ける。

「僕は、一柳棋聖なら異論はないよ。本音を言えば、塔矢名人の研究会に通いたるところだけど」

「今以上に人を増やすのはどうかな。……越智くんは芦原さんと相性悪そうだし」

塔矢くん、ぼそつと付け足したの、聞こえちゃったよ。明日美さんも嘖き出しかけたし。

「僕もお願いしたい。でも、迷惑だったらいいよー」

「頼むだけなら大丈夫。でも、断られる可能性の方が高いから、それは織り込んでおいてよ。先週、棋聖戦の挑戦手合いが終わってたよね」「そうだね、棋聖位も防衛できたし、しばらく忙しいだろうけど、来週以降ならネットで見つけた時に話してもいいかもね」

先週、防衛戦明けの月曜にも佐為と打っていたけどね。しかも持ち時間3時間で。

塔矢先生がやっていたから自分もいけると見たんだろうけど、行動力と体力が凄い。

考える時間が長かったせいかな、普段よりも白熱した碁になってい

て、佐為も凄く喜んでいた。おかげでヒカルも嬉しそうで、私としても嬉しい限りだった。

そんな話をした2週間後、ヒカルと塔矢くんの対局の日が決まった。4月4日。私と明日美さんは同日で、4月11日。

他に誰かいないか確認してみると、冴木さんがヒカルと同日に対局があるようだったので、当日はお任せすることに。

「いよいよだな。若獅子戦で打ったけど、プロとしての1戦目が塔矢つてのは燃えるな」

「うん、羨ましい。私も後ろの方で塔矢くんと対局があるけど、早く打ちたいな」

「どっかの一次予選とかで打てないかな？」

「どうかな、塔矢くんはほとんど全部勝ち進んでるから、なかなか機会はなさそう」

塔矢くんは名人戦を除いて、全部勝ち進んでいる。低段者に敵なしだね。

「あ、ichiryuだ」

「ほんどだ。今の対局が終わったら、申し込んでみよう」

今日は、私がネット碁で打っている日。ネット碁はほとんど佐為が打つけど、時々私やヒカルが打つ時もある。

一柳先生が受けてくれたので、対局する。対局といっても、指導碁だ。お互いに実力は分かっているので、勝ち負けにこだわらず個々の局面での打ち回しを学ぶ。

「あ、こんな手があるんだ」

「……佐為も知らないってよ。現代風の手だよな」

「うん。この先の展開、研究は進んでるのかな」

佐為が見てるとは思ってないだろうなあ。

そんな話をしながら対局を進めていく。色々と教わりながら、それでもたまに一柳先生の手が止まる場面もあった。

「よし、頼んでみよう」

対局が終わった後、チャットで相談してみると、会って決めるとの

こと。それはそうだ。

一柳先生の予定に合わせようとしたら、とんでもないことを言ってきた。

『きみたちが打ってる研究会って、塔矢さんところの碁会所でやってるの？　そこに行けたらいいんだけど、来週は十段戦の解説があるから行けないなあ。再来週なら行けるけど、どうかな？』

再来週、といえは3月最後の土曜日。予定は問題ないけど、いいのかな。

「来てくれるって言ってるんだから、良いんじゃないの？」

「うーん。まあ、そうだね。『ありがとうございます』、っと。佐為、この後一柳先生と打ってもらえるかな？」

「……大歓迎だつてよ。俺も構わねえよ」

ヒカルと佐為に了承を得て、お礼代わりに一柳先生へひとつ質問。

『この後、まだネット碁を続けますか？』

『うん、もうちよつと打とうかな』

『分かりました、私は、ここで落ちますね。本当にありがとうございます』

『はいよ。じゃあ当日、楽しみにしてるよ。ああ、saiは来ないかな。気分がいい時に打っておきたいねえ』

気分が良いと打ちたいっていうのもよく分からないけど、じゃあ、バトンタッチ。

佐為も喜んでるし、いいよね。

「いいけど、バレねえよな？」

「別に偶然で済む話だし、大丈夫でしょ。saiと打ちたいっていうのも一柳先生が言っただけで、私は何も言っていないもん」

というより、毎回ネット碁を打つと、saiと打ちたいって言い続けてるもんね。

そして、saiがログインすると、間髪入れずにichiryuからの申し込みがあった。早い……。

「すげ、選ぶまでもなく最速だったぜ」

「凄いね。慣れてるのもあるだろうけど……」

「……佐為が、それだけ貪欲なんだろうってさ」

うん、タイトルホルダーやリーグ戦棋士って、碁に対する意気込みが凄い。私やヒカルも結構打ってる方だけど、それを何十年も続けているんだから、積み重ねが違う。

対局自体は佐為が勝ったけど、熱戦が繰り広げられて、4目半の差。見所が多くて研究しがいのある一局だった。

そして、2週間が経過して、一柳先生が研究会に来てくれる日がやってきた。

第42手 プロ1年目 その2

当日、一柳先生が来ると言っていた時間より早めに、本日の参加予定者が全員揃っていた。私とヒカルも碁会所に到着している。

そうして迎えた一柳先生。

「よろしく。若いのが集まっけていて楽しそうだね」

「一柳先生、わざわざありがとうございます」

私の挨拶を皮切りに、口々に挨拶をかわす。一通り挨拶を済ませた後、一柳先生が早速本題を持ちかける。

「さて、弟子になりたい越智くんと福井くんってのはどれだい？」

「僕です」

「はい」

越智くんがきまじめに返事をして、フクくんも手を上げる。

じゃあ打ってみるか、と2面打ちができるように少しだけ机を動かす。

準備をしながら、和谷くんが一柳先生に伝言を伝えている。

「一柳先生、後で森下師匠も顔を出すって言ってました」

「森下さんが？ そういえば藤崎さんや和谷くんの師匠だったか」

「はい。あと、その進藤も」

「そういえば今月頭の授与式で聞いた気がするな。というか、今年のプロ入り3人は仲が良いんだね」

「そうですね、全員院生だったので」

「まあ、院生同士でも仲が良いとは限らないけど。ま、それはいいやね」

準備が整い、置き石なしで越智くんとフクくん相手に打ち始める。

2人とも少し緊張した様子だけど、普段通り打てるよう頑張つて。

私たちも、思い思いに対局をしたり、一柳先生の打ち方を見ながら検討をしたり。

「師匠」

「おう、お邪魔するぞ」

和谷くんが真っ先に気付いて、みんなまで再び挨拶。

来るって話をしていた時にどうしてか聞いたら、弟子経由でのお願いで世話をかけるのに、挨拶なしってわけにもいかん、とのことだった。

森下先生は、塔矢先生以外にはきっちりしているし、色々といベントの主権もしているし、和谷くんと同じで凄くお人好しだね。というか、森下先生のお人好しが、和谷くんに引き継がれているのかもしれない。冴木さんも、懐に入れた人には相当世話を焼くし。

ともかく、森下先生と一柳先生は目線で挨拶だけして、和谷くんや私たちの様子を見始めた。

対局の合間で手が空いた時に周りを見ると、受付の方から何か視線を感じる。目を向けると市河さんに呼ばれたので、足を運ぶ。

「藤崎さん、気付いてくれてありがとう」

「いえ、どうかされましたか?」

「えっとね、北島さんが森下先生のファンで。もし余裕があれば打ってほしいってお話なんだけど。もちろん、相応の対局料は払うわ」

「聞いてみますね」

多分、断られないと思うけどね。森下先生に聞いてみると、首を傾げながらも了承した。

「いいけど、ここは行洋の碁会所だろう。何だって俺のファンなんだ?」

それは本人に聞いてください。とはいえ、私も気になるので付いていく。

「ええと、受付の姉ちゃん。普段こいつらがお世話になってるから、指導料は今回はいいよ。俺のファンだったのも珍しいしな」

森下先生が軽く請け負って、市河さんと北島さんが恐縮している。

「どうも、ありがとうございます」

珍しく北島さんが緊張した様子になっているけど、森下先生も慣れたもので、上手く話をしながら、指導碁を打ち始めた。

「どうして森下先生のファンなんですか?」

私が水を向けると、北島さんは嬉しそうに話し出す。

「いや、もちろん塔矢先生の華麗な打ち方は素晴らしいんだけどよ。森下先生がリーグ入りしてた時も、力強い打ち方で憧れたもんです。あ、今がリーグ入りする力がないってわけじゃなくて……」

慌てたように付け足す北島さんに、森下先生が笑って手を振る。

「いや、リーグ入りできてないのは確かですから。近頃不甲斐なくて申し訳ない。でも、まあこのままだとあそこにいる行洋のせがれやこいつらにも抜かれかねんからな。気合い入れて対局に臨んでますよ」
ははは、と笑いながら、森下先生も嬉しそう。過去の成績も把握しているような、歴としたファンだつて分かると嬉しいよね。

そうやって研究したり一柳先生の対局や森下先生の指導碁を見ているうちに、越智くんとフクくんの対局が終わった。

一柳先生が顎に手を当てて考え込んでいたので、口を開くまで待つ。越智くんも、一柳先生の前だと借りてきた猫みたいになっている。注目されているのに気付いてか、一柳先生が口を開く。

「こつちの越智くん、今のままでも順当に行けばプロ4段くらいまでは順調に上がれるだろう。地味な碁だから目立ちにくいけど、打ち筋が悪いわけじゃない。むしろよく勉強していて好感も持てるよね。どうしてこの子がプロ試験で落ちたのか、不思議なくらいだよ」

一柳先生の目から見ても、越智くんは素質があるらしい。一柳先生の疑問には、和谷くんが答えた。

「受かった奴が、もっと強かったつってだけですよ」

「和谷！ 僕は実力で劣ったつもりはないよ！」

「でも、プレーオフまでやって負けたのは事実じゃねーか。プレーオフまで行かなかった俺が言うのも情けねえけどさ」

和谷くんの言葉に、なるほどと頷く一柳先生。

「まあ、ちよつと気になるところもあるけど、いいだろう。越智くんだったかな、俺の研究会に来るといいよ。それと、福井くんだったかな」

「は、はいっ」

「きみは少し足が軽すぎるね。軽いのは良いけど、常にそれじゃ良く

ないね」

「はい」

「先を読まずに緩手になっていることもしばしばあるね。直感で打つのも悪いことだけじゃないが、プロになるには、今のままだとちよつと物足りないかな。でもまあ、今年から中1なんだろう？ 十分に見込みはあると思うよ。越智くんと一緒にうちの研究会で学ぶといい」

良かった、許可を出してくれるらしい。

安堵したところで、越智くんが口を開く。

「気になるところって、どこですか？」

「ん？」

越智くんってば、ふてぶてしいというか、我が強いというか。大人しくしていたと思っただけで、言いたいことは口に出しちゃう性格には困ったもんだ。一柳先生にもかみついちゃうとは思わなかった。

私も周りも、注意しようと動きかけたけど、それより早く、一柳先生が気にした風もなくあっさりと答える。

「ちよつとね、遊びがないよね。こつちの福井くんが自由に打つのに比べて、最善手を追求する姿勢はいいけど、ちよつと硬すぎるね」

「……遊ぶ必要はないと思いますが」

「そんなことねえさ。なあ、森下さん」

指導碁が終わったようで、森下先生も会話を聞いていた。

「そうですね。一柳棋聖ほど柔軟な碁はなかなかないけど、遊ぶっていうか、もうちよつと余裕を持って、視野を広げた方がいいかもしねえな」

「今のリーグ戦棋士で言えば芹澤くんが越智くんに近い碁を打つけど、それにしてももっと柔軟性はあるからね。まあ、今すぐじゃなくていいけど、もっと楽しく打った方がいいよ」

越智くんも思うところはあるのか、それ以上は反論せず頭を下げた。

越智くんは、ひとつの局面での読み合いは凄く強い。でも、大局観が弱いとまでは言わないけど、各所が薄い状態で打ち合うのは苦手そうだ。

「一柳先生、ありがとうございます」

「いいってことよ。俺もかわいい弟子ができて嬉しいし。まあ、藤崎さんやそっちの奈瀬さんみたいな女の子の方がいいけど、美人過ぎてヨメさんに怒られちゃうかな」

あつはつは、と笑う先生に、愛想笑いを返しておく。フクくんはともかく、越智くん大丈夫かな。性格が違いすぎて疲れそう。

帰り道、ヒカルが佐為と話をしていたようで、笑いながら話しかけてくる。

「佐為がな、碁からも感じていたけど、一柳先生がかなりお調子者だったよ。平安や江戸の世にも、滅多にいないタイプだったらしいぜ」

「そりゃ、あれだけの実力で、あれだけ個性豊かな人も珍しい……と言いたいところだけど、みんなそれぞれに個性強いよね」

「塔矢のオヤジはもちろん、本因坊のじーちゃんも変な奴だよな」

「言葉遣い悪いよ。でも、桑原本因坊だけは本当に気をつけないと」

勘でヒカルに目をつけるって、塔矢くんや緒方さんたちとは気をつけるの意味合いが違う。

そのうち、ヒカル越しに烏帽子の幽霊が見えるって言い出してもおかしくない。

「それより、来週はいよいよ塔矢くんと対局だね。決まってから塔矢くんとは打ってないけど、やっぱり意識してる?」

「うーん、俺が避けてるといいうか、塔矢が避けてるといいうか。勉強で打ちたくないってわけでもないけどさ、やっぱり正式な場で勝ちたいじゃねーか」

うん、大変だけど頑張るって。私も頑張ろう。

「お前は誰だっけ?」

「山田さんっていう、二段の人。ヒカルが塔矢くんに勝った時に、私が負けてると悔しいから、頑張らないとね」

「まあ、お前なら大丈夫だろうけどさ。そういや、女流の大会とかもあるんだよな?」

「うん。女流であるのは本因坊、名人、棋聖だね。他にも細かいタイト

ルもいくつかあるけど、やっぱり国内だとこの3つが重要な。女流棋聖戦は6月頃から予選が始まるから、楽しみなの」

へーって、話を振っておきながら、軽く流してくる。

「女流かあ。でも、女流で1番強い人でも、普通の棋戦はリーグ戦に入っていないんだろ?」

「うん。三大棋戦でも二次予選を突破する人は時々いるけど、三次予選で落ちたりしてる。でも二次予選突破って凄いなだよ」

森下先生でも、二次予選を突破している棋戦は半分あるかどうか。さつき、フアンの人に言っていた通り、最近は調子が良くていくつか二次予選を突破している。

ヒカルや私が発憤材料になっているのなら、それはそれで嬉しい。

そして、いよいよヒカルが対局する前日。ヒカルと相談した結果、いつものように打つと決まった。

「今日は、俺とあかりで打つ日だからな。お前と打つと落ち着く気がするぜ」

「本当?」

「ああ。そんな嘘を言ってもしょうがねーじゃん」

そう言ってもらえると嬉しい。前世でも、塔矢くんと打つ前に打つてくれたよね。ふふ、変わってないといえれば良いのか、やっぱりといえれば良いのか。

普段より心持ち丁寧に、ゆっくりと打つ。ヒカルも、一手ごとに気持ちいを落ち着かせるように、ゆっくりした展開になった。無理に荒らすような打ち方をせず、ともに最善を尽くすための碁。

碁は、勝ち負けを決めるためのものなのに、こうやって会話をするように打てる。不思議だけど、これも碁の魅力なんだと思う。

「塔矢とは、若獅子戦で打ったのが俺との初対局だったから、次が2戦目だな」

「最初は佐為で、部活の大会だと、途中まで佐為が打っていたもんね」

「ああ。これが終わったら、また佐為とも打たせてやりてーな」

「最近、塔矢くんはネット碁をやってないみたいだし、難しいかもね」

「そうなんだよなあ。佐為にこだわっていたようにも見えたのに、どうしたんだろううな」

気にしているのは確かだけどね。

ヒカルの手で佐為の碁を打ったんだから、他の人と違って塔矢くんを誤魔化すのは難しい。でも、簡単に言える話じゃない。

信じてもらえるかどうかというのは、実のところ、どっちでも構わない。本当に困るのは、ヒカルが打っているのに佐為が打ったと思われること。

ヒカルは、碁を覚えてから真剣に取り組んでいて、ずっと成長を続けている。それなのに、打ったのが佐為かヒカルか、なんて疑心暗鬼になっちゃうと、ヒカルにとっても、塔矢くんにとっても良い結果にならないと思う。

「塔矢くんは、ちゃんとヒカルを見ようとしているのかもね。佐為は佐為、ヒカルはヒカルだから」

「そうなのかな。それなら良いんだけど」
「きつとそうだよ」

また機会を見計らって、佐為と塔矢くんを打たせてあげたい。塔矢くんはもちろん、佐為も打ちたいはず。

そんな話をしているうちに、夜が更けていった。

そして、ヒカルと塔矢くんの対局当日。学校が終わって大急ぎで棋院に行くと、大騒ぎになっていた。どうしたのかと思うと、塔矢先生が倒れたとかなんとか。

詳しい話を聞きたくて、ちょうど入り口ホール近くを通りがかつた天野さんに声をかける。

「塔矢先生が倒れたって、どういうこと!?!」

「あ、藤崎さん。それが……」

病院から明子さんが電話をかけてきたようで、容態がどうなのかは、まだ分からないみたい。もし私の方に情報が入れば教えてほしいと言われた。うん、言っただいようなら伝えよう。

それはそうと、ヒカルはどこかにいるのかな。塔矢くと打てたの

かも気になる。

「あかり」

棋院の中を見て回ろうとすると、ヒカルの声が聞こえた。

声の方へと振り向くと、階段から降りてきたヒカルが近づいてくる。良かった、すぐに合流できた。

「ヒカル！」

「なかなか来ねえから、帰った方がいいか迷ってたんだ」

「待たせてごめんね。それで塔矢先生が倒れたって」

「うん、全然詳しい話は分からねえから、どうしようかと思つて」

緊急性が高ければ手術しているだろうし、過労が原因で倒れただけなら、検査くらいで済むだろう。まだ棋院の関係者もあまり情報がないことを考えると、今日は何も分からない可能性が高そう。

「棋院にいるのも迷惑だし、いったん帰ろう。塔矢くんは？」

「あいつ、来なかったんだ」

「そっか。多分、ずっと塔矢先生のお側にいるんだね」

対局できなかつたのはお互いにとって残念と思うけど、今はそれどころじゃない。

いったん自宅へ帰り、ヒカルの家に行く前に明日美さんへ電話してみたけど、繋がらなかった。お母さんに、もし電話があつたら連絡してもらおうようお願いしてからヒカルの家に行く。

「明日か明後日、塔矢先生のお見舞いに行こう」

「うん。佐為も塔矢先生の容態が気になるってさ」

落ち着くまで部外者は無理だろうけど、数日経てば行つてもいいだろう。今日はヒカルと佐為が打つ日なので、佐為の指し示す場所に碁石を打ちながら、そんな話をしていると、明日美さんから電話があつたと連絡が入った。

ヒカルのお母さんに了承を得て、ヒカルの家から直接明日美さんへ電話を入れる。

「明日美さん、塔矢先生どうだった？」

「私は直接お伺いしてないよ、恐れ多い。アキラくんに聞いたところ、心筋梗塞だつて。明日は十段戦の第3局だつたけど、とてもじゃない

けど行けなそう」

「そう、十段戦は残念だけど、無理しちゃ駄目だよな」

「でも早期発見だったから、そこまで酷くはならないだろうって」

酷くなさそうだって、と横で様子を伺っていたヒカルに声をかける。ヒカルも、ホツとした様子で息を吐く。

「そっか、なら良かった。いつならお見舞い行けそうかな？」

「明後日以降なら行けそうだって。どうする、一緒に行く？」

「私は土曜に行こうかなって思ってるの」

「そっか、進藤と一緒に？」

「うん、そうだよ」

探るような声音の明日美さん。ヒカルと一緒にだと何か問題あるかな？

「じゃあ別々にしておこっか。私は、その」

ああ、塔矢くんと一緒に行くんだね。塔矢先生に勘付かれてそうだけど、いいのかな。

「分かった。それなら、また来週、研究会で」

「うん、またね」

電話を置いて部屋に戻って、ヒカルに説明をする。ついでに、塔矢先生には佐為のことを伝えてもいいんじゃないか、聞いてみよう。

「ヒカル、分かっているとと思うけど、私が佐為と塔矢先生の対局を整えた時に、塔矢先生は繋がりがあって気付いてるの。言いたくないって態度を取ったから、先生が気を遣ってくれて言わないだけで」

「ああ、そうだろうな」

「佐為が幽霊ってこととか、ヒカルに憑いているとかは別として、私の知り合いというよりヒカルの知り合いっていう方が、佐為との対局をもっと増やすには良いと思うんだけど、どうかなあ？」

「そうだな、塔矢のオヤジには言っていないと思うけど、黙っていてくれるかな？ 塔矢には言いたくないぜ」

「どうして？」

むしろ、誤魔化すには言っちゃった方が良い気がする。そして、習い始めの頃に佐為から教えてもらって、偶然あの碁になったとか。

「どう伝えても、誤魔化したら嘘になっちゃうじゃん。説明できないから言えないけど、嘘は言いたくないんだ」

「そっか、そうだね」

思った以上に、塔矢くんに対して誠実だったので、少し驚いた。でも、ヒカルは昔から素直だし、考えたからおかしくない。

言えないから黙るとするのは、それが正しいのかどうか分からないけど、口先だけで誤魔化すよりよっぽど良い。

でもね、洗いざらい伝えちゃうっていうのも、手段としてはあると思うよ。

「いつか、言うかもな」

今はそれ以上、ヒカルを説得する意味もない。塔矢くんとの関係は、ヒカルが決めることだ。

そして、塔矢先生のお見舞い。果物は定番だけど、足が早いから避けておきたい。無難にそれなりに日持ちのする洋菓子を選んだ。

ヒカルはお見舞いの品を考えてなかったみたいだったけど、それだけ塔矢先生の様子が心配だったんだろう。

病院で場所を聞いて、病室に入る。すると、中には緒方先生と市河さん、広瀬さんも来ていた。

「あら、藤崎さんと進藤くん。こんにちは」

「こんにちは」

市河さんが挨拶をしてきて、私たちも返す。

「じゃあ、我々はおいとましますか」

私たちはまだ子どもなのに、次のお客様が来たら席を空ける、という大人な対応をしてくれる。

話の腰を折ったら申し訳ないな、と思っていると、ヒカルが慌てた様子で手を振った。

「いや、俺たちはちよつと塔矢先生がお元気かなって思っただけで……」

「進藤が見舞いとは意外だが、藤崎も一緒ならまあ分かるか」

「ちよつと緒方さん、そんな言い方しなくても」

くくく、と小さく笑う緒方先生。病室の空気も、少し軽くなる。お見舞いが置かれているのを見て、私も持ってきた品物を市河さんに渡す。

「わざわざ済まないね。おかげさまで、今はもうなんともないよ」

「そうですか、それは何よりです」

「まあ、医者はあと10日ほど入院しろって言ってきたがね」

それは本当に大丈夫なのかな。塔矢先生も囲碁が絡むと無茶をしそうだし、本当に心配だね。

そして病室にいてもネット碁を打つから楽しんでるだの、来週の第4局は問題なく行けるだの。

そういった話を少ししてから、話題は私たちのことに移る。

「君たち付き合ってるんだらう？ いいね、若いねえ」

「広瀬さん、そういうのは……」

市河さんがたしなめるも、緒方先生も話に乗った。

「幼馴染みらしいし、いいんじゃないですか。まあ、知り合って1、2年で良い雰囲気になってる子もいます」

話に乗ったというか、なんとというか。

さつき軽くなった病室の空気が、一気に重くなる。負の発生源は市河さん。知らないよ、もう。

「緒方さん。馬鹿言ってるんで、そろそろ出ましようか。私、塔矢先生のご自宅に、お見舞いの品を持って行きましようか」

「アキラくんは今日は外出していたと思うが？」

「緒方さん」

あ、駄目だ。完全に市河さんをからかう方向へ行ってる。塔矢先生は苦笑いしながら、緒方先生をたしなめる。

「緒方くん、ほどほどにな」

「はい」

さすがに塔矢先生に言われては黙るしかない。荷物持ちを申し出て市河さんの機嫌を取りつつ、部屋を出て行った。

「さて、騒がしくて済まなかったね。座りなさい」

いえいえ、塔矢先生が騒がしかったわけじゃありませんから。

「進藤くん、アキラとの対局が駄目になってしまつて悪かつたね。アキラも、平静に打つ自信がなかったのだろう」

「倒れられたの、当日でしたから。まともに打てないのは当然ですよ」
「今はそれでいいが、もつと成熟しないと今後は困るだろうがね」

「厳しいようだけど、ある面では正しい。」

私も森下先生に聞いただけの話だけど、周りに影響されて打てなくなるようでは、タイトルを獲るのは到底無理だそうだ。

私自身は、そこまで精神状態に左右されるような場面は少ないけど、プロ試験中でもヒカルが気になって私自身が危なくなつたこともある。

お父さんやお母さんが倒れたら、碁を打ちに行くなつてできなそう。もちろん、ヒカルが倒れた場合でも。

「ところで、今はネット碁を打つ余裕はあるんですか?」

「うむ。ある意味で時間に余裕はあるからね」

ヒカルに目配せすると、ヒカルが頷いて塔矢先生に向き直る。

「塔矢先生、またs a iと打つてくれますか?」

「……彼は、きみの知り合いかね?」

「はい。前にあかりを経由して打ってもらいましたが、あかりはs a iと話したこともありませぬ。俺の知り合いで、他の人と話せないから」

「ふむ。何やら事情がありそうだね」

ここからは、誰かに聞かれると大変。2人にひと言断つてから部屋の外に出て、お見舞い客が来てもすぐに分かるように待機する。

少し開けた扉を挟んで、声が聞こえる。佐為の詳細については触れず、ネット碁しかできない、本人はたくさんの人と打ちたがっている、と。

それを聞いて思うところがあつたのか、塔矢先生も考え込む。

「来週は木曜に十段戦があるが、その週末は空いている。1日おいた土曜にお願いしたい」

「はい、ありがとうございます。あの、連続で打つて、体調は大丈夫ですか?」

「ははは、それほど悪いわけじゃないし、心配ないよ。それよりも、s a i に伝えてくれないか」

何をだろう。会話に口は挟めないけど、凄く気になる。

「あれほどの碁は、私の棋士人生でも特別な1局だった。s a i には少し届かなかったが、あれからも私は成長しているはずだ。胸を借りるつもりで挑ませてもらう、とね」

「……s a i も、あれだけの碁は久方ぶりだって。それと、次の対局も、望むところだって。……きつと、そう言いますよ」

時間も決めて、塔矢先生の病室を出る。

「良かったね、問題なく対局できそうで」

「ああ。あかり、色々とありがとな。あ、そういや今の十段戦って、緒方さんと塔矢先生なんだろう？ 緒方さんとも、打たせてやりてえよな」

そうだね。緒方さんとも塔矢くんとも、和谷くんとも打たせてあげたい。それは佐為だけじゃなくて、相手にとっても凄く有意義な時間になるはずだから。

まずは、塔矢先生との再戦。見応えは十分、楽しみな一局になるのは間違いない。

第43手 プロ1年目 その3

週が明けて、水曜日。今週は私と明日美さんのデビュー戦。学校が終わったらヒカルも来てくれるし、これからのプロ生活で不安を抱かないためにも、絶対に勝ちたい。

棋院の近くで明日美さんと合流して、棋院へと向かう。

「明日美さんの相手の真柴さんって、まだ初段なんだよね？」

「うん。真柴は昇段できてないみたいね。何かと周りに言い訳を作る奴だから、負けた碁を研究なんてしないんだろうね」

ふーん。せっかくプロになったんだから、ただ打っただけじゃもったいないのよね。

院生でもプロ並みの人はいるけど、プロだと間違いなく強い人ばかり。たまにしか強い人と打てない院生研修に比べて、研鑽を積むにはもってこいの場だ。

「山田さんは、どうだろう、強い人かなあ」

「どうかな。やってみないと分からないけど、普段通り打てたらきつと大丈夫よ」

「でも、緊張して失敗するかもしれないし、お互い気を付けないとね」
そんな話をしているうちに、棋院に到着する。

手合いがある大部屋に行くと、真柴さんはまだ来ていなかった。私の相手はいるかな？

「おはよー、2人とも早いね」

「芦原さん。おはようございます。あれ、今日是对局日でしたっけ？」
「うわ、2人が初対局だから気を利かせて早く来たのに、酷いな。……って、そっか。先週の研究会で言うつもりだったけど、研究会がなくて言えなかったんだ。あはは、忘れてたよ」

相変わらず軽い。

そんな話をしていると、新顔が珍しいのか、芦原さん経由で色々な人に挨拶してもらった。何人かは院生出身のようで、明日美さんとは顔見知りみたい。

「はあ、なんだかね。あかりちゃん、しつこいのがいたら、ちゃんと進

藤に相談しなさいよ？」

「え、しつこいって？」

「彼氏持ちって聞いたら、普通は諦めるでしょ」

いやいや。さすがに中学生相手にアプローチしてくるような人はいないでしょう。明日美さんが目的で、仲が良さそうな私を足がかりにするならともかく。

そう言うと、明日美さんは苦笑している。でも本当に、3年後ならまだしも、今はまだまだ大人とは言えない。

あ、そろそろ始まりそう。指定された席について、山田さんと向かい合う。

「今日が初めてなんだろう？　ちやほやされてたけど、囲碁は別だからな」

「はじめまして、よろしくお願いします。おっしゃる通り、今後は囲碁の実力で声をかけてもらえるよう、精進します」

もしかしたら嫌みかもしれないけど、言ってることは正しい。囲碁に真面目な人なのかな。そうだと良いな。

それ以上は特に会話もなく、時間になって対局が始まる。

打ち始めは緊張したせいで足が遅くて後手に回ったけど、相手の追及が薄い。緩手が多いせいで、序盤の不利をあつさり挽回できた。

昼を挟んで午後になり、さほど時間をおかずに盤面の地目差を付けられて、ヨセに入る前に相手が投了した。良かった、しつかり勝ちだった。

周りを見ると、終わってない方が多くて、明日美さんのところも対局中だった。見に行くと、明日美さんが顔を上げて、口元に笑みを浮かべる。

ちらりと盤面を見ると明日美さんが有利だったけど、勝った気になつてちや駄目だよ。勝負は最後まで分からないんだから。

明日美さんも分かっているのか、盤面に目を戻した時には真剣な顔になつていて、気持ち良く碁盤に打音を鳴らしていた。

「やった、お互いに初勝利！　ふふふ、今日はお姉さんが奢ってあげる

よ」

「え、ほんとに？ あ、でも明日美さん、この後予定あるんじゃないの？」

塔矢くんと待ち合わせとか、結果報告とか。

と言ってから気付いた。今日は関東にいなかったはず。

「あはは、あれば良かったんだけどね。塔矢くん、今日は名古屋じゃなかったかな。進藤は来るの？」

あ、やつぱり。早くも高段者との対局が始まっているのは、凄く羨ましい。

「うん、学校帰りに寄ってくれるはずだけど」

「お邪魔なら後日にするけど、どうする？」

「明日美さんが良いなら、私は歓迎。ヒカルはどうか分からないけど、大丈夫でしょ」

ヒカル、両手に花状態だね。もし明日美さんに色目を使うようなら、絶対に許さないけど。

話しながら1階に下りると、ヒカルが既に来ていた。

「ヒカル、お待たせ」

「終わったか。あかり、奈瀬も、結果どうだった？」

ヒカルの言葉に、奈瀬さんがえへんと胸を張る。

「勝ったよ」

「お祝いに、明日美さんが奢ってくれるって！」

「え、まじで？ やった」

「進藤に奢るとは言っていない」

「差別じゃねーか」

「勝ったお祝いだもん。不戦勝じゃ別に褒められないし」

「打ってても勝ったさ」

勝ったら、余計に明日美さんは奢ってくれないと思うよ。

そう思い、くすくすと笑っているながら移動する。

私は明日美さんの言葉に甘えて、ケーキセットを奢ってもらい、ヒカルは自腹で、パスタを注文している。麺類が好きだね。

注文待ちになり、明日美さんが口を開く。

「打ってみた手応え、どうだった？」

「うーん。こんな言い方すると悪いけど、ちよつと物足りなかったかな。調べたら、去年の若獅子戦で越智くんに負けてる人だったの。その頃から、それほど成長していかないのかもね」

「あかりちゃんは、塔矢くんほどじゃないけど普通じゃないから。それはそうと、真柴の奴、マグレで受かったんじゃないかって言ってるのよ。あー、腹立つわ」

真柴さん、そんなこと言ったんだ。嫌味にしても酷いね。

「もうずっと冷静に打とう、怒って碁が単調になったら思うつぼだつて自分に言い聞かせながら打ったよ」

「うん、熱くなったら勝てる勝負も勝てなくなるよね」

「まったくもう。マグレなのは真柴の方だつてのに」

大した腕じゃないくせにして、明日美さんも結構言いたい放題に言ってる。っていうか、全然冷静になれてないんじゃないかな。

私たちがそんな話していると、ヒカルがため息を吐く。

「いいよな、対局できて。ああ、俺も早く打ちてえな」

「次の予定って決まってた？」

「再来週。なんて名前だったかな、三段の人」

「進藤も負けないようにね」

もちろん、と返しつつ、どこか上の空。週末に佐為と塔矢先生の対局があるし、そっちを気にしているのかな。

「なあ、あかり。俺が出られる棋戦って、近いやつで何があるんだ？」

「7月頃から始まる本因坊戦かな。あと、名人戦も8月か9月頃から始まるよ」

「3ヶ月後か、長いなあ」

「私たちは一足先に、6月から女流棋聖戦が始まるけどね」

明日美さんが凄く良い笑顔で自慢する。嬉しそうだけど、からかうのはほどほどにしておいてね。

「なんだそれ、ずるいぞ」

「ふふん。って、自慢することじゃないんだけどね」

はあ、とため息まじりの明日美さん。それはそうだけど、女流棋戦

があるのはありがたいと思う。

「女流も大事な大会だよ。今の女流トップの人、3次予選まで残ったことある人もいるんだし、当たれるかどうか分からないけど、戦える機会があるのは嬉しいよ」

「あはは。トップと当たる時のことを考えるのは、あかりちゃんらしいね」

囲碁には男女の差がない。実力の差で勝てないだけで、七大タイトルすべて、男女混合戦なんだ。

これは、体力勝負のスポーツと比べても、非常にやりやすいと思ってる。性別の壁ではなく、個人の資質がものを言う世界。

勝てばそれで良いなんていうつもりはないけど、やっぱり勝負事の世界だし、勝ち進めるなら勝ちたい。

「今年すぐ当たれるとは限らないけど、勝てば高段者とも当たれるもんな。俺もお前も」

うん。高段者はもちろん、ヒカルや塔矢くん、明日美さんとも打ちたいね。

そして佐為も、今は無理でも、場を整えてそのうち棋戦に出られるようになってほしいな。

根回しが必要だと思うけど、s a iのネット人気を考えたら、上手くいけば参加できるネット棋戦も開かれる気がする。

みんな得意気込みを確認しつつ、その日はお開きとなった。

週末。佐為と塔矢先生の再戦日。

今日はお姉ちゃんはお出かけてるけど、両親が家にいる。昨日のうちから、大事な対局だからって言うておいたから、邪魔にはならないと思う。でも、約束の時間、10時13分頃になっても塔矢先生がログインしてこない。

「まだいないな」

「うん。もしかしたら、誰かお見舞いに来ているかもしれないね」

誰か来ていたら、打ち始めるなんてできない。既に打っているなら、途中で止めるのは相手にも失礼だしって続けられるけど。

そうして待っていると、すぐ塔矢先生がログインしてきた。

ログインが分かるように取っただけのアカウントをログアウトして、s a i のアカウントに変わった。

「わざわざログインをチェックするために別名にするとか、きつちりした時間じゃなくて中途半端な時間にするとか、面倒なことするよな」

「私やヒカルのアカウントがあると、知り合いにばれるでしょ。そして引っ込んだと同時に s a i がログインしたら、塔矢くんや和谷くん、一柳先生に気付かれたらすぐばれるよ。時間も、きつちりした時間ばかりじゃ塔矢先生が追及されちゃうし」

そして、ほぼ予定通りの時間に対局が始まる。前回同様、持ち時間は3時間。

序盤は穏やかに進むかと思いきや、塔矢先生が急戦を仕掛けてきた。塔矢先生がこんな早いタイミングで仕掛けるのなんて、初めて見る。

佐為があつさりといなしで、攻撃に転じる。塔矢先生は守りもそこそこに、別の場所を攻め立てる。凄い、低段者がやると全然守れずに一瞬で負けるような展開だけど、攻め気に逸つてるようで、ギリギリのところまで守りにもにらみを利かせた手を打っている。

佐為も楽しそうに応手を模索している。いや、楽しそうって言うても顔や声は分からないんだけど。ヒカルの顔と佐為の打ち筋で、凄く楽しんでいるのが伝わってくる。

「これ、前回と違って地の勝負にはならないよな」

「うん。どっちかが生きてどっちかが死ぬ、そういう囲碁だね」

そして、結果としては佐為が勝った。最近の棋戦で、少し挑戦的な碁が増えていたけど、ここまで変わった碁ではない。塔矢先生にとっても、佐為の影響は大きかったんだろう。

「佐為が、すげー勉強になったってよ。今までも最高峰の打ち手と、勝ち負けだけじゃない碁でこれほど楽しめるとは、ってさ」

「うん、佐為も塔矢先生も楽しそうだったよね。2人とも綱渡りなのに、レベルが高いからこそ成立するっていうか」

「そうだな。ここの一手法とか凄い手だよな」

「右辺を攻めながら上辺や中央を守る一手だよな。こういう手をほぼノータイムで打てるのは練習量だけじゃないよね」

佐為の見極めは、囲碁センスなんて言葉じゃ言い表せない。

「佐為も、ここが決め手だったつてよ。……この対局で1番分かれ目になった部分が見極められるのは十分に実力があるからこそだったよ」

でも、打たれてから分かるのでは遅い。打っている途中に、その一手を打てないような展開にできたら、勝ち目があるかもしれない。

……佐為を相手に勝ち目？ 私つてば、かなり大それたこと考えちゃつてた。うう、佐為はもちろん、ヒカルにも黙つておこう。

場所をヒカルの家に移して、検討と対局に没頭する。

打った碁の検討を終えて、休憩でひと息ついている時に、ヒカルが質問を投げてきた。

「そういや、お前は次の対局つてどうなつてんだ？」

「5月まで対局はなさそう。でも来週は指導碁の依頼を受けてるのと、4月末あたりに、泊まりがけで囲碁のイベントに行く予定なの」「へえ。指導碁か。俺には来てないな。どこでやるんだ？」

「ヒカルにも、きつとすぐに来るよ。場所は都内だよ。でも、指導碁の依頼が来るより、きつとタイトルの期待をしてもらう方が嬉しいよね」

塔矢くんにも、かなりの頻度で来ているらしい。多忙を理由にあまり受けてないみたいだけど。イベントの参加はあまり断っていないみたいだし、単に好みかもね。

そもそも、塔矢くんは指導碁をするよりもタイトルに向かって勝つていく姿を見せる方が、お客様も喜ぶ。ヒカルもすぐにそうなるだろうし、できるものなら私もそうなりたい。

「タイトルかあ。塔矢のオヤジとも、いつか公式戦で対局できるのかな」

「きつとできるよ」

「そういえば、塔矢のオヤジのところ、また行くんだろ？」

「あ、そうだね。明日、行ってみる？」

明日の午前中に、顔を出すと決めて、そういえば気になっていたことを伝える。

「そろそろ『塔矢のオヤジ』は止めた方がいいよ。これからプロになるんだし、ちゃんと塔矢先生もしくは塔矢名人って言う方がいいよ」

素人のうちは、友達のお父さんってことで塔矢のオヤジでも構わないかもしれない。でも、プロになった以上、塔矢先生は大先輩にあたるんだから、きちんとした呼び方をしないとイケない。

「ああ、そっか。じゃあ塔矢名人かな。塔矢先生っていうのは変な感じだし、塔矢名人なら分かりやすいじゃん」

「うん、それでいいと思う」

棋院で塔矢のオヤジなんて口に出して、礼儀を気にする人に聞かれたら、きつと怒られるもんね。

塔矢先生のお見舞いに行く時間を決めて、あらためて打とうとしていると、ヒカルが思い出したと口を開く。

「そういや、俺がたまに行ってる碁会所にさ、今度一緒に行かねえか？」

「ヒカルがよく行くところって、前に5人で行ったところだよな」

「そうそう。子どもが珍しいってのもあるかもしれないけど、結構みんな優しくしてくれるんだぜ」

ヒカルがよく行くところなら、行こうかな。お礼を言うのはヒカルが怒るだろうし、指導碁を少し打つくらいがいいかもしれない。

「いいよ。いつ行くの？」

「来週、指導碁があるって言ってただろ、その週の水曜は空いてないか？」

普段から持ち歩く手帳で確認すると、問題なく空いている。ヒカルの対局はその翌週だし、問題ないよね。

「うん、分かった。事前に言っておくの？」

「いや、別に」

いいのかなあ。まあ、遊びに行くだけだし、事前に言うっていうほ

どじゃないかな。

そんな話をしているうちに、夜が更けていった。

日曜になり、朝から病院へと向かう。

検査等もなく、受付で確認した上で、塔矢先生の病室へと向かう。

「おはようございます」

「ああ、おはよう。2人とも、よく来てくれたね」

中に入ると、すでに来ていた明子さんが出迎えてくれた。

「あら、あかりさんに……進藤さんだったかしら」

「はい」

明子さんとヒカルは、ここで1回会ったのみだから、面識はないに等しい。それでも名前を覚えているのは、塔矢くんが時々名前を出すからかな。

「すまないが、席を外してくれるか」

「はいはい」

苦笑しながら席を立った明子さんに、ヒカルと一緒に頭を下げる。空いた席に座るよう促されて、ヒカルと並んで腰を下ろした。

「前日もそうだったが、今回もまた、充実した良い碁だった。負けたのは悔しいがね」

「佐為も、紙一重だったって。もっとたくさん打てたらいいのにね」

「……うむ、そうだな」

塔矢先生が、何やら考え込む。ちらりと顔を向けてきたので、席を立って入り口で見張り番になる。

扉はほんの少しだけ開けているので、声は聞こえる。

「saiは、プロにはなれないんだな？」

「はい。プロにはなれません。あいつ、ネット碁しかできないから」

塔矢先生とヒカルの会話。見えないけど、ヒカルの言葉に、塔矢先生が頷いているのが分かる。

「……プロでもない、誰とも知れぬ人物とあれだけの碁が打てるなら、引退しても良いかもしれない」

「い、引退!?!」

部屋の外で聞いているだけのつもりなのに、つい叫んじやった。でも、引退ってちよつと待って。

中でヒカルも同じように叫んでいて、塔矢先生が、ほんの少し声を大きくしながら、話し出す。多分、私にも聞こえやすくなるように配慮してくれたんだと思う。

「うむ。タイトル戦となれば、どうしても1日かけて移動、取材などにわずらわされることも少なからずあるからね」

「でも、そんなの困る！ 佐為と打たせた俺のせいになっちゃうじゃん」

「そんなことは関係ないさ。私が勝手に辞めようと思っただけだ」

でも、塔矢先生が引退なんて絶対に嫌だ。ヒカルや塔矢くんと一緒に成長するのも楽しいけど、いつかタイトルホルダーの塔矢先生に挑みたい。

「佐為だって、そんなの気に病んじやうし」

「でも、私が辞めると、saiと打てる機会は増える」

何かと説得しているけれど、塔矢先生にはあまり響いていない。どうしたものか。

話が少し途切れて、沈黙が続く。

「ヒカル、交代」

「お、おう」

ヒカルが説得できないみたいだったので、私が変わる。佐為が説得の言葉を考えていたようには見えない。佐為も塔矢先生と打てる方が嬉しいだろうし、説得する気はなかったんじゃないかな。

「佐為、今回だけは私のやりたいようにやらせてもらうね。ごめん」
すれ違いざま、ぼそりと小さくつぶやく。塔矢先生には聞こえないくらいの声量で。

ヒカルが振り向き、大きく頷いてくれた。うん、百人力だね。

「塔矢先生、代わり代わりで異論を口にしてごめんなさい。あの、もし体調が悪くなるようなら、すぐに切り上げますので」

「はは、大丈夫だよ。でも、すまないが、藤崎さんの意向には沿えないよ」

ヒカルが座っていたところに腰を下ろして、塔矢先生と向かい合う。

引退はするつもりだったことだね。うーん、どう攻めようか。

「じゃあ、せめて休養ってかたちにして、例えば名人戦だけに絞るとか、そういうのも駄目なんですか？」

「そんな勝手はできんだらう」

辞める方が勝手じゃないかな。……勝手、か。

「塔矢先生、わがままを言っても良いですか？」

「うん？ 辞めるなというのは、わがままに含まれないのかな？」

「ええ、それだけだと、単なる願望ですの」

なるべく強気に、塔矢先生を挑発するように笑みを浮かべる。

「私、師匠は森下先生です」

「うむ、それはもちろん分かってる。棋風に森下さんの影響もあるね。年齢に見合わない力強さ、特に中盤の粘りはいかにも彼らしい」

それで？ と続きをうながす塔矢先生に、言葉を返す。

「でも、塔矢先生も師匠だと思ってます」

「そうか」

「私を含めて、塔矢先生に対局した弟子は、緒方さんだけです。挑むところまで行けてない。実力が足りないのは事実ですけど、いくらなんでも早すぎます」

塔矢くんがプロになって1年。私や明日美さんは、プロになったところ。棋戦の都合上、どうやっても挑めるところまで駒を進められない。

対局をするだけじゃない、今は全然勝負にならないけれど、いつか、塔矢先生にも勝ちたい……！

「10年とは言いません。せめて5年は、1つだけでもタイトルホルダーとして待ってもらえませんか」

私の言葉に、塔矢先生は黙って腕を組み、黙り込んだ。

しばらく待つと、ゆっくりと目を開けた。

「私の師匠との対局を思い出したよ。そうか、そう言われると弱いな」「じゃあ」

「考えておこう」

もし、引退するとしても、私から言えることはこれ以上ない。

雑談に切り替わって少しした頃、外でヒカルの声が聞こえてきた。あつ、ヒカルを忘れてた。

「ヒカル、どうしたの」

「藤崎か」

「緒方さん。おはようございます」

「ああ、おはよう。それで、進藤を見張りに置いて、何を話していたんだ？」

「見張りってそんな。それより中に入らないんですか。ほら、ヒカルも」

緒方さんは何やら言いたそうだったけど、押し切る。

「緒方くん、おはよう」

「おはようございます。それで、何の話を？」

塔矢先生の前でも、緒方さんは追及を緩めない。困ったな、どうしたものかな。

「いやなに。私の病気を心配してくれてね。藤崎さんが上がってくるまでタイトルホルダーでいてもらいたいと話をいただいたところだよ。ちようど、十段戦の最中だからね」

うわあ、これはまた、緒方さんを挑発するようなことを。って、今のは……。

塔矢先生を窺うと、小さく、でも確実に頷いてくれた。

「ヒカル、私たちはそろそろ……」

ヒカルに話しかけつつ、声が震えないように注意しないと。

ああ、とヒカルが頷いて、揃って塔矢先生の病室を出た。

「あかり、大丈夫か？」

「うん、ちよつと安心したというか、気が抜けたというか」

あ、駄目。

足に力が入らず、ヒカルの腕にしがみつく。ヒカルは驚いた顔になっっているけど、ごめん、ちよつとだけ待ってね。

「進藤。藤崎さんも。どうしたの？」

え、と顔を上げたら、ちょうどエレベーターで塔矢くんと明日美さんが出てきた。うわ、本当にちよつと待って。

「あの、ちよつと立ちくらみで」

「立ちくらみ？ 大丈夫？」

塔矢くんは素直に心配してくれるのに、横でにやにやと笑っているのはどういうことかな。

「明日美さん、言いたいことあるなら言ってくれていいよ」

「いや、別に？ 立ちくらみなら、両手でしつかりと進藤の腕にしがみついても、しょうがないよね？」

言われて、抱え込むようにヒカルを掴んでいるのに気付く。ああ、それどころじゃなかったから……。

少し恥ずかしくなって、片手で掴む程度に離れる。

「父さんの病室、今は誰かいるの？」

「緒方さんが来てて。入れ違いで入ったところだから、少し時間を潰してからの方がいいかも」

それじゃあ、と4人で病院を出て、しばらく喫茶店で時間を潰した。

話題に出たのは、やっぱりというべきか、昨日の塔矢先生と佐為の碁。

「ちよつと父さんに話を聞きたくて。奈瀬さんも気にしていたから、一緒に行こうかって」

「ふーん。見ててお前はどう思ったんだ？」

「父さんも普段と全然違ったけど、応じるsaiの碁もまた、普段と違った。随分と挑戦的な手が多くて、まるで父さんと一緒に研究でもしているかのようだったよ」

鋭いというか、洞察力が高すぎる。ちよつと、佐為も似たようなことを言っていた。

「なるほどね。ま、塔矢名人も辞めずに続けてくれるみたいだし、俺だっていつか……」

「辞める？ 続ける？ 何の話だ？」

あ、ヒカルのお馬鹿。

当然のように塔矢くんの追求が始まり、ヒカルがしどろもどろにな

る。

「少しだけ説明をして、あとは塔矢先生から直接話を聞いてもらうように納得させる。」

「まあ、納得はできないが、父さんから直接聞いた方が良いのは確かかなようだね。明日美さん、そろそろ行こう。進藤、藤崎さん、また来週、研究会で」

「うん。あかりちゃん、進藤も。また来週ね」

「なんとか逃げ切った。でも、最後に明日美さん、悪い顔で笑ってたよ。ふとした時に明日美さんって呼んでもらえるっていうのが分かったからだろうけど。」

「ふう、塔矢の奴、面倒だよなあ」

「今のは全面的にヒカルが悪いよ。まったくもー」

「私が文句を言うと、ヒカルががつくりと首を落とす。」

「あーもー、佐為もあかりも、同じように説教しやがって。でも、ちよつと疲れたな。気分転換にどっか行くか?」

「え、うん」

「デートかな。デートだよな。どうしよう、どこが良いかな。」

「いつも行ってる道玄坂の碁会所とか……」

「あ、これは黙っていると駄目なパターンだね。」

「たまには、デートしようよ。映画か何か」

「映画あ? やだよ、じつとしてるの」

「じゃあ、ボウリングとか?」

「うーん、それなら良いけど。……ボウリングの説明、佐為にしてやってくれよ、うるさくてしよーがねえよ」

「ああ、佐為が来てから囲碁三昧だから、ボウリングに行ってなかったよね。というか、私も今世では初めてかもしれない。」

「ボウリングっていうのはね……」

「ヒカルと手を繋いで、佐為に説明しながら駅へと向かった。」

第44手 プロ1年目 その4

病院で引退の話をした日の夜、電話で明日美さんと情報交換を行った。

「びっくりしたよ、塔矢先生が辞めるとか言うから」

「うん、ごめん。塔矢先生はなんて言ってたの？」

「塔矢先生、saiとの碁が凄く充実していたとかで、棋戦にこだわる必要はないって。最善の一手を今まで以上に追究したいっておっしゃっておられたわ」

塔矢先生は凄く忙しい立場だから、面倒なことも多いのは確か。引き止めた私が言うことじゃないけど、もつと研究に時間を費やしたいのは当然だと思う。

「それでね、全部辞めて気楽になれたら、っていう気持ちが出ちゃったみたい。それを進藤が勘違いしたって聞いたわ。でも、十段戦はきちんと打つけど、その後はちよつと考えていることがあるんだって。家族のお話になってくるから、それ以上は私が聞くことじゃないし、先に帰ったの」

なるほど。引退したら、収入や今後の生活にも影響してくるものね。

「色々フォローしてくれてありがとう」

気にしなくていいよ、という明日美さんの電話を置いて、大きく伸びをした。

まさか、塔矢先生が辞めると言い出すとは思わなかった。前世では、ヒカルがタイトル戦で打っていた頃には塔矢先生はタイトルホルダーじゃなかったけど、いつ頃引退したんだろう？

覚えていないから、考えてもしょうがない。軽く首を振って意識を切り替えて、気分転換に詰め碁でもやろう。

「あかり、電話終わった？　じゃあお風呂入っちゃいなさい」

「はい」

詰め碁をやり始めると、時間を忘れて没頭する。お母さんに怒られないうちに、先にお風呂入っちゃわないと。

月曜、午後からの約束だったので、午前中だけ授業に出て、昼から指導碁に向かう。

白川先生が開いている囲碁教室のように、定期的に囲碁の交流会を行っているみたいで、私以外にもう1人、年配のプロの方が呼ばれていた。

責任者に挨拶して、来ている人に紹介される。

「本日、指導碁をやらせていただく藤崎あかりです。今日は1日、よろしくお願いします」

棋院主催のイベントではなく個人主催のイベントだけど、平日のわりに20人近く集まっていて、かなり盛況だ。

ほとんどが定年退職しているだろう年代。主催者はそれより少し若いかもしれないけれど、それでも50より上だろう。女性は少なく、2、3人いる程度。

もう1人のプロは何度も顔を出しているようで、来ている人の大まかな棋力を教えてくれるという。

本来なら私ではなく、そちらも普段から顔を出す人がいたらしいけど、用事が入って来られず、棋院に相談したそうだ。

事前に何人同時にいけるか聞かれて4人までと伝えていたので、私のために用意された席には、碁盤が4つ置かれている。

「さっそくですが、お願いできますか?」

「はい、分かりました」

席に座り、碁盤を挟んで座り、棋力を聞きつつ、置き石を置く。

「いやあ、こんな可愛いお嬢ちゃんが来るとは思わなかったな」

「ちよつと頼りないかもしれないけど、せいっぱい頑張りますね」

和気藹々と楽しむ人ばかりで、ちよつとした会話をしながら指導碁を打つ。

大手合いで一局打って勝ったのを褒めてもらったり。打ち筋について説明しては感心されたり。

もう1人のプロは実力ではトップには遠く及ばないと自ら認めていたけれど、物腰は柔らかくて親切な方だった。ほとんど全員と指導

碁を打ち、夕方のお開きの時間になったので、片付け始める。

「これから晩ご飯でも食べに行こうかって話なんだけど、藤崎さんは……誘わない方が良いよね？」

「あー、そうですね。家でお母さんが用意してくれてるので」

成人していたら、せめて高校を卒業するくらいの年代なら、一緒に行っても良いかもしれないけれど、中学生で夜遅くまで出歩いているたら、親もだけど警察の補導対象になっちゃおう。

「まだ中学生だもんねえ、いやはや、しっかりしてうちの孫とは大違いだ」

「お孫さん、何歳くらいなんですか？」

「今年から中学1年でね。女の子なのに柔道やるって言ってて、心配なんだよ」

「へえ、凄いですね。やりたいことを決めていて、十分にしっかりしてるじゃないですか」

柔道とか怖くて、私はできないよ。むしろその子の方が凄いかもしれない。

私の言葉に、その人は照れたように笑う。口ではそんなこと言いながら、孫が可愛くてしょうがないって感じがする。

話しながら外に出ると、横から声がかかった。

「あかり」

びっくりして見ると、そこにはヒカルが立っていた。

「ヒカル！ どうしたの、こんなところで」

「たまたま近くを通りかかったから。そういえば今日指導碁だっけ話してたからさ」

やだ、嬉しい。周りの人が首を傾げたので、慌てて紹介する。

「あ、私と同期にプロになった進藤初段です。家も近くなので、彼と一緒に帰りますね」

「え、ああ。そうだね、その方が安心、かな。じゃあ、今日は一日お疲れ様」

「ありがとうございます、お疲れ様でした」

ペこりと頭を下げて、ヒカルと並んで一緒に外に出た人たちが帰る

のを見送る。

「びつくりしたよ、急に声をかけてくるんだもん」

「まあな、別にわざわざ来なくてもいいと思ったんだけど、佐為がうるさくてよ」

言った途端、耳に手をやる。佐為が何やら騒いでいるらしい。

仲が良いのはいいけど、往来で騒ぐことじゃないよね。

「まあ、そういうことにしておく。ヒカル、ありがとね」

優しい人ばかりとはいえ、緊張していたのは間違いない。ヒカルの手を取っても振りほどかずに握り返してくれたので、そのまま歩き出す。

「む、そろそろ背が抜かれそう」

「へっへっへ。俺だって伸びてんだぜ。今に三谷より高くなつてやるさ」

「今も似たような高さだよな？」

「ああ。でもちよつとだけ負けてんだよなあ」

「そつか。夏目くんより高くなるとは言わないの？」

「あいつとは差がありすぎるからなあ」

確かに、夏目くんは10センチ以上ヒカルや三谷くんより高い。和谷くんよりも高いし、もしかしたら小宮さんより高いかも。

電車でも続けて話しているうちに、家に着く。1人だと移動時間も長く感じるけど、ヒカルと一緒にならあつという間だね。

その週にあつた十段戦で塔矢先生は緒方さんに敗れ、緒方十段が誕生した。

新聞では、不戦敗がなければどうなったか分からないと書かれていたけど、塔矢先生自身は緒方さんの実力だって言ってるみたい。

さらに十段戦で緒方さんに負けた数日後、名人位のみ残して、残りを返上した。

「引退じゃないけど、お前の言った通り、いくつかタイトル返上するんだな」

「うん。実際、どれだけ負担だったか分からないし、やっぱり引退を止

めるのは無茶だったかな？」

「大丈夫じゃねえの？ 本当に体調が悪くて無理なら、そんなときは辞めるだろうし、自己管理ぐらいするだろ」

ヒカルにそう言ってもらったけど、やっぱり心配。研究会が再開したら、直接塔矢先生から話を聞きたい。

そして4月末、退院してから初めての、塔矢先生の研究会。

みんな集まったところで、塔矢先生が事情を説明してくれた。

「棋戦に縛られて、なかなか研究の時間が取れなかったものでね。緒方くんと十段戦は非常に楽しかったが、その気になればタイトル戦でなくとも、本気の碁が打てるからね」

「まあ、塔矢先生が望むのでしたら、いつでも」

塔矢先生にちらりと目を向けられて、緒方さんが頷く。それを見て満足した様子で、説明を続ける。

棋院で関係者と相談して、現時点でタイトルを持っている棋戦のスポンサーとも話をして納得してもらったらしい。

「今は韓国や中国が力を付けてきている。だから、ずっとというわけではないが、あちらに行つて研鑽を積みみたいと思つているのだよ」

「名人戦の防衛だけなら、3ヶ月ほどで済む、というわけですか」

納得した様子で、緒方さんがため息を吐く。

「じゃあ、もし名人戦で負けたら、もしかしてその時は引退ですか？」

「どうかな、状況によるが。そう簡単には負けんよ」

芦原さんの言葉に、自信を込めて宣言する。そして、病室でかわした話を意識してくれたんだろう。

「そんな心配するより、芦原は早く二次予選を突破しないとな」

「そうだな。今のところ緒方くんだけだが、この研究会の若いメンバーも挑戦者になってくれるのを期待してるよ」

塔矢くん、私、明日美さんを見ながら、塔矢先生が笑う。

顔が向かなかつた芦原さんが首を傾げる。

「あれ、僕は？」

「どうにも詰めが甘いからな。芦原がアキラくんよりも先にリーグ戦

に上がる気がしないな」

「そりゃ、アキラの快進撃は凄いですけど、俺だって頑張ってるんですよ」

「どうだかな。アキラくんはもちろん、藤崎か奈瀬の方がお前より先にリーグ戦にも参加してきそうだな」

緒方さんつてば。でも、芦原さんをからかう目的にしても、明日美さんや私の名前を挙げてくれるのは嬉しい。

塔矢先生も緒方さんも、私たちが女だからと無下にしない。

私も明日美さんも、まだプロになってすぐだし、棋戦も始まってない。一歩ずつ、でも確実に進めるように頑張ろう。

「おかしいな、この中じゃ一番リーグ戦に近いと思うんだけど」

「二次予選を突破できない以上、何を言っても説得力はないぞ」

塔矢くんみたいなのに、1年目が終わった時点で名人戦以外の一次予選をすべて突破している人なんて、そうそういない。芦原さんは2つか3つは一次予選で負けてるし、塔矢くんの方が明らかにリーグ戦に近い。

塔矢先生の研究会が終わって家に帰り、明日から行われる泊まりがけのイベント準備に取りかかる。と言っても、大盤解説や記念対局をするわけじゃなく、指導碁を打つだけ。ヒカルも来週のゴールデンウィークに、指導碁でイベントに参加する。同じイベントなら楽しめたのに、別々になっちゃって残念でしようがない。

でも、そのうち一緒のイベントに参加する機会もあると思うし、今は楽しみに取っておこう。

そしてイベント当日。会場へ向かう前に、ヒカルの顔を見ておこうと思って家に寄る。

「あかり。昨日、じいちゃんの家泥棒が入ってき。じいちゃんの家に行ってくる。佐為が、碁盤がどうなったかって心配しててさ」

「うん、行ってあげて。夜に電話するね」

「おう。あかりも気をつけて行けよ」

「ありがとうございます。行つてきます」

うう、私もヒカルと一緒にいきたい。こんな時に限つてイベントがあるなんて。指導碁を楽しみにしているお客様もいるだろうし、まさかすつぽかすわけにもいかない。

後ろ髪を引かれつつ、イベントへと向かう。

都内から新幹線でおよそ1時間ちよつと、会場の最寄り駅にたどり着く。

「あれ、藤崎さんかい？」

「一柳先生！ おはようございます」

「はい、おはよう。今日は藤崎さんもいるのか。じゃあ、俺の大盤対局、変わつてもらおうかな」

「何をおっしゃるんですか。一柳先生の碁、楽しみにしているお客様ががっかりしますよ」

「代わりに藤崎さんが打つたら、喜ぶお客さんの方が多そうだけどね」
相変わらず、口が達者だ。一柳先生の軽口に、特に今は癒やされる。でもヒカル、大丈夫かな。

「ん、何かあつたのかい？ ちよつと元気なさそうだけどさ」

「えっと、実は昨日……」

かいつまんで事情を説明する。

「へえ、そりや大変だね。まあ、俺にできることはないけど、イベント中に何か困つたことがあつたら、相談してくれよ」

「ありがとうございます」

一柳先生、誰にも気軽な態度なのは良いけど、本当に相談する人がたくさんいたら、手が足りなくなるよね。棋聖の一柳先生に気軽に相談できるような人、たくさんいるわけがないけどね。

一柳先生と一緒に会場へ入り、スタツフの説明を受ける。荷物を部屋に置いてから、オープニングセレモニーに参加する。

指導碁を始める。東京から離れたから、知っている方はまったくいない。

それはいいんだけど、意外と若い男性も多くて驚いた。

「藤崎プロって、今年のプロ試験で全勝だったんですね。凄いな」

「ありがとうございます」

「1年目から、女流タイトル狙ってるの？」

「いえ、そこまでは。1つでも多く勝てるように頑張りますけど」

「同年代は相手にならないって思ってた？」

「いえいえ、まさか」

うーん、なんだろう。素直に褒めてくれる人もいれば、少しとげがある人もいる。まあ、しょうがないのかな。

昼の休憩を挟んで、午後からは大盤を使った棋譜解説の手伝いを行う。

八段の方が解説をして、私は大盤に大きな碁石を貼り付けていく係。たまに話を振られて、頷いたり言葉を返したり。

途中、佐為なら違う手を解説するだろうなって思ったりもしたけど、顔に出さないよう注意しながら問題なく終わった。

「藤崎さん、お疲れ様」

「桜野さん。お疲れ様です」

たまたま同室になった桜野さんが、晩ご飯に誘ってくれた。他にも仲が良い人を集めて、10人くらいで動く。

居酒屋で、成人になっている人がお酒を頼む中、私を含めて3人くらいはジュースやウーロン茶。

「皆さん九星会なんですか？」

「ううん、違う子もいるわよ。そうそう、九星会と言えばね、来月、主宰の成澤先生が中国への親善試合を任されていて、それに慎ちゃんも来るのよ」

慎ちゃん？ 誰だろう。

私が首を傾げると、桜野さんが口に手を当てる。

「ごめんね。伊角慎一郎だから、慎ちゃん」

「ああ、伊角さん。え？ 中国？」

「そうなのよ。九星会も辞めちゃったけど、成澤先生は慎ちゃんに期待している」

へえ。なかなかプロになれない年度が続いてるみたいだけど、伊角さんは十分にプロとしてやっていけるだけの実力がある。

九星会の先輩達も、歯がゆいだろうな。

「去年も、ほんの僅かな差というか、運というか」

「そうなのよねえ。私なんて、慎ちゃん相手に結構負けてるんだから」
あはは。桜野さんは、プロになった後も、碁の勉強をするというよりは生活でできればいいって思ってる節がある。だから、プロになるために切磋琢磨している伊角さんの方が、やる気は高いだろうね。

「今年どうなるか分かりませんが、年齢を考えると、伊角さんも受かりたいですよね」

「うーん、まあ、私もプロになったのは20歳を越えてからだからね。一概に若くて合格すれば良いってもんじゃ……あ、ごめんなさい」
「いえ、そんな」

本当に思っていることを口に出しただけで、私に対する当てつけって感じもない。桜野さんは、良い意味で裏表がない人だと思う。思ったことがすぐに口に出るというか。ふふ、ヒカルと一緒にだね。

「さて、私たちは二次会に行くけど、あかりちゃんはどうする?」

「ごめんなさい、私、家に電話しないと」

「そうよねえ、中学生だもんね」

私以外の未成年の2人と一緒に、ホテルまで歩く。2人は仲が良いみたいで、雑談に花を咲かせている。

私は囲碁絡みの話が上がった時にちよつと話に混ざるくらいで、ずっとヒカルのことを考えて歩く。碁盤、無事だったら良いんだけど。考え出すと、早く連絡したくとうずうずしてきた。急に走り出すわけにもいかないし、気持ちを落ち着けながら歩く。

「お、あれ、一柳棋聖じゃねえか?」

「ほんとだ」

2人の言葉で目を向けると、一柳先生が何人か連れて歩いている。すれ違いざまに、3人でぺこりと頭を下げると、一柳先生が手を上げて応じてくれた。

「よっ。もう食べてきたのかい?」

「はい、九星会の桜野さんに誘っていただいて」

「そりゃ良かった。知り合いがないと辛いからね。あ、その時は俺

に声かけてよ」

「あはは、ありがとうございます」

話しかけてくれるのは嬉しいけど、一緒に歩いている2人がびっくりしている。一柳先生の方には記者らしき人もいて、何やらメモを取っているんだけど、大丈夫かな。

「まあ、機会があれば行こうか。棋聖戦の記録係とか、やる時があればね」

「そうですね、その時には是非」

なるほど、知り合いの子に声をかけた程度に済ませてくれるらしい。記者の人も、少しだけ気が抜けたように、メモを取ろうとしていたのを止めた。

完全に声が聞こえないくらい離れてから、2人が興奮気味に声をかけてきた。

「藤崎さん、一柳棋聖と顔見知りなの？」

「はい、新初段シリーズでお相手をしていただいて、ちよっとお話をする機会があつて」

「へえ。良いなあ。俺、桑原本因坊だったけど、あっさり負けちまつてさ、それでおしまいだよ」

あらら、それは残念だね。明日美さんは勝つて顔と名前を覚えてもらったから、桑原先生にも判断基準があるんだろう。

ホテルに戻り、2人と別れて、早々に電話をかける。

「こんばんは。ヒカルいますか？」

「ええ、ちよっと待ってね」

おばさんが出たので、ヒカルに変わってもらおう。

「おう」

「ヒカル、どうだった？」

「んー、明日、帰ってくるんだよな？ 詳しいことはそれから言うけどや」

ちよっと困ったような感じで、珍しくヒカルが言いよんどんでいる。

「碁盤は盗まれてなかったし、大丈夫なだけどき、最初の時に、血の

染みが見えるって言ってただろ？」

「うん、私には見えなかったけど」

「それが、消えてたんだ」

消えてる？・染みが？

「それで、佐為も不思議がつてさ。どう思う？」

「うーん。何だろう。でも、不思議がつてることとは、佐為も原因は分からないし、影響もなさそうなんだよね？」

それが心配。ずっと残っていた染みが消えるなんて、一大事だと思う。

「……。ああ、佐為は何も問題ないってよ。だから余計に意味がわかんねえんだよな」

そうだろうね。考えても埒が明かなそうだし、ヒカルの言うとおり、明日帰ってから詳しく聞こう。

「明日は、午前中の指導碁と、午後からちよつと手伝いがあるだけで、最後までいなくてもいいから、終わり次第帰るね」

「おう、明日も特に用事はないから、佐為と打って待ってるよ」

時間潰しが佐為との対局なんて、塔矢くんや和谷くんが聞いたら怒るよ。

さて、そうと決まれば、今日は早く寝よう。夜更かしは健康にも悪い。

「じゃあ、明日ね。おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

挨拶を済ませて部屋に戻ってから気付く。お母さんに電話するの、忘れてた……。

第45手 プロ1年目 その5

イベント2日目は、予定していた仕事が終わる次第、今回お世話になった人に挨拶だけして早々に帰宅した。

着替えやらの荷物を持ったままヒカルの家に行くわけにもいかなないので、家に帰る。

「ただいま」

「おかえり、お疲れ様。楽しかった?」

「うん、色々勉強になったし、楽しかったよ。でも、細かい話は後でいい?」

「はいはい、いつてらっしゃい」

昨日、1度寝ようとしたけど、起きて家にも電話をかけたかいたあった。

荷物を置いたらすぐにヒカルの家に行くとお母さんに伝えておいたから、苦笑まじりだけど手を振って見送ってくれる。

「ヒカル、ただいま」

「おう、おかえり。で、どうする、見に行くか?」

「元々何も見えてないし、今じゃなくていいよ。それより、話を聞かせて」

「うん。昨日、じいちゃんの家で、碁盤の様子を見たらさ、前にあった血の染みがなくなってたんだよ」

「ヒカルや佐為は、どう思ってるの?」

「佐為は、俺だけじゃなくて佐為自身にも見えないのが不可解だって。分からないけど、成仏するような感じもしねえって言ってるから、気にしないでいいかもしれないんだけどさ」

碁盤が依り代だったとして、それが、別の何かが変わった、とか?

「佐為って、碁盤に宿っていたんだよね。その時は、碁盤から離れられなかったの?」

「えーと、ああ。少しは離れられたけど、あまり遠くには行けなかったよ。今の俺と同じ感じだな」

「じゃあ、取り憑く相手を碁盤からヒカルに変えて、定着したって感じなのかな」

前に確認したのは、いつ頃だろう。ここ数ヶ月は見に行っていないと思うけど。

「前は、えーと、いつだったかな。院生になる前くらいに、ついでに見た気がするけど」

「なるほど、もう1年以上前だね」

「碁盤に付いていた染みって、秀策の血だったんだよね？」

「佐為が、そうだったよ」

それはそれで、不思議なんだよね。秀策の血なのに、宿っているのは秀策ではなく、佐為。どうしてなんだろう。

「秀策に佐為が取り憑いた時は、涙の跡が染みになって見えるって言ってたらしいぜ」

「ふうん。ヒカルには、それは見えなかった？」

「見えなかったな。佐為も、秀策が死んだ後は、涙の跡は消えていたってよ」

つまり、佐為が流した涙を秀策が見て、秀策に取り憑いて。

涙が消えて、秀策が流した血をヒカルが見て、ヒカルに取り憑いて。血が消えて、次はどうなるんだろう。

「佐為って、秀策に取り憑くまでは、もつと碁が打ちたいって話だったよね。秀策が死んだ後は？」

「……基本的には同じだったよ。ただ、虎次郎とも別れたくなかったって」

「じゃ、今は？」

「えーっと、同じような感じだった。……って、そんなこと言えるか！」

何やらヒカルが佐為に怒鳴った。赤くなってるのは、怒ってるというより照れているのかな。

佐為が、何か都合の良いことを言ってくれたのかもしれない。そうだと良いな。

「秀策が死んだ後に涙の跡が消えたけど佐為は残っているんだから、

血の跡が消えても佐為は残っていておかしくないといえればおかしくないのかな?」

「あー、そうなのか? ややこしい話だな」

「佐為は満足なんてしてないよね?」

私の言葉で、ヒカルが佐為と話をする。

佐為が見えないのは、こういう時にもどかしいね。

「全然満足してないってよ。塔矢名人ともほとんど差がないし、俺とあかりも同じくらい打てるようになるのを待ちたいってよ」

「ふふ、そっか」

ヒカルはともかく、私が佐為と同じくらい打てるとは思えないけど、できる限り高いところまで登りたい。

「じゃあ考えられるのは、碁盤の染みが依り代になっていたのが、ヒカルが依り代になったっていう感じかな?」

「よりしろお?」

なんだそれ? ってヒカル、オカルトにあまり興味はないのかな。佐為に取り憑かれたのに、そういうのを調べてもいないみたいだし。

ヒカルらしいといえば、この上なくヒカルらしい。

「佐為に問題がないなら、何でもいいか」

「……まあ、それでいいなら」

「それより、今日は俺とあかりで打つ日だな。最近ちよつと俺の方が勝率良いからな。へへ、今日も勝つぞ」

「そうだっけ。前は私が勝ったけど」

「今日は俺の方が勝ってるだろ」

ふふふ。ヒカルってば、すっかり覚えてるんだね。今日は不安を抱えて来たけど、終わってみれば安心できたし、良い日だった。

って、浮かれてないでちゃんと打たないと。今日は、序盤から仕掛けてみようかな?

5月は私もヒカルも若獅子戦が始まる以外は対局が少なく、研究会やヒカルの家での勉強が中心になる。

塔矢くんは忙しく動き回っているようで、時々明日美さんから全然

2人で会えないと弱音を聞かされた。はいはい、ごちそうさまです。特筆するようなこととしては、6月から始まる女流棋聖戦の対戦相手が決まったこと。幸い明日美さんではなく、春木良子さんっていう初段の人。

明日美さんの相手は宮島広美さんという、同じく初段の人。女流は70人もいないくらいだから、予選に2回勝てば、本戦トーナメントに参加できる。

ヒカルの家で、女流の大会について説明したら、羨ましがられた。「いいよな、女流でも何でも、俺より早く大会に参加できてさ」

「7月頃から本因坊戦が始まるよ。秋には名人戦も始まるし、小さな大会も色々あるし」

国際棋戦もあるけど、そういうのはほとんどタイトルホルダーや、それに近い立場の人だけ。

若手の大会なら、出るチャンスもあるかもしれないけどね。

「女流棋聖って誰？」

「木ノ内さんって人。言っても分からないでしょ？」

「……まあ」

ヒカルが知ってるはずないよね。なにせ、院生時代に桑原先生を見ても誰？ とか言ってたくらいだし。

「去年は日中女流戦で勝ってたし、女流名人も持ってるし。いくつかの7大タイトルでは、二次予選まで進んでるんだよ」

「へえ。……それで、あかりより強いのか？」

わ、そんな直球で聞かれるとは思わなかった。

「単純な比較って考えると、今の時点で劣っていたとしても、そう大きな差じゃないはず。でも、場数が違うし、今の時点で挑戦者として挑んでも、不利だと思う」

「なるほどね。もし挑めるとしたら、いつ頃？」

「もしそこまで勝てたとして、来年の2月か3月くらいかな」

日程を聞いて、ヒカルが考え込む。どうしたんだろう。

「半年ちよつとか。棋戦って時間かかるんだな」

「それでも早い方だよ。男女混合戦なら、1年以上かかるんだし」

そんな話をしていると、ヒカルが鞆から何か取り出す。

「これ、やるよ」

袋に入っていて、取り出すと扇子だった。

無地で白色、骨の部分は木でできていて、シンプルながらも上品な作り。こういっちゃなんだけど、ヒカルに似合わない。

「ありがと。えっと、なんで？」

「……なんでって。お前、誕生日じゃんか」

誕生日。そういえば、そうだった。

「ああ、うつかりしてた。そっか、今日は5月17日だったね。でも、どうして扇子なの？」

「それだったら、対局の時にも持っていけるじゃん。それと、俺も同じの買ったんだ」

そう言つて、ヒカルも鞆からまったく同じ扇子を出す。ヒカルとおそろい。感激でどうにかなりそう。

「これ、売ってた中で、佐為が持つてるのと一番似てるんだよ。3人でおそろいってのも、面白いだろ？」

佐為ともおそろい。それは、ヒカルが自らの懐に私を入れてくれたというか、表面上だけじゃない繋がりを感ずる。

「ふふ、そっか。ヒカルも私も、佐為と同じ扇子を持ったら、簡単に負けるわけにはいかないね」

きちんと打ち切つて、実力不足ならまだいい。手を抜いたような碁を打つたり、勘違いで無様な碁を打つような真似はしたくない。

今までも気をつけていたけど、より一層、そう思った。

「ヒカル。そのうち、必ず2人でタイトル戦で打とうね」

「ああ」

そのためにも今週末の若獅子戦、しつかり打とう。

大会当日、ヒカルと一緒に棋院へと向かう。

「ヒカル、1回戦から強敵だね」

「ああ、そうだな。まあ、お前の2回戦ほどじゃねえけどな」

「あはは。でも必ず負けると決まってるわけじゃないし、頑張るよ」

「おう、塔矢なんか負かしちまえ」

ヒカルが越智くんと対局で、私は足立さん。足立さんも最近小宮さんに院生順位で抜かれたらしいけど、決して油断はできない相手。棋院に着いて、塔矢くんや明日美さん、和谷くんたちに挨拶していると、対局時間になった。

「よろしくお願いします」

足立さんの先番で対局が始まる。若獅子戦は持ち時間が短いので、それなりに早く打たなきゃいけないので、深く読み合いをするにも、時間がかけられない。

序盤お互いに大人しい碁になった。地目の差が出ないけど、足立さんにも考えがあるんだろう。

中盤に入る頃、足立さんが仕掛けてきた。でも、それほど深く読んで打った感じじゃない。どう打ち回しても、私の石は崩れない。

ここは、2手抜いても問題なさそう。その分、中央の地を取りに行く。

「……ありません」

「ありがとうございます」

結局、仕掛けてきたところ丸々大損してしまい、私の中押し勝ちになった。

油断できない、と思っていたし、油断したわけじゃないけど。途中、少し拍子抜けした。

思った以上に、足立さんとの差ができているみたい。

「そうだ、ヒカル」

結構早めに終わったので、ヒカルの碁を見に行く。

塔矢くんの対局を見ていた明日美さんが私に気付いたようで、近寄ってきた。

「あかりちゃん、どうだった?」

「勝ったよ。明日美さんも?」

「うん、フクには悪いけど、勝ちをもらったよ」

無声音で話しかけてきた明日美さんに、勝ちの報告。

お互いに讚え合って、ヒカルの様子を見る。

越智くんもしつかり打って頑張っているけど、ヒカルの方が良い。左辺に展開したヒカルの石が、上下どちらにも手を伸ばせる形になっっているので、越智くんは守りにくそう。

「他のところ見てくるね」
「うん」

明日美さんが軽く肩に手を置いてから、席を外す。私はヒカルの打っている姿を見たいので、そのまま残る。

越智くんも何度か仕掛けていたけど、ヒカルがきっちりと地を増やしていく。盤面で5目ほどヒカルが有利になったところで越智くんは投了した。

「この右側を守った一手、先にこっちを押さえた方が良かったかな」
「ああ、そっちに打たれた方が困ったな。その場合は俺が頭を押さえに行くから……」

2人で検討し始めたので、私も少し口を挟む。しばらく話した後、越智くんが席を立つ。きつと、いつもの1人反省会。でも最近、その前に感想戦をやるので、終わった直後に1人だけで籠もるより効果があるはず。

「あかりも勝った？」
「うん。だから、次は塔矢くん」

私にとつての、大一番だね。

和谷くんや冴木さんに声をかけて、ヒカルも一緒にお昼ご飯に行く。塔矢くんと明日美さんは、今日は別行動。

小宮さんや本田さん、フクくんも一緒じゃないし、不自然じゃないはず。

「藤崎は、次が大変だな。森下先生にも言われてただろ？」

「塔矢アキラの連覇を阻止しろ！ って。そんな簡単な話じゃないよね」

「俺もよく芦原さんを止めろって言われてるからなあ」

和谷くんや冴木さんに発破をかけられる。ヒカルは何も言わない。きつと、私が勝てば塔矢くんとは対戦できなくなるから、それが引つかかっているんだろうな。

「塔矢くんと対戦したい人には悪いけど、去年の雪辱は果たしたいから頑張るね」

「ああ。塔矢なんかやつつけちまえ」

ヒカルもそう言ってくれるとはいえ、塔矢くんは大手合いでは負けなし、棋戦でも二次予選で倉田さんに負けたくらいで、ほとんど負けがない。プロになって、ますます強くなっている。

駄目駄目。考えすぎないで、いつも通り打てるように頑張ろう。

そして、午後から塔矢くんと対局。周りに気を遣う余裕は一切ない。

「公式戦での対局は、1年ぶりだね」

「うん」

特に話すこともない。普段の研究会での手合いとは違うのは、お互いに分かっている。

……分かっているんだけど、どう言えばいいのか、塔矢くんの周りだけ空気が違う。ピリピリとした痛いほどの視線。

飲まれちゃ駄目、とヒカルからもらった扇子をギュツと握る。

「よろしくお願いします」

時間になって、対局が始まる。私が黒石。今は、主導権を握りたかったから、黒石の方が嬉しい。

深い読み合いになる前に、勝負を決めてしまいたい。短い対局時間の中で、塔矢くんの読みの深さには追いつけない。そう思っていたら、塔矢くんは大きく地を広げていく。

攻めやすい布石。攻め損ねると負けが決まるけど、序盤から勝負をしかけていく。

もしかしたら、私が攻め急ぐと気付いていたのかもしれない。しっかりと構えて、崩せない。私では崩せないようでも、佐為なら。

「失礼します」

一声かけて、席を立つ。ヒカルから聞いた、ヒカルが打つ時に佐為がよく立つ斜め後ろあたりの場所に、少しだけ体を寄せる。

扇子を手に持って、考えに没頭していると、塔矢くんが面白そうに

笑う。

「どうしたんだらう。って、今はそれを気にしている場合じゃないね。」

座り直して、思いついた手を打っていく。

「塔矢くんも予想していなかったようで、少しだけ場を荒らせたものの、完全に崩すには手が足りない。あと2手、ううん。1手でも稼げたら五分以上に持っていける。」

「そう思っていると、塔矢くんから私の下辺に、手痛い一手が放たれた。あ、これはどうしようもない。」

「……負けました」

十分に守れると思っていただけれど、打たれたら分かった。

「ありがとうございます」

悔しい、とうつぶくと、塔矢くんがフォローのように声をかけてくる。

「途中、寄せられた時は困ったけどね。結構きわどかったと思うよ」

「あはは。ありがとうございます。でも、もし塔矢くんより先に下辺を守ったとしても、そうするとますます攻めの手が足りなくなるし、崩せる場所はないつかないよ」

簡単に検討を済ませて席を立つと、結構人ばかりができていた。あらら、気付かなかった。

「明日美さーん、負けちゃったよ」

「うん、でも良い碁だったよ」

持ち時間の関係で、普段と違う碁になっちゃったけど、面白かった。塔矢くんは、低段者の中では頭ひとつ抜けた存在だと思う。だからこそ、こういう場所で戦えるのは、非常にありがたいよね。

「あかり、お疲れ」

「ありがとう。ヒカルはどうだった？」

「勝ったぜ」

「そっか、良かった。明日美さんに目を向けると、小さく笑ったので、きつと勝ったんだらう。」

「塔矢くんと明日美さんとヒカルが勝ち、他のメンバーはどう？」

「へへ、俺は勝ったぜ！」

和谷くんが手でピースサインを作る。良かった、院生の方からも2勝が出てるね。

本田さんは冴木さんに負けて、小宮さんも勝ち。

「残った8人のうち、6人が研究会の奴って、結構良い感じだな」

冴木さんが嬉しそうに笑う。みんな頷く中、明日美さんが笑いながら文句を言う。

「ちよつと、私は女の子なんだけど。奴はないんじゃないですか？」

「おつと失礼。越智は進藤に負けて、藤崎が塔矢、フクも奈瀬に負けた結果だから、しょうがないよな」

プロ側で5人、院生側で5人もいるから、結構勝ててもおかしくない。

それでも同研究会の潰し合い以外では負けていないっていうのは、思ったよりも嬉しいね。

「来週は、ヒカルと明日美さん、和谷くんと小宮さんが当たるんだね」「うん」

研究会だとヒカルの方が明日美さんより安定感あるけど、一発勝負だし、何が起こるか分からない。しっかりと準備して、ヒカルに勝ってもらわないと！

いったん家に帰ってから、すぐにヒカルの家に向かう。部屋で碁盤を挟んで座り、今日の対局について意見を求めた。

「私が押さえる前に塔矢くんがこう打ってきたから、手が足りずに崩壊しちゃったの」

「ああ、そうか。でもさ、その前にこうやって打てばどうだ？」

ヒカルが示した手を試すと、下辺を守りながら塔矢くんの左下隅を攻められる展開になった。

「本当だ、これでだいぶ実戦より良いね」

「うん。佐為も良さそうだったよ。それでも、塔矢が打ち間違わなければ、少し足りないか？」

「そうだね。他に稼げそうなところは……」

2人で考えて、どうしても思いつかない時は佐為に頼る。佐為は私たちが思いつかない手を示してくれる時が多く、とても参考になる。

最近、佐為とヒカルの対局時に、時々ヒカルが驚くような新手を打つ時もあった、そういう時は嬉しい反面、置いていかれるような気持ちになって、凄く焦る。

「ん、あかりどうした？」

「ううん、なんでもない」

ヒカルがこうして、ちよつとした時に気にかけてくれる。この関係が壊れないためにも、しっかりと打たないと。そう思っていると、ヒカルが思いもかけないひと言を発した。

「塔矢やお前に置いていかれないように、俺も必死だからな。再来週の奈瀬と、和谷か小宮さんとの対局も、絶対に勝って塔矢との決勝戦に挑まないとな」

「え、私？ 塔矢くんはともかく、私は最近、あまり調子良くないよ」
私が首を傾げると、ヒカルは笑いながら肩をすくめる。

「別に、勝ち負けだけがすべてじゃないじゃん。今日の塔矢との対局もそうだけど、お前って大崩れしないし、どんな相手でも自分の碁を打てるのは大したもんだと思うぜ」

「そうかな？ うん、そう言ってもらえると、嬉しいかも」
びつくりした。内心で落ち込んでるのが分かったのかな、と思ったけど、ヒカルの顔を見ると、そんな様子はない。本心からそう思っ
てそう。

うん、元気出てきた。落ち込んでる場合じゃないよね。つていうより、やっぱり塔矢くんに負けて、気分は沈んでいたみたい。せつかく、ヒカルと一緒なのにね。

「でもヒカル。塔矢くんが冴木さんに負けるとは思わないんだ？」

「あー、考えてなかった。でもさ、冴木さんが勝つと思うか？」

冴木さんごめんさい、確かにちよつと想像できない……。

第46手 プロ1年目 その6

週明けの火曜、森下先生の研究会に顔を出す。若獅子戦で塔矢くん
に負けたから、きつと森下先生に怒られるし、少し怖い。

研究に使っている部屋へ行くと、森下先生や白川先生たちがひとつ
の碁盤を囲んで検討している。

「こんにちは、お疲れ様です」

「ああ、藤崎さん。こんにちは」

挨拶をした私とヒカルを、白川先生が笑顔で迎え入れてくれる。柔
らかい微笑みに、ほっと安心する。と、そこに森下先生から声が飛ん
できた。

「藤崎、塔矢のせがれに負けたんだって？」

「う。……はい」

森下先生の口がへの字になっている。

「簡単じゃねえが、負け続けじゃあ良くねえわな」

「はい」

塔矢くんには負けたけど、森下先生は冷静に見える。ホツとする反
面、勝てると思われてなかったのなら、それは悔しい。

いつか雪辱を、とは思うけど、塔矢くんってほとんど全部の棋戦で
勝ち進んでいるから当たる機会が少ない。ヒカルのように大手合
いで対戦する機会があればいいんだけど、今年は当たらない。来年はど
うなるかな。

森下先生は、順調に勝てば塔矢くんと当たる冴木さんに目を向け
る。

「冴木、お前は再来週、当たるんだろう？」

「その前に1戦ありますよ。それに勝てば塔矢戦です」

苦笑する冴木さんに、森下先生は勝てよと発破をかける。

「和谷と進藤は、まずは3回戦に勝てるようにな」

誰と対戦するかと聞かれて、和谷くんが答える。

「俺が小宮さん、進藤が奈瀬です」

「まあ、俺の弟子が3人も勝ち進んでいるのは悪かないな。でも、塔矢

に連覇なんぞさせるんじゃないぞ」

若獅子戦の話題は終わって、検討に入る。過去の棋戦で打たれた手の良し悪しについて、意見を出し合う。

実戦で打たれた手よりも優れた手を探して検討するのは楽しい。それに、結果として失着だったとして、なぜその手を打ったのかを考えるのも、凄く勉強になる。実際に、ヒカルの家で佐為も含めて3人で検討していると、失着だとされている手でも、その後の打ち方によつては蘇る手もあった。私やヒカルも、打ち手の意図は分かっても、蘇るところまではなかなか思いつかない。佐為との差は、読みと
いう一点においても、まだまだ大きい。

プロになつても、というより、プロになつたからこそ、日々の勉強が凄く大事だね。

若獅子戦までの間に私もヒカルも大手合いの対局が入ったけど、問題なく勝利した。明日美さん含めて、大手合いは今まで3人も負けなし。みんな凄く調子が良い。

「ヒカル、今日は頑張つてね」

「おう。任せとけー」

ふふ、頼もしい。明日美さんには悪いけど、今日はヒカルの応援。会場に入り、既に来ていた明日美さんとも挨拶をする。

しばらく話していたけど、対局の時間が近づいたので、少し離れる。対局が始まる前に、天野さんから声がかかった。

「藤崎さん、おはよう」

「おはようございます、天野さん」

いつものようにメモを手にとって、4組の対局を眺める。

「藤崎さん、今回はクジ運が悪かったね」

「あはは、負けちゃいましたけど、塔矢くんと当たれたのは良かったです」

「そうかい。ところで藤崎さんは、今日はどうなると思う？」

順当に行けば、塔矢くんは間違いないと思う。残りは、確定というほど力の差があるわけじゃない。ヒカルには勝つてほしいし、勝つと

信じているけど、明日美さんだっただ黙ってやられるわけもないし。

「知り合い同士で当たっているところもあるので、予想しにくいですね。塔矢さんと冴木さんには勝ってほしいですけど、相手の方をあまり知らないのです」

そつちも、なんとも言えない。

「ひとつは院生が上になるの確定だよ。しかも準決勝で当たる相手は、去年まで院生だった進藤くんか奈瀬さん。もしかしたら院生初の決勝進出があるかもしれないね」

「……そうですね」

ヒカルが負けるとは思いたくないけど、確かにその可能性もある。ヒカルがいるブロックは残っているのが全員研究会メンバーなので、みんな頑張っているのを知っているだけに、素直にヒカルを応援しにくくて複雑だね。

天野さんと話しているうちに対局が始まる。まずはヒカルと明日美さんの対局を見に行く。

先手の明日美さんが右辺とその両隅に地を作り、後手のヒカルが、大きく中央に地を作る。もちろん明日美さんは割って入り、序盤から大きく動いていく。

まだまだ布石の段階でどこも薄いのに、一気に形勢が決まりそうな打ち合いが展開される。他のところも見に行こうと思っていたけど、これは目が離せない。

「うわ、凄いね」

「そうですね。こういう碁、ちよつと怖くて打ちたくないです」

一手のミスが致命傷になりそうな綱渡りの碁。かと思えば、隅の方ではアタリにも手を抜いて、他の場所を攻めたりもしている。

ヒカルもだけど、明日美さんが普段と全然違う碁を仕掛けている。きつと、塔矢くんの影響かな。火がついたような攻め方だ。

でも、それだけで勝てるほど、今のヒカルは甘くないよ。

「……ありません」

「ありがとうございます」

結局、明日美さんの攻め手が緩手になったところをヒカルが攻め返して、ヒカルの中押し勝ち。

でも、普段の研究会ではないくらいにヒカルを追い詰めていたと思う。

「もう、悔しい！ 読み負けた！」

「かなり焦ったぜ。塔矢ほどじゃねえけど、ぐいぐい来るもんな」

「もつと押し込みたかったけど、上手く打たれちゃったね。左上隅のところ、ちよつと打ちすぎたかな？」

「あ、そうだな。そこで小さく生きてても、代わりに中央の石が薄くなつたら大損だからな」

勝負が付いて、検討を始めたので席を外す。

和谷くんと小宮さんは、和谷くんが優勢。まだヨセが残っているけど、ミスがなければ和谷くんの勝ちかな？

塔矢くんは……と目を向けると、ちよつと中押し勝ちで対局が終わっていた。

冴木さんも、盤面は終盤に入っている。かなり細かい。

整地した結果、冴木さんが1目半の勝ち。かなりきわどかったけど、勝てて良かった。

「冴木さん、やったじゃん！」

「和谷も勝ったのか？」

「うん、なんとか勝利」

和谷くんが嬉しそうに冴木さんと話し出す。

冴木さんがヒカルにも目を向けて、ヒカルが笑顔でぐつと拳を握る。それで勝ったと伝わったようで、嬉しそうに笑いながら、私に目を向けた。

「藤崎が塔矢に勝ってたら、森下門下の4人でベスト4だったかもな」

「簡単に勝てる相手じゃないですよ」

「次は、その相手なんだよなあ」

冴木さんは大きいため息を吐く。そこに、塔矢くんが寄ってきた。

「僕がなにか？」

「いや。俺にとっては次が山場だな、と」

冴木さんの言葉に、困ったような顔を浮かべる塔矢くん。

「どうでしょうね。逆のブロックで勝ったのは……和谷さんと進藤か」

ヒカルが勝ったのを喜ぶべきか、明日美さんが負けたのを悲しむべきか。というのを考えたのかどうか分からないけど、塔矢くんは至って平常通りに見える。さすがというか、こういう時に精神的な揺らぎをまったく表に出さない。普段の研究会では、特にヒカルと言いつつ時に感情を出すことも多いんだけどね。

お昼を挟んで、ヒカルが和谷くんと、塔矢くんが冴木さんと対局。

ヒカルの方を見ようとすると、周りの人が一番前を譲ってくれた。ありがたいけど、いいのかな。

「まあ、藤崎の頭越しで見えるし。しつかり見たいだろ？」

近くにいた小宮さんから暗に小さいって言われた。いいけどね、確かに周りに比べると小さいし。それでも、フクくんよりは背は高いよ。

それはそうと、ヒカルの対局が始まる。しつかりと見ないと。

「お願いします」

2人のかげ声が揃い、ヒカルが黒石で打ち始める。

序盤、布石でヒカルが思ったよりも地が少なくなってしまったせいで、和谷くんが有利に進めていく。そのまま進めば良くない流れだけど、よく見ていると、和谷くんの地が広がっているせいで、いくつかわずいところが散見される。

和谷くんも気付いたようで、厚く打とうとしたところを、ヒカルが荒らして一気に形勢が逆転した。

「あー、結構上手く打てただけだな」

「もうちよつと取り返すのが遅れたら、もしかしたら間に合わなかったかもな」

「ちえ。……負けました。ありがとうございました」

「ありがとうございました」

研究会では塔矢くんが一步抜きん出っていて、冴木さんとヒカル、私

がそれを追いかけていて、少し後ろに明日美さんや越智くん、和谷くんがいる感じだったけれど。

実戦で得るものは大きいんだね。今日の明日美さんも和谷くんも、これまでにならないほど上手く打っていた。しかもまぐれなんかじゃなく、打ち方を変えたり、布石で上手く打つたりと、実力を発揮するかたちで強さを見せた。

「あ、そうだ。冴木さんは？」

ヒカルと和谷くんの碁に集中していたせいで、塔矢くんと冴木さんの方は見ていなかった。

目を向けると、明日美さんが真剣な顔で見学している。かなりの人だからだったので少し離れたところから様子を見る。盤面が見えないから、どちらが勝っているかも分からない。2人とも真剣な顔で打っているの、一方的な試合ってことはなさそう。

しばらく待っていると、終局したようで、冴木さんの悔しそうな声が聞こえてきた。

「ああ、ちよつと足りないな」

「盤面で2目、コミを入れて7目半の差ですね」

後手の塔矢くんが冴木さんの攻めをさばいて、勝利をおさめた。

明日美さんが、安心したように小さく笑う。

「冴木くん、塔矢くん相手によく頑張ったね」

少し離れた場所で、天野さんがカメラマンと話をしている。何枚か撮りながら、去年よりも接戦だったと話題になる。去年は決勝戦で戦ったし、塔矢くんが桁違いなだけで、冴木さんも若手の中で強い人だって認識されているはず。

「これで、決勝は塔矢くんと進藤くんか。桑原先生や緒方さんが注目してるって聞いた時には、どういうことかと思っただけど、進藤くんも頑張ってるよね」

ふふ。ヒカルの実力が認められるのは嬉しい。ただ、注目されてモチすぎると困るから、ほどほどでいいかな。

運営スタッフが再来週の決勝戦について説明したり、負けた人にも賞金が出るから確認を取ったりしている。

終わるまで待つて、みんなに挨拶をして解散した。

帰る途中の電車で揺られながら、それなりに空いた車内をヒカルと並んで座る。

「ヒカル、次はついに塔矢くんとだね」

「ああ。普段から打ってるけど、やっぱり大会は違うからな」

「そうだね、頑張ってるね」

私の応援に、少し考える素振りを見せる。どうしたんだろう。

「お前の方が、先に女流の予選あつたよな？」

「え、うん」

「俺のことばかりじゃなくて、それも頑張れよ」

ヒカルの言葉に、大きく頷く。

ヒカルが気にしてくれた。別に普段から雑に扱われてるわけじゃないけど、優しい言葉をかけてくれるのは、全然違う。

「もちろん！ ちゃんと勝って、ヒカルの弾みになるよ！」

ヒカルもその日は大手合いがあるから、一緒に行ける。

当然だけど、初めての相手なので気合を入れていかないと。

そして女流棋聖戦の一次予選、初戦の日がやってきた。

起きて、身支度をして朝食を摂る。いつものようにヒカルの家へ行き、ベルを鳴らすと、いつものようにおばさんが出てきた。

「あかりちゃん、おはよう。ヒカルもすぐ来るから」

「おはようございます」

「今日は大事な試合なんですよ？」

「うん。いつもの大手合いと違って、勝ち進めば強い人とやれる大会形式なの」

日数がかかるし間に別の対局もあるけど、例えば高校野球のようなものと思えば分かりやすいと思う。

小さい頃からずっと碁を打っていた私の家族と違い、ヒカルがプロになったとはいえ、急に囲碁業界の仕組みを説明されても分かりにくいと思う。おばさんに分かりやすいよう少し話しているうちに、ヒカ

ルが出てきた。

「おはよ。何の話をしてんの?」

「大会の話。ヒカル、若獅子戦の決勝戦って言ってなかったの?」

「あー、言ってなかったかも」

もう、ほんとにいい加減なんだから。

今はあまり時間がないから、今日帰ってきてから説明するとおばさんに約束して、棋院へ向かう。

「いいよ、いちいち言わなくて」

「そんなわけにも行かないよ。賞金も出るし、おばさんの立場で考えると、何してるのか分からないって不安だよ」

はいはい、とヒカルは面倒そうにしている。対局前だし、言い過ぎてもしょうがない。

そんな話をしてるうちに棋院に到着する。

「あかりちゃん、おはよ」

「明日美さん。おはよう」

明日美さんは、ヒカルと同じく大手合いの日。

「明日美さんは来週だっけ?」

「うん、勝てたらいいんだけど」

「明日美さんならきつと大丈夫だよ」

相手次第だけど、私たちなら予選は抜けられると思いたい。うぬぼれでも何でもなく、それだけの勉強をしてきている。というより、私たちほど恵まれた環境の人はいないはず。

「当たり前順次第だけど、本戦トーナメントの決勝でやりたいね!」

「あかりちゃん、気が早い。まずは目の前の1勝」

「うん。それは分かってる」

分かっているけど、ヒカルや塔矢くんに追いつくには女流で立ち止まっている暇はない。

気合いを入れて対局室へと向かう。

部屋に入って時間がくるまで待つ。しばらく待つうちに、対戦相手の春木さんが現れた。

「藤崎さん？ はじめまして」

「はじめまして、よろしくお願ひします」

春木さんに頭を下げて挨拶すると、そのまま少し話を続けてきた。「楽しみにしてたの。プロ試験全勝で、新初段戦でも勝っていたし。しかも緒方十段と同じ、塔矢門下でしょ？」

「あ、私の師匠は森下先生なんです。塔矢先生の研究会には通わせてもらってますが」

「そうなの。先月、ゴールデンウィークのイベントで緒方十段と打たせてもらったんだけど、凄く勉強になったわ」

ゴールデンウィークのイベント……。あの時は、ヒカルの行ったイベントに緒方先生もいらつしやったはず。ということは、ヒカルと同じイベントだったんだ。いいなあ、羨ましい。

「そうですね。緒方先生、打ち筋が鋭くて緩手の指摘が厳しいですけど、それが勉強になりますね」

「……ええ。打ったのは早碁だったし、公開イベントだったから、そこまで厳しくなかつたけど」

「そうですか」

何故か春木さんが不機嫌になったので、話を切り上げる。

……何故かというか、緩めて打たれていたと思つて不機嫌になったのかもしれない。どうしよう、フォローした方がいいかな。

「あの」

「そろそろ時間ね」

話そうとしたら、会話を止められた。実際に時間は迫っていて、すぐに開始の音が鳴る。ニギつた結果、私が黒石で対局が始まった。

序盤は、私が右上から右下と右側に広げていこうとすると、春木さんは右下隅を目がけて、すぐに仕掛けてきた。

先ほどの会話が原因か分からないけれど、攻撃的な碁だね。荒れた碁になりそう。

こういう時、きっちり守っていると無理な手が出る人と、守つたのを見て落ち着いて地を広げる人がいるけど、後者だと守りに入ると負けかねない。

もし対面しているのが塔矢くん、こういう攻めをしてきた時は、守ろうとすると余計な手を使わされて、萎縮している間にやられてしまう。

守る手も展開する手もあるけど、相手が強い場合を想定して、あえてこちらからも攻め込む手を打つ。

細かく検討すると最善の手ではないかもしれないけれど、今後の盤面には重要な手になっていくはず。

「へえ」

攻め返したせい、春木さんが面白そうに笑う。

おそらく、春木さんは攻め碁が得意なんだろう。でも、それに固執してしまおうと打ち回しが固定されていくし、いざ劣勢に立った時、我慢して守るべき時に守れない。

塔矢先生は当然、緒方さんや塔矢くんも、攻めるべき時と守るべき時の読みというか嗅覚は凄く鋭い。芦原さんも、長く一緒にやっているからか、自由な棋風の中でも我慢する時は我慢している。……はず。

「……ありません」

春木さんは、攻め方にしても塔矢くんやヒカルより甘いところが多く、勝負としては完全にこちらのペースだった。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます。大したものね」

「いえ、そんな」

悔しそうにしながらも、対局前に苛立っていたのは打ち筋には影響していなかったし、勉強の仕方次第で強くなる気がする。

私の口から偉そうにどうこう言えないけどね。

周りを見ると、ヒカルはまだ対局中で、明日美さんは終わったようだったので声をかける。

「どうだった?」

「勝ったよ! あかりちゃんは?」

「同じく。ちよっとヒカルを見てくるね」

「じゃあ、私も行くわ」

お互いの勝ちを称えて、ヒカルの対局を見に行く。ほとんど勝負はついていて、後は相手の投了待ちという段階まで来ている。

「負けました」

さほど時間をおかずに相手が投了して、ヒカルの勝ちが確定する。

「お疲れ様。みんな勝ったね！」

「そうだね。よし、今日はあかりちゃん的女流戦初勝利を記念して、お姉さんが奢ってあげよう」

「いいの？　ありがとう！」

わーい。食べていけるほどじゃないにしろ対局料が入ってくるので、私も明日美さんも、ヒカルだって中高生にはお金に余裕がある方だと思う。

でも、今のところさほど使い道もないし、私とヒカルはお母さんに管理してもらっている。

少なくとも、中学を卒業して一人暮らしをするまでは、これでいいよね。

近くのハンバーガーショップに入って雑談していると、塔矢くんが現れた。

「塔矢!？」

「何だ、その驚きようは」

「急に現れるから」

「進藤たちが今日対局なのは分かっていたから。多分ここにいるって」

明日美さんから聞いていたんだね。それで奢るって話になったのか。

4人で話していると、ヒカルが思い出したように話を振る。

「そーいや、そろそろ本因坊戦の予選が始まるだろ。お前、勝ってたっけ？」

「僕は進藤が一次予選に挑んでいる頃は、最終予選あたりだと思う」

つまり勝ってるってことだね。塔矢くんも、ヒカルを相手にした時だけ、優しさが欠落するよね。見ている面白いけど。

明日美さんも似たようなことを思っていたのか、私と顔を見合わせ
て笑う。

「塔矢くんが負けてるの、名人戦だけだよね」

「うん。たまたま倉田さんが残っていて、当たって負けちゃったんだ」
「倉田さんか。あの人って強いのか？」

またヒカルは……。弱いわけないよ。

「当たり前だろう。今、ほとんどの棋戦でリーグ入りしているし、挑戦
者にもなっている。父さんが退いた今、タイトルホルダーになっても
おかしくない実力を持っているだろう」

「へー。あの顔でねえ」

「ヒカル。顔は関係ないし、失礼だよ」

「まあまあ。進藤らしいね」

明日美さんは楽しそうだけど、いざ倉田さんを前にしても、同じよ
うなことを言って怒らせそうで怖い。

「早く高段者とやりてえな」

ヒカルはつまらなそうにしているけど、そんな簡単な話じゃない
よ。

「高段者とやりたいのは私も一緒だけど、今のうちに勉強して実力を
つけておかないと。今のまま高段者と打っても、良いようにやられる
だけだよ」

ヒカルは実力があっても、どうにも覚悟が足りない気がする。ま
あ、さつき話に上がった倉田さんも気楽に打ってそうだし、悲壮感を
漂わせてもしょうがないんだけどね。

「でも、最近は森下先生とも良い勝負できるようになってきたぜ」

「……研究会で打つのと公式戦で打つのは、全然違うよ」

私が思ったことを、塔矢くんが代弁してくれた。

「それはそうだろうけど」

「まあ、口で言っても意味はないからね。若獅子戦の決勝、楽しみにし
てるよ」

「俺だって。毎度お前に負けっぱなしってわけには行かねえからな
！」

白熱しちゃってまあ。こういうところは、男の子だね。

塔矢くんが高段者と同様の気迫でヒカルと対局するのか、打ち慣れているだけにヒカルもいつも通り打てるのか分からないけど、ヒカルのためにも、良い碁になったらいいな。

第47手 プロ1年目 その7

若獅子戦決勝戦の前夜、いつものようにヒカルの家で勉強会。できる限りの対策は練った。

佐為に仮想塔矢アキラをやってもらったり、私が持っている塔矢くんの棋譜を用意して、打ち筋を確認したり。

続けて研究や対局をしていたから、かなり疲れた。準備万端整えてから、休憩する。

「ヒカル、明日頑張つてね」

「おう。去年はまだまだ力の差が大きかったけど、今年は勝ってみせるさ」

うん、確かに去年よりもずっと実力差は縮まっているはず。その上で対策までしているんだから、勝つてもおかしくない。

おかしくないんだけど、塔矢くんには勝てるっていうことは、リーグ入り間近の実力とも言えるわけで。一足飛びに強くなつていくヒカルに、付いていくので精一杯にならないよう、私ももつと頑張らないと。

本当に、プロ1年目だからと甘えずに女流タイトルくらい取れないきゃ、塔矢くんやヒカルと肩を並べられない。

「ああ、私にも佐為が見えて話ができたらな。たまには連れて帰って、ひと晩中相手をしてもらえるのに」

「……それは嫌だな」

「もー、ヒカルのケチ」

口をへの字にしつつ駄目出しをするヒカル。1日くらい借りてもいいじゃない。

……無理を前提で話しているけどね。

「ケチとかじゃなくて……。あーもう、うるせーよ！」

何だろう、ヒカルが何やらぶつぶつ言ってる。

大事な対局前夜に言うことじゃなかった。つい口から出ちゃったけど、反省しなきゃ。

「ごめん、本気で言ったわけじゃないから。それより本因坊戦の一次

予選の1回戦、早く決まるといいね」

「あー、そうだった。あかりの方は連絡来たんだよな」

「うん。7月末の水曜。ヒカルは8月頭あたりかなあ？」

ついに、男女混合の七大タイトルの1つが始まる。塔矢くんは勝ち続けているから当たらない。そうになると、一番当たりたくないのはヒカルだね。

二次予選ならまだしも、一次予選で当たるのは避けたい。

「そういや和谷から聞いたんだけど、伊角さんが戻ってきたってよ」

「へえ。中国から？　じゃあプロ試験受けるんだね」

「みたいだな。和谷が会ったらしいが、去年よりも落ち着きを増していて、さらに手強くなってそうだったよ」

へえ。それは和谷くんや越智くん、本田さんたちにとって強敵になりそう。

みんな去年と比べて格段に強くなってるとけど、そもその棋力は伊角さんの方が高いくらいだし。

つて、そんな他人の心配をしている場合じゃない。

休憩を終えて、最後にヒカルと私で早碁を打って1日を終えた。

「くそお、今日は負けちまった」

「たまには良いじゃない。早碁だとかなり負け越してるし」

「確かに早碁だと、俺の方が勝ってるな。でも、早碁じゃなきやお前の方が勝ってるよな？」

「うん、今月も少し私が勝ってる。でも、2人とも佐為には勝てないよね」

ヒカルは当然、私も随分と強くなった。塔矢くんには私も練習手合いで勝てる時もあるし、読みの鋭さならヒカルと塔矢くんは五分に近い。

明日もヒカルならもしかしたら勝てるかも、という希望が持てる。それでも、私やヒカルが佐為に勝つ場面は想像できない。

真剣勝負をする時、佐為は目に見えないのに、確かに存在するんだっていうくらい空気が張り詰めたものに変わる。あれは私たちに
は出せないし、気圧されているようでは勝てるはずない。

それでも、高段者との対局を繰り返している塔矢くんと真剣勝負の場で打てるのは、大きな財産になると思う。

「ヒカル、明日は頑張つて。私もすぐに追いつくから」

「おう、見てろよ」

ふふ、頼もしい。まだまだ子どもっぽさもあるけど、随分と顔付きもすっかりしてきた。

大手合いでも当たらないし、しばらく塔矢くんと対局できる機会はないけど、その時までには、しっかりと力を蓄えておかないと。

若獅子戦決勝の日。事前に確認すると、明日美さんは当然、和谷くんたちも見に行くとのこと。私はヒカルと一緒に向かうので、現地で合流する。

「おはよう、あかりちゃん」

ヒカルは対局に集中しているので、目で合図してからヒカルと離れて明日美さんと合流する。和谷くんや越智くんも来ているので、挨拶をかわす。

対局が始まるまで、あえて2人の対局に触れず、食べ物や服の話で時間を過ごす。どちらが勝つかという話で外野が勝手に盛り上がるのも、2人に失礼だし。

でも、ちよつとヒカルの顔がこわばっているのは気になる。何か声をかけた方がいいのかな。

「おう、進藤」

「和谷」

私が考えていると、和谷くんがヒカルに声をかけた。

「何だよ、柄にもなく緊張してるのか？」

「そんなわけねーじゃん」

「そうか？ 顔がこわばってるぜ。……そろそろ、若手は塔矢アキラだけじゃねーって知らしめねえとな。俺も今年、絶対にプロ試験受かって、塔矢にもお前にも勝ってやるから、今のうちに勝ち星を貯めとけよ」

煽っているようだけど、そういうわけじゃないと思う。気負いすぎ

るなつてところかな？

2人の言い合いに、明日美さんが口を挟む。

「あら、和谷。私やあかりちゃんは眼中になし？」

「奈瀬、そんな話じゃないだろう」

そんなやりとりをしているうちにヒカルの緊張もほぐれたようで、落ち着いた表情になっている。良かった、和谷くんに感謝。

「よし、じゃあ行ってくる」

「うん。ヒカル、頑張って」

ヒカルが先番で決勝戦が始まり、序盤はお互いに無理せず、布石を打っていく。静かに進む局面の中、先手を打ったのはヒカルだった。

左辺が塔矢くん、右辺がヒカルの地になっている中で、下辺に伸ばした塔矢くんの石をヒカルが攻め立てる。一気に攻めるといふより、自ら地を確保しつつ、相手の地を削れるようプレッシャーをかける打ち方。

ヒカルは碁を打つ時は凄く我慢強いし、並みの打ち手ならミスをするまで粘れるけど、塔矢くんの場合はミスなんて期待できない。そんな中でヒカルは右下隅のアタリに対して、手を抜いて左上隅を攻める一手を打った。

「あれ、右下死ぬんじゃないか」

「どう見てもミスだよな」

ひそひそと、周りから小声で聞こえてくる。

私の見立てでは、それなりにヒカルの地も残る。それより右上の打ち込み、放っておくと塔矢くんの形勢が非常に悪くなるから、塔矢くんこそ油断すると一気に流れを持っていかれるよ。

「く……」

さすがに分かっているようで、塔矢くんが長考している。この手でヒカルの方が僅かだけど優位に立ったはず。塔矢くんは甘くないから、このまま行くとは思えない。ヒカル、気を抜かずに頑張って！

応援しかできないのがもどかしい。というより私がヒカルと打ちたい。塔矢くんに勝っていれば、この場所でヒカルと打てたかもしれない。

ないのに。

ヒカルの会心の一手で塔矢くんが不利になる。巻き返すために塔矢くんは果敢に攻めるけど、ヒカルも応手で間違わず最善手を繰り出している。

うん、さすがヒカル。一切気後れしてないね。それにしても、いつの間にか視野が広がっているというか、大局観が優れている。この対局に向けて強くなった？ それとも、この対局自体で強くなった？

終盤のヨセに入るまで、ヒカルの優勢が揺るがなかった。でも、ヒカルはヨセが苦手だし、まったく油断できない。

そう思っていたら、ヨセでミスが出てヒカルの有利が消えた。これで半目勝負になった。残り時間は……。あれ、塔矢くんの方が随分少ない。

この局面で、塔矢くん相手に時間が残っているなんて。早打ちしていた？ ううん、気がつくほどじゃなかった。

それよりも、今日のヒカルは長考がほとんどなかった。

塔矢くんも終局までの流れは見えているだろうけど、ヒカルが何か仕掛けたら、読み切るだけの時間はないんじゃないかな。

そして、ヒカルが若干長考に入る。持ち時間の半分ほどを使い、中央に伸びていた白石の頭を押さえる。悩んだ割には平凡な手だけど、目的はその手自体ではなさそう。

「あ」

ああ、声が出ちゃった。ヒカルの意図が分かった。中央を打ち合いつつ、右下隅に下がっていくと、中盤で小さく生きた黒石が邪魔で、ヒカルに大きな有利がつく。

多分塔矢くんも気付いてない。私も、取り返しの付く段階だと気付かなかった。

「……2目半」

結果、ヒカルが塔矢くんに公式戦で初勝利をおさめた。

勝てるよ！ なんて気軽に言いつつ、実際に勝つと思っていなかった。それだけ塔矢くんの壁が厚いんだけど、ヒカルは今日、運じやな

くて実力で勝ったんだ。

凄しい嬉しいけど、それと同時に焦る気持ちも出てくる。このまま2人に置いていかれるなんてことになったら……。

「まさか、進藤に負けるとはね」

「なんだと！ 俺だって強くなってるさー！」

「それは分かっているが。……小6の頃とは性質の違う強さ、か」

ほんの小さくつぶやいた塔矢くんの声が、何故か耳に残った。

ヒカルは和谷くんを背中を叩かれて振り向いていたから聞こえなかったみたいだけど、佐為にも聞こえたかな？

性質が違うというよりも、佐為は別格だから。ヒカルの碁にも、佐為の影響は色濃く出ているけれど、あまり大声で言い回ることじゃないし、塔矢くんもそれは分かっているはず。

「こら、あんたたち騒ぎすぎ！ 塔矢くん、お疲れ様」

「あ……奈瀬さん。情けないところを見せちゃったね」

「ううん！ 凄かったよ。打ち筋も良かったし、ミスもなかったし」
負けた塔矢くんは、私が話すものはばかられるし、明日美さんに任せよう。

その後、優勝したヒカルが表彰されて、色々と説明を受けた後に解散となる。

「ヒカル、どうする？ どこか寄っていく？」

「疲れたし帰る。へっへっへ、ついに塔矢に勝ったぜ。この調子で、佐為にも追いついてやるぜ！」

佐為に？ へーそう。

いくらなんでも、まだ無理じゃない？

「……あー、佐為のやつ、嬉しそうに返り討ちにしてやるってさ」

「今は無理でも、いつか佐為に勝てるように、一緒に頑張ろう」

「おう。塔矢とは勝負できたし、次はあかりと公式戦で打ってみたいな」

「……私と？」

「ああ。プロ試験だと負けてるし、お前もプロ試験から今まで、塔矢に

しか負けてないだろ？」

あ、ちゃんと覚えていたんだね。ヒカルのことだから、そういうの気にしていないと思ってた。

「それぐらい覚えてるさ。今日、塔矢と打って思ったんだよ。いつも打ってるけど、勝負の場で打つのは大分違うなって」

ヒカルが凄く大人びた顔をしている。塔矢くんに勝てたのは、何か大きな変化に繋がったのかな。そうだと良いな。

家に帰って、ヒカルの家族と私の家族みんなで優勝祝いをした。塔矢くんに勝つのがどの程度凄いのか、ヒカルのお母さんはピンときていないみたいだけど、賞金が出る大会で優勝したのが凄いのは分かってくれている。それで十分だよな。

お祝いが一段落ついて、ヒカルの部屋に向かう。お姉ちゃんがにやにやとしていたけど、うん、そういうのと違うから。

今日は佐為と私が打つ日だけど、ヒカルが疲れているようなら、今日は打たなくてもいい。

「打てるよ。まあ、あかりと佐為の碁を見ながら考えるのも疲れるって言えば疲れるけどさ。あかりと一緒に勉強する時間は結構好きなんだぜ」

「そう？ それならいいけど。体調崩さないように、無理しないでね」
えへへ、ヒカルが好きって言ってくれた。変に喜びすぎて、引かれないようにしなきゃ。

ああ、でも顔に出ちゃうかも。でもいいよね、恋人なんだもん。
その日は、終始顔がにやけるのを抑え続ける1日になった。

「取材？」

「あー。なんか塔矢に勝ったのが、話題になったみたいでさ」

若獅子戦から少し経った頃、ヒカルの家でいつものように打っていると、ヒカルから出版部からインタビュー記事を書かせたいと依頼を受けたと報告された。

それはまあ、そうだろうね。塔矢くんがプロになって1年と少し。

負けた対局は新初段戦の座間先生と名人戦での倉田さん、そして若獅子戦でのヒカル。その3局のみ。早ければ今年にもリーグ戦入りしちやいそうな勢いがある。

それに勝ったヒカルも、近しい実力があると判断するのはおかしくない。実際に若獅子戦の棋譜を見ると、十分な実力を約束している打ち筋が記されているし。

「良いんじゃない？ あ、でも余計なことは言っちゃ駄目だよ」
「言わねえよ」

「だからといって、黙って仏頂面っていうのも駄目だからね。プロなんだから、フアンサービスも意識して記者さんの質問にはなるべく答える方がいいよ」

面倒だなあ、とうんざりした顔をしている。もう、そんな顔しているとモテないよ。……他の人にはモテなくていいけどね。

そんな話をしていたけれど、後日、ヒカルのインタビュー記事が載っている週刊碁を読んで驚いた。

『進藤ヒカル初段 そうですね、師匠っていうのとは違いますけど、最初は幼馴染みのあかり（記者注：藤崎あかり初段のこと）に教えてもらいました。今も毎日打ってるから、師匠に近いのは確かです』

『記者 毎日？ そういえば、同じ森下先生の門下ですね』

『進藤ヒカル初段 ええ。でもそれは関係なくて。家が近いので、毎日俺の部屋で打ってるんです。少し前まで負け越していたけど、最近は互角に近い成績になってきたんです』

『記者 なるほど。では、藤崎初段も進藤初段に近い実力がある、と？』

『進藤ヒカル初段 近いつていうか、今の時点だとあかりの方が上かもしれない。塔矢にも、1回勝っただけで上回ったわけじゃないですから』

ヒカルってば！ 嘘じゃないけど、毎日ヒカルの家で打つてると

か、よからぬ噂が立ったらどうするのよ。

早速明日美さんから、からかいの電話がかかってきたので、逆に文句を言ってしまった。

「でも進藤も、それくらい分かって言ってると思うわよ。むしろ色々と考えていて、周りへの牽制じゃない？ あかりちゃんに色目を使う連中へのね」

「色目？ そんな人いた？」

「いた？ じゃないよ。いくらでもいるよ。私にも寄ってくるのいるけど、どうにもピンとこないのが多いんだよね。私とあかりちゃんです話していると、どっちでもいいからお近づきになりたいって感じで話しかけてくる人いるじゃん」

「えーっと」

おかしいな。別に鈍感ってわけじゃないのに、本当に覚えがない。

「恋は盲目ってね」

「それを言うなら、明日美さんも塔矢くんしか目に入ってないんじゃない？」

「そんなことないよ。恋愛対象にならないだけで、上手い人は凄くと思うもん」

うん、それはつまり恋愛対象としては塔矢くんしか目に入っていないのと一緒だよな。

上手い人と言えば、と明日美さんが受話器の向こうで手を叩く。

「そういえば、伊角さんが予選受けてるって」

「うん。和谷くんに聞いた。予選で落ちるとは思えないし、和谷くんや越智くんにとって強敵だね」

「あかりちゃんが来るまで、ずっと院生トップだったからね」

伊角さんの地力は凄く高いし、普段の打ち方は安定感がすごい。問題はメンタルの弱さなんだけど、中国で色々勉強してきたって聞いているし、楽しみ。

それに、伊角さんが参加するって聞いて、和谷くんが凄く嬉しそうだった。ライバルが増えるっていうのも確かだけど、それ以上に伊角さんがプロを諦めていなかったのが嬉しいんだろう。

和谷くんは周りを引っ張って一緒に強くなるタイプだと思う。ヒカルに色々教えてだしてから、それまでに比べて一気に強くなっていたし。

「しかし、進藤もアキラ君に勝ったんだから、もっと自信ある回答すると思ったけど、思ったより謙虚だったね」

「そうだね。強くなったからこそ、相手の強さも分かるようになったんだよ」

自分の立ち位置をしっかりと把握してないと、言葉に説得力がないもんね。

明日美さんとは、その後も女流棋戦の話で盛り上がりつつ、夜が更けていった。

第48手 プロ1年目 その8

若獅子戦からしばらく経った頃、塔矢くんが本因坊戦三次予選を突破して、リーグ戦入りを果たした。

ヒカルも触発されて、打つ手に力が入っていた。

私も続きたいところだけど、そもそも三次予選まで行けるかどうか分からない。森下先生ですら二次予選で負ける時も多いくらい、壁は分厚い。

だからといって、歩みを止めるつもりはない。ヒカルに期待外れだと思われないように、ただ横にいるだけじゃなく、ずっとそばで一緒に打つためにも、強くならないと。

気合いを入れたのが良かったのか、ヒカルも私も、大手合いで負け知らずの快進撃で、7月になる頃、二段になった。

ヒカルの家で簡単にお祝いをしながら、雑談が弾む。

「本当にヒカルはずるい。私が帰った後も、佐為に打ってもらってるんでしょ?」

「まあ、毎日打つわけじゃないけどな」

前世でも、佐為が消えたと思われる後も、凄く速度で強くなってはたはず。にも関わらず、今はずっと佐為に教わっていると、羨ましくすぎる。

「あかりは、ネット碁も使って勉強してるんだろ? 佐為は羨ましがってるぞ」

「あはは。佐為は色んな人と打つのが好きだもんね」

「相手がどんなにへボくても、楽しそうに打つからなあ」

私も下手だった期間が長いから、あまり上手くない人と打つのも苦痛じゃないけど、佐為のように楽しむまでには達していない。こればかりは、才能というよりは性格の違いなんだろう。

「時々、一柳先生に打ってもらってるよ。凄く勉強になるの。越智くんとフクくんも、随分と鍛えられてるみたいだし」

越智くんやフクくんが鍛えられるのはいいんだけど、和谷くんの立

場だと凄く大変になってる。

ただでさえ伊角さんや門脇さんが手強いのに、越智くんも院生成績だと和谷くんより上だし、フクくんは和谷くんと相性が良い上に強くなってるし。

「そうみたいだな。和谷から聞いたけど、伊角さんも予選受けてるつてよ。囲碁をやめてなくて良かったって嬉しそうにしてたぜ」

「へえ。伊角さんが出ると手強いライバルになるけど、和谷くんらしいね」

人によつては甘いと思うかも知れないけど、親身に面倒を見る和谷くんの姿勢は尊敬している。私は当然、ヒカルも院生の時に随分とお世話になっている。

今年のプロ試験、通つたら良いんだけどな。和谷くんが通つたら、しげ子ちゃんと一緒にお祝いのケーキを作ろうって約束している。

でも、お祝いを作るのとは別に、ケーキ屋さんで食べたいとも言っていた。何やらこだわりがあるみたいだけど、恥ずかしそうにしていたから、聞かなかつた。いつか教えてくれたらいいな。

そして、プロ試験の本戦が始まる直前の火曜日。森下先生の研究会で、みんなで和谷くんを応援した。

「和谷くん、いよいよ今週からだね」

「おう。去年は厳しかったし、今年も楽しじゃねえけど、手応えはあるんだ」

最近、和谷くんは塔矢くんとも打っているし、アドバイスを素直に受け入れている。最初はどんな時でも涼しい顔をしていると思っていたみたいだけど、ヒカルと白熱した言い合いをしているのを見て、認識を良い方にあらためたみたい。

実際、持ち時間が少なくなっても慌てて適当に打つ手は減っていて、しっかりとした打ち筋になっている。

それに加えて、真面目で素直な手が多い中にも、相手の思惑を崩すのも上手い。

「和谷、行洋のせがれとの研究会までしておいて、プロ試験で落ちたら

タダじやおかねえぞ」

「はい」

あはは、と苦笑いしながらも和谷くんが頷く。塔矢くんも一緒の研究会を言い出したのは私だけど、森下先生なりの発破のかけ方だし、余計な口を挟まない方がよさそう。

去年私とヒカルが受かってるし、和谷くんも今年こそ受かろうと凄く気合いが入っている。

どんな組み合わせで、どんな結果になるか分からないけれど、和谷くん頑張れ。

そして、週明け。プロ試験の組み合わせがホームページに記載されたので、学校が終わった後に家でチェックをする。

和谷くんが日曜の2戦目で門脇さんと対局して、負けている。フクくんが伊角さんに負けて、越智くんが足立さんに勝ち。

和谷くんが負けちゃったか、と残念に思っていると、珍しくしげ子ちゃんから電話がかかってきた。

「あかりお姉ちゃん、こんばんは」

「こんばんは。どうしたの?」

「お父さんから、和谷くんが負けたって聞いたの。今年は頑張るって言ってたのに。電話したら迷惑かなあ?」

「どうかな。私がかけると嫌がるかもしれないけど、しげ子ちゃんなら大丈夫だと思うよ」

森下先生の娘とはいえ、囲碁とあまり関わっていない子からの励ましなら、素直に受け取れるだろう。

そう思っつてのアドバイス。

「でも明日もプロ試験があるし、あまり長い時間話さない方がいいと思うよ」

「うん、分かった。ありがとう」

4戦目で伊角さんと越智くんが当たって越智くんが勝って調子を上げていたけど、しげ子ちゃんの応援のかがあったのか7戦目で和

谷くんと越智くんが当たった時は和谷くんが勝っていた。

本田さんが1人だけ全勝だけど、片桐さんに勝つたくらいで、まだあまり実力者とは当たっていない。星の潰し合いは、ここからだね。そんな感じでプロ試験の結果を追いかけしていると、電話で明日美さんから駄目を出された。

「あかりちゃん、結果も気になるだろうけど、自分のことも気にしなきゃ。来週、女流棋聖戦の2戦目と3戦目があるでしょ」

「う。そうだね。でも、毎日ヒカルとも打ってるし、手は抜いてないよ」

「それならいいけどね。和谷といいあかりちゃんといい、冴木さんだって、森下門下の子は進藤を除いてお世話大好きだよね」

「ヒカルを除いてって……」

ああ見えてヒカルも結構優しいし、色々と考えている時もあるんだよ。

でも、明日美さんの言っているのも正しいと思う。私はそこまででもないけど、和谷くんのお節介度合いは相当だよ。冴木さんだって、若手の研究会も勉強になるって言ってるけど、フクくんを含めた院生の練習相手になってあげていたし。

「私も、和谷とあかりちゃんのおかげで実力アップできたし、感謝してるよ」

「明日美さんが強くなったのは、明日美さんが努力したからだよ」

「もちろん努力もしたけどさ。まさか私が塔矢先生の研究会に通えるとは思わなかったもん。で、それはそうと。あかりちゃんはあと2回、私はあと1回勝てば、トーナメント進出だね」

女流棋聖戦は、女流というだけあって人数が少なく、2回もしくは3回勝てば決勝トーナメントに駒を進められる。16人のトーナメントで4回勝てば、挑戦者になる。

「決勝トーナメントまで行けば当たるかもね。お互い頑張ろう」

「うん。私も明日美さんと打ちたい」

「前までは、私なんかじゃ無理だと思ってたけど、アキラくんもリーグ戦入りするし、のんびりしてられないよね」

「うん。リーグ戦入りってことは、塔矢くんは女流の誰よりも強いってことだから。誰と当たっても塔矢くんほどじゃないって思うと、少しは気が楽じゃない?」

「あはは。前向きに考えるとそうだね」

本当に、塔矢くんは別格だ。練習と本番での気迫が違う。森下先生によれば、リーグ戦入りするような奴はもつと凄いつて話だし、私も早く強い高段者と打ちたい。

そして迎えた女流棋聖戦の2回戦。かなり時間を使って打つ、あまり周りにいない打ち筋の人だった。あえて言うなら、伊角さんが近いかな。伊角さんよりも緩い手が多く、何度かとがめているうちに、相手が投了した。

そして、昼から続けて3回戦。日程の都合もあるんだろうけど、女流の場合は同日に2局打つ場合もある。

相手は、伊角さんの先輩にもあたる桜野さん。

「私、3回戦まで上がるの久々なのよ。慎ちゃんがいつにも増してプロ試験頑張ってるから、気合い入っちゃって」

「プロ試験に合格しなきゃ、スタート地点に立てないですもんね」

「そうなのよね。まったく、慎ちゃんは実力があるのにもたっているから、余計に心配になるわ」

やれやれ、とため息を吐く桜野さん。一瞬、色恋沙汰かと思ったけど、どちらかという心配性のお姉さんといった風情だね。

「プロ試験でも慎ちゃんに勝ったみたいだしもう二段になってるみたいだし、油断しないわよ」

「もちろんです。よろしくお願いします」

そうして桜野さんが先手で始まった対局。無理な手を控えて、じっくりと打ち進める。すると、ヒカルや塔矢くんとは違って、序盤から中盤に入るあたりで緩手が目につく。相手の思惑通りにいかないよう、とがめていく。

しばらく打ちにくそうにしながら模索していたけど、終盤戦に入る少し前あたりで、桜野さんが投了した。

「いやー、慎ちゃんに勝つだけあるわ。ってというか強すぎない?」

「ありがとうございます」

桜野さんは、共通の知人がいるので話しやすい。時々挨拶や雑談をしていたけど、対局するのは今日が初めてだった。

伊角さんのプロ試験についての話題で少し盛り上がった。

いったん自宅に荷物を置き、ヒカルの家に行って勝ったと報告する。

今日は私と佐為が打つ日なので、打ちながら話をする。

「うん、おめでと」

「何だかあっさりね」

「だって、あかりが負けれると思ってるねえもん」

ふふふ、嬉しいことを言ってくれる。この調子で勝ち続けたいな。

「ヒカル、次はいつだっけ?」

「来週、大手合いだよ。まったく、いつになったら高段者と打てるんだか」

「慌てない。一歩ずつだよ。1年目はだいたい一次予選と、棋戦によって二次予選が始まる程度なんだから」

1年目から二次予選以上の対局が打てるのは、本因坊戦と名人戦だけ。他は、始まる時期の都合もあって、2年目以降になる。

そういう意味では、純粹に対局数が増えるけど、女流ってたくさん打って有利かもしれない。

「そうは言っても、塔矢はどんどん進んでるし、焦るぜ」

「それを言うなら、私だってそうだよ。ヒカルより先にタイトル取りたいと思ってたのに、若獅子戦で先取るんだもん」

今のところ、ちゃんとヒカルの視界に私が入っているのは間違いない。だから心配しすぎても駄目なんだけど、だからといって油断していいはずがない。

目標はたくさんある。

間近の目標は女流タイトル。もちろん混合戦も勝ち進みたいし、森下先生と公式戦で打ちたい。それに、唯一残ってくれた名人戦で塔矢

先生とも打ちたいし、一柳先生とも打ちたい。

塔矢先生との対局が一番大変。みんな塔矢先生と対局したいから、名人戦のリーグ戦は一番激しい戦いになっている。興味なさそうなのは、桑原先生くらいじゃないかな。

「塔矢に勝つことしか考えてなかったけどな。でも、優勝って嬉しいもんだな」

「そうだね」

話しているうちに佐為との対局が難しい局面になり、少し考え込む。

佐為の一手で私の左辺が崩されて、厳しくなる。でも、とがめる手がない。何かできないか考えて、右上隅が若干薄く、左辺を潰される代わりにそこを荒らせば佐為の思惑通りにならないかもしれない。

そう考えて、崩しにかかるも、あつさりと守られてしまう。

それが決め手となって、勝負がついた。

「もう、全然勝てない」

「えーと。まだまだお2人には負けませんよ、だってよ」

「佐為、指導碁はしても手加減はしないよね」

「当たり前じゃん。こいつ、相当負けず嫌いだぜ」

本当に、凄く負けず嫌い。多分、ヒカル以上。

そんな佐為との対局で、できる限りの打ち方を吸収する。佐為はネット碁もよく打つからか、最新の定石もよく学んでいる。一柳先生とも時々打つのに、一度も負けてないって凄すぎるよね。

「ichiryuも強くなってるって、佐為が言ってるよ」

「うわあ。タイトルホルダーで、今でも凄く強いのに。佐為と互角に打つために、一柳先生も必死なんだろうな」

「ああ。……それに、色々試してるってよ。攻めるのが得意な分、押すと楽に勝てたのが、最近は厳しくなってきたってさ」

楽に勝てたって、一柳先生が聞いたら怒るだろうなあ。いや、もしかしたら笑うかもしれない。

そして日が進み、秋の気配が漂ってきた頃、名人戦の一次予選で塔

矢くんと対局する日がやってきた。

棋院の入り口で、塔矢くんと明日美さんに会ったので、挨拶をかわす。

「藤崎さん、おはよう」

「おはよう。明日美さんも」

「おはよ」

塔矢くんととの対局。組み合わせを見た時には、思わず叫んでお姉ちゃんに変な目で見られちゃった。

明日美さんは女流棋聖戦の二次予選決勝。これに勝てば、私と一緒にトーナメントに進出できる。

「明日美さん。今日は頑張ってるね！」

「うん。簡単に勝てるとは思ってないけど、精一杯打つよ」

「奈瀬さんなら大丈夫だよ」

あらら、私がいるせいで、塔矢くんが奈瀬さんって呼んじやってる。うーん、お邪魔虫は退散するべきかな。

「私ちよつと先に行くね」

ヒラヒラと手を振って、中に入る。さて、どこで時間を潰そうかな。

「藤崎さん。早いね」

「おはようございます」

売店に顔を出すと、天野さんが声をかけてきた。

「今日は、誰と打つんだい？」

「名人戦の一次予選で、塔矢くんなんです」

「ああ、それは……。頑張ってるね」

「はい」

あはは。負けたなって顔してる。私だって勝てる目は薄いとは思うけど、そうあからさまに顔に出されると少し悔しい。

少し話していると、塔矢くんと明日美さんが入ってきたので、一緒に対局室へと向かう。

明日美さんの相手は、混合戦で何度か二次予選まで上がったことのある人。でも、二次予選での成績はあまり良くないし、単純な実力なら明日美さんの方が上のはず。

席に座り、準備をする。

「名人戦は、お互いに勝ち進みたい棋戦だね」

「え、どうして？」

私の言葉に、塔矢くんが不思議そうに首を傾げる。

「塔矢先生と公式戦で打てる唯一の棋戦だよ」

「ああ、そうか。うん、そういう意味では勝ちたいかもね」

もっと意識してるかと思っただけど、意外と淡泊なのね。

でも、今はそれより何より。

「何にしても、塔矢くんと打てるのは嬉しいよ。若獅子戦から数ヶ月経ってるけど、塔矢くんだけじゃなくて私も強くなったんだよ」

「うん」

それで話を切り上げて、時間になり対局が始まる。

序盤は、穏やかな立ち上がり。佐為なら序盤から殴りに行けるかもしれないけど、塔矢くんも強引な打ち回しには案外強い。私はそういうのは苦手なので、この展開はありがたい。

しばらく打って、中盤に入る頃、お昼になる。

「藤崎さんは、s a iの碁をよく勉強しているよね」

「え？」

「打ち筋が、s a iを追いかけているのが分かる」

「まあ、s a iは凄いからね。私もネット碁も打つし、参考になるの」

塔矢くんは、私の言葉に納得しかねる様子で盤面を見つめる。

「それにしては……」

塔矢くんが言いよどむ。先をうながすと、考えながら口を開く。

「進藤もそうだが、2人ともs a iの碁について理解が深すぎるんだ。僕は当然、高段の棋士たちもこぞって勉強している。でも、すべての手を理解できるわけでもない。きみたち2人は、まるで直接手ほどきを受けているような……」

和谷くんも相当s a iが好きだけど、塔矢くんも大概だよな。

うーん、どうしたものかな。

「今の2人より、最初に打った時の進藤の方が……」

話しているうちに、深く考え始めちゃった。しかも限りなく正解に

近い。

と、横に呆れた様子の明日美さんが立っていた。

「アキラくん。お昼だよ」

「ああ。明日美さんは何か食べたいのがある？」

上の空で返事をする塔矢くん。一瞬経ってから、あつと気付いたように私にちらりと目を向けてくる。

気にしてないよって顔で、明日美さんの回答を待つ。

「うーん。暖かいものが食べたい」

「じゃあ、うどんとか？」

私が提案すると、2人とも賛成して食べに行く。

佐為の話も呼び方の話もうやむやにしたまま、午後からも対局が進み、私の投了で終局した。

「あー、また負けたあ」

「でも、確かに藤崎さんも凄く強くなってるよ」

「昼から、ちよつと空気が変わったよね」

「そうかな。あのままだと上手く打たれると半目勝負になりそうだったから、気合いを入れて臨んだからかな？」

昼までは練習とさして違和ない感じだったのに、午後からは空気がピリピリとしていた。良い手だと思っただけでも、石から手を離れた瞬間に、間違いだったんじゃないかと不安になった。そのせいで、先をちゃんと読む時間がなくなって、焦って自滅。

「本気で打ってくれて、ありがとう」

「手を抜いて打てるような、楽な相手じゃないから。読み合いは高段者に匹敵するんじゃないかな」

「どうかな、そこまではなかなか。でも、今日は本当に勉強になりました」

プロ1年目、早い段階で高段者と同等以上の気迫を経験できたのは、とてもありがたい。

こればかりは、練習だと分からないもんね。

「そうだ、明日美さんは？」

「どうかな、先に終わっていたけど」

部屋を出て、明日美さんを探すと、廊下で私たちを待っていてくれた。

「どうだった?」

「私の負け。塔矢くん強すぎる」

「ふふん。大したものですよ」

「どうして明日美さんが自慢げなの」

冗談を言い合いながら、明日美さんにもどうだったか聞いてみる。

「勝ったよ!」

「やったあ! 当たるところまで頑張ろう!」

「うん。早く当たりたいような、当たりたくないような」

「あはは。どうせなら決勝でやりたいね」

「いやいや。いくらなんでも、決勝まで残るのは難しいよ」

弱気な発言をする明日美さんに、塔矢くんが励ましの言葉をかける。

「確かに、女性でも三次予選まで進んだことのある人はいるけど、凄く強いって人は少ないよ。組み合わせにもよるけど、勝ち上がる可能性は十分にあると思うよ」

棋院で2人と別れて、1人で家に向かう。

「ヒカル」

「おかえり。どうだった?」

ヒカルが、学校帰りの格好のまま、駅前で待っていた。

「負けちゃった」

「そっか」

残念だったとも、どんな内容だったかとも言わず、ただ横を歩いてくれる。

「こんな時だけ優しいなんてずるい。」

「今日は、俺とあかりで打つぞ」

順番では、今日はヒカルと佐為で打つ日だけど、入れ替えてくれるらしい。

「ん。ありがとう」

「別に、俺がお前と打ちたいだけだから。塔矢に負けたまま帰るより、俺に負けて帰る方がいいだろ」

「あー、なんで勝った気でのよ。私もヒカルに勝って、気分を入れ替えて帰りたいもん」

不器用なように優しいヒカル。今日は、思いつきり甘えちやおう。

第49手 プロ1年目 その9

名人戦の予選で塔矢くんに負けて少し経った頃、女流棋聖戦のトーナメント組み合わせが棋院から送られてきた。

明日美さんとは、2回勝てば準決勝で当たるけど、私の2回戦の相手に元女流本因坊がいる。明日美さんのブロックは、三段までの若手が多い。

今の女流本因坊と女流名人は、別のブロックにいるので、決勝までいかない当たらない。

「2回戦が大変そう」

「あかりちゃん、頑張つて。勝つ自信はないけど、私もできるだけ頑張るよ」

プロ試験中なので人数が少ない若手の研究会で、明日美さんと一局打ち終わってから雑談に興じる。

自信がないなんて言いつつ、塔矢くんの家に行つて打ってもらつているらしい。この碁会所で2人だけで打つと、市河さんの目が怖いもんね。

「塔矢くんの家で打てるのいいなあ」

「あれ、浮気？」

ちらりとヒカルを見ながら、明日美さんがからかってくる。こういう時の明日美さんは、ムキになると喜ぶので、軽く流す。

「まさか。塔矢くんの家だと、塔矢先生にもアドバイスいただいたりできるんじゃない？」

「うーん。いない時も多いけど。時々教えてくれるよ」

塔矢先生に教えてもらえる機会が多いのは羨ましい。でも私には聞こえないけど、ヒカルが塔矢先生に教えてもらう時があれば、きつと佐為が羨ましがらるだろうな。

塔矢くんとヒカルの対局が終わったようで、激しく言い合いながら近寄ってくる。本当に仲が良いよね。

そして、こちらの話に反応して、塔矢先生の情報を教えてくれた。「海外に行く時も、母さんと一緒に出ていってるよ。今は無理だけど、

参加する棋戦が減ってそれなりに余裕が出てくるからね」

「へえ」

「ふーん。塔矢先生、そのうち俺とも打ってほしいな」

今は名人戦の挑戦手合いが間近に控えているから、海外旅行をする暇はないだろう。

佐為と塔矢先生は、退院した後も1回打っている。成績は佐為の3戦全勝だけど、ほとんど互角の勝負。

ヒカルも打ってもらおう機会があればいいんだけど、今のところうまく時間が合わせられず、対局できていない。

「それよりプロ試験の方、本田さんは厳しくなってきたね」

市河さんが近づいてきたからか、明日美さんが話題転換を試みる。私も気になっている話題なので、素直に便乗する。

「うん。可能性はあるけど、上位が崩れないね」

「和谷も頑張ってるよね」

プロ試験は後半にさしかかり、合格者は伊角さん、門脇さん、越智くん、和谷くんに絞られている。本田さんや小宮さん、フクくんは黒星が増えてしまって合格争いからは脱落している。正確には本田さんはまだ脱落したわけじゃないけど、上位4人のうち2人が急に崩れるとも思えない。

「全勝者はいなくて、1敗が伊角さん、和谷、越智、門脇さん。その下が4敗の本田さん、5敗の小宮さんと片桐さんだね」

「和谷、受かればいいのになあ」

横からヒカルが会話に混ぜてきた。うん、しげ子ちゃんの喜ぶ顔も見たいし、ぜひ受かってほしい。

「その4人同士で当たってないのは、伊角さんと和谷くん、伊角さんと門脇さんだね。越智くんは本田さんとの対局が残ってるけど、そこで負けてもプレーオフには出られるはず」

越智くんが一番合格の可能性が高い。逆に、2人との対局が残っている伊角さんは大変だ。

そんな話もしつつ、碁の勉強で日々が過ぎていった。

そして10月に入り、女流棋聖戦のトーナメントが始まった。

1回戦は問題なく勝ち、2回戦がある木曜。

朝、ヒカルが学校に行く時間に合わせて家を出る。

「あかり。今日が正念場だな」

「うん。相手は三次予選にも残ったことがある人だからね」

「大丈夫、普段通りに打てたら勝てるさ」

ヒカルにそう言ってもらえると、勇気が湧いてくる。

「ヒカルは来週の木曜が二次予選の1回戦だよ。一足先に私が木曜の勝ち星をもらっておくね」

「ああ、すぐに追いつくから待ってる」

よし、気合い入れて頑張ろう。

棋院に着いて中に入ると、森下先生が部屋の前で知り合いの方と話をしていた。

「おう、藤崎」

「おはようございます」

2人に挨拶して、頭を下げる。今日、森下先生は名人戦の三次予選。あと2つ勝てば、リーグ戦という正念場だ。

研究会でも森下先生の奮闘は話題になっていて、塔矢先生と対局するには名人戦で勝つしかないと決まってから、名人戦の予選は特に気合いを入れていたという話だ。

でも、森下先生は絶対に認めない。ふふ、凄く意識しているのに違うと言いつ張るとか、可愛いところあるよね。

可愛いとか本人には絶対に言えないけど。

「なんだ、緊張しているかと思っただが、平気そうだな」

「緊張してましたけど、森下先生の顔を見たら落ち着いてきました」
「そうか」

「森下先生も頑張ってください!」

「ああ。何年かぶりだが、残りたいもんだ」

森下先生は棋力も高いし、もっと活躍できると思うんだけど。体力方面ではちよつと陰りが出てくる年齢だから、全部の棋戦を同等に力

を入れるっていうわけにはいかないだろうけど。

ともかく、いったん席に向かい荷物を置く。

念のために、碁笥の確認もしておく。極稀に両方とも白石だったり、両方とも黒石の時があるから、事前に確認しておかないとね。

森下先生のところに戻って話しながら時間を過ごしていると、開始時間が近づいてきたので、話を切り上げて席に向かう。

「あなたが藤崎さんね？ 今日よろしく」

「よろしくお願いします」

先に相手が座っていて、こちらを見極めようとしてか、睨むように見つめながら声をかけてきた。

でも、うん。気圧されるほどの気迫じゃない。笑顔で挨拶をして席に座る。

ニギリの結果、私が後手で勝負が始まった。

女流棋聖戦は、1手30秒なので考える時間はあまりない。

何手も先を読む力より、直感でより良い手を探したり、ミスをしないうように注意が必要なんだけど、私はゆつくりと考える方が得意というか、直感に頼って打つのは苦手。だからヒカルとたくさん打って鍛えてるけど、苦手分野なのは間違いなかった。

でも、今日は凄く調子が良い。相手は強いし、ちよつとの失敗で一気に形勢が傾く危険性があると思っていたけど、不思議なくらい、盤面が見えている。

例えば左上スミでの攻防の途中でも、全体を見て弱そうなところ、攻めるべきところが掴めている。

左上スミは互角の打ち合いだったけど、相手のアタリに対して手を抜いて、中央を攻める。まだ中央ではなく左上スミの攻防が続くと思っていたんだろう、一瞬手が止まり、どうするべきか迷ったようだけど、そのまま左上に石を置いた。

当然、左上スミは相手の地になるけど、それほど大きな損失にならない。相手の中央が薄いうちに攻め立てて、断点が多くなって決着がついた。

「……ありません」

「ありがとうございます」

少しだけ感想戦をした後、自分の師匠が今日打っていると相手に説明をして了承を得て、早々に席を立った。良い碁を打てたのは良かったけど、森下先生の状況が気になる。

様子を見ると、中盤だけど森下先生の方が良さそう。ずっと見ていて邪魔になっても悪いので、部屋を出る。

「おや、藤崎さん。もう終わったのかい？」

「一柳先生。はい、終わりました。先生は？」

「俺はまだまだ。相手が長考してるから、気晴らしにね」

一柳先生は、今日は天元戦の最終予選だったかな。確か去年は、準々決勝で緒方さんに負けてシード権を逃していたはず。

「どうですか？」

「そうだね、まだ途中だから気を抜けないけど、手応えは良いね。と言っても、悪かろうが打つしかないんだけどな。はは」

愉快そうに笑う一柳先生。

「そういえば、プロ試験の結果は知ってるかい？」

「はい。越智くん相変わらず調子良さそうですね」

「彼は間違いなくプロになれるレベルだね。甘いところも多いけど、そりゃ若手だから当然だ。少なくともプロ試験で足踏みするレベルじゃねえな。だからこそ、最近のプロ試験突破者は要注意だと思わねえかい？」

「あはは。どうでしょうか」

うーん、そんなこと言われても、返答に困る。

一柳先生と当たれるところまで駒を進めているのは、今のところ塔矢くんだけ。塔矢くんの同期も、辻岡さんはそこそこ勝っているけれど一次予選の突破には届いていない。真柴さんは調子が悪いみたいで、結構苦戦しているし。

私たち3人は始まっていない棋戦もあるし、まだまだこれからだ。

「2年目でリーグ戦入りする塔矢くんみたいな子もいるし、キミみたいに1年目で高段者に混ざって打つ子もいる。まだまだ若手に負け

る気はないけど、少なからず意識するよな。緒方くんや芹澤くんになると、憎たらしいだけなんだけどさ」

「またそんな」

「おっと、そろそろ戻らねえと。秒読みが始まってたら大変だ」

「お話ありがとうございます。頑張ってください」

「うん。良い気分転換できたし、勝ったら談話で藤崎さんと話したおかげって書いてもらおうよ」

「いや、それは」

「あはは。冗談だよ」

慌てていると、笑いながら手を振って去っていく一柳先生。

ああもう。大事な対局のはずなのに、私をからかって遊べる余裕があるのは凄いけど、ちよつとは自重してくれないかな。

ため息を吐いて時間を見ると、今から学校に行っても最後の授業に間に合うかどうか、というくらい。森下先生の結果も気になるし、このまま棋院で待とうかな。

森下先生の対局を少し離れた場所から見ていると、いつの間にか時間が経っていたようで、やってきたヒカルにひそひそと声をかけられた。

「あかり」

「ヒカル。早かったね」

「まあ、すぐに来たから」

笑顔を向けて、ヒカルに隣を譲る。

「私は勝ったよ。森下先生ももうすぐ決まりそう」

森下先生がかなり有利な状況になっていて、ミスをしないう限り、覆る心配はなさそう。

相手も分かっているのか、かなり悔しそうにしている。

「負けました。森下さん、調子良いねえ」

「おかげさまで。徐々にリーグ戦まで行ける可能性が出てきたので、必死ですわ」

対局相手とそれなりに仲が良いようで、雑談し始めた。私は目線で

ヒカルに合図して、席を立った。

「あかり、お疲れ様。勝って良かったな」

「うん、ありがと」

えへへ。ヒカルに褒めてもらうのが何よりのご褒美だよ。

しばらくヒカルと話していると、森下先生が部屋から出てきた。

「おう藤崎。応援ありがとうよ。進藤は……藤崎の応援か？」

「えっ。俺だってちゃんと先生の応援に来たんだぜ」

「そうか？」

「だって、あかりは午前中で終わるじゃないですか」

「ははは。分かっとなる。わざわざありがとうよ」

ヒカルが先生にからかわれて拗ねている。ふふ、先生も勝って機嫌

がいいのか、楽しそう。

「俺はちよつと感想戦やってから帰るが、お前らはどうする？」

「あー、俺たちはもう帰ります。俺、学校帰りだから遅くなったらまず

いし」

「そうか。気をつけてな」

先生さようならー、と小学生のような言葉を置いて、ヒカルと一緒に

棋院を出る。

「ヒカル、帰ったら早碁で打ってくれない？」

「うん」

今日の手応えは、今までと少し違った。感覚を忘れないうちに、も

う一度打っておきたい。

……佐為と打ったら自信がなくなりそうなので、ヒカルと。

ヒカルと打った結果、搦んだ手応えは間違ってたようだったので、早

碁でヒカル相手に、5戦して3勝2敗。珍しく勝ち越せた。

「なんか、強くなってねえ？」

「なんだか、盤面がよく見えるの」

「ああ、そういう時あるよな。じゃあ、忘れないうちにもう一局……っ

てこんな時間か」

時計を見ると、かなり時間が経っている。あまり遅くなると怒られ

る。

「今日はありがと。えへへ、久しぶりにヒカルから勝ち越せたよ」

「そうか？ んー。まあ、公式戦で当たってないから、なんとも言えねえけど、お前だって塔矢以外には負けてないだろ？」

「うん、まあ一応」

「俺も前は塔矢に勝ったけど、次も勝てるかっていうと、怪しいしき。俺とお前で実力差があるわけじゃないし、焦る必要はねえんじゃないか」

言ってることは正しいけど、ヒカルが励ましてくるとは思わなかった。しかも、焦るななんて、ヒカルに似合わない。

でも、うん。ヒカルも成長してるんだなあ。もう中学3年生、15才だもんね。

「ヒカルらしくないアドバイスだね。でも、ありがと。公式戦、当たりたいね。大手合いは今年当たらないけど、来年は当たるかなあ」

「どうだろうな。その前に、何かの棋戦で当たるんじゃないかな」

確かに、来年以降は勝ち進んだ結果次第だけど、今年は当たる可能性が十分にある。

「手加減なしだよ」

「当たり前じゃん」

囲碁を打つだけではない充実した時間を終えて、家に帰った。

来週はヒカルと高段者との本因坊戦の二次予選が始まるし、私も再来週に同じく本因坊戦の二次予選を控えている。再来週言えば、名人戦では公式戦で再びヒカルと塔矢くんの対局がある。

プロ試験も終盤だし、何かと気になる出来事が多い。気を抜かず、しっかりと頑張ろう。

第50手 プロ1年目 その10

ヒカルが初めて高段者と打つ日。ヒカルの相手は、以前詐欺をしていた御器曾プロ。高段者とはいえ、黙って負けるわけにはいかない相手だ。棋院に到着した後も、ヒカルに応援を飛ばす。

「ヒカル、絶対勝つてよ。あんな人、偉そうにさせちや駄目だよ」
「おう。でもお前、えらく怒ってるよな」

ネットで評判も見たからね。あそこまで嫌われてる人も珍しい。実力面でもこれまでリーグ戦入りしていないし、三次予選にもここ何年も上がってない。

それに何より、私とヒカルの初デートに水を差した人だし。今も許してないもん。

「相手が誰だろうと、負ける気で打つ碁なんかねえよ」

「佐為でも？」

「うっ。毎日打ってるのは勉強のためだろ。本番で打つ時があれば、佐為にだってだなあ……」

軽くからかうと、むきになって反論してくる。ふふ、こわばっていた顔が、ようやく緩んだ。

そんな雑談をしているうちに対局時間が近づく。

「じゃあ、私は下にいるから。がんばってね」

「任せとけ」

ふふ、頼もしい。あの様子だと大丈夫そうだ。さて、ヒカルは対局場に向かったし、私も時間を潰さないで。

売店で碁の月刊誌を買って読んでいると、天野さんから声がかかった。

「天野さん。どうしたんですか」

「ちようど良かった。藤崎さん、来週二次予選あったよね」

「はい」

「終わったらインタビューさせてもらえるかな」

「いいですけど……。単なる二次予選ですよ」

女流の方で挑戦者になったわけでもない、ただの新人なのにわざわざインタビュー？

不思議に思つて首を傾げると、言い訳のように付け加えた。

「私は、キミと進藤くんに注目していてね。塔矢名人や一柳棋聖、桑原本因坊といったタイトルホルダーが気にしているからというのもあるけど、私自身も、キミたちには期待してるんだよ」

そんなわけで、インタビュー記事を書きたいとのこと。話題性は低いかもしれないけど、紙面の片隅に新人にしては珍しい一次予選突破の記事があつてもおかしくはないだろうし、そもそも断る理由もないし。

了承すると、ほっと安心したように笑顔で去っていった。なんだろう、普段と少し雰囲気違った気がしたけど。

そしてヒカルの対局が終わったようで、対局相手の御器曾プロが不機嫌そうに出て行った。ヒカルもすぐに来るだろうと思っていると、なかなか出てこない。

どうしたのかな、と対局場に行くと、出口のところで天野さんと話していた。

「あかり。なんかインタビューしたいって言われてさ」

「急で申し訳ないけどね」

私だけじゃなくて、ヒカルにもインタビューしたかったのね。

横で聞いていて構わないって言われたので、一緒に話を聞く。ヒカルが余計なことを言わないか心配だったけど、初めての高段者との対局の感想も含めて、無難な受け答えに終始していた。

「じゃあ、最後に。今のプロ棋士で、一番対局したい相手は？」

「ええと。あかりとも公式戦で打ちたいし、塔矢とも当然打ちたいけど。今、一番対局したい相手は塔矢名人です」

うん。打ちたいよね。他の棋戦に出なくなったせいで、世間では名人戦で負けると引退だろうと言われているけど、そんなのは関係なく、塔矢先生と打ちたい。

でも、それはちよつとまずい。

「あの」

「あかり、何かあんのか？」

「塔矢先生と打ちたいのは分かるんだけど。……森下先生が怒らない？」

「……あ」

忘れてた、と顔に書いている。天野さんも苦笑しているから、言いたいことは分かったんだろう。森下先生は、塔矢先生をライバル視してるから。

「えーと、じゃあどうしようかな」

「無難に行くなら、森下さんか、桑原本因坊あたりかな？」

天野さんの助け船に、ヒカルが乗る。

「うーん、それもなあ。塔矢なら大丈夫かな？」

「どうかな。塔矢先生よりいいと思うけど」

「あはは。うん、じゃあそういうことにしておくね」

森下先生も、ヒカルとお互いにライバル視している塔矢くんなら文句も出にくいだろう。そこで森下先生と言わないのは、多分研究室でも対局したことあるからかな。

なんとかインタビューが終わり、家路につく。

「ヒカル、お疲れ様。対局はどうだった？」

「相手もある程度警戒してたみたいでさ。しっかり打ってきたけど、地を守って勝てると思ってたみたいだから、それほど苦労しなかったよ」

「そう。後でどんな碁だったか教えてね」

「おう。佐為も色々と言いたいことあるみたいだから、一緒に感想戦やろうぜ」

ヒカルが勝って良かった。来週は私も二次予選の1回戦。相手は格段に強くなる。負けないように頑張ろう。

そして、私の対局日がやってきた。相手は松永六段。段位こそ六段だけど、先週の御器曾七段より実力はありそう。

勝てるかどうか分からないけど、つい先日、塔矢くんが王座戦の二

次予選で勝っている相手。手応えは掴んでおきたい。

私が1年目の新米だからか、気楽そうな態度で接してくる。意識して油断させる気はないけど、勝手に油断しちゃってるのは知らないよ。塔矢くんにも負けたはずなのに、懲りていないというか、あれは別格と思っっているのか。

「よろしく願います」

私が後手で対局が始まり、相手はゆったりとした手を打ってきた。後手でコミがあるから、本当なら無理して攻める必要はないんだけど、最近ヒカルや佐為と一緒に研究している手を試してみたかった。単に守るだけだと、不利になってしまうと無理攻めするしかなくなる。事前に攻めておくと、いざ劣勢になった時の足がかりになる。

とはいえ、攻める必要のない段階で攻めるから、他が薄くなるのは確かだし、失着や緩手が許されない難しい碁になるのは確か。でも、今のままで高段者とまともに勝負するには、経験も足りない。たくさん経験を積むためにも、1つでも多く勝って、対局機会を増やしたい。そういう意味では、まだ1年目なのに二次予選まで上がったのは大きい。駄目で元々、砕ける覚悟で当たっていける。

「むう」

押しの強い打ち筋に戸惑っているのか、相手の方が時間をかけつつ進んでいく。地に辛い打ち方をされていると勇み足だったかもしれないけれど、相手が広く構えていたので、私の布石が上手く働いてくれた。

「そんな、まさか……」

ありえない、といった風につぶやく松永六段。松永六段がどの程度碁の勉強をしているのか分からないけれど、ここ数年に限れば、環境に恵まれたとはいえ、絶対に私の方が勉強している。

布石の段階で油断していたというのもあって、案外あっさり勝利を収めた。

「ヒカル、勝ったよ」

「おう。やったな」

対局していた大部屋を出て、ヒカルと合流する。昼の段階で盤面は見ていたけど、あらためて勝ったと伝えて喜び合う。さて、天野さんはどこかな。

「藤崎さん。もう終わったの?」

「はい。天野さんが準備できてたら、今からでいいですか?」

「当然大丈夫だよ。悪いね」

結果を聞かれて、勝ったと伝えて賞賛される。えへへ、ありがとうございます。

ヒカル同様、無難に受け答えをして、最後に誰と対局したいか、という質問に対して。

「私は、ヒカルと対局したいです」

「進藤くん?」

「はい。他の誰より」

よく練習しているんじゃない? と思われるかもしれないけど、公式戦でヒカルと対局するのは、逆行した5才の頃からの夢なんだ。

森下先生も、私がヒカルと一番対局したがっているのは知っているし、問題ないはず。

そうこうするうちに、10月も下旬に入って秋らしくなってきた頃、プロ試験本戦の全日程が終了した。その頃には、北斗杯の噂も出始めている。私も、天野さんからインタビュ記事の下書きを見せてもらった時に聞いた。

ともあれ、プロ試験の終了時点で合格が決まったのは2名。1敗を維持した越智くんと、同じく和谷くんや門脇さんに勝った伊角さん。

和谷くんと門脇さんは2敗で並び、プレーオフになった。

「和谷と門脇さんかあ。あかり、どっちが勝つと思う?」

「門脇さんが、去年からどれくらい強くなってるか分からないけど、和谷くんの成長を考えると棋力では負けてないと思うよ。本戦では門脇さんに負けたけど、1回だけで優劣がつくわけじゃないし。2敗を維持できたのも、実力が上がっているからだし」

「そうだよな。和谷には勝ってもらいてえな。森下先生の機嫌を考え

てもさ」

「あはは。ほんとにね」

森下先生、和谷くんが伊角さんに負けた後、凄く機嫌が悪かったもんね。それに、しげ子ちゃんにも喜んでもらいたい。

そんな話をしながら、プレーオフの当日、ヒカルと一緒に棋院へと足を運んだ。

プレーオフが行われる小部屋を覗くと、和谷くんが座っていた。ヒカルと顔を見合わせると、頷いたのでヒカルに譲った。

「和谷」

「おう、進藤。藤崎も。わざわざ来たのか」

「気になるからな」

「絶対に勝って、追いついてやるからな」

2人で仲良く談笑するのを見てみると、自然と笑みが浮かんじやう。後から弟子入りしたヒカルが先にプロ入りしても、腐ることなく真面目に囲碁に向かう姿勢は森下先生も褒めていた。

あまり話し込んで集中力を削いだらまずいので、適度なところで話を切り上げる。

対局が始まり、お互いに布石を打つのをじっと見守る。秀策を意識した布石を打つ和谷くんに対して、地を意識した布石を打つ門脇さん。

門脇さんは、年齢相応に落ち着いた碁を打つ。我慢強いというか、こちらがミスをするまで、決して無茶な打ち方はしない。和谷くんもそれが分かっているからか、序盤のうちから左上スミで激しく打ち合いが始まった。

「ヒカル、気付いてる?」

「ああ。ichiryu相手に佐為が打っていた新しい布石だよな」

「一柳先生でしょ」

まったく、ヒカルってば。ネット碁でしょっちゅう佐為と対局するせいか、すっかりネット上の呼び方が定着しちゃってる。

今はまだいいけど、いずれヒカルが一柳先生と対局するまでには正

してもらわないとね。

門脇さんは知らなかったようで、和谷くんのペースで進んだ。

「佐為も、和谷が頑張って自分の碁を勉強しているのが嬉しいみたいだぜ」

うわっ、びつくりした。ヒカルってば、急に耳元でつぶやくんだもん。佐為のことを他の人に聞かれたらまずいからっていうのは分かるけど、ドキドキしちゃった。顔、赤くなってないかな。

「負けました」

少し意識が碁盤から離れているうちに、対局が終了した。和谷くんが涙ぐんでいる。門脇さんには悪いけど、勝った和谷くんを見ていると、本当に良かったと安心できる。

「来年、必ず合格して、きみにも伊角くんや越智くんにも、リベンジするから」

「……今日は勝ちましたけど、俺の方が上って言えるような差はないですから。負けないように、頑張ります」

毎年、強い人が合格していくんだから、門脇さんほど強ければ来年以降楽になる可能性は高い。もちろん、塔矢くんやヒカルみたいに、凄く強い人が急にプロ試験を受ける可能性もあるけど。

そのまま森下先生の家に行つた和谷くんと別れて、ヒカルと一緒に帰る。

「良かったね、和谷くんが勝って」

「ああ、そうだな。そういや北斗杯って、越智や和谷も権利あんの？」
「18才以下のプロ全員が対象だから、権利はあるはず。どうやってメンバーを決めるのかは知らないけど。」

「誰が選ばれるんだろうね。私も、メンバー入りしたいなあ」

「うん。でも秀英も出るかもしれないし、俺だつて出たいぜ」

5月に行われるから、それまでに予選か何かがあるんだろう。

「そういうえば、北斗杯予選って、資格のある人が全員でやるんだよね」

「そうだろうな」

「じゃあ、ヒカルや塔矢くんとも打つチャンスだ」

「ああ、そういえばそうだな。あかりとかあ」

感慨深そうにつぶやくヒカル。嫌がってる感じじゃないけど、何が言いたいんだろう。

「お前のおかげで、こうやってプロになった部分もあるからさ。インタビューでは塔矢つて言っただけど、お前の名前を出した方が良かったかもな」

嬉しい。まさかの言葉に、どう返事したらいいのか分からない。

「先月はあかりの方が勝率良かったけど、今月は俺の方が勝ち越してるからな。今やれば勝てそうだし」

「あー、そういうのずるい。そういえば森下先生の話でも思ったけど、本番と練習じゃ全然違うじゃない」

「そりゃ分かってるけどさ」

塔矢くんとも打ってるし、練習とは全然違うって分かってるだろうけど、少し甘く考えている気がする。

こればかりは言っても分からないし、そもそも私も、知識では知っているけれど、理解しているわけじゃない。経験が大事な部分だし、もっと高段者と対局を重ねたい。

「早く、プロアマ混合のネット棋戦も始まればいいのにね。佐為との真剣勝負も、いつかやりたいな」

「公式戦じゃなくても真剣勝負はできるだろ、それこそ塔矢名人と佐為の対局みたいに」

「それはそうだけど、いざ打つとなったら、なかなか難しいよ」

佐為も、塔矢先生ならともかく、私が相手だと本気で打つって言っても無意識で手を緩めそうだし。

「佐為も、いつか真剣勝負の場で、俺やお前と打ちたいってよ」

「うん。いつか打とうね。ヒカルが佐為と打つ時は、ちよつと難しいけど私が佐為役だね」

「あ、そうなるのか。面倒っていうか、ややこしいけどしようがねえな」

まだしばらく先だろうし、ノートパソコンを用意して、2台並べて打つのも楽しいだろう。

そんな話で盛り上がっていくうちに、夜も更けていった。

第51手 プロ1年目 その11

和谷くんたちが合格してしばらく経った頃、明日美さんが女流棋聖戦で負けを喫した。明日美さんが有利に進めていたけど、堅実に行こうとしていたところを相手が荒らしに来て受けきれずに薄い右辺を突破されて、負けに繋がっていた。

「悔しい。勝てばあかりちゃんも打てたのに」

「惜しかったね。でも全体的に見て、明日美さんが崩れたわけでもないし相手が上手く打った感じだね」

「うん。強かったよ。場慣れしてる感じもあったし」

明日美さんが負けた対局があった週末に、残念会と称してケーキバイキングに足を運んだ。こればかりは、塔矢くんじゃ厳しいだろうから私の出番だね。

アップルパイにチーズケーキ、モンブランと続けて食べながら、会話に花を咲かせる。

「対局の結果を見て、塔矢くんは何か言ってた？」

「うん、終わった後にも相手の方と検討したけど、それを踏まえてアキラくん色々教えてもらったよ」

どんなアドバイスをもらったかを聞き終えてから、別の話題に移る。

「そういえば、天野さんが関西に行くみたいなの」

少し前にインタビューを取りに来たとき、様子が変だったので聞いてみたら、関西の上層部の人が体調不良らしく、急遽天野さんが穴埋めに行く必要が出たとか。

「ふーん。変な取材が増えなければいいけど」

「あはは。明日美さん美人だから、若い人が天野さんの後釜になったら大変かもね」

笑ってからかうと、明日美さんもため息まじりに言い返してくる。

「私のことより、あかりちゃんこそ気をつけなよ。囲碁を打ってる時以外は、ただの可愛い女の子にしか見えないんだから。内面はともかく」

「うん、気をつける。いざとなったらヒカルに守ってもらおうよ。明日美さんも、何かあったら塔矢くんに相談しなきゃね」

「それ、変に大ごとになりそうだね……」

相談して、もし塔矢くんが怒ったりしたら、確かに大ごとになりそう。ヒカルが騒ぐ分には、またかで済みそうだけど。

人徳というか、なんというか。ちよつと大人っぽくなってきたとはいえ、ヒカルはまだまだ子どもだよ。

「そういや、和谷と越智が合格したし何かお祝いしてあげる？」

「そうだね。そうだ、お祝いと言えよね。しげ子ちゃんのお祝いつていうのがね……」

明日美さんにしげ子ちゃんの面白いエピソードを話して爆笑をもらったり、碁会所での研究会でサプライズパーティーやる計画を立てたり。

後日、塔矢先生と市河さんにも相談して了承を得て、準備にいそしむ。

12月に入り、女流棋聖戦の本戦決勝の日になる。

明日美さんとの対局や、その他過去の棋譜も研究して、ヒカルにも佐為にも鍛えてもらった。

「あなたが藤崎さんね。よろしく」

「よろしくお願いします」

相手は女性には珍しい、力碁を好んでいる棋風。持ち時間が一手30秒の対局だと特に荒れやすいけど、私もヒカルとさんざん打ってるし、勝負になるはず。

私が先手で対局が始まり、お互いの布石もそこそこに序盤から相手が戦いを仕掛けてきた。相手の土俵で戦う必要なんてないので、のりくらしとかわしつつ相手のミスを待つ。

「あっ」

相手が、小さくつぶやく。ミスでもないような場面で。惑わせようとしたのかもしれないけど、とりあえず無視して打ち進める。

そうするうちに、相手は地が確保できていないので、無理な手が目

立つようになってきた。

冷静に、自陣を守りつつ相手の石を攻め立てる。あとは応手で間違えなければ、勝ちが見えてくる。

「……負けました」

考慮時間も使い切るくらいギリギリまで考えていたけれど、勝てる道筋が見つからなかったようで、相手が負けを宣言した。

「あかり」

「ヒカル！ 来てくれたんだ」

対局が終わって部屋を出ると、ヒカルが待っていてくれた。あれ、でもまだ授業をやっている時間だね。

「先生に了承はもらったぜ。囲碁の用事で、外せない事情があるってさ」

「そうなの？ ならいいけど、学校に行くのもあと少しだし、ほどほどにね」

そんな話をしながら棋院を出ようとすると、入り口付近で声がかかった。

「あ、きみが進藤くん？」

「はい？」

ヒカルが振り向くと、あまり見覚えのない男性だった。ヒカルと一緒に首を傾げていると、出版部の古瀬村さんと名乗った。

へえ、この人が天野さんの後釜か。

「韓国のプロで、洪秀英って子を知ってる？」

「秀英！ 知ってるよ。あいつもプロになったの？」

ヒカルが、プロになる直前に碁会所で対局したと伝ええると、古瀬村さんは嬉しそうにしている。

北斗杯で日本に勝ち目が薄いと聞いていたようで、不安だったようだ。

「出場選手って、どうやって決めるか知ってますか？」

「ん、きみは？」

「藤崎です。藤崎あかり。そっちの進藤ヒカルくんと一緒に、今年プ

口になりました」

「へえ。そういえば聞いたことあるような」

この人、考えたことがそのまま口に出るといえるか、そそっかしい感じだけど大丈夫かな。

「それで、選手の決め方だよね。うーん、渉外部の人ならある程度把握してると思うけど、僕は出版部だから知らないなあ」

「そうですか、ありがとうございます」

残念ながら知らなかったようで、首を横に振られた。私の話はそこに、古瀬村さんはヒカルと話を続ける。

「それにしても、日本も塔矢くんに進藤くんがいれば、十分に勝ち目あるんじゃない」

「あー、まあ出られるかどうか分かりませんがね。あかりだっているし、奈瀬や今年受かった越智や和谷だって強いし」

「でも塔矢くんはリーグ戦入りだし、そんな塔矢くんに勝った進藤くんとは比べものにならないでしょ？」

古瀬村さんの言葉に、ヒカルが怒っているのが分かる。

あーあ、この様子じゃ、今日は機嫌が悪そう。

古瀬村さんにすれば、自分が持ち上げられて悪い気はしないと思ってるんだろうけど、そんな単純な話じゃないよね。

「あかり、行こうぜ。検討の時間もなくなっちゃう」

「うん。古瀬村さん、情報ありがとうございます」

ヒカルに手を取られて、棋院から出る。

これまで出版部には天野さんがいて、新聞に載せて良い内容と駄目な内容の線引きが上手かったけど、これからは気をつけなきゃいけない気がする。出版部任せじゃなくて、自分できちんと線引きしておかないと。

「なんだあれ。あかりの成績知っててあんなこと言ってるのかな」

「私の成績はともかく、あまり囲碁界について詳しい感じじゃなかったね。小さい頃から囲碁を打っていて、大人になって棋院で働くって人もいるけど、古瀬村さんはただ選んだ企業のひとつが棋院だったって感じだね」

それは別に悪いってわけじゃない。ただ、古瀬村さんの口の軽さに、ちよつと不安が残るっただけ。

まあいいや。そんなことより、ヒカルの言葉じゃないけど検討したいし。

「早く帰ろう。今日は、ヒカルと佐為の日だよね」

「おう。今日こそ勝つてやるぜ。……うるせーな、分かってるよ」

ふふ、かわいい。佐為と楽しく話してるヒカルは、中学3年生とは思えない幼さがある。今も何を言われたんだか。

そんな話をした翌日、塔矢先生の研究会の帰りに、明日美さんから相談を受けた。

「誕生日プレゼント？」

「うん。アキラくんが、来週誕生日だから」

「そうだったね。候補はあるの？」

「候補っていうか。最近はリーグ戦もあるし、スーツを着る機会も増えるからネクタイとかどうかなって思ってるの。ありきたりだけどね」

恋人でもないのにネクタイを送って、変な目で見られたくないってところかな。

でも、それこそ今さらだよね。

「良いと思うよ。勘違いされて困るならともかく、明日美さんはもつとアピールした方がいいんじゃないかな。塔矢くんって、ヒカルと一緒に結構鈍感そうだし」

「そうなの。囲碁ばかりやってたからか、そういうことに疎いよね。私も似たようなものだけどね」

プロ試験に受かるまでは、それどころじゃなかった、と付け足す。

うんうん。塔矢くんは意外と押しに弱そうだし、明日美さんはドンドン攻めた方がいい。決して面白がってるわけじゃない。

「私も来年はネクタイにしようかな」

「誕生日まで待たなくても、クリスマスに贈れば良いんじゃないの？」

「もうマフラー編んでるもん」

ヒカルが明るめの色が良いっていうから、明るめのオレンジ色で編んでみた。柄は入れずにインシヤルだけ大きめに。

隠そうと思えば隠せるし、チラツと魅せたりもできる。外套に合わせて使い分けられる。

「はいはい、ごちそうさま。あ、そういうえば話は変わるけど、北斗杯の予選、どうやらトーナメントらしいわよ」

「え、誰に聞いたの？」

つい先日、出版部の人から知らないって言われただけに、気になって首を傾げると、明日美さんがふふんと胸をはった。

「昨日、棋院で北斗杯の予選のスケジュール管理してる人が話していいね。1月に東京で代表を決める予選をやって、4月に東京4人、関西棋院とか別の棋院4人で決定戦とか言ってたよ」

明日美さんの説明で大まかに理解できたけど、3人を決めるのは難しそうな気がする。

それにしても、予選があつて良かった。どうやって決めるのか不明だったし、3人を棋院が決めちゃうと指をくわえてみているだけになるところだったね。

「8人から3人選ぶの？」

「え？ うーん、どうなんだろうね。近くで聞いていただけだし」

「そっか。でも1月に予選なら、そろそろスケジュール調整も兼ねて連絡が来そうだね」

ヒカルや私、明日美さんもだけど、特に塔矢くんは対局が増えていて、凄く忙しくなってきた。スケジュールを合わせるだけでも簡単じゃないはず。

「予選にしても本戦にしても、当たり前運が大事になりそう」

「そうだね。ヒカルと一緒に出たいから、ヒカルとは当たりたくないな」

「実力を考慮してトーナメント作るなら、アキラくんと進藤とあかりちゃんは、別のブロックにしそうね」

「え、そんなことないよ。塔矢くんはともかく、ヒカルと私は実績も実力も足りてないよ」

棋力そのものも調子が良くて互角程度だし、場慣れという意味では足もとにも及ばない。

中韓の実力者に比べると、あきらかに実力不足だと思う。

「私は棋戦も負けてるのが多いけど、進藤とあかりちゃんはまだに負けなしでしょ。明らかに18歳以下で相手になる子がいるとは思えないけど。2次予選で勝ってるのって3人だけだしさ」

塔矢くんに関しては、2次予選どころかリーグ戦入りだから、私やヒカルと同じ枠に入れると失礼にあたる。

「こんなこと言うと失礼だけど、何年か前からプロなのに2次予選に進めてない人より、今年受かった3人の方が怖いよね」

「伊角さんに越智くんに和谷くん、3人とも強いからね。和谷くんに聞いたけど、伊角さんはこれまでより格段に強くなってるって言ったよ」

私の言葉に、明日美さんは驚いて目を見開く。美人だと驚いても変な顔じゃないのはずるい。

「伊角さん、また強くなってるんだ。来年、当たらないよう祈らないと」

「まあ、伊角さんは北斗杯は出られないけどね」

そう、伊角さんは年齢制限に引つかかって、北斗杯の資格がない。和谷くんや越智くんは参加するので、かなりの強敵だね。

特に越智くんは、一柳先生に師事してから地にこだわる打ち方だけじゃなくなっている。

もちろん地にこだわるのは悪くないんだけど、深いところまで読む打ち方にいいようにやられる場合も多い。

「北斗杯かあ。無理だろうけど、なれるなら代表になりたいよ」

「なりたいね」

塔矢くんにヒカル。他の棋院だと思うけど、もう1人、前世で参加していた人がいる。彼も凄く強いだろうし、当たり運を含めて壁は高い。

……明日美さんのプレゼント相談から変な方向に話が転がったけど、2人で気合いを入れて解散となった。

翌週の月曜、学校から帰り、荷物を置いてからヒカルの家に行くと、棋院から電話があったらしいとおばさんが言っている。

「帰ってきたら電話してほしいって」

「なんだろう。とりあえずかけてみるけど、あかりは上で待ってるか？」

「うん、分かった。先に上がって、準備しておくね」

気になるけど、あまり踏み込みすぎても良くない。プライベートは大事。

部屋に入ると、佐為がギリギリまで見ていたのか、週刊碁の棋譜のページが何枚か開かれていた。まだ見たいかもしれないので、すぐに展開し直せるようずらしながら重ねる。

詰碁の本も、ベッドの上に置いたままになっていたので、本棚に戻す。

「おう、おまたせ」

「ううん。何だったの？」

私が聞くと、ヒカルは少し言い辛そうにしている。どうしたのかな。

「北斗杯の予選なんだけどよ。俺と塔矢が免除だった」

「へえ。塔矢くんはスケジュール管理すら難しいくらい忙しいし、分かるけど。ヒカルもなんだ」

「若獅子戦とはいえ、塔矢に勝ったのが評価されたとかなんとか言ってた。俺が免除なら、お前も免除でいいくらいだと思っただけだな」

ああ、言いにくかったのは、私に遠慮していたからなんだね。でも、ヒカルが言うとおおり塔矢くんは別格だし、塔矢くんに勝ったヒカルを特別視するのは、何もおかしくないよね。

「成績で見たら一目瞭然だよ。私は2人に劣ってるし、3人とも棋院で決めちゃったら、他の人もがっかりするでしょ」

それでもなあ、と気にしているヒカル。私にしてみれば、ヒカルと塔矢くんが北斗杯に出るのは確定だし、2人が免除されてトーナメントで当たらないことがありがたいんだけど。

「残り1枠をかけて争う。分かりやすくいいと思う」

うん、と頷いて気合いを入れる。日程が決まったわけじゃないけど、あと一ヶ月ほど。

「意外と冷静だな。俺なんか、自分のことだけどずるって思ったのに」

「ふふ。ヒカルと違って、私は大人だからね！」

「ちえ。でも、予選でお前と当たるような事態にならなくて良かったとは思うよ」

本当にそうだね。ヒカルの横に並んで団体戦ができるチャンスは、北斗杯が最初で最後かもしれない。何が何でも、勝ちをもぎ取りたい。

「ヒカル、打とう。予選までにもっと強くならなくちゃ」

「おう。俺も油断してられねえしな。っていうか、あかりは北斗杯予選の前に、大一番があるじゃねえか」

「うん。ヒカルとどっちが先かかって思ってたけど、私だったね」

「楽しみだな。俺も早く打ちたいぜ」

来週の木曜。本因坊戦の1回戦、私は幼い頃からお世話になっている、森下先生との初対局が待っている。

第52手 プロ1年目 その12

毎日ヒカルと打っているうちに、森下先生との大一番の日がやってきた。

普段通りに起きて、準備をする。今日はヒカルも対局があるので、一緒に棋院へ向かう。塔矢くんや明日美さんも対局があるので、心強い。

棋院には早めに着いたので、森下先生が来る前に席へ向かい、碁笥の中身を確認する。既に席に座って集中している人もいるので、ヒカルと一緒に廊下に出た。

「最近は何曜の対局も増えてきたね」

「そうだな。やっぱり、相手が強い方が面白いな。……前みたいなのは勘弁だけだな」

御器曾七段との対局は面白くなかったみたいだね。

「勝っていけば大変な対局が増えるよ。言うまでもないけどね」

高段者相手だと一手の小さなミスが致命的になるのはもちろん、ちよつとした緩手でもしつかり追及してくる。それこそ、森下先生からもいっぱい聞かされている。

それに佐為との対局でも、プロになってからは厳しく最善の一手を叩き込まれている。

「あかりは、今日が今までで一番大変な対局かもな」

「うん。ずっと教えてもらってたから、森下先生の手の内は分かっているつもり。あとは、呑まれなければ勝負になるはず」

小さい頃から見ているから、森下先生が碁聖の挑戦者になった時も知っている。あの時のトーナメントを勝ち進んでいる間、ご自宅でもかなりピリピリしていたし、空気が違った。

森下先生は普段の二次予選ではそこまで勝ちに固執しないはずだけど、今日はどうだろう。

対局の時間が近付いてきて、森下先生が姿を現した。いつもと少し違い、顔つきは厳しい。

「おはようございます」

「ああ」

頷いて、小さく返してくる。勝負はもう始まっているんだ。

私も気合いを入れ直して、対局室に入った。

席に座り、あらかじめ確認していた黒石が入った碁笥を持った。

森下先生がにぎって、私が黒石を1つ盤上に置く。白石を数えると10個、私が後手。

「よろしくお願いします」

お互いにぺこりと頭を下げて、言葉をかわす。普段より少しだけ長く、でも邪魔にならないよう持ち上げる。

森下先生は厳しい顔をしたまま、早々に一手目を4の五、高目に打つ。堅実な碁を打つ森下先生にしては珍しい。隅を攻めやすくなるけど、安易に攻めると中央を押さえられて碁が潰されるかもしれない。

厚く打って小さく生きてもしようがなさそう。昔は模様の碁が苦手だったけど、最近は佐為やヒカルとずっと勉強しているから、慣れている。森下先生も思うところがあるかもしれないけど、私だって成長してるってところを見せたい。

打ち進むうちに、森下先生が地を大きく広げて、私が石を切断できるかどうか、という流れになった。一手で1箇所を咎めているだけじゃ追いつかない。

いくつか薄いところは見つかるけど、手を入れるだけ損になりそうな、明らかに罠っぽいところもある。佐為ほどじゃないにせよ、盤面で大事なところを見極めないといけない。

「……お昼ですね」

「おう。ちゃんと食べろよ」

昼の合図が鳴り、周りも思い思いに席を立ち始める。森下先生は休憩室でお弁当を食べるらしく、私はヒカルたちと一緒に外へ出た。

明日美さんや塔矢くんも一緒に、近くのハンバーガーショップで四人掛けの席に座った。

ずっと対局のことを考えても頭が休まらないので、昼は雑談で過ごす。

「そういえば、アキラくんはペア碁の大会は出るんだっけ？」

「ああ、うん。一応依頼は来ていて、受けるつもりだけど」

「ペア碁？ 何だそれ」

明日美さんと塔矢くんの会話に、ヒカルが斜め上を見ながら疑問を口にする。佐為に聞いたのかもしれないけれど、知らないんじゃないかなあ。

佐為にも分かるように、ちよつとくどい言い方になつちやうけどヒカルへと説明する。

「昔は連碁っていう言い方もしていたみたいだけどね。男女がペアになって、交互に打つの。黒の女性、白の女性、黒の男性、白の男性って順番でね」

「私にも話が来るくらいだから、あかりちゃんにも来てるでしょ？」

「うん。何ごとも経験だし、参加するつもりだよ」

「俺は来てねえな。お前らだけずるいぞ」

塔矢くんはリーグ戦入りするくらいだし、出てもおかしくない。明日美さんと私は女性の枠だから、ヒカルに比べて上位16人に入りやすい。

ヒカルも出られたら楽しかっただろうけど、ヒカルと同じペアになる確率は、あまり高くない。

「僕だって去年は出ていないさ。それに今回も早碁で2日だけの大会だから出られるけど、長くかかるようなら断っていたかもしれない」
「男性陣は結構豪華な顔ぶれになるよね。私、足を引つ張つちやいそう」

ぐてつと机に突つ伏す明日美さん。どうやってフォローしたのかな。

「賞金が出るとはいえそれほど格式の高い大会じゃないし、楽しんだ方がいいよ。1年目で2人も参加するなんて快挙だし」

「そうそう、塔矢くんの言うとおり。相性の良い人とペアになったら、案外勝ち上がりやすいみたいだし」

塔矢くんの意見に合わせて、明日美さんを励ます。元気になるような助言もできるけど、今は無理だし。

お互いプロなんだしそれなりに形になるとはいえ、交互に打つという都合上、片方が攻めたいのに片方が弱気だと話にならない。

ペア相手の考えがある程度読めたら、随分と楽になるだろう。

そんな話をしていると午後からの時間が近づいてきたので席を立つ。ヒカルと塔矢くんが先に歩き出したのを見てから、明日美さんへとひとと言。

「ペア碁、明日美さんは塔矢くんと一緒に打てるチャンスだね」

「うん。でもさつきも言ったけど、私じゃ弱いから」

「男女ペアなんだから条件はみんな一緒だし、明日美さんが1番塔矢くんの打ち方に慣れているんだから、塔矢くんにとっても最も相性が良いのが明日美さんだと思うよ」

そうやってこそそそと話していると、2人が立ち止まって待つてくれているので急いで追いかける。

棋院に戻ってから、雑談もそこそこに午後からの対局に備えて集中力を高める。

対局が進み、森下先生は中央から左辺、上辺に広く構えた。中央を荒らして分断させれば、きっと勝てる。

いつもより数段ピリピリとした空気が流れる中、お互いに打ち損じもなく手が進む。佐為ほどじゃないけど、ヒカルや塔矢くんと同等の手応え。

時々席を立ち、大きく深呼吸を挟む。飲まれたら負けるし、集中しすぎて盤面全体を見られなくなってもいけない。

コミを含めて、私が僅かに負けている。このままだと厳しいけど、ずっと森下先生の下で学んできて、好きな打ち方や嫌いな打ち方、苦手な打ち方もたくさん知っている。私は、あえて森下先生が好む展開になるよう打ち込んだ。

「むっ」

怪訝そうな顔で、森下先生が私をうかがう。ふふ、研究会で打っている時なら何を考えているんだって怒鳴りそうだよな。

ずっと重い展開だったけど、森下先生の気迫が少し緩んだ。顔付き

も打ち方も変わらないけど、私には分かった。慣れた打ち筋になると、手も自然と早くなる。

早暮になってペースを崩せるとは思っていないけど、読みが甘くなるのは間違いない。

途中で森下先生が打ち間違えたわけじゃないけど、中央を荒らした結果、森下先生の地が足りなくなつて、盤面でほぼ五分の状態になつた。

ヨセで詰められたとしても、コミの分が裏返るほどじゃない。

「これは……。ん、負けました」

「あ、ありがとうございます」

よかつた、なんとか勝てた。今までの中でも、一番厳しい対局だった気がする。

「他はまだやってるな。進藤を待つんだろ？ よそで検討するか」

「はい」

森下先生と一緒に部屋を出て、別室へ向かう。雑談のように褒めてくれるけど、今さらながら先生が本気だったのかどうか、不安になってくる。でも、そんなの聞いたら失礼だし、うう、どうしよう。

「うん、どうした？」

「いえ、なんでも」

「そうか。しかしあれだな。天野さんがいたら、俺にもインタビューが来たんだろうがなあ」

「え、天野さん？」

「あの人、えらくお前をかってただろう。師匠に勝つたとなれば、どうだったかってコメント取りに来てもおかしくねえよ」

あはは、確かに天野さんなら聞きに行きそう。物怖じしないし、森下先生相手にそんな話を聞けるだけの実績もあるし。

「本気で打ったかどうか、とか聞かれそうですよね」

あ。

失敗した、と思った時には、もう言葉を拾われていた。

「そんなこと聞かねえよ。本気で打たない理由なんか、欠片もないからな。聞くとしたら、女性初のリーグ戦入りや女性初のタイトルホル

ダーはいつになると思うか？　って感じだろう」

「え、いえいえ。さすがにそれは……」

「俺は次の名人戦の最終予選で勝って、リーグ戦入りするつもりだ。最近離れてるが、遊んでたわけじゃない。お前や進藤に刺激を受けて、かなり気合いも入ってるからな。刺激というか、追いつかれかねないって思ってたし、実際に負けたんだが。何にしろ、お前はそんな俺に勝ったんだから、もっと自信を持っていいぞ」

思っていたよりも、ずっと評価してくれていて、驚いて言葉が出ない。今までも褒めてくれていたけど、弟子としての褒め言葉だった。

対等のプロ棋士だと認めてもらえたようで、凄く嬉しい。

「……はい」

なんとか返事をして、森下先生の後ろを付いていった。

ヒカルの部屋に入って、座布団の上に腰を降ろしつつベッドにもたれかかり、頭と手を投げ出す。ヒカルがだらしねえなって顔で見てるけど、今日は疲れたんだよ。

「今日はジューズか何かにするか？」

「あ、うん。ありがと」

ちよつと待ってる、と言葉を残して、ヒカルが部屋を出る。いつも手を抜いているわけじゃないけど、今日はずっと頭を使い続けた。糖分が足りていない。鞆にチョコ入れてたかな。

「開けるぞ」

ヒカルがお盆を片手に戻ってきた。

「ほら、食えよ。晩ご飯前だけど、今日はいいだろ」

「え、ケーキ？　どうしたのこれ」

「森下先生と対局したんだから、疲れてるだろ。母さんに言って、買っておいでもらったんだ」

ヒカルがそんな細やかな気遣いをしてくれると思っただけで、一瞬思考が止まった。すぐに我に返り、お礼を言って食べ始める。

えへへ、不思議だけど普段食べるのより美味しいね。

「んで、どうだった？」

「実力自体は、正直言つて塔矢くんの方が上だと思う。もちろんヒカルも負けてない。でも重圧というか、刺すような気配はさすがだったよ。あれは2人じゃない凄みだと思うよ」

「ふうん。佐為が塔矢のオヤジと打った時みたいなものか」

「ああ、そうだね。私には佐為が見えないけど、それでもあの時は空気が変わる感じがしたもんね」

「佐為は、画面越しでも塔矢のオヤジの気迫は感じ取れたつてよ」

なるほどね。佐為だからこそ感じ取れたのか、塔矢先生だからこそなのは分からないけど、私も佐為や塔矢先生ともそんな真剣勝負が打ちたいな。

「私とヒカルは、最短でリーグ戦入りできたとして、来年の10月からの本因坊戦だね。まあ、三次予選とか簡単に突破できるものじゃないけどね」

今日は慣れている森下先生だからこそ気負わずに臨めたし、普段通りに打てた。でも、初めて打つ相手だと吞まれてしまう可能性が高い。北斗杯予選もあるし、簡単に負けるつもりなんてないけど、全部勝ち進めるわけがない。

全部に力を入れていると体力も持たないだろうし、いくつか手を抜く棋戦も考えておかないと、全てが中途半端になってしまう。

「私、混合戦は名人戦と本因坊戦、棋聖戦に絞ろうかな」

「絞るってどういうことだ？」

「他の棋戦は直前に対局相手の研究とかをしなくて、当日頑張るだけにするの。私、あまり器用じゃないし、対局が増えてくると手が回らなくなっちゃう」

「ふうん。まあ、事前の準備なんてなくても勝てばいいんだからな」

これまではそうだったけど、相手が強くなってくると、得意な戦術とかは調べておかないと不利になる。

ヒカルだって塔矢くん相手の時は普段よりもしつかりと打ち筋や戦法も研究したし、リーグ戦常連と当たるようなことがあれば、勉強するはずだし。

「私やヒカルはまだほとんど棋譜が残らないから、相手は研究のしよ

うもないはずだよ。そういう意味では、相手の研究をせずに対局に挑むのは、その時の実力を見極めるのにちょうど良いかもね」

「俺はその方がいいな」

ヒカルならそういうと思った。実力をつけるためにも、今日もしっかり打とう。今日はヒカルと佐為の日だけど、佐為の対局ほど勉強になる碁はそう多くない。特に最近は私たちも結構打てるようになってきたから、佐為も本気で打ってくれている。お願いしたら緩めて打ってくれてヨセの勉強もさせてくれるし、本当にありがたい。

「佐為は佐為で、嬉しそうに打ってるけどな。まあいいや。今日は、俺が黒でいいかな」

「ん」

白石の碁笥を受け取って、ヒカルと佐為の対局が始まった。

「ペア碁より先に、北斗杯の東京予選だね」

「うん。あかりちゃんや越智と当たらないことを祈っておくよ」

「……和谷くんならいいんだ?」

「和谷も強いけど、私は越智の方が苦手なんだよね。院生時代からほとんど勝ってないし」

「苦手意識は良くないよー」

とはいえ、本当に最近は越智くんが強い。一柳先生の教えを意識してか、最近は地に辛い打ち方だけじゃなく、大きく模様を広げる碁も打つし、ここぞという妙手を打つ時もある。

名前を忘れたけど、ヒカルや塔矢くんと一緒に北斗杯に出ていた人と並んで、相当手強い相手になりそう。

「他の棋院にも強い人がいると思うし、頑張って東京予選突破しよう」
「あかりちゃんが気にするような人がいるかなあ。まあ、東京予選は頑張るけどさ。下手したら、あかりちゃんと和谷と越智が通って、私だけ落ちるなんてことになりかねないし」

「大丈夫。実戦経験は、あの2人より明日美さんの方が多いいし、棋力も劣ってないし。今も毎日のように塔矢くんと打ってるんでしょ?」

「そこまでじゃないよ。週に4日くらいかな?」

「それ、対局や研究会がない日は毎日だよね」

十分に恵まれた環境だと思う。私の方が恵まれているのは否定しないけど。

「時々、若手研究会の後にも、ちよつとね」

「私もほとんど毎日ヒカルと打ってるけど、やっぱり気合い入るよね」

若手研究会の後だと、結構遅い時間になってるけど、細かく聞くのは野暮だね。2人とも真面目だし。

私もヒカルの部屋で碁打つ以外は何もなし、そんなものだろう。恋人になつたとはいえ、今は囲碁で強くならないと。

長話をしているとお母さんに怒られるし、今日は疲れたし、早々に切り上げると、部屋に戻った。

「今月は……厳しそうな対局はもうないかな。つてことは1番近いイベントは、クリスマスかあ」

今年のクリスマスはどうしようかな。出来れば、ヒカルとどこか遊びに行きたい。佐為は劇場で映画を見たことはないだろうし、テーマパークに行つたこともないだろう。

どこがいいか、明日にでもヒカルに相談してみよう。

第53手 プロ1年目 その13

12月末、クリスマスイブも含む3連休。2人とも都合が良かったので、ヒカルとデート。

時々一緒に出かけるけど、囲碁に関係なく何らかのイベントでのデートは初めてなので凄く嬉しい。そこそこお金は稼いでいるけど、まだ中学生だし、連休明けは学校と森下先生の研究会があるので、近場で良さそうな場所を探した。

ヒカルはじっとしているのが苦手なので、映画館は候補から外れる。テemapパークも考えたんだけど、クリスマスイブでお休みの日という、凄く混みそうな時に行くのは疲れそうで避けた。

というか、どこに行っても人が多くて大変なんだよね。そんなわけで発想を変えて、家族を巻き込んで泊まりがけで遊びに出かけた。

「へえ、結構いいな」

「調べたら、評判良かったから。作りもしつかりしてるって」

お父さんに車を出してもらって、多摩の方にあるキャンプ場へ向かう。

私もヒカルも、中学生にしては結構稼いでいるし、親孝行も兼ねて、一緒にお金を出した。

キャンプ用品なんて私の家にもヒカルの家にも無かったので、初心者に優しいように大きめのコテージを借りている。一軒家をまるまる借りるのでキャンプしている感じは薄れるけど、テントに寝袋だと寒くて厳しいと思う。

お姉ちゃんは2人で泊まりがけで出かければいいのにつて言ってきたけど、それは多分まだ早いよ。

いつもお母さんが料理を作るので、今日は私とお姉ちゃん、ヒカルの3人で作る。

朝から移動して昼はカレー、夕方からバーベキュー。分かりやすいメニュー構成だね。

薪はちようどよいサイズに切られて売っていたので、素直にそれを

買った。みんな初心者なので、無理に背伸びしても失敗するだけだから。

「飯ごうじゃないんだ」

「お米焦げちゃうし、難しいよ」

今後何度か来るようなら、その時は挑戦してみても良いかもしれない。

聞けば佐為も自然の中に行くのは久々らしく、楽しそうにしている。森の中は千年前から変わらないって。

「ヒカルも切るの手伝ってよ」

「えー、面倒だなあ」

せっかく普段と違う場所に来ているんだから、やってないことも挑戦しなきゃ。そんな理屈で、普段お母さんが作るカレーとは違うものを試してみたくて、キーマカレーに挑戦。

スマホで検索、なんて簡単にできないので、あらかじめレシピを印刷して持ってきている。移動時間を考えるとあまり時間が取れないので、結構簡単なものを選んだのは、多分正解だった。

出来上がったカレーを、みんなで食べる。どれくらい食べるかわからなかったなので、かなり多めに作っている。お母さんたちがのんびりと話をしながら食べているのに対して、お父さんとヒカルはガツガツと食べている。

「こういうのも美味しいね」

「うん。でもお姉ちゃんが来るとは思わなかったよ」

「家にも暇だから。たまにはね」

「1人でご飯作るのが面倒だったとか?」

「それもある」

ひゆう、と口笛を吹きながら遠くを見るお姉ちゃんを、ヒカルと一緒に笑う。

食事が済んで、洗い物を手早く済ませて、周りを散策に出かける。大人はちよつと休憩、なんて言ってるし、お姉ちゃんは1人で動いて言うので、ヒカルと2人。近くに川があるらしいので、そこに向か

う。

「夏に来たら、泳げそうかな」

「どうかなあ、浅いから、遊べるとは思うけど泳げるかな?」

「また違う季節に来てもいいかもなあ」

「釣りも出来るらしいよ」

「へえ、釣りねえ」

佐為も昔、何度かやっているのを見ていたらしい。でも話に聞いている限り、疑似餌やリールを見たらはしやぎそうな気がする。

「今度は、碁会所でやっている研究会のみんなに来ても楽しそうだね」

「ああ、それもいいな。でも運転できる年齢のやついねえじゃん」

「電車で来てもいいし、なんともなるよ」

なんなら、マイクロボスを運転手込みで借りてもいいし。

そんな話をするうちに、話題は囲碁に流れていく。

「そういえば、北斗杯のスケジュールってもう決まったんだよな」

「うん。関東で予選があつて、4人選ぶの。中部や関西の人も合計4人選んで、8人でトーナメント。関東のが1月末頃、全体のは3月か4月だつて」

関東で、18才以下は和谷くんと越智くんを入れてちょうど8人。1戦だけやつて、4人に絞ることになる。

「北斗杯は持ち時間が1時間30分だから、しばらくそれでやってくれないかな?」

「ああ、俺も練習になるし、いいんじゃないかねえの」

しばらくそんな話をしながら歩いていると、途中で何かの虫を見つけたヒカルが走り出した。ふふふ、大人っぽくなったと思つたけど、まだまだ子どもだね。

捕まえた虫は、しばらく佐為に自慢していたようで、満足したのか逃がしてあげていた。

「そろそろ戻る?」

「そうだな」

歩きながら、どうしても話題は囲碁に偏つてしまう。2人とも碁打ちだからしょうがない。

そのせいか、話していると打ちたくなってくる。

「晩メシ食ったら打つか？」

「うん、1局だけ打とう」

自然と手を繋いで戻ると、お姉ちゃんに冷やかされた。お父さんは見てない振りしている。往生際が悪いなあ。

そんなことを思いながらお母さんたちと野菜を切って、ヒカルはコソ口の準備。

手軽にご飯を済ませると、マグネットの碁盤で打ち始めた。

「また囲碁？」

「うん。また囲碁」

お姉ちゃんが呆れた様子だけど、こればかりはしょうがない。ヒカルは当然、私も碁打ちなんだ。

ちよつと熱中しすぎてお母さんに怒られたのは失敗だったけどヒカルも楽しそうだったし、泊まりがけデートは正解だったと思う。

そして年末年始が過ぎて、年明け早々に研究会を開いた。

年明けの今回から伊角さんも参加している。そして新年早々ということもあり、全員参加できる日に集まった。

市河さんやお店の常連にも挨拶をしていると、誰からともなく、話題が上がった。

「研究会の名前？」

「うん。俺が前まで行っていたのは九星会だし、誰か先生がいる研究会だと、その名前になるだろう？」

言われてみると、確かに。若手研究会？ 今はそうだけど、年齢を制限したくないし、私たちもしばらく経てば若手じゃなくなる。

「藤崎研究会でいいんじゃないかねえの」

和谷くんが、当たり前のように提案してくる。いやいや、何を言っているの。

「良いと思う。僕も藤崎さんに誘われて参加したようなものだし」「んじゃそれで」

「ちよ、ちよつと待つて」

塔矢くんが同意して、ヒカルが決定させる。いや、でもそれは困る。実力が伴ってないのに私の名前なんて無理。

「塔矢研究会だと、塔矢先生と被るしさ」

「それなら、進藤研究会とか」

「だって、俺はメンバー集めてないし」

明日美さんに助けを求めて目を向けてみる。

「あかりちゃん、藤崎研究会が嫌なら、あかり研究会になるくらいしかないと思うよ?」

「悪化してるよ。それでいいなら、アキラ研究会とかは?」

「あかりちゃん、往生際が悪いよね」

私以外、それでいいみたい。もうちよつと面白い名前にしてみたいけど、私個人のことじゃないから言い出しにくい。

「よし、それじゃあ名前が決まった記念と新年つてことで、全員で総当たりのリーグ戦とかやらねえ?」

和谷くんの提案に、今度は私も含めて全員が賛同する。リーグ戦、面白そう。

さつそく組み合わせ表を作っていると、市河さんの提案で壁に貼ることになった。お客様が見ても楽しめるようになって。

実際、その場にいた人達はさつそく勝敗予想で盛り上がっている。みんな揃って、優勝は塔矢くん固定だったのには、ヒカルが拗ねてたけどね。

2位は私とヒカル、冴木さんに予想が集まっているけど、プロ試験の内容を見ていると伊角さんもありえると思う。

「さつそくだけど、打っていいこうぜ」

「うん。じゃあ組み合わせ決めようか」

くじ引きの結果、私は伊角さんと打つことになった。他は明日美さんがいきなり塔矢くんと、ヒカルは越智くんと打っている。

伊角さんと打ったのは一年以上前だから、今回どうなるか楽しみだね。

早碁とまではいかないけど、持ち時間は1時間だけ。伊角さんはじっくりと考えるのが得意で早碁は苦手だと思っていたけど、全然そんなことはなかった。

「やっぱり伊角さん強いな」

「安定感が増したっていうのかな、落ち着いてる」

「うん感情のコントロールについて学んだから」

結果だけ見ると、私が3目半差で勝った。でもずっと厳しい手が続いていたし、時間の使い方も上手く、長丁場の戦いならもつと不利になつていたかもしれない。

最近、二次予選で打ち始めた高段者の人よりも強く感じた。

話を聞くと、中国で高段者の人から心構えを鍛えられたらしい。私も初めて聞く内容だったから、興味深く聞かせてもらった。

でも確かにその時の気分や体調で強さが変わるようだ安定して勝てないし、棋士として厳しいと思う。そういう意味では、私もそれなりに体調の変化に左右されず、感情のコントロールは出来ているのかな。

……ヒカルが、なんとなく空中を威嚇してるので、多分佐為がまた何か言っただらうな。

「ともかく、今日はこんなところだね。3人はもうすぐ新初段戦だけど、もう相手って決まってる？」

「ああ、俺は桑原先生とだよ」

私が聞くと、伊角さんが答える。和谷くんは一柳先生で、越智くんは緒方さんと打つらしい。

緒方さんが新初段戦に出るのは初めて。これは応援しないと。

「越智、緒方先生は強いよー。あっさり負けないようにね」

「誰が相手でも勝つだけだよ」

越智くんらしい回答だけど、今の緒方さんは本当に強いからなあ。

越智くんなら簡単に負けないと思うし、楽しみだ。

「私も月末に女流棋聖戦があるし、がんばらなきゃ」

「女流棋聖戦か、相手誰だっけ？」

「木ノ内さん。海外棋戦でも活躍してるし、かなり強いよ」

他にも何人が強い人がいるけど、多分木ノ内さんが一番強いと思う。

もちろんリーグ入りしている塔矢くんや、それに近い実力があるヒカルには及ばないだろうけど、私だと勝てるかどうか分からない。棋力は負けてないと言いたいところだけど、積み上げてきた場数が違う。

女流はあまり注目されないし、強い相手と戦う機会がどうしても減っちゃうけど、さっき言った通り海外棋戦で注目されるのにも慣れているし、混合戦でも三次予選まで進んだ経験がある。

女流で三次予選の経験者は片手で足りる程度だから、いかに木ノ内さんが凄いかが分かる。

「練習手合いで俺や塔矢にも勝ってるし、公式戦だって森下先生に勝ってるんだからな。弱気になったらその時点で負けるぞ」

「うん。私ももつと経験を積みたいし、女流タイトルは凄く欲しいよ」
中学生プロが多い囲碁界だけど、頭角を現している塔矢くんとヒカルに、そろそろ世間も注目してきている。

北斗杯の予選免除も、途中でうっかり負けてしまわないよう配慮した結果だし。2人ともうっかり負けたりしないだろうけど、そもそも塔矢くんは忙しすぎてスケジュールが厳しい。ヒカルは塔矢くんにこそ勝ったし、予選も勝ち進んでいるけど、リーグ入りみたいな分かりやすい結果はまだ少し先だもんね。

「僕たちは、まずは北斗杯予選だね。僕が勝つつもりだけど」

「てめー、直接当たったら今度はリベンジしてやる」

越智くんの軽口に和谷くんが乗る。プロ試験で負けたもんね。

「ちえ、いいなあ。俺ギリギリで出られないんだよな」

「伊角さんは惜しいよね。でもこの研究会から2人確定で、残り1人もここの誰かになりそうだよな。18才以下で、他に強い子っていないっけ？」

明日美さんが首をかしげるけど、確かに他に強い子は思い浮かばない。でも、前世では社くんだったっけ、彼が出ていたってことは越智くんや和谷くんより強かったんだろうけど。

「そういえば、関西棋院に強いやつがいるって聞いたことがあるよ。去年はプロになるのがいなかったけど、今年は文句なしでプロになったって。まあ強いって言っても、僕よりは弱いだろうけど」

「へえ。越智詳しいな。でもそうだな、中部や関西に強いやつがいてもおかしくないよな」

まだまだインターネットも普及していないし、情報の伝達速度もそこまで高くない。トッププロや塔矢くんくらい注目されている若手の話題はともかく、他の情報はあまり出回らない。

「どういう組み合わせになるか分からないけど、楽しみだね」

ここで打つのも勉強になるし楽しいけど、数少ない席の奪い合いは、力の入れようが段違いで、凄く良い経験になる。ヒカルの成長速度についていくには、一局も無駄にできないんだ。

「みんな終わったみたいだし、次の組み合わせでやっていこうか。参加率が低いメンバーを消化しておく方がいいね」

塔矢くんの提案で、参加する頻度が減ってきている塔矢くんと私とで対局を始めた。

塔矢くんはいつだって真剣だけど、勝ち負けの記録を付ける対局は久しぶりだ。あっさり負けられないように、気合いを入れて臨む。

「ヒカル、帰ったら塔矢くんとの対局の研究していいかな？」

「おう。敗着になった手も、しっかり確認しなきゃな」

負けて、後から考えたら駄目だった手も、打つべき手も見えてくる。過去の研究で良い手だったと判明しているものや、悪い手と言われているものでも、実はそれほど研究が進んでいない手もたくさんある。

今日も、そういった手を打つてみたけど、まだまだ甘かった。

「佐為にも手伝ってもらって、色々な経験値を積んでおかないとな」

「うん。女流タイトル戦もそうだけど、北斗杯も、経験が少ないと困るもんね。中国や韓国は、私たちとそう年齢が変わらない頃から、どんどんタイトル戦や海外棋戦に挑戦してるから、経験値が凄いらしいよ」

日本とは環境が全然違うらしい。

とはいえ、本因坊秀策がつきつきりで四六時中教えているほどの環境じゃないだろうから、凄いやなと思うけど羨ましいとは思っていない。ヒカルのそばで打つことほど、良い環境なんてないもん。

そうして去年にも増して囲碁の研究をしているうちに、女流棋聖戦のタイトルをかけた挑戦手合いの前日を迎えた。